



TITLE:

カメルーン東南部における農耕民
= 狩猟採集民関係 -市場経済浸透下
のエスニック・バウンダリーの動
態-(Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

大石, 高典

CITATION:

大石, 高典. カメルーン東南部における農耕民 = 狩猟採集民関係 -市場
経済浸透下のエスニック・バウンダリーの動態-. 京都大学, 2014, 博士
(地域研究)

ISSUE DATE:

2014-03-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r12824>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により本文は2018-07-
02に公開

博士（地域研究）

学位申請論文

カメルーン東南部における農耕民＝狩猟採集民関係

—市場経済浸透下のエスニック・バウンダリーの動態—

Interactions between Farmers and Hunter-Gatherers in

Southeastern Cameroon:

Dynamics of Ethnic Boundaries Under the Penetration of

Market Economy

大石 高典

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

2013 年 11 月

目次

序章	-----	1
I. はじめに		
1. 狩猟採集民とは？		1
2. 平等主義社会のなかの不平等		1
3. 熱帯林における交易史と商業民		2
II. 農耕民と狩猟採集民の関係に関する先行研究		
1. 隔離モデルと相互依存モデル		4
2. コンゴ盆地における農耕民＝狩猟採集民研究		4
3. 研究史上の問題点		6
III. 研究の枠組み，目的と方法		7
IV. 研究対象地域の設定		9
V. 論文の構成		10
第1章：調査地域の概要	-----	13
I. 民族誌的事項		
1. バカ・ピグミー		13
2. バクウェレ		14
3. バカ・ピグミーとバクウェレの関係		15
4. 商業民		16
II. 調査地の概要		
1. ドンゴ村		17
2. ドンゴ村における研究史		20

第2章：ジャー川下流域放棄集落群の歴史生態学 ----- 23

I. はじめに	23
II. 方法と手順	24
III. 結果	
1. フランス委任統治期における地域住民と外部世界の関わり	25
2. バクウェレ, バカ・ピグミー両居住集団の動態	30
3. 農耕民による放棄集落の分布と地名	31
4. 環境利用の痕跡	34
5. 現地調査と文献調査の整合性	40
IV. まとめ	42

第3章：森の「バカンス」—バクウェレによる漁撈実践を事例に--- 44

I. はじめに	
1. 定住村と漁撈キャンプ：二つの社会的なモード	44
2. バクウェレ社会における漁撈キャンプとバカンス	47
3. 生業実践の空間的広がりとその社会学的な意味	48
II. バクウェレによる漁撈実践	
1. バクウェレの生業活動における漁撈活動の位置	50
2. タンパク源としての魚	51
3. 熱帯雨林水系の特徴と漁撈技術	53
4. 移動しながらの漁撈生活	55
5. 燻製加工された魚のゆくえ	60
III. 漁撈キャンプにおける社会関係の諸相— 逸話からのアプローチ	
1. 村から森へと向かう心理	62

2. 森での食物探し	67
3. 森の恵みに対する態度	70
4. まとめ	74
IV. 考察：森棲み感覚と「バカンス」	
1. 森を楽しむ	
1-1. 漁撈キャンプの社会的な静かさと快適さ	74
1-2. 漁撈実践に内在する楽しさ	76
2. バクウェレの森棲み感覚：アンビバレントな自己表象	78
第4章：「人間ゴリラ」と「ゴリラ人間」—人間=動物関係と民族間	
 関係の交錯と混淆—	82
I. はじめに	82
II. ゴリラの民族誌	
1. ゴリラの民族動物学	83
2. 人間とゴリラの近接	89
3. ゴリラ狩猟の民族誌	91
III. 「ゴリラ人間」と「人間ゴリラ」の民族誌	
1. 「ゴリラ人間」としての農耕民	94
2. 動物になって畑を荒らす狩猟採集民	100
3. 「人間ゴリラ」の民族誌	102
4. 人間とゴリラの入れ代わりと混淆	107
IV. まとめ	109
第5章：バカ・ピグミーによる換金作物栽培と民族間関係	111
I. はじめに	111

II. カメルーン東南部におけるカカオ栽培	
1. カメルーン東南部におけるカカオ栽培の歴史的背景	112
2. アフリカ熱帯雨林地域におけるカカオ栽培の特徴	114
III. 研究方法	
1. カカオ園の野外観察と計測調査	115
2. カカオ栽培に関する聞き取り調査	115
IV. 結果	
1. カカオ栽培の消長	
1-1. 調査地域におけるカカオ栽培の拡大	116
1-2. 栽培面積における個人差	119
1-3. カカオ畑の所有, 世代間継承とジェンダー	122
2. 現金収入の獲得と消費	
2-1. 収穫, 販売と現金収入の推定	122
2-2. カカオ栽培による現金収入の分配と用途	126
3. バカ・ピグミーの賃金労働	
3-1. 労働力不足とバカ・ピグミーの労働者確保をめぐる競争	129
3-2. 農園労働者としてのバカ・ピグミーの評判	133
3-3. 賃金労働のインパクト	134
V. 討論と結論	
1. 遅延型利得経済への適応	135
2. 経済的な報酬の認知とその即時消費	137
3. 変化する価値観と, 近隣農耕民との民族間関係	138
第6章: バカ・ピグミーによる嗜好品利用と民族間関係 -----	141
I. はじめに	141

II. カメルーン東南部における嗜好品—たばこと酒を中心に—	
1. たばこの種類と嗜好	146
1-1. 自家栽培のたばこ	146
1-2. 自家栽培の大麻	148
1-3. 工業製品のたばこ	149
2. 酒の種類と嗜好	149
2-1. ヤシ酒	149
2-2. 蒸留酒（現地生産）	151
2-3. 工業酒製品：ビール，ウイスキー，ワイン	156
3. その他の嗜好品：覚醒剤の流入	158
III. 飲酒と喫煙の実態	
1. バカ・ピグミーの日常生活における喫煙と飲酒	159
2. 酒と労働をめぐるバカ・ピグミーとバクウェレの駆け引き	160
3. 儀礼の場におけるバカ・ピグミーの飲酒	161
4. バカ・ピグミーとバクウェレの飲酒行動の比較	163
IV. まとめと討論	
1. 狩猟採集民＝農耕民関係における嗜好品	164
2. 嗜好品がつなぐ地域経済と市場経済	166
3. たばこと酒の両義性	167
第7章：バカ・ピグミーの土地問題と民族間関係-----	170
I. はじめに	170
II. カカオ園の貸借と売買	
1. 前払い契約（ヤナ）	173
2. カカオ園の貸借契約（ロカション）と売却	173

3. カカオ園の賃貸・売却理由	178
Ⅲ. 社会的な不平等と対立	179
Ⅳ. カカオ園と土地の権利をめぐる論争	181
Ⅴ. 土地契約をめぐる地域住民間の駆け引き	183
Ⅵ. 地方政府による土地問題への介入	185
Ⅶ. まとめ	188
終章 -----	190
Ⅰ. 各章の要約	190
Ⅱ. 結論	
1. 近現代における農耕民＝狩猟採集民関係の変遷	195
2. バカ・ピグミーのカカオ栽培: 貨幣経済と農耕民＝狩猟採集民関係	198
3. 象徴実践によるエスニック・バウンダリーの維持と再生産	200
Ⅲ. 今後の展望	202
謝辞 -----	203
引用文献 -----	207

序章

I. はじめに

I -1. 狩猟採集民とは？

近年、世界的な生業変容の流れの中で、そもそも狩猟採集民とは誰か、を明確に定義することは以前にまして困難になってきている。近代的な経済活動から一見隔離されたかに見える人々のみを見ている限りでは、狩猟採集民の真正性は疑う余地はなかったであろう。進化論的な文脈で狩猟採集民を論じる文献では「狩猟採集は、人類史の 99% 以上の長きにわたる生業形態であった」とよく言及されている。しかし、実体としての人びとの生業やアイデンティティのありようと、研究枠組みとしての狩猟採集民や農耕民という概念にギャップが生じてきているのである。近年になって、農耕革命以後は狩猟採集民が農耕民になるという方向での文化進化だけではなく、東南アジアや南米を中心に、むしろ歴史の中で農耕民が狩猟採集民になるという“cultural devolution”についての研究事例も少なからず蓄積されてきた。加えて、グローバルな先住民運動のなかで狩猟採集民のアイデンティティが政治化され、狩猟採集活動実践が先住性を主張するための政治的道具にも利用されるようになってきている。

I -2. 平等主義社会のなかの不平等

20 世紀後半以降、サン（ブッシュマン）、ハッザ、そしてピグミーなど熱帯アフリカの乾燥帯、半乾燥帯、熱帯雨林の狩猟採集民を対象とした研究では、狩猟採集という資源利用様式と深く関連した社会性が重視されてきた。それを最も端的に表している概念が「平等主義」である。実際の狩猟採集社会における「平等主義」に注目し、「平等社会」の特徴について議論を深めたのは、タンザニアの狩猟採集民ハッザを研究したイギリスの人類学者 James Woodburn であった(Woodburn, 1982)。狩猟採集社会の中でも、

ハッザのほかにサン（ブッシュマン）やムブティ（ピグミー）など熱帯アフリカの狩猟採集民に代表される社会では、生業活動によるリターンが直接的で即時的である。このような経済システムを Woodburn は、即時リターンシステムと呼び、①自由で頻繁な移動性、②集団構造の可塑性、③徹底した分配による食物などの資源の平準化が平等主義的な生き方と深く関連していることを指摘した。平等主義は、熱帯アフリカ狩猟採集民の特徴として研究者の間に広く認知され、多かれ少なかれ社会階層的な社会関係をもつ農耕／牧畜社会と狩猟採集社会とを対比するうえでの特徴となってきた。

私がカメルーン東南部の熱帯雨林で出会ったバカ・ピグミーの人々は、定住化が進み、既に自給作物の農耕を受容しているばかりか、換金作物の栽培さえも始めていた。もちろん森での狩猟採集活動も継続しているのだが、長い雨季のほとんど毎朝出くわしたカカオ園への通勤風景の方が印象に残った。調べてみると、調査地では「ごく最近になって開始されたばかり」のカカオ栽培だったが、実際にはほとんどのバカ・ピグミー男性がカカオ畑を持っていることや古いものでは3-4世代以上以前から相続され、財産化しているものがあることなどが分かってきた。

ボツワナのサンの生業活動の歴史的な変遷を追究した池谷和信は、生態人類学的な狩猟採集民研究からの人類進化史研究への貢献可能性について、サンのヤギ飼養に大きな個人差があることを指摘しつつ、「一部のサンは多数のヤギを所有して畑を耕作していると報告されることから、伝統的なサンと変容を受けたサンが共存している実際と要因こそが、現在と過去をつなぐ橋わたしになる」（池谷 2002: 16）のではないかと提案する。バカ・ピグミーにとって、カカオ園はいわば動かない家畜のようなものと言える。

I - 3. 熱帯林における交易史と商業民

カメルーン東南部の調査地では、「象牙はカカオとともに歩いている」とよく言われる。筆者の聞き取りによれば、1980年代半ばに CITES によって狩猟が全面禁止される

まで、アフリカマルミミゾウは活発に狩猟され、象牙は村の軒下にずらりと並べられて交易されていたという。コンゴ盆地西北部における象牙交易の歴史は 17 世紀以前に遡る(Klieman, 1999)。カメルーンは、1800 年代の末に 10 数年のドイツによる植民地支配の後、第一次大戦を経て 1900 年代初めにフランスの信託統治領となる。現在、首都ヤウンデの公文書館に残された入手・解読可能な歴史資料が残るのはこれ以降である。植民地政府は、象牙交易を継続するとともに、森林産物の生産会社を設立し、強制的な野生ゴムの樹液採集を課した。1920～30 年代になって、需要の減った野生ゴムに代わって、新大陸由来の樹木性換金作物であるカカオの栽培が導入された。カカオ栽培は、独立以後も継続され、地域住民の貴重な現金収入源として現在に至っている。現在、象牙売買は禁止されているが、密交易は絶えない。冒頭の文句は、カカオ生産をはじめとする地域経済と象牙取引のカネの流れには深い類似（関連）性があるということを示唆している。

象牙やカカオに限らず、さまざまな森林産物の流通には商業民が関与し、地域経済と外部経済の橋渡し役を担ってきた。しかし、これまでのアフリカ熱帯林社会の生態人類学的研究では、土着の狩猟採集民と農耕民の間の生態学的、社会経済的な関係に分析が集中し、商業民の存在や役割はほとんど無視されてきた。

また、20 世紀後半の 1970 年代前後から交通アクセス（道路）が整備されたカメルーン東南部では、市場経済の浸透によって、モノ、土地、労働力の商品化が継続している。とくに過去 10 年間に於いて、その傾向は顕著であった。木材伐採会社の操業の影響に加え、都市部における獣肉需要の増加、樹木性換金作物のカカオの価格高騰がその具体的な要因だと考えられる。活発な経済活動は、より人口稠密な他地域からの出稼ぎ的な移民の流入を促進している。

これらの社会変化のなかで、バカ・ピグミーと近隣農耕民の関係もまた変容してきた。本研究では、両者の関係の変容を外部世界との交渉史の中に位置づけ、そのなかでどの

ように農耕民と狩猟採集民の境界維持がなされてきたのかを生活実践と象徴実践の 2 つの側面から明らかにすることを目指す。

II. 農耕民と狩猟採集民の関係に関する先行研究

II-1. 隔離モデルと相互依存モデル

農耕民と狩猟採集民の関係は、人類学、考古学、遺伝学、言語学など多様なアプローチから研究されてきた。1980 年代以前には、農耕／牧畜社会を含む外部世界と狩猟採集民社会との交流を想定しない隔離モデルに沿った研究が大半を占めたが、1980 年代後半からは考古学と人類学を中心に次第に農耕／牧畜民やより広い社会との相互依存モデルへとパラダイムが変化していった(Spielman and Eder, 1994)。隔離モデルと相互依存モデルをめぐる議論は、狩猟採集社会の歴史的 positionづけをめぐり、真正な狩猟採集社会を描き出してきた伝統主義者と植民地化や近代化の過程で国家の周縁に追いやられた人々が狩猟採集民になっていったとする修正主義者の間の論争へと発展していった。アフリカでは、Richard Lee や田中二郎などサンの生態人類学的な研究のパイオニアによる業績が、歴史的な位置づけを欠いたものとして Wilmsen ら修正主義者によって批判されたが Wilmsen らの提示した歴史資料も地理的に偏っていたり、解釈に問題を孕んでいたりと批判を呼ぶものであった。1980 年代後半から 1990 年代前半にかけて、カラハリ論争は多くの研究者を巻き込む大論争となった。このカラハリ論争は、東南アジアやアフリカの熱帯雨林地域における狩猟採集民研究に飛び火することになる。

II-2. コンゴ盆地における農耕民＝狩猟採集民研究

コンゴ盆地では、コンゴ民主共和国のイトウリの森でムブティ・ピグミー研究に先鞭を着けたシェベスタ、特にコリン・ターンプルは、森に住む平和的なムブティの世界と定住集落に住む争いごとに絶えない農耕民という極めて対照的な社会として描きだし

た(Turnbull, 1961). 一方で、ムブティやエフェの環境利用や狩猟採集生活の自然史的側面を生態人類学的手法によって明らかにした市川光雄や寺嶋秀明は、狩猟採集民と農耕民の関係は、炭水化物と動物性タンパク質の交換に基づく、生態的な相互依存を基盤とした共生的な相互依存関係にあることが示された(Ichikawa, 1986; Terashima, 1986). 両者の贈与交換関係は、とくに擬制的親族関係を結んだ農耕民と狩猟採集民の間で頻繁に見られる。エフェ・ピグミーとレッセの間の個人間で結ばれる関係に着目した寺嶋(1991)はまた、狩猟採集民／農耕民という括り方に安住してしまうと、それぞれの社会内部の多様性を見失いかねないと警告する。

コンゴ盆地北西部のアカ・ピグミーの農耕民と狩猟採集民は、農耕民が農作物、酒、鉄、そして工業製品を狩猟採集民に提供し、その代わりに狩猟採集民が農耕民に林産物や労働力を提供するという物々交換システムを発展させていることが明らかにされた(Bahuchet and Guillaume, 1982). これらの分析においては、近隣農耕民は、狩猟採集民と外部世界の間を仲立ちし、コントロールする調整弁のような存在であった。

1989 年に Bailey らによって、熱帯雨林には十分な食べ物がないから狩猟採集民は農耕社会から独立して（「純粋な」狩猟採集民として）生きるとは困難であるとする野生ヤム問題が提起されると、これをめぐって論争が起こった(Bailey et al., 1989). この論争は、農耕民と狩猟採集民の共生関係の起源に関わる問題を主として生態学、考古学的な次元から深めることに貢献した。

ここまで見てきた研究の多くは、主として狩猟採集民の側からのアプローチであったが、埴狼星は、コンゴ共和国北部のアカ・ピグミーとボバンダの関係について、ボバンダから見た民族間関係の動態を描き出すことを試み、農耕暦や相互交渉の起こる空間によってその性格が大きく変動することを報告している(埴, 2004). カメルーン東南部のバカ・ピグミーと農耕民の関係を社会人類学的に調査した Joiris (2003)は、先行研究を整理しつつ、関係の起源や機能に関する研究は多いものの、関係の枠組み(framework)

やメカニズムについての研究は少ないと指摘する。アカ・ピグミーは、農耕民と狩猟採集民の間で見られる両義的な関係について指摘している。北西(2010: 45-46)もまた、両者が相互に対峙している「手のひらを返したように相反した感情」について当惑した経験を記している。

II-3. 研究史上の問題点

ここまで述べてきた先行研究のレビューを踏まえ、問題点を指摘する。まず、狩猟採集民研究では、誰がピグミーなのかという問題がある(Robillard and Bahuchet, 2013)ものの、「狩猟採集民」とピグミーはほぼ同じものを示すと考えられてきた。「農耕民」にはそれ以外の人々、すなわち非ピグミー系住民を指し、そこには極めて多様な集団が含まれる(Rupp, 2003; Robillard and Bahuchet, 2013)。それにも関わらず、隔離仮説も相互依存仮説も農耕民＝狩猟採集民の二者関係しか想定してこなかった。

カラハリ論争、すなわち狩猟採集社会の真正性に関わる論争の熱帯雨林版ともとらえられる野生ヤマ論争(Wild Yam Question)がある。野生ヤマ論争は、炭水化物源となる植物性食物の生態学的入手可能性とそれに基づいた農耕民との関係などの生態的側面が論点となった(Headland, 1987; Bailey et al., 1989)。そのため、現在顕著にみられる農耕民との社会文化的相互依存や情報交流(小川, 2005; 2000)についてはあまり考慮されていない。地域ごとに多様な農牧民とサンの通時的関係の動態が明らかにされつつあるサン研究(Ikeya, 1999)とは異なり、アフリカ熱帯林では数少ない研究(Bahuchet and Guillaume, 1982; Wilkie and Curran, 1993; Klieman, 2003)を除き、現在と過去をつなぐ歴史研究がたち遅れている。とくに、具体的な地域社会に焦点をしぼり、歴史、文化、生態、政治経済という複数の視点を比較・統合した事例研究は少ない。

生態人類学のアプローチにおいても、研究史のなかでコリン・ターンブルをはじめとする研究者が構築してきた農耕民／狩猟採集民という区分にもとづき研究が進められ

てきた。農耕民／狩猟採集民の二項対立は、トートロジー的に「狩猟採集民らしさ」あるいは「農耕民らしさ」を強調することにつながりがちで(Rupp, 2003), どのように両者が異なったアイデンティティを維持したままで共存しているのか, について十分に解明されてきたとは言い難い。

これらの問題は、一般に農耕民と狩猟採集民の関係をあつかった研究において、双方に目を配った研究はまれで、狩猟採集民あるいは農耕民どちらかの視点に偏りがちになる(Kent, 1992)ことと関係していると思われる。しかし、実際には、「共在」(木村, 2003)する両者の関係には、ポジティブな側面とネガティブな側面の両面性がある (Kazadi, 1981; Bahuchet and Guillaume, 1982; 竹内, 2001) ことや、グラデーション—曖昧な領域—が存在することも指摘されてきた(寺嶋, 1991; Terashima, 1998; Rupp, 2003; 埜, 2004; 松浦, 2012)。

Ⅲ. 研究の枠組み、目的と方法

本研究は、市川光雄が提唱している3つの生態学（文化生態学、政治生態学、歴史生態学）の研究枠組み(市川, 2003; 2001)を参照枠として、農耕民＝狩猟採集民関係の動態を、「歴史的視点」（通時的変化）を補いつつ、「より広い世界とのつながり」（リージョナル、グローバルのなかでの位置づけ）のなかで明らかにすることを目指す。

文化生態学とは、「人間と自然の間の物質的、精神的、直接的、間接的関係の全て」を含む「地域における間—自然関係の共時的関係の総体」の探究である (市川, 2003)。アフリカ熱帯林では、特に狩猟採集民の文化的な自然認識に関してこのアプローチから詳細な研究が行われてきた（例えば、服部, 2012）。

本研究では、農耕民＝狩猟採集民関係における二項対立の維持と再生産を、これまで強調されてきた民族人類学(ethno-anthropology)的な観点(Galaty, 1986; 竹内, 2001; Rupp, 2011)や社会政治的な観点(Joiris, 2003)に加えて、文化生態学的な実践との関わりか

ら捉え直す。すなわち、集団間の相互表象を直接あつかうのではなく、自然や動物などの非人間的な存在との関係を媒介とした集団内／集団間の相互作用やアイデンティティの動態を取り上げる（図 0-1.）。

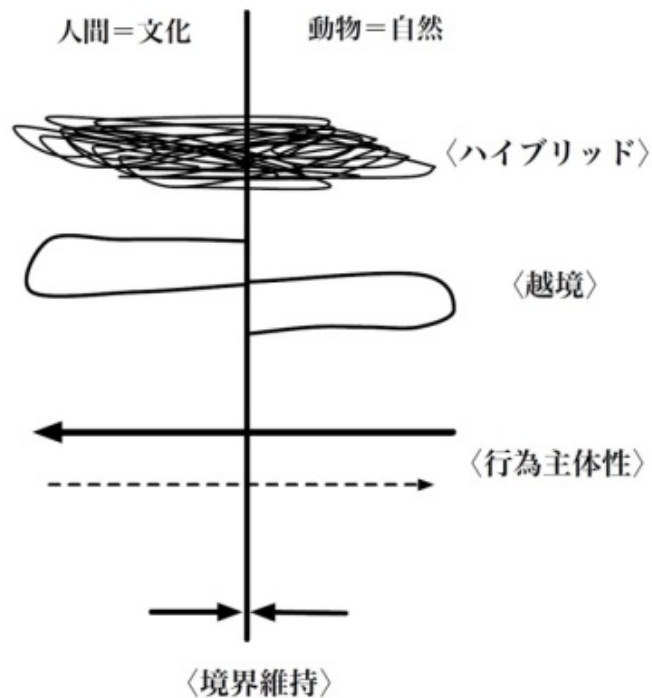


図 0-1. 人と動物の境界をめぐる相互作用（概念図）。（池田光穂作成，出所：奥野克巳（2012: vii)）

政治生態学とは、地域におけるミクロな人間活動について、マクロな政治経済システムや権力関係との関連を明らかにしようとする探究である(市川, 2003).

本研究では、カメルーン東南部において顕著であるバカ・ピグミーによる樹木性換金作物栽培の実践を題材に、貨幣を媒介として起こっている狩猟採集民と農耕民、そして商業民の関係のダイナミズムをカメルーンの政策や国際的なカカオ経済との関係から解明する。

歴史生態学とは、「人間と自然の相互作用の歴史に関する探究」である(市川, 2003). 本研究では, 調査対象地域周辺の熱帯林における人間居住の歴史について, 外部世界との接触に注意しながら復元を行う.

研究の方法は, 調査対象である農耕民と狩猟採集民の社会への住み込みによる参与観察, 個別聞き取り調査, 集団面接, GPS をもちいた測量, カメルーン国立公文書館における文献調査などを組み合わせて用いた. なお, 具体的な調査方法については, 以下の各章ごとにまとめている. 本研究のためのカメルーンにおける調査期間は, 2002 年 2-3 月, および 7-12 月, 2003 年 12 月から 2004 年 7 月, 2006 年 12 月から 2007 年 6 月, 2008 年 1-3 月, 2009 年 2-3 月, 2009 年 12 月から 2010 年 1 月, 2010 年 3 月および 7-8 月, 2011 年 3 月, 2012 年 1-2 月, 2013 年 2-3 月の合計約 2 年 5 ヶ月間である. また, 2009 年 9-10 月と 2011 年 10-11 月には, カメルーン東部州と隣接するコンゴ共和国にてカメルーン側との比較調査を行った. 現地調査では, 調査対象に合わせてフランス語, バカ語, バクウェレ語をもちいた.

IV. 研究対象地域の設定

中部アフリカでは, 比較的大きな政治経済的変異が地域内でモザイク状に起こっている. 最近の過去 10 年足らずを取ってみても, 毎年のように武力紛争が起こっている. 政治経済的に不安定な国が多い中部アフリカにあって, カメルーンとガボンとは例外的に大きな軍事紛争を経験してこなかった. この政治経済的な安定が, 世界経済の辺境ともいえるカメルーン東南部熱帯森林地域において貨幣経済の浸透が継続的に起こっている理由の一つだと考えられる.

また, カメルーンは北部ではサバンナが卓越し, 南部では熱帯雨林が優占するという複合的な生態環境をもつ. カメルーン東南部の熱帯林地域で狩猟採集民や農耕民との交易に活躍する商業民の多くは, カメルーン北部から西アフリカにいたる広範な地域に出

自を持つ(稲井, 2010; Oishi, 2012). 地縁も血縁もない雑多な出自の彼らを結びつけているのはイスラームである. ムスリム商業民は, ネットワーク型の社会を活かして森と都市, 森とサバンナをつなぐ交易を担ってきた. 高谷好一は, 『世界単位論』(1995)のなかで生態適応型, ネットワーク型, 大文明型に分類した. 狩猟採集民と農耕民は, 生態経済的な共生関係をもとに生態適応型の社会を築き上げてきた. サヘルとコンゴ盆地がつながる位置にあるカメルーン東南部の熱帯林を調査地域に設定することによって, カメルーンの熱帯林地域独自の地域特性をこうした生態適応型の社会とネットワーク型の社会の相互作用としてみることも可能になる.

また, カメルーンとコンゴ共和国の国境地域を対象とすることによって, 国境と言う地政学的条件が民族関係の形成に及ぼす影響について考察することも可能になる. 2つの地域は, コンゴ川の支流であるサンガ川およびンゴコ川が多数の中小河川および沼沢地を伴って流れており, ほぼ同じ生態環境条件下にある. しかし, 政治的安定が数十年以上継続し, 環境政策におけるガバナンス強化やインフラ整備が進んでいるカメルーンと, 1980年代から度重なる内戦と社会主義体制からの転換を経験したコンゴ共和国では, 熱帯林開発事業の展開規模, 狩猟規制の適用実態, そして地域住民の社会経済的周縁化の程度が著しく異なっている. 国境をなすコンゴ川水系は, 15世紀以降地域住民をつなぐ交易の場となるだけでなく, ヨーロッパ世界と熱帯林を結ぶ交通路ともなってきた. そのため, 比較的コンスタントに記録された植民地時代からの歴史資料が現在まで残されることにもなった. 国境地域という地政学的な条件が, どのように地域住民の生業活動や社会関係に影響してきたのかに着目する.

V. 論文の構成

本論は, 全部で9章からなる. 本章につづく第1章では, 主たる調査地であるドンゴ村と研究対象であるバカ・ピグミー, バクウェレ, およびハウサなど商業民の概要につ

いて、コンゴ盆地全体を見わたしたときの立地条件、カメルーン東南部とコンゴ共和国北西部の国境域の地政学的条件に留意しつつ記述する。同一調査地で継続されてきた日本人による生態人類学研究史と、その中での本研究の位置づけにも触れる。

第2章では、「カメルーン東南部ジャー川下流域放棄集落群の歴史生態学」では、時間軸のなかで農耕民と狩猟採集民の関係を捉える。具体的には、コンゴ川の一支流であるジャー川流域を空間単位として、過去約100年間における人間活動の変遷について、放棄集落群に着目して明らかにする。オーラル・ヒストリー、歴史資料、森林に残された痕跡や植生調査の結果をもとに、カメルーン独立前後に新政府によって行われた共産ゲリラの鎮圧に関連して行われた大規模な定住化・集住化の前後に分けて、森への人間の棲まいかたにどのような変化が見られたのかが論じられ、それに伴って生じたと考えられる農耕民と狩猟採集民の関係の時代変化に関する仮説が提示される。

第3章と4章では、文化生態学的な観点から、農耕民と狩猟採集民の相互表象が、生産活動や日常生活の中で、自然との関係とどのような共振構造にあるのかが扱われる。第3章「森の「バカンス」―バクウェレによる漁撈実践を事例に―」では、熱帯雨林の農耕民社会にとって、村を離れて森に行き、そこを一時的にせよ生活の場とすることが、彼ら自身にとってどのような社会的な意義をもつと考えられているのかを参与観察に基づく内在的な観点から記述した。そして、そこから読み取れる彼ら自身の「森に棲まうこと」に関わる自己／他者イメージの両面性について検討を加える。

第4章「「人間ゴリラ」と「ゴリラ人間」―人間=動物関係と民族間関係の交錯と混沌―」では、同所的に居住する農耕民と狩猟採集民が、互いを半人間=半動物だと認識しあうような負の互酬性の関係を民族間の境界維持にもちいていること、さらに民族間、人間／動物の2つの境界が、妖術という象徴的思考を媒介して相互に影響を及ぼしあう共振構造にあることが論じられる。

第5章、6章、7章では、主として政治生態学的な観点から、地域社会への貨幣経済

の浸透が急速に進むなかで、樹木性換金作物栽培を受容した狩猟採集民と農耕民の関係の変容について、国家や世界市場とのつながりに留意しつつ、広い空間スケールの中に位置づける。第5章「バカ・ピグミーによる換金作物栽培と民族間関係」では、調査地におけるミクロな観察をもとに、バカ・ピグミーによるカカオ栽培の受容を即時利得経済から遅延利得経済への適応プロセスとしてとらえ、農耕民を媒介者とし、より直接的な外部経済とのつながりの生成に着目しながら解明する。第6章「バカ・ピグミーによる嗜好品利用と民族間関係」では、「資本家」的投資を行う商業民という新たなアクターが加わった地域社会における、農耕民と狩猟採集民の関係の変化を嗜好品利用という切り口から明らかにする。第7章「「森」か「農地」か：カメルーン東南部多民族社会における土地認識と対立」では、カカオ経済の景況が続くなか、財産化したバカ・ピグミーの土地資源をめぐるアクター間の紛争を事例に、民族間の協調と対立、狩猟採集民社会内部における社会階層化と平等主義規範と相克を描き出す。

終章では、以上の議論を要約し、カメルーン東南部における農耕民と狩猟採集民の関係の動態を、市川(2003)の提唱する3つの生態学（歴史生態学＝時間／文化生態学＝人と自然の関係／政治生態学＝空間）の枠組みを参照しながら、統合的に提示することを試みる。

第1章 調査地域の概要

I. 民族誌的事項

I-1. バカ・ピグミー

バカ・ピグミーは、カメルーン東部、コンゴ共和国北西部、ガボン共和国北東部にまたがって居住するピグミー系狩猟採集民集団の一つである。総人口は、かつての文献では3-4万人と推定されている(Ndii, 1968; Hewlett, 1996)が、全地域を網羅した、信頼できるセンサス結果はいまだに得られていない。

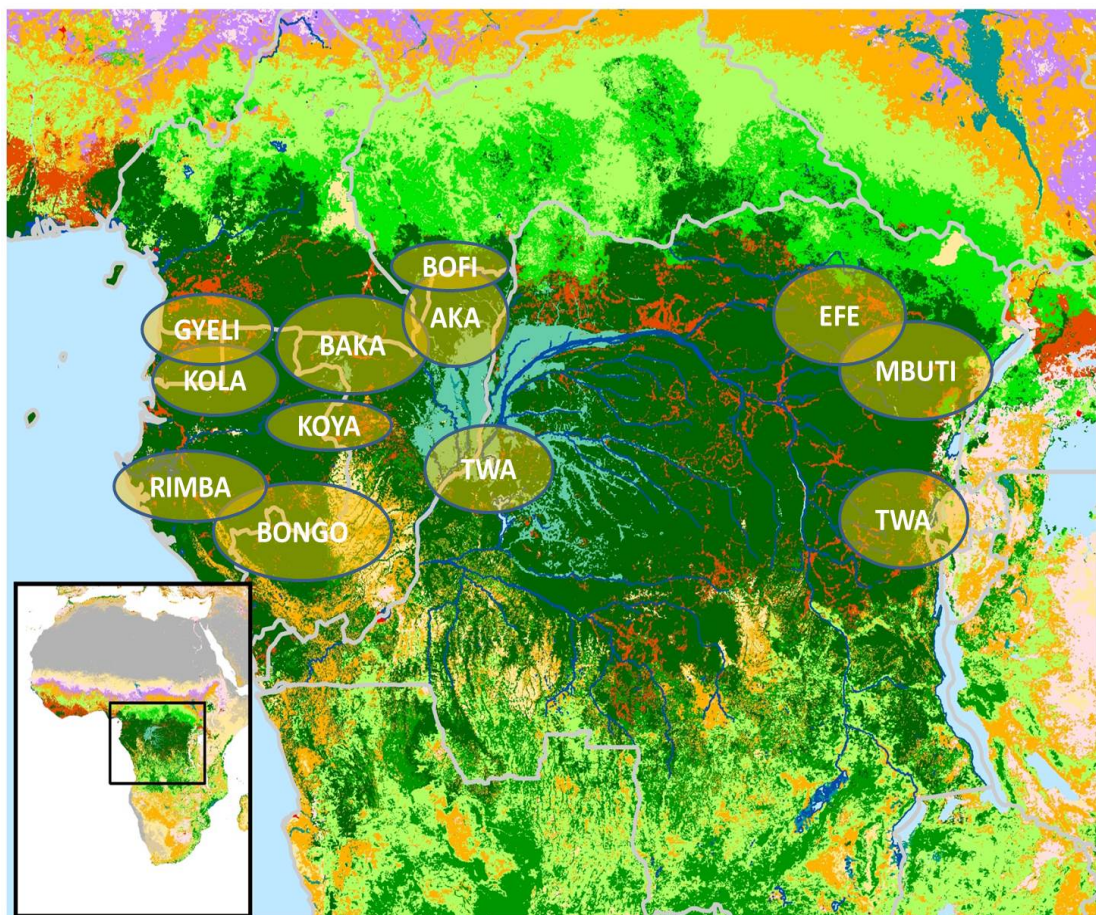


図 1-1： 狩猟採集民の分布と植生。濃い色の部分は熱帯雨林植生を表す。ウバンギ川，サングァ川とコンゴ川の合流部周辺は湿地林になっている。

現在バカ・ピグミーは、近隣農耕民が話すバンツー系とは異なる、東アダマワ系のバカ語を話し、バカ語は中央アフリカ南西部に現在居住している農耕民ンバカ(Ngbaka)の言語に近いことから、かつてンバカと隣接居住していた時期があったものと推定されている(Bahuchet, 1993). バカ・ピグミーは、現在十数集団が知られる中部アフリカのピグミー系狩猟採集民の中では比較的早くから定住化が進んだとされる (Hewlett, 1993). ムブティやアカなど、他のピグミー系狩猟採集民と同様に、かつては狩猟採集を主な生業としながら森の中で遊動生活を送っていたと言われているが、カメルーンでは少なくとも 1950 年代までに焼畑農耕の受容を開始し、徐々に定住化が進んだ(Althabe, 1965).

バカ・ピグミーの現在の主要な狩猟活動は跳ね毘猟と委託銃猟であり、以前は行われていたというクロスボウによる猟やネット・ハンティングのような共同狩猟は行われていない. モロンゴと呼ばれる数週間から数か月にわたる長期狩猟採集行を行う集団もあるが (Yasuoka, 2006), 日常的には、定住集落における農耕活動と両立させた形での日帰り狩猟がおこなわれることが多い(Hayashi, 2008).

I-2. バクウェレ

バクウェレは、Bantu A85-b に分類されるバンツー語を話す農耕民集団の一つである¹(Guthrie, 1967-1971). バクウェレは、ガボン北東部からコンゴ北西部、カメルーン東南部までの赤道沿いに細長く分布している. 総人口は 1 万 5 千人ほどという推定があるが(Lewis M. et al., 2013), 信頼に足るセンサス調査はいまだにない. 特に最も広範囲に分布するコンゴ共和国北部のバクウェレに関する調査は十分になされておらず、彼らが分布する地域の広さを考慮すれば、上述の数値は過小評価である可能性が高い. バクウェレのカメルーン国内での人口は、筆者の推定によれば 1000 から 2500 人を越えない程度であり、この地域の農耕民の中では少数派である. カメルーン国内のバクウェレの

¹ 先行研究では、Bakwélé, Bakuele, Bekwil,あるいはバクウェレ、クエレなどとして記述されてきた(Siroto 1969; Robineau 1971; Joiris 1998; 林 2000; Rupp 2001).

ほとんどは、ジャー川沿いに居住している。バクウェレは、かつては親族集団を単位としてジャー川沿いに点々と小集落を作って焼畑農耕と漁撈を中心とした生業を営んでいた（大石 2010）。

I-3. バカ・ピグミーとバクウェレの関係

カメルーンがフランスから独立した直後の 1960 年代初頭には、バクウェレ、バカ・ピグミーともに半強制的な移住と集住化政策の対象となり、現在の定住集落周辺に隣接居住するようになった（四方, 2006; 大石, 2010）。

かつて、バカ・ピグミーとバクウェレのリネージ間には、パトロン＝クライアント的な擬制的な親族関係が存在していた（Joiris, 2003）が、この強制移住と集住化の過程で、調査地においてはそれらの多くは解消し、あるいは弱められた。

バカ・ピグミー、バクウェレ双方の古老への聞き取りによれば、強制移住前のバカ・ピグミーはバクウェレの集落の周辺の森林内にキャンプを作り、焼畑での労働や獣肉をはじめとする森林産物と引き換えに農作物を受け取っていたという（2 章; 大石, 2009）。

現在のドンゴ村周辺に移住後、バカ・ピグミーは、従来のようにバクウェレの農作業を手伝うだけでなく自ら焼畑を開き、プランテン・バナナやキャッサバの栽培を主とした食料生産を行うようになった（林, 2000, Kitanishi, 2003）。1970 年代後半から 1980 年代初頭にかけて、木材伐採会社がドンゴ村に集材基地を設置し、熱帯林の伐採を行った。この時期、バクウェレのみならず、多数のバカ・ピグミーが賃金労働に雇用されて、本格的に地域内で貨幣が流通するようになった（Kitanishi, 2006; Oishi, 2012）。

その後、伐採会社は撤退したが、都市からの労働者や商業民の一部が定住化し、カカオ園経営が本格化した。現在では多くのバカ・ピグミーが、バクウェレや商業農民のカカオ園での農作業を手伝いつつ、換金作物であるカカオの栽培を自ら行うようになっている（林, 2000; Kitanishi, 2006; Oishi, 2012）。

I-4. 商業民

バカ・ピグミーとバクウェレに加えて、調査地域には半定住している商業民がいる(図1-2)。商業民は、日用品の売買、カカオ栽培、漁撈活動などに従事している。かれらの多くは、イスラームを信仰するカメルーン北部や西アフリカのサヘル地域の出身者で、バカ・ピグミーやバクウェレからは「ハウサ」と一括りにした通称で呼ばれている。



図 1-2: カメルーン北部マルア出身の商店主

しかし、かれらの具体的な民族構成をみると、ハウサ以外にもフルベ、コトコなどの諸民族が含まれている(図1-3)。商業民は、調査地域において人口に占める割合は少ないが、貨幣経済的に大きな影響力を持っている。

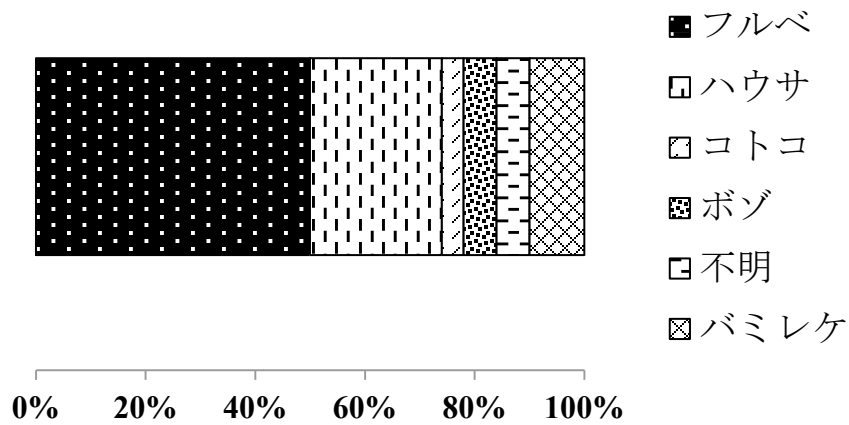


図 1-3: 調査地（ドンゴ村）に定住している商業民の民族別内訳.

Ⅱ. 調査地の概要

Ⅱ-1. ドンゴ村

本研究は、カメルーン共和国東部州ブンバ＝ンゴコ県ムルンドゥ郡ドンゴ村とその周辺を主要な調査地とした(図 1-4). ドンゴ村は、カメルーンとコンゴ共和国の国境を流れるジャー河沿いに位置する. 付近一帯は、コンゴ川の支流であるブンバ川とジャー川に挟まれた熱帯森林地帯である.

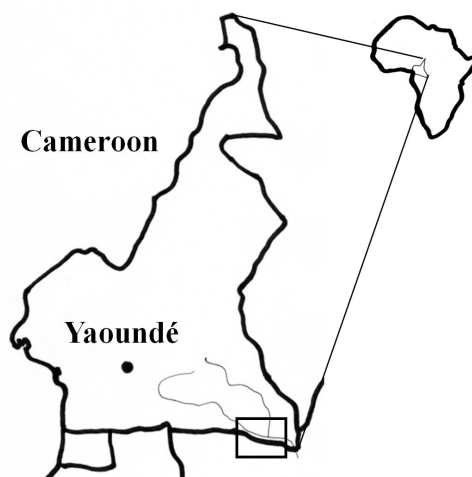


図 1-4. 調査地域の位置.

ドンゴ村周辺の年平均気温は 25 度，年平均降水量 1500 mm 前後と温暖多湿である．9 月中旬から 11 月までと 4 月から 6 月までの年 2 回の雨季，12 月から 3 月までと 7 月から 9 月中旬まで同じく年 2 回の乾期がある．植生は，一部にマメ科ジャケツイバラ亜科のエベン(*Gilbertiodendron dewevrei*)の木²が優占する常緑熱帯雨林が点在するほかは，アオギリ科，ジャケツイバラ亜科，シャクンシ科の高木が林冠をなす半落葉性熱帯雨林と，河沿いに密生するマングローブのような呼吸根をもつエッセーブ(*Uapaca paludosa*)の列の中に樹高の高いドウム(*Ceiba pentandra*)が目立つ河辺林，ラフィアヤシが卓越する湿地林によって構成される．その中に点状に湿性草地が混じる．加えて定住集落周辺や集落跡には，人為的に形成された異なる遷移段階の二次林が見られる．そのような陸地を縫って，コンゴ河の支流であるジャー川とその無数の支流が流れている．

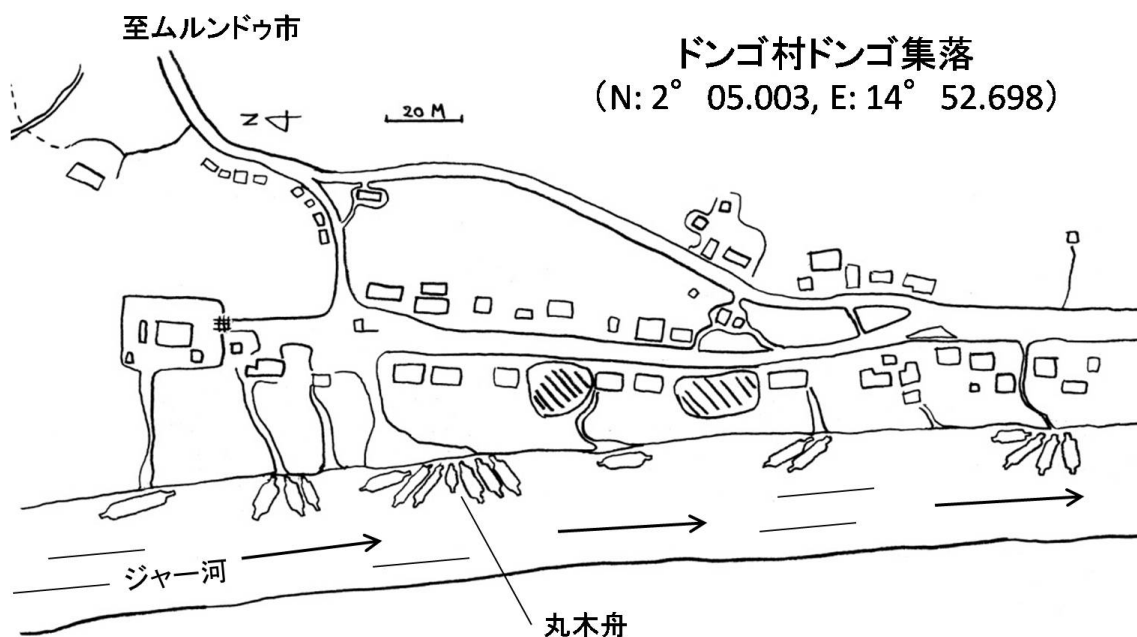


図 1-5. ドンゴ集落内の家屋配置図.

² バカ・ピグミーは，ベンバと呼び，種子が救荒食となるとするが，バクウェレは利用しない．中央アフリカ熱帯雨林各地で，多種混交林に混じって，本種が作る純林が観察されるが，ドンゴ村の西側に広がる森の中でも，ところどころにパッチ状に広がっているのを見ることができる．

ドンゴ村は、カメルーン独立前後の 1960 年に、ジャー河の上流方面から移住してきたバクウェレの数世帯を中心に作られた定住村で、行政村の単位にもなっている。1980 年代前半に伐採会社が基地を構えるまでは、車が通れるような道路はなく、近隣の村々や最寄りの町へは徒歩か丸木舟による水上交通によるしかなかった(図 1-5)。

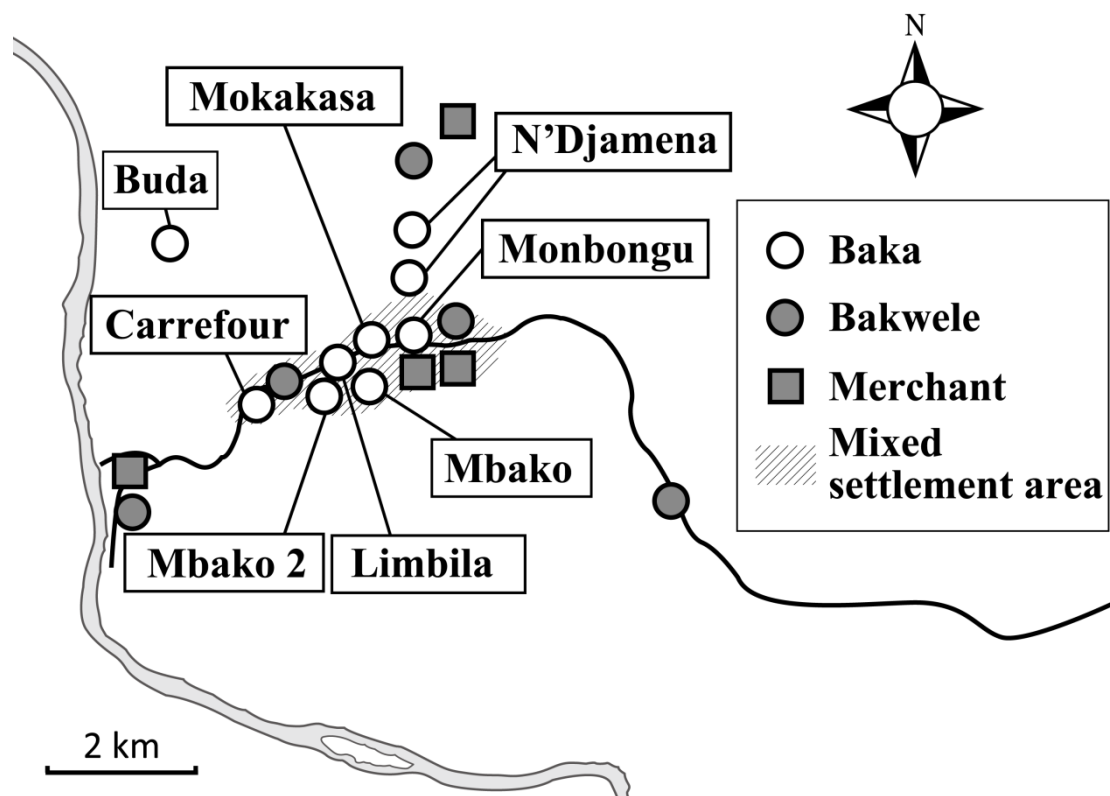


図 1-6: 調査地域におけるバカ・ピグミーの定住集落の分布 (2009 年時点)。

現在は、もともとの住民であるバクウェレとバカ・ピグミーのほか、伐採会社に雇用されていた近隣地域の農耕民バンガンドゥやカメルーン北部などに出身村をもつハウサ³が伐採会社撤退後も残り定住する。2009 年時点での人口構成は、バカ・ピグミー 61 世帯 300 人、バクウェレ 40 世帯 250 人、ハウサやフルベほか 10 世帯 50 人であった (合

³ ハウサは、本来西アフリカに分布する 1 つの民族集団名だが、カメルーン東南部では、ハウサを含むフルベ、コトコ、ムズグン、などの諸民族集団に属するムスリム住民の総称としても用いられている。彼らの多くは、カメルーン北部から西アフリカ各地出身の出稼ぎ商業民である。詳しくは第 4 章 3 節、および稲井(2010)を参照のこと。

計 550-600 人)。バカ・ピグミーは、8 つの定住集落に分かれて居住しているが、そのうち 4 つではバクウェレや商業民との混住している(図 1-6)。

2003 年には、ドンゴ村に京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科 21COE フィールド・ステーションが設置された結果、日本人研究者による生態人類学を中心とする様々な研究が盛んにおこなわれるようになった。

1-2-2. ドンゴ村における研究史

ドンゴ村における本格的な調査研究は、1994年に佐藤弘明博士(当時・浜松医科大学)によってはじめられた。ドンゴ村は、カメルーンとコンゴ共和国の国境を画すコンゴ川の支流、ジャー川に面している。周囲はコンゴ盆地に連なる熱帯雨林に囲まれ、年間を通して湿潤温暖な気候下にある。植生は半落葉性と常緑性の熱帯雨林が混交している。住民の総人口は約600人であり、その民族構成は、バカ・ピグミーが約60世帯300人、農耕民バクウェレが約40世帯250人、商業農民ハウサが約50人である。約 5 km四方に、6 つのバカ・ピグミーの定住集落と 3 つのバクウェレの定住集落が分布し、それらのうち 2 つは極めて近接し、混住に近い状況が見られるようになっている(林 2000)。

バカ・ピグミーは、現在十数集団が知られる中部アフリカのピグミー系狩猟採集民の中では早くから定住化が進んだ(Hewlett 1996)。かつては狩猟採集を主な生業としながら森の中で遊動生活を送っていたが、カメルーンでは少なくとも1950年代までに焼畑農耕の受容を開始し、徐々に定住化が進んだ(Althabe 1965)。バクウェレは、バンツ一系の言語を話し、親族集団を単位としてジャー川沿いに点々と小集落を作って焼畑農耕と漁撈を中心とした生業を営む(第3章)。バカ・ピグミーは、東アダマワ系の言語であるバカ語を話すので、両者は異なる系統の言語を使用する。両集団の間で正式な通婚関係はほとんどみられない。

池谷(2002)によれば、1960年代以降に本格的に始まった狩猟採集民を対象とした生

生態人類学研究は3つのパラダイム区分に分けられる。すなわち、第一期が自然と人の共生的關係や生態的適応が強調される「伝統主義」的アプローチ、第二期が狩猟採集民が民族間の文化接触や政治経済的要因によって周縁化されることによって生み出された存在だとみる「修正主義」的アプローチによって特徴づけられる。第三期が「先住民」運動など政治的に主張する存在としての狩猟採集民研究であるが、日本の生態人類学では、少なくともピグミー研究に関する限り、最近に至るまで「伝統主義」的な研究が大半で「修正主義」的な研究はほとんどみられない。

伝統主義者と修正主義者の間の「狩猟採集民」の真正性をめぐる論争は、カラハリ砂漠のサン（ブッシュマン）をめぐって始まり、1980年代終わりに、やや遅れてピグミーに飛び火した。それは具体的には、Baileyらにより提起された、熱帯雨林で狩猟採集民は農耕民の提供する農作物に頼らなければ生きてゆけないのではないかという問題提起であり、キャッサバや料理バナナなど農作物に代わるだけの植物性炭水化物源（野生ヤマノイモ）が森の中にあるかどうか論点になったため、「ワイルドヤム・クエスチオン」と呼ばれている（Bailey et al. 1989; 論争のその後の経緯については、安岡, 2010を参照されたい）。佐藤はこの論争が提起された直後から一貫して、「伝統主義」的立場から熱帯林内の狩猟採集生活の自給可能性について研究を進め、カメルーン東南部の植生調査に基づき、熱帯雨林が供給可能な可食野生ヤマノイモの現存量の推定を行い（Sato, 2001）、可食野生ヤマノイモが群生する植生パッチを発見した（Sato, 2006）。さらにバカ・ピグミーの被験者家族の協力を得て、数週間にわたる実験的狩猟採集生活の観察を森林産物の端境期だとされる時期を含む各季節に行った結果をもとに、ほぼ通年農作物に依存しない狩猟採集生活が可能であると主張している（佐藤ら, 2006; Sato et al. 2012）。佐藤とほぼ同時期に木村大治（京都大学）がバカ・ピグミーの発話重複と沈黙に関する行動学的研究を開始し（木村, 2003）、それは発話形式から会話分析による発話内容の研究へと発展する（木村, 2010）。1995年には、山内太郎（当時・東京大

学大学院)が佐藤とともに定住集落におけるバカ・ピグミーの日常生活や栄養・成長に関する人類生態学的な調査を開始し(Yamauchi et al. 2000), その研究はドンゴ村以外にも調査地を広げて現在まで継続されている。

佐藤に続いて, 1998年より林耕次(当時・神戸学院大学大学院)がバカ・ピグミーの調査を開始した。林はバカ・ピグミーの森林キャンプにおける狩猟活動について, 定住的な生活スタイルとの関係のもとに分析を行った(Hayashi, 2008)。1999年には, 北西功一(山口大学)がバカ・ピグミーの農耕化の問題を巡って調査を開始し, 現在彼らが小規模な焼畑により生産しているプランテン・バナナ栽培の実態を明らかにするとともに(Kitanishi, 2003), 貨幣経済がバカ・ピグミー社会に与える影響について考察している(Kitanishi, 2006)。

2002年からは, 大石高典がバカ・ピグミーと隣接して居住する農耕民バクウェレに関する研究を開始した。大石は, 河川沿いの農漁複合の実態について, ジャー川下流域に居住するバクウェレを対象とした研究を進めるとともに(大石, 2010), 換金作物であるカカオ栽培の活発化など貨幣経済の浸透に伴ってみられるようになった社会経済上の変化が民族集団間の相互関係に与える影響に関する研究を進めている(第5章)。

このように, ドンゴ村における日本人研究者による人類学的研究は, 「伝統主義」的アプローチを基調とした研究から始まり, 最近ではこれまで対象とされてこなかった農耕生活や定住化による社会変容といった側面をあつかう研究が展開されるようになってきている。

第2章：カメルーン東南部ジャー川下流域放棄 集落群の歴史生態学

I. はじめに

中部アフリカ熱帯雨林のピグミー系狩猟採集民とバンツー系焼畑農耕民は、集団原理の相違や社会的地位の不平等（ピグミーの劣位）がありながらも、不即不離の関係を保ちながら共存してきた（竹内, 2001）。両者の関係についてはこれまで2つの対照的なモデル、生計経済上の相互依存関係に基づく共生モデル(Terashima, 1986)と狩猟採集民が農耕民に差別されながらも、農耕社会の不可欠な成員となっているとするハウスモデル(Grinker, 1994)が提出されてきたが、いずれも静態的な社会状態を説明するに留まっている(埴, 2004)。現在の両者関係は、そのまま過去から続いてきたとするよりも、歴史上の様々な出来事の中で変遷してきたと考える方が自然であろう。特に、カメルーン東南部を含むコンゴ盆地北西部は、オーラル・ヒストリーや Bantu A グループの言語分布から 18 世紀後半から 19 世紀にかけて起こったと推定される Bantu 諸民族集団の移動・再編成の結果、中部アフリカにおける他のバンツー圏に較べて複雑に入り組んだ民族集団、および言語分布を示していることが知られており (Vansina, 1993)、カメルーン東南部においても、過去数百年にわたり外部世界との接触に起因した激しい社会経済上の変化があったことが知られる(Althabe, 1962; Joiris, 1998; Rupp, 2003)。過去 100 年に限っても、委任統治行政による野生ゴム採集、商品作物栽培導入、宗主国間の戦争、集住化政策執行、70 年代の木材伐採会社の進出、90 年代以降の自然保護運動および国立公園設置が該当する。これら度重なる外部世界からの干渉による民族間関係の攪乱・再編過程を乗り越えて、両集団がいかんして現在に至ったのかを理解するためには、両者の集団間関

係を、現在から過去に遡って明らかにする必要がある。

本研究では、バンツー系漁撈農耕民バクウェレとピグミー系狩猟採集民バカ・ピグミーの過去における居住地移動を、調査村における人口・家族調査に基づいて選んだ主要な家系ごとに明らかにし、現在の居住集団の成立過程を再構成することを試みた。

II. 方法と手順

(1) 歴史資料の収集・分析

カメルーン共和国の首都ヤウンデ市の国立公文書館(National Archives of Yaoundé)にて調査地域周辺のフランスによる委任統治期(1920-60 年代)に関する資料収集を行い、地域住民の生業や森林産物や換金作物の導入に関わる政策について把握を試みた。

(2) オーラル・ヒストリーの収集と現地踏査

カメルーン東部州ブンバ・ンゴコ県モルンドゥ郡ドンゴ村に隣接して居住するバカ・ピグミーとバクウェレの両集団の成人全員に、定住集落でおこなった人口センサス(2004; 2007; 2008 の各年に実施)のなかで、個別に以下の項目について聞き取りを行った(父親・母親の出身地、自身の出生地、過去に居住したことのある居住地の名前と位置)。得られた過去の居住地のうち、インフォーマントとともに訪問が可能である定住集落跡を可能な限り訪問し、地名の収集を行った。GPS を用いて位置を記録した。それぞれの居住地跡について、利用時期、居住時の家系集団構成、主な生業活動、以前はどんな植生が周りにあったか、放棄の理由は何だったのか、などについて聞き取り調査を行った。最後に、現地調査で得られた資料と(1)の歴史資料から得られた知見との関連を検討した。

Ⅲ. 結果

Ⅲ-1. フランス委任統治期における地域住民と外部世界との関わり

公文書館では, 1923 年以降に調査地から 50km ほど離れたムルンドゥ市に駐在したフランス人行政官による資料 9 点が得られた (巻末引用文献[公文書資料]を参照). 資料は, 年次報告と出張報告がほとんどであるが, 1951 年の郡長官 Rigo 氏による年次報告には写真付きで当時の調査地周辺の様子が記載されている. 調査地であるドンゴ村の対岸の Ngbala 村には汽船が訪れていたこと(図 2-1)や, バクウェレが現在と同様に丸木舟で移動している様子がわかる (図 2-2).



図 2-1: ジャー川に着岸している汽船. 調査地対岸の Ngbala 村 (*Fort Soufflay*) で撮影されたもの. (出所: APA 11732 22 II *Rapport Annuel* 1951)



図 2-2: 丸木舟で水上移動するバクウェレ・エセル. (出所： APA 11732 22 II Rapport Annuel 1951)



図 2-3: 行政官によるバカ・ピグミーの写真. 殺人容疑でムルンドゥからバトゥリに護送される際に撮影されたもの. (出所： APA 11732 22 II Rapport Annuel 1951)

バカ・ピグミーは、これらの報告書の中では Babinga として記載されており(図 2-3), 出張報告の中での人口調査の結果などは、他の民族とは別に分けて集計されており、バクウェレやバンガンドウなどは人の単位で記録されているが、バカ・ピグミーのみ推計値が挙げられている(図 2-4)。



図 2-4: ムルンドゥ郡の民族別人口ヒストグラム. (出所: 1AC 3509 Moloundou Statiques Année 1957)

フランス領赤道アフリカ(AEF)に属するコンゴ北部地域では、CFSO と呼ばれるコンセッション会社によって、野生ゴムの採集と栽培が強制的におこなわれていた (Guillaume, 2001). CFSO は、野生ゴムには、*Landolphia owariensis* など *Landolphia* 属

(Apocynaceae)のつる性植物樹液のほか、木本性の *Funtumia elastic*(Apocynaceae)を採集対象としていた(Guillaume, 2001: 300.). 野生ゴム採集が、どの程度の規模で行われていたかについて推測するうえで、1942 年の植民地行政官による年次報告書には、ムルンドゥ市の市場に持ち込まれた生ゴムのフランジ数の記録が参考になる。生ゴム・フランジは採取したゴムの樹液を竹筒に入れて凝固させたもので、1938 年には年間 14 万本以上が集められていた (図 2-5).

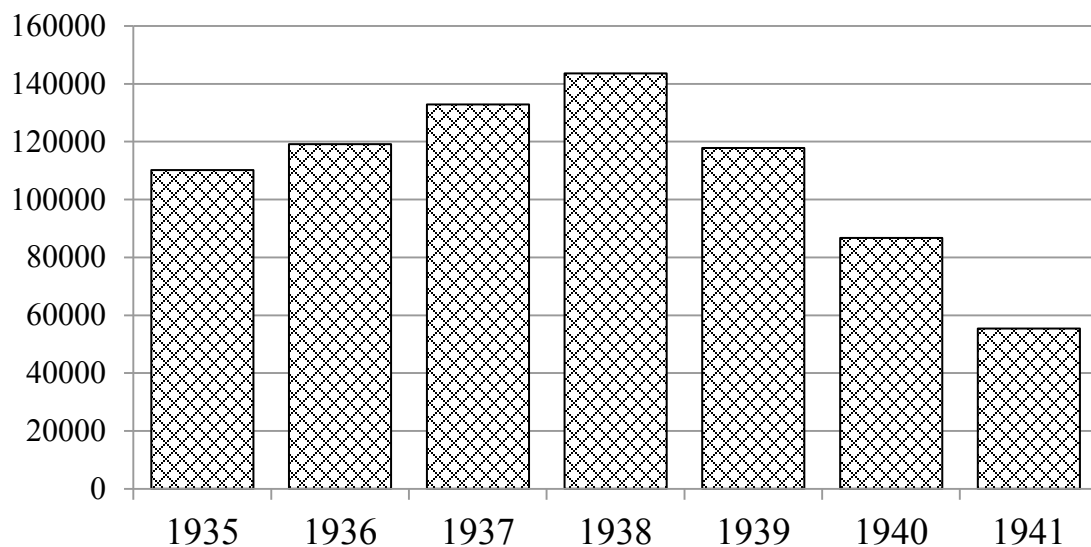


図 2-5：ムルンドゥの市場に運び込まれたゴム・フランジ数(1935-1941)

同じ資料の 1935 年から 1941 年までの生ゴムの月別の取引数データを表にしてみると、年間を通じてコンスタントに生ゴムが生産されていたことがわかる (図 2-6). 現在行われているカカオ栽培では、カカオの収穫に季節性があるため、比較的是っきりした農閑期があるのに対して、当時ゴム採集の作業が年間休みなく行われていたと考えられる。特に焼畑の伐開時期とかさなる大乾季の 1 月～4 月の間に他の季節よりも取引量が多かったことから、ゴム採集作業が特に農耕民の生業への影響が大きかったであろうことが推測される。

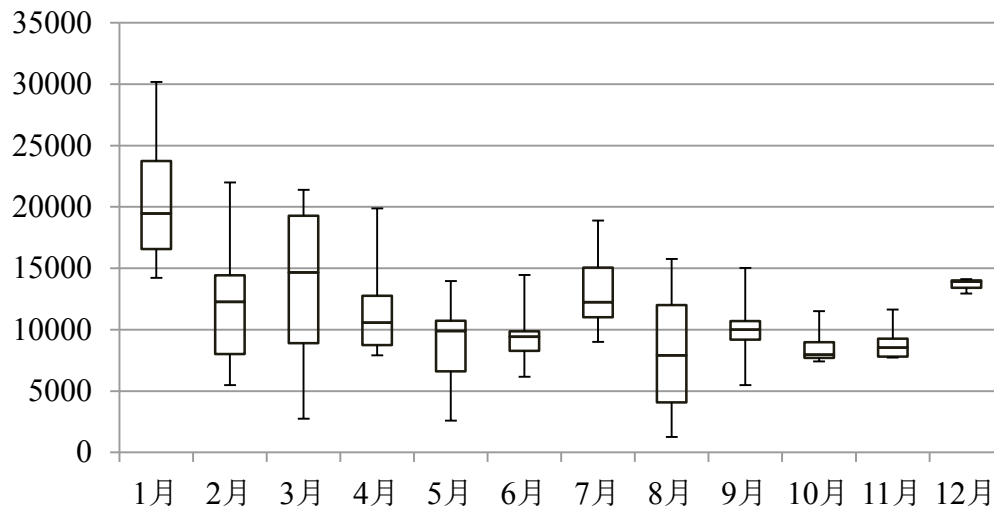


図 2-6 : ムルンドゥ市におけるゴム・フランジの月別取引数(1935-1941 年)

1950 年代に入ると、ゴムに代わって急速に換金作物としてのカカオとコーヒー栽培が奨励された。ムルンドゥ市の行政官は、開墾されたカカオ園の数とともに、まだ結実しないカカオ樹の本数までを報告に残している（図 2-7）。

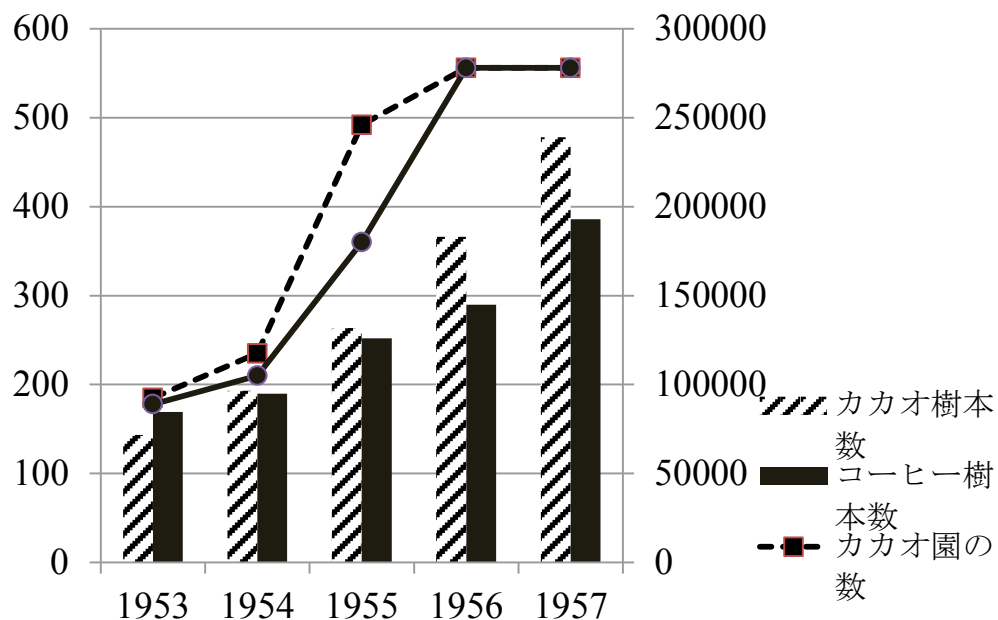


図 2-7 : 1950 年代のムルンドゥ郡におけるカカオおよびコーヒー栽培の拡大(出所:

1AC 3509 Moloundou Statiques Annee 1957)

ムルンドゥ郡において 1953 年から 1957 年までの 4 年間にカカオ園の数は 178 から 556 へと 3 倍以上に増加し、カカオ樹は合計で約 23 万 9 千本に増加した。これらの政策によって急速に拡大されたカカオ園は、しかし、ジャー川流域ではこれらの多くは独立前後の強制移住による居住地移動によって、いったん放棄されることになる。

歴史資料から得られる情報と先行研究に基づき、過去約 100 年間に調査地周辺に起こった外部社会との関わりをまとめると表 2-1 のように整理できる。

表 2-1. 過去約 100 年間に調査地周辺に起こった外部社会との関わり (Rigo, 1951; Joiris, 1998; Robillard, 2011)

19 世紀後半	ドイツ植民地行政官による天然ゴム採集・栽培の強制開始
1905-10	Moloundou 市周辺で第一次世界大戦戦闘（独軍と仏軍）に住民動員
1920-30 頃	Afrique Equatoriale Française 圏内における鉄道建設への強制連行
1940-50 頃	フランス植民地行政官によるカカオ栽培の導入
1960 年代初め	カメルーン独立紛争にともなう集住・集村化政策の実施
1970-80	外資（リベリア）による商業伐採の開始と撤退
1990 年代	生態系保全のための自然保護活動の開始
2000 年代	Nki 国立公園の設定

III-2. バクウェレ、バカ・ピグミー両居住集団の動態

ドンゴ村における現在の人口は、バクウェレが約 180 人、バカ・ピグミーは約 300 人であり、数キロずつ離れた 6 つの小集落に分かれて隣接（5 小集落）ないし混住（1 集落）をしている。それぞれの小集落は、1 つから 8 つまでの父系拡大家族により構成されている。バクウェレは、ジャーコ（「ジャー川上流の人々」）という地縁的集団アイデンティティを共有しているが、各家系の出自集団はバクウェレのみならず、コナベンベ (Konabembe)、ジェム(Djem)など周辺諸民族集団より成る。バクウェレ・ジャーコ各家系集団の年長者への聞き取り調査の結果、かつては熱帯林の中に分散して居住し、しばしば対立関係にあった各家系集団が、婚姻を通じた女性の交換により密接な関係を持つ

ようになり、出自民族集団を超えたレベルで地縁的な結合を重視した集団アイデンティティが形成されたことが示唆された。

一方バカ・ピグミーの年長者への聞き取りから、ドンゴ村のバカ・ピグミーには、バクウェレの家系集団とともにジャー川ぞいに移住してきたグループと、バクウェレ集落の動きとは関係なく、ほかの農耕民集団の村を離れてドンゴ村に移住・定着したグループとが混在していることがわかった。また、バクウェレ、バカ・ピグミーともに通婚圏は半径 100 キロ以上に広がっていた。

III-3. 農耕民による放棄集落の分布と地名

聞き取りに基づく現地踏査により、21 のバクウェレの定住集落跡、10 のバカ・ピグミーのベースキャンプ跡が確認された(図 2-8; 2-9)。21 のバクウェレの定住集落跡は全てジャー川に面して立地していたが、バカ・ピグミーのキャンプ跡は農耕民集落から森の中に 300 メートルから 3 キロメートルほどの範囲に位置していた。バクウェレの集落跡は、植生の変化が周辺の森林に比べ比較的捉えやすく、特定樹種 (*Lingembe*:

Rothmannia sp. Rubiaceae や *Belenge*: *Meiocarpidium lepidotum* (Oliv.) Engl et Diels

Annonaceae) が「指標」として用いられ、放棄された時期や土地利用の方法と関連づけられて解釈された。これらの樹種が、植生の人為的攪乱とどのような関係にあるのかは次節で検討する。バクウェレの定住集落跡には必ず地名がつけられていたが、バカ・ピグミーの居住地跡には、必ずしも固有の地名がなく、近くのバクウェレの集落跡の名前が当てられていることが多かった(表 2-2)。

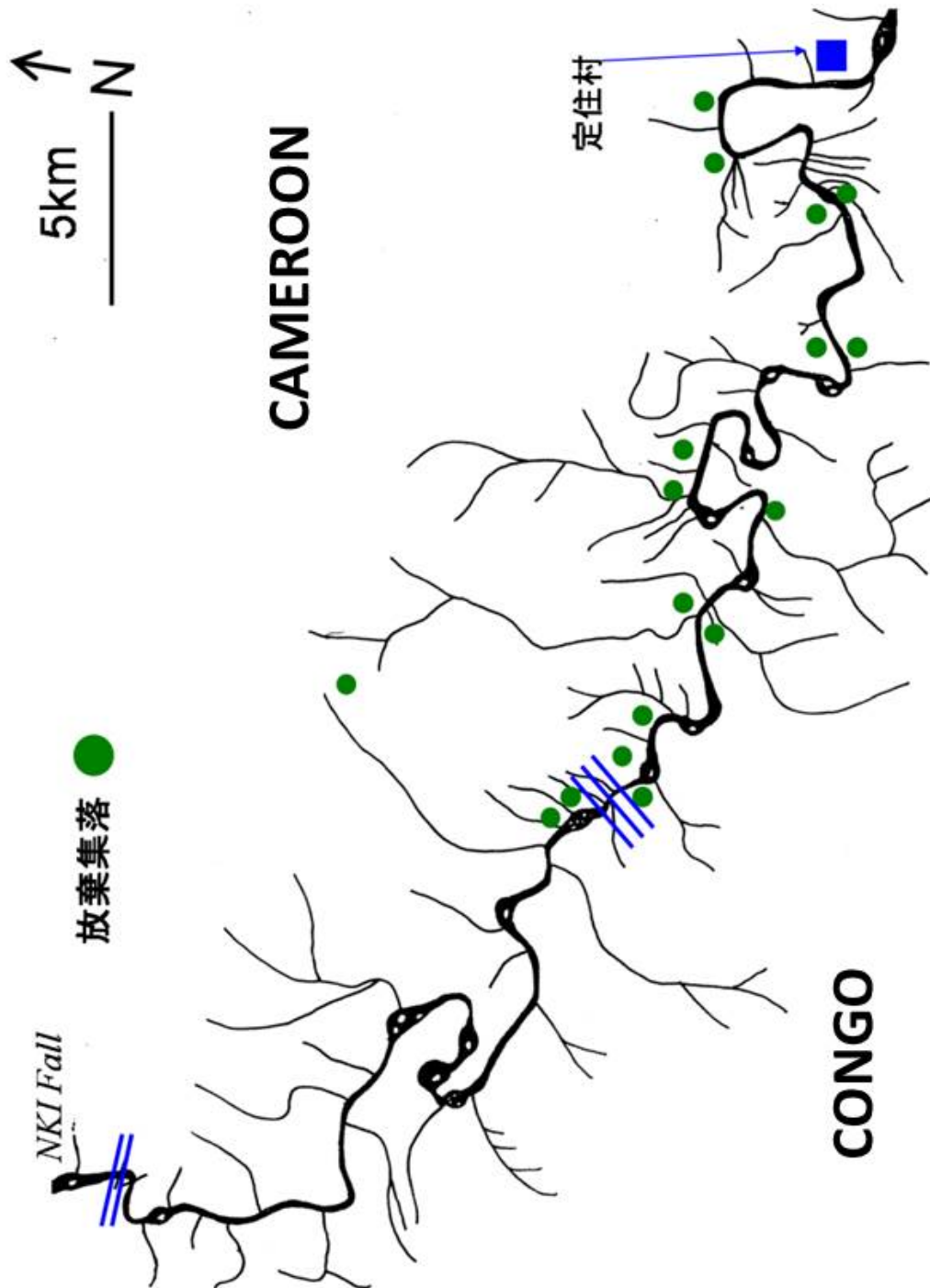


図 2-9.:放棄集落跡の分布

表 2-2. 聞き取りおよび現地踏査により得られた放棄集落群に関する情報

定住集落名	居住時期	居住者	放棄の理由	ゴム	カカオ	土器・鉄器
Messok	>1930	Dj/Bk	大量死	○	○	○
Dibo	>1930	白人	不明	×	×	○
Ndongo[1]	>1940	Kb/Bkw/Bk	不明	○	○	○
Ndongo[2]	1940>1950	Dj/Kb/Bkw/Bk	強制移住	×	○	
Ndongo[3]	1960>現在	Dj/Kb/Bkw	—	×	○	
Baad	>1960	Kb/Bkw/Bk	強制移住	○	?	
Leke[1]	>1930	Kb/Bkw/Bk	不明	?	?	○
Leke[2]	1930>1960	Kb/Bkw	不明	×		
Leke[3]	1960>現在	Kb/Bk	—	×	○	
Ngola	>1930	Kb/Bkw	呪術	×	×	
Mindourou[1]	>1960	Kb/Bkw/Bk	強制移住	○	○	
Mindourou[2]	1960>	Kb/Bkw/Bk	—	×	○	
Ekoob	-----地名・伝承のみ-----					
Alangong	-----地名・伝承のみ-----					
Alangongboto	-----地名・伝承のみ-----					
Cinet	-----地名・伝承のみ-----					
Ngokosangha[1]	1950>1960	Dj/Kb	強制移住	×	○	○
Ngokosangha[2]	1985>現在	Kb/Bkw	—	×	○	○
Mekununu	1960>1970?	Kb/Bk	不明	?	?	?
Mapoma	1980>現在	Kb	—	×	○	
Epaka	?	Bk	呪術	?	?	?

* 居住時期は、情報を得たインフォーマントの推定年齢に基づいて推定した。

* 居住者は、各集団を Dj=Djem, Kb=Konabembe, Bkw=Bakwele, Bk=Baka と表した。

III-3) 環境利用の痕跡

訪れた少なからぬ集落跡地で、かつてのカカオ栽培およびゴム採集の痕跡（カカオ園およびゴムの純林）を認めることができた。また、異なる年代に放棄された調査プロットごとに、さまざまなタイプの人為遺物が確認された。以下に、観察された人為遺物について種類ごとに記載する。石器や土器、儀礼用鉄器は、1950年以前の古い時期に放棄された集落において多くみられた。一方、1960年前後を境に、ビール瓶やスコップ、ホーロー製食器などカカオ栽培および貨幣経済の本格的な浸透を示す商品の遺物が増加している。とくに土器については、異なる年代の集落放棄地にそれなりの量が見られ

た.

1) 石器

・磨り器と丸石

放棄後 100 年以上経過していると思われる調査プロットにて半地表から発見. 香辛料となる木の実やトウガラシなどの食品を磨り潰すための炊事用具である. 現在は同様の用途に, 木製の台と, 球形の果実を乾燥させたものを用いているが, 同じ形態だが, 石でできた磨り器と丸石が見つかった.

2) 土器・陶器

・小型のつば, 土器片

放棄後 20-100 年とみられる調査プロットにて, 小型のつばや, 皿などの土器片の散乱が林床部に見られた.

・腕輪

同様に放棄後 40-50 年とみられる調査プロットにて, 発見. 陶製の輪形装飾. サイズからして, 腕に付けたものと考えられた.

3) 金属

・鉄矛

放棄後 50-60 年とみられる調査プロットの地表近くにて発見. ドウパやゾンと呼ばれる鉄製の薄平べったい矛が, 錆びついてはいるものの見つかった(図 2-10). 聞き取りの結果, これらはかつて婚礼の際に男性から女性に支払われた婚資の一部であることが分かった.



図 2-10: 金属製の鉄矛. 向かって左: *zong*; 右: *dupa* (バクウェレ語).

・首輪，腕輪，足輪

放棄後 50-60 年とみられる調査プロットの地表近くにて発見. グオスと総称される金属製（鉄製と思われる）輪形装飾で，首輪（グオス・チョン，グオス・チー），腕輪（グオス・ンボ），足首輪（グオス・エ・コ），の各種がある. 聞き取りの結果，これらもまた，かつて婚礼の際に男性から女性に支払われた婚資の一部であることが分かった.

・投げナイフ

放棄後 50-60 年とみられる調査プロットの地表近くにて拾ったものを調査プロット周辺の出づくり地の古老宅から確認. ボゲヤと呼ばれる戦闘用の投げナイフ. レイヨウの

頭部を象ったデザインが施されている。

- ・スコップ

放棄後 40 年とみられる調査プロットから、植生の根に絡まった形で地中に埋もれているものを発見した。一部を除き、分解してしまっていた。

- ・ランプ

放棄後 40 年とみられる調査プロットから発見。ケロシン・ランプの金属部分がばらばらになったもの。

- ・ホーロー皿，深皿

放棄後 10 年から 40 年程度の調査プロットで頻繁に観察された。半分地中に埋まったり，地表に散乱する形で林床部に見られる。形が歪んだり，穴が開いているものが多い。

- ・不明

用途不明の鉄製具の一部とみられるものが数点確認された。

4) プラスチック・ガラス

- ・ビール瓶

放棄後 50-60 年とみられる調査プロットにて，現在調査地域で流通している胴長型の瓶とは異なるずんぐりとした形のビール瓶がたくさん発見された（図 2-11）。委任統治時代に流通した瓶の形であるという話であった。



図 2-11: 胴が詰まったビール瓶. 現在入手可能なものとは形状が異なる.

・プラスチック籠

放棄後 15 年とみられる調査プロットにて、劣化した黒灰色のプラスチックの塊が観察された。カカオの秤量のために用いられた籠が残ったものと思われる。

4) 衣服

放棄後 15 年とみられる調査プロットにて、化学繊維製の衣服が地表に半分うずもれる形で観察された。

5) 人為地形・家屋跡地

調査地域周辺でみられる家屋の形式には、大きく分けて 2 タイプある。一つは、モングルと呼ばれるクズウコン科の林床草本の葉と木本の若枝で作られる半球ドーム型の小屋で、バカ・ピグミーの伝統的居住様式である。もう一つは、ポトポトと呼ばれるラフィアヤシの幹の骨組みに土を塗りこんで作られるもので、バクウェレはじめバンツー系農耕民の伝統的居住様式である。前者は、分解されやすい植物素材だけでできているので、天井や壁の葉を数週間おきに換え続けなければ数カ月で影形なくなるが、後者の

土壁づくりの家屋は屋根の葺き替えを数年おきに続ければ十年以上維持することが可能である。

家屋倒壊後、地表には壁に練りこまれた土壌が積み重なって堆積する。この地表面の盛り上がりが雨水によって流れ去る前に周辺植生に覆われた場合、森林回復後まで地表面に不自然な隆起が残っているのが観察された。これが、現地の人々が古い集落跡において具体的な家屋の配置を識別するひとつの手掛かりとなっていた。



図 2-12：木本性の野生ゴム樹液を産する *ndama: Funtumia elastica* (P. Preuss) Stapt.,
Apocynaceae

少なくとも 4 つの放棄集落で、野生ゴムのうち、木本性の *Funtumia elastica* (P. Preuss) Stapt., の群生を確認した（表 2-2）。野生ゴム採集の作業の経験について、バカ・ピグミ

一の古老 G は、下記のように回想した。

「ゴムを採っていたころは、白人がいて、チェックを受けたものだ。それは、このわたしの目の前で起こったこと。その人は手でゴムをつかんで、もし品質が悪いとなったら大変だ。もう一回、採集に行かされた。」（バカ・ピグミーの老齢男性 G，2010 年 8 月 1 日聞き取り。）

この語りからは、文献資料によれば、実際に税金としての野生ゴム採集を命じられているのはバクウェレの村長だが、実際には野生ゴム採集の労働にはバカ・ピグミーが動員されていたということが分かる。

少なくとも 1930 年以前にさかのぼる集落跡にまで、野生ゴムやカカオの栽培・採取の痕跡が残っていることは、対象地域における世界経済の浸透の程度を示すものとして注目される。現在でも雨季を中心に多大の時間が割かれるカカオ栽培が、これら集落跡での生活においても大きなウェイトを占めていたことは明らかだと考えられる。また、ゴム採集やカカオ栽培の導入の時点で、銃が入っていたことが示唆される。また、集落跡地にて行った聞き取りでは、バクウェレ、バカ・ピグミーのインフォーマント双方から、現在では行われない集団網猟が行われていたという情報が得られた。バクウェレのインフォーマントによれば、バカ・ピグミーは現在のように自前の畑を持たず、バクウェレの畑で農作業の手伝いを行うことにより農作物を得ていたという。なお、川沿いの集落跡地は現在でも頻繁に漁撈活動やナッツ採集のための季節キャンプとして活用されている（第 3 章）。

III- 4. 現地調査と文献調査の整合性

ヤウンデ国立古文書館にて資料収集を行った結果、植民地行政官による 1933 年時点

におけるジャー川中流域における定住集落の分布に関する手書きの地図および集落の概要に関する文献（"Rapport de tournée effectuée du 3 Avril 1933 au 14 Avril 1933 par le chef de la subdivision de Moloundou dans la région Konabembe"）を発見することができた。これを参照したところ、付表に示した放棄集落群のうち、旧 Messok 村、旧 Ndongo 村、旧 Leke 村、旧 Baad 村、旧 Mindourou 村の位置に関して、インフォーマントとともに収集した地理上の情報が一致し、聞き取り調査により得られる情報の信頼性、有効性について一定の確認ができた（図 2-13.）。

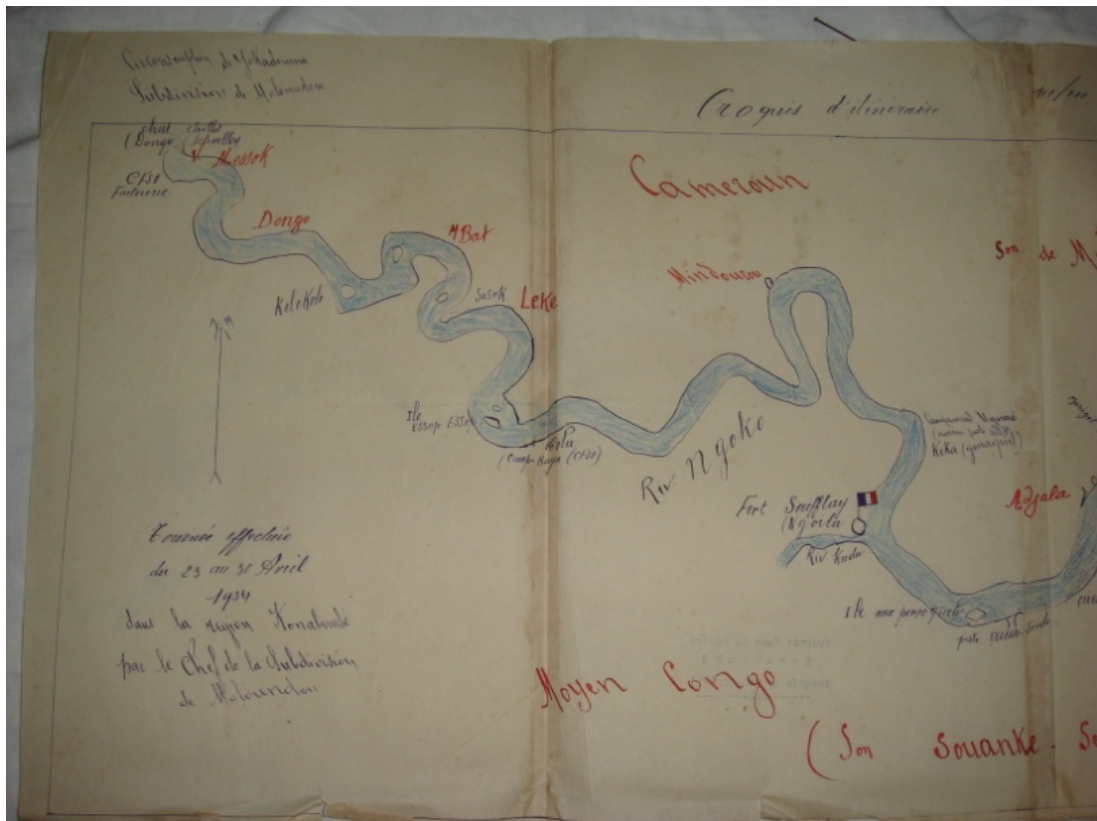


図 2-13. 植民日行政官が作成したジャー川下流域の地図。（出所: APA 11779-B）

ただ、委任統治期の行政官による出張報告には、バクウェレなど農耕民に比べてバカ・ピグミーに関する記述が乏しい。これは、前述のようにバカ・ピグミーの集落が

農耕民集落から数キロ離れた熱帯林内部に位置していたために短期間の訪問者である行政官の目には入らなかった結果だと推察される。

バクウェレのインフォーマントによる、「バカ・ピグミーは、森の中に隠れていた」「われわれの後ろに、バカ・ピグミーが居た」という表現は、多くのバカ・ピグミーが商人など外部世界からの来訪者と直接関係をもつ現在とは異なり、上流域に居住していた時期には、農耕民が労働力としてのバカ・ピグミーを囲い込むとともに外部世界とバカ・ピグミーの生活世界の間を媒介する存在にであったと考えられる。

IV. まとめ

中央アフリカのピグミー系諸集団の歴史について歴史言語学的なアプローチから研究を行った Bahuchet(1993)によれば、バカ語は隣接するピグミー系集団アカ・ピグミーのアカ語と語彙レベルで共通性が高く、250–300 年程度前までは両者は共通の集団であったことが推定されている。また、バカ・ピグミーは、バカ語という独自の言語を有するが、これは現在コンゴ共和国ウバンギ川の近くに居住するバンツー系農耕民 Ngbaka の使用言語に近縁とされている。これらから推察されるのは、バカ・ピグミーはもともとカメルーン東南部より南東の現在のアカ・ピグミーの分布地域に近いところから、何らかの原因により現在の分布域に移動してきたということである。その過程のどこかで両者は遭遇したと推測される。

バクウェレはもともとコンゴ共和国北部熱帯林に分布の中心を持ち、森林環境によく適応した西バンツーとして自立した生計経済を営んでいた(Siroto, 1969)。18 世紀後半から 19 世紀にかけてのコンゴ北部からカメルーン東南部にかけての民族間紛争と民族間関係の再編の過程で、諸民族集団は移動と混淆状況を繰り返し、その中から農耕民社会の中にバクウェレ・ジャーコという地縁的なつながりをもとにしたアイデンティティが生まれた。一部のバカ・ピグミーは、彼らと農作物と労働力の交換という形で関係を持

つに至った。

19 世紀後半から続いた部族間戦争に加え，第一次世界大戦に巻き込まれることを通じて，ジャー川流域の森林内で混合部族的な農耕民集団「バクウェレ・ジャーコ」が生成した。

フランス委任統治下では，バクウェレなど農耕民に野生ゴム採集，ついでカカオ，コーヒーなどの換金作物栽培が課されたが，実際にはバカ・ピグミーがこれらの労働の担い手として農耕民を手伝っていた。1930 年代には，野生ゴム採集のピークを迎え，1950 年代には，カカオ栽培の急速な拡大が図られた。以上の経緯のなかで，一連の委任統治政策による森林産物の採集や換金作物の導入と奨励は，農耕民の狩猟採集民への労働力依存を高めたということが推察される。

第3章 森の「バカンス」―バクウェレによる漁撈実践を事例に―

I. はじめに

I-1. 定住村と漁撈キャンプ：二つの社会的なモード



図3-1. ジャー川を行きかう丸木舟.

2002 年1 月から2 月にかけて、私は生態人類学的な研究を志してカメルーン東南部の熱帯雨林を初めて訪れた。住み込み先をカメルーンとコンゴの国境を流れるジャー川の傍らにあるドンゴ村に選んだ。ここは、バクウェレという民族名の農耕民の村である。かれらとの会話から、私が当時憧れを抱いていた自然により強く依存した生活がありそうに思われたジャー川上流方面の出作り地を訪ねることにした。その周辺には漁撈や採

集といった活動の拠点として使われている、かつての廃村群があるというのだ。その旅の2 日目に、2 艘の丸木舟いっぱい、鍋やきねなどの炊事道具はもちろん、蚊帳や家財道具や農作物、はてはニワトリやヤギといった家畜までを山のように積み込んで流下してくるA 氏の家族と水上ですれ違った。ジャー川の流れは緩く、我々の舟は手漕ぎで遡って行くので近づくのにも時間がかかる（図3-1.）。

すれ違った地点から丸2 日かかる漁撈キャンプで2 週間過ごし、そこから定住村への帰途だという。その時点で、A 氏と私は短い滞在期間ながらすでに定住村で知り合っていた。初対面の際に路上で声高に金品を要求されたことがあり、良い印象を持っていなかった。おまけにお世話になっていた調査助手からも、彼がいかにトラブル・メーカーであるかを聞かされていたため、すっかり警戒していた。しかし、丸木舟の上のA 氏はごくごく和やかに、「よく来たね」といって、上流のキャンプで拾ったという土器をいくつか見せてくれた。そして、私に大きなナマズの燻製をそっと手渡して、そのまま静かに川を下っていった。



図3—2. プスプスに荷物を載せて川に向かうカップル

私は、村での彼の私に対する非常にとげとげしい関与の仕方や攻撃的にさえ感じられた押しの強さと、丸木舟の上での同一人物とは別人であるかのように紳士的で、落ち着いた態度の間のギャップがあまりに意外で、強い印象を受けた。漁撈キャンプでのかれらとの出会いは、私にとって驚きであると同時に発見だった。なぜなら、それは、私のなかで知らずしらずにできていた農耕民イメージを崩すものだったからである。

そのイメージとはどのようなものか。たとえば、生活苦の訴えと対になった金品の要求が挙げられる。一方的に問題をぶちまけられて、カネをくれといわれる。問題の真偽は分かりようもない。いったい、その問題がこの私とどういう関係にあるというのか、という困惑に襲われながら話を聞く。そんな時、かれらのこちらへの接近の仕方は、相手である私が何をしようがお構いなく、彼にとって都合のよいタイミングで要求をぶつけてくる。

一方的で押しの強いコミュニケーションのあり方は、バクウェレだけにかぎったことではなく、アフリカ熱帯雨林の様々な農耕民社会で報告されている。たとえば、カメルーン東南部から数千キロメートルも離れた旧ザイール（現コンゴ民主共和国）中央部の熱帯林に棲む農耕民ボンガンドの発話形態を記述・分析した木村大治は、言葉を投げつけるようなかれらのコミュニケーションにおける対他的な身構えを、投擲的態度と呼んだ（木村 1991）。このような対人関係における対他的圧力と一方通行性は、農耕民社会にみられる特徴の一つであると考えられる。しかし、それはかれらの社会の日常生活の中で、いつでも、どこでも、同じように維持されるものなのだろうか。私は、このような特徴は、定住村においてこそ顕著に観察されるものであり、そこから離れた生活空間ないし場（たとえば、バクウェレにおける漁撈キャンプ）においては必ずしも成り立っていないのではないか、そしてそういった場によって、社会的な付き合いのモードが切り換わるのではないかという考えを抱くようになった。もしそうであるならば、村に

いるときのかれらだけをみて、対人関係や社会のあり方を理解しようとするのでは不十分ということになるだろう。

I -2. バクウェレ社会における漁撈キャンプとバカンス

ぼろぼろのプスプス⁴の上に、ベッド代わりのマットレスやら、食器やら、ありったけの家財を漁網と一緒に積んで、若いカップルが川へ向かう道を進んでゆく（図3 -2）。どこに行くの？と尋ねると、「ちょっとバカンスに行ってくるのよ。」という答えが返ってくる。

数日後、丸木舟を借りて川を遡ってゆくと、木陰にぷかりと舟を浮かべて釣りをしている2 人を見かけた。女性は、丸木舟に寝そべって手枕をしている。乾季になると、このような光景をしばしば目にすることになる。

なぜかれらは、漁撈キャンプに行くのに「バカンス」というような言葉を使うのだろうか。漁撈活動を生業、すなわち労働としてとらえると、私たちには、一見これはひどく矛盾した言い方のように聞こえる。常日頃、私たちがつかうバカンス⁵という言葉には、反労働としての休暇という意味合いが込められているからである。

しかし、日本やアジアの民俗世界を対象にマイナー・サブシステム論を展開するなかで松井健が指摘するように、労働を遊びとは無縁なものとして灰色に塗りつぶすような「休息と労働と遊びという三分法は近代産業社会の思考を反映している」（松井 1998）のである。かれが「バカンス」という言葉を使ったからといって、漁撈キャンプでの生活ではかれらの日常性が全て否定されるというわけではない。それでは、バクウェレにとっての「バカンス」とは、いったいどのような生活感覚に根ざしたものなのだろうか。

⁴ フランス語で、金属製の手押し大八車のこと。“*pousse-pousse*.”

⁵ バカンスの原義は、空白や不在といった意味であり、仕事や労働がないからっぽな状態を表す。

I -3. 生業実践の空間的広がりとその社会学的な意味

森の農耕民にとっての生活の場は村とその周辺の畑だけに限定されるものではない。これまで、森でキャッサバやプランテン・バナナなどタンパク質含量の少ない作物に依存する農耕民にとって、農耕以外に狩猟、採集、漁撈といったありとあらゆる手段によってタンパク質を確保することが重要であること、これらの社会では農耕以外にこれらの活動や余暇に多くの時間が割かれていることなどが示されてきた（Kimura, 1992; Takeda & Sato, 1993）。環境に応じて複数の生業要素を柔軟に組み替えたり、組み合わせる傾向性は、中央アフリカ熱帯雨林の農耕民だけにとどまらない。東部アフリカ、南部アフリカ、中部アフリカの焼畑農耕民社会における生計維持システムを比較研究した掛谷誠は、その生業形態の一般的な特徴として、焼畑農耕に基盤を置きながらも、狩猟採集、漁撈、家畜飼養など様々な生計活動の選択肢を持ち、幅広く自然資源を利用する環境利用のジェネラリストであることを指摘している（掛谷, 1998）。畑だけでは食べてゆけないとなると、かれらの生活圏は自然と村から森へと広がりをもったものになる。農耕民の生活圏は存外広いものなのである。しかし、これまで森の農耕民にとって、これら多様な生業実践が行われる場がどのような社会学的な意味を持っているかについては、ほとんど言及されてこなかった。

中央アフリカ熱帯雨林における野外研究で、生業が行われる場の社会的重要性がいち早く着目されたのはピグミー系狩猟採集民研究においてであった。まず、市川光雄が、ムブティ・ピグミー社会にとっての蜂蜜の栄養学的な重要性と同時に蜂蜜採集キャンプの持つ社会学的な重要性を強調している（Ichikawa, 1981）。コンゴ共和国北東部のアカ・ピグミーの網猟に参与観察した竹内潔は、捕獲努力を上げれば明らかによりよい結果が望めるような状況にあっても、獲物を増やすための労働強化が行われないことを報告している。アカ・ピグミーが大事にしているのは、狩猟活動そのものの楽しさだけで

なく、休息時間に獵参加者の間で見られる座談や踊りといったコミュニケーションの楽しみなのである（竹内, 1995a）。

一方、農耕民についてはどうであろうか。コンゴ民主共和国東部のイトウリの森に居住する農耕民レッセとエフェ・ピグミーの集団間関係について調査を行った寺嶋秀明は、レッセたちが「休暇⁶」と称してエフェ・ピグミーの蜂蜜採集キャンプに居候する様子を報告している。村こそが主要な活動の舞台である農耕民であるゆえに、ストレスや困難な問題を蓄積している。レッセにとっては森のキャンプが、格好の村からの逃避先として機能しているのではないかというのである（寺嶋, 1991）。

コンゴ共和国北東部モタバ川流域で調査を行った埴狼星は、農耕民ボバンダとアカ・ピグミーの関係が、定住村と築漁キャンプで大きく変わるという興味深い現象を報告している。一般に、農耕民とピグミーのあいだにははっきりした優劣関係が存在している。ボバンダは、村ではいうことを聞かないアカ・ピグミーに対しては武器を使った脅しを用いることさえも辞さない。しかし、築漁キャンプではアカ・ピグミーと同じキャンプに滞在し、協同して漁撈を行う。築漁のキャンプは、両者の擬制的な家族関係の絆を強化する儀礼的な場になっており、築漁キャンプの期間中は、村で両者が抱える諸々の問題は棚上げにされる（埴 2004）。

これらの報告では、蜂蜜や魚という森の恵みがもたらす祝祭的な雰囲気や、定住村から離れることによる社会的な緊張の緩和が、生態学的、経済的な共生関係にあるピグミー社会との関係性に注目して論が進められている。本章では、ピグミーとの関係はひとまず措き、農耕民社会にとって、村を離れて森に行き、そこを一時的にせよ生活の場とすることが、かれら自身にとってどのような社会的な意義を持つのかをバクウェレの漁撈キャンプ生活への参与観察に基づいて内在的な観点から素描することを試みる。そして、そこから読み取れるかれら自身の「森に棲まうこと」に関わるセルフ・イメージに

⁶ フランス語で、コンジェ（“conge”）と表現されたと寺嶋は書いている（寺嶋, 1991）。

ついて考えてみたい。

II. バクウェレによる漁撈実践

II-1. バクウェレの生業活動における漁撈活動の位置

バクウェレの生業形態は、焼畑農耕をベースに漁撈、狩猟、採集、ごく小規模な家畜飼養が組み合わされた多重的な生業複合が見られる。近年では、換金作物であるカカオ栽培が、現金収入源として大きな割合を占めており、基本的な生活周期は焼畑の農耕暦とカカオ園での作業暦（特に繁忙期である収穫から天日乾燥・売却まで）により決まっている（図3-3）。

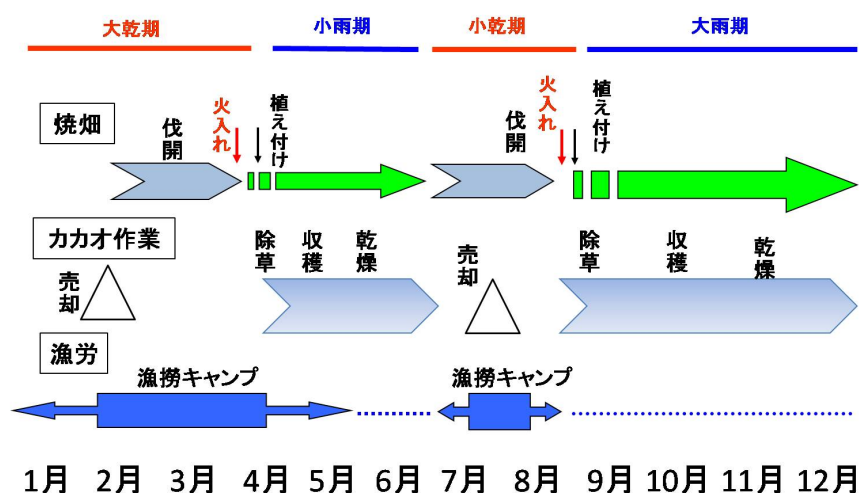


図3-3. 農耕暦と漁撈活動の最盛期の関係。

3月と9月、乾季の終りに焼畑の火入れが行われ、プランテン・バナナ、キャッサバ、トウモロコシ、ヤウテアなどが植え付けられる。これらのうちプランテン・バナナとキャッサバが主食とされる。最近では、新しく開かれるプランテン・バナナの焼畑のほぼすべてにカカオが同時に播種されており、自給用の畑と換金作物用の畑の位置付けがきわめて曖昧になっている。全世帯が自給用の畑を、全世帯の約80%に当たる31世帯が収穫の得られるカカオ園を所有している。各世帯の焼畑面積は、自給用焼畑（まだカカ

オが収穫できるまでに育っていない畑) が平均1.5ha, カカオ園が平均3ha ほどである。最近では, 様々な社会・経済的な理由からカカオ園をハウサなど外部から来た商業農民に貸し出す世帯も増えている。

カカオの収穫期にあたる雨季の間は, 人びとは主に定住村に滞在することが多いが, 乾季になると, ペティ・ピエーブ (*kpeti pieeb*) と呼ばれる二次林のなかの出づくり小屋や森のキャンプであるペティ・ンディック (*kpeti ndik*) に出かける。ペティ・ンディックには, ペティ・チール (*kpeti chiir*) と呼ばれる狩猟キャンプ, ペティ・ワ・ディー (*kpeti wa dii*) と呼ばれる漁撈キャンプ, ペティ・ニョック (*kpeti nyoak*) と呼ばれるイルビンギア・ナッツの採集キャンプ⁷いずれもが含まれるが, 長期間の狩猟に出かけることの少ないドンゴ村のバクウェレたちにとっては漁撈キャンプのことを指すことが多い。

ここ数年は, 都市から村までカカオを買い付けに来る商人の市が立つ時期が大きく大乾季にずれ込むことがあり, これが森に出かける時期を遅らせたり, 期間を短縮させたりするといった影響を与えることも多いが, 基本的には, 雨季は定住村に人口が集中し, 乾季になると森の中に人口が分散するという離合集散の生活周期が繰り返されることになる。

II-2. タンパク源としての魚

森に棲む農耕民は, 主食を農作物に依存する限り, タンパク質源を求め続ける生活を送らなければならない⁸。バクウェレ語では, 空腹感にはザー (*zaa*) とゾー (*zoo*) の2種類があるとされており, このうちのザーは, 肉や魚の動物性蛋白質が食べられない状況

⁷ 採集キャンプには, 採集対象となる植物の名前がつけられる。ニョックは, イルビンギア・ナッツ *Irvingia gabonensis* (Irvingiaceae) の方名である。

⁸ 十分にタンパク質を摂取せずにキャッサバやプランテン・バナナなど焼畑作物の炭水化物ばかりを摂取すると, 必須アミノ酸の欠乏によりクワシオルコル病になりやすい。

が続くことを、ゾーは主食となる作物が食べられない状況が続くことを指す。

村の食生活では主食であるプランテン・バナナや多年生のキャッサバが欠乏することは稀で、世帯の中で不平が上がることが多いのは、ザーのほうである。肉や魚を調達できれば良いが、それがなくてもタンパク質を豊富に含む芋虫類をはじめとする昆虫類、畑に茂るキャッサバや集落近くの開けた森林環境で採集されるココ (*koko*: *Gnetum africanum*) やカレ (*kale*: *Gnetum buchholzianum*) と呼ばれるグネツム科グネツム属の野生植物の若葉や、森の中のシロアリの巣の周辺に群生するシロアリキノコ

(*Termytomycetes* spp.) , 雨季に森の樹上やカカオ園に発生するアフリカオオカタツムリの仲間ンゴル (*ngol*: *Achatina* sp.) などが採集され、副食として利用される。

狩猟のうち、最も盛んなのはラーブ (*laab*) と呼ばれる跳ね毘鹿である。集落近傍の二次林を中心に、遠くても片道徒歩数時間の範囲の森に仕掛けられる。近年のカカオ栽培の拡大に伴い、定住集落に常時滞在する人口が増えたことが狩猟圧の増加をもたらしているのか、最近跳ね毘鹿は不猟である。熱帯アマゾン低地のいくつかの焼畑農耕民(インディオ) 社会では、狩猟の効率が下がると、生業努力の重点を狩猟から漁撈に移すという戦略が取られる (Beckerman 1993) 。バクウェレにおいても、狩猟によって得られる獣肉の減少により、漁撈への依存度が相対的に高まってきている。

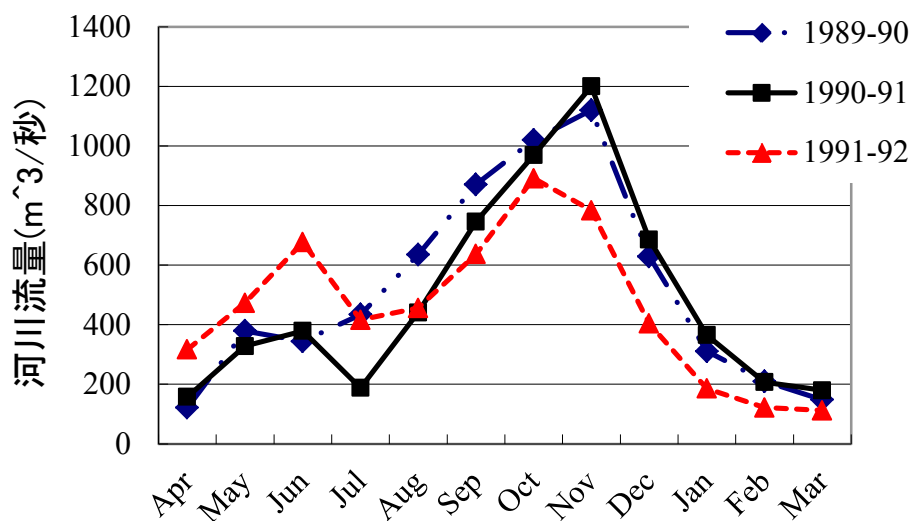


図3-4. ジャー川下流における月毎の河川流量の変化 (Sigha-Nkamdjou, 1994)

さらに2005 年10 月にはカメルーン政府により、ドンゴ村の西北西15km にあるジャー川の支流レゲ川以西が、国立公園に指定されたことに伴い、大型哺乳類保護を目的とした狩猟規制がより厳密に適用されるようになった。狩猟規制は、ピグミー系住民よりも、専ら現金獲得を目的に狩猟を行っていると言われる農耕民に対してより厳しく適用される傾向が見受けられる。このような自然保護政策の動向は、バクウェレをこれまで以上に漁撈に依存させ、水産資源の減少を招きかねない可能性すらある。

II-3. 熱帯雨林水系の特徴と漁撈技術

バクウェレが用いる25 余りの漁法は、大乾季の渇水期とその前後の水位変化を利用した季節的なものと、通年場所を変えながら行われるものに大別できる。1990年前後に調査地から45km ほど下流の地点（モルンドゥ市近郊）でジャー川の水文学的な調査を行ったSigha-Nkamdjou（1995）によれば、若干の年変動がみられるものの、9—12 月の大雨季と1—3 月の大乾季ではジャー川本流を流れる水量の差は5 倍以上にもなる（図3-4。）。

氾濫期には、林床全体が水に浸かる冠水林が出現し、置針漁や突漁が行われる。雨季が終わり、水が支流から本流に落ちる際に、築漁がいくつかの小河川の川口で行われる。減水につれ、川岸や林内には水溜りが数多くでき、取り残された魚たちが掻い出し漁の対象とされる。さらに水が引くと、川岸の泥の中に潜り込んだ魚を掘り取る漁が行われる（図3-5。）。

の繁殖生態にとって重要な意味を持っていることが知られている。各地で人びとは、河川の水位変動に付随した魚の生態に関する民族知識を発達させ、河川氾濫により生じる一時水域を巧みに利用することにより、多様で個性に富んだ在地漁撈文化を生み出してきた。たとえば、岩田明久らは、魚類学的見地からメコン川水系上流部における魚類の生息場所利用と住民の漁撈活動の関係について検討している（岩田ら, 2003）。アフリカ熱帯雨林においても、在来型の漁撈の本領は、本流の季節氾濫によってできる一時水域が作る漁場と、魚の生態に関する知識を巧みに利用したこまやかな技術にあると考えられる。しかし、複数世帯や集落単位の協同を要する大きな支流を堰き止めて行う築漁や、大掛かりな魚毒漁のような参加者が種々の禁忌を厳しく守らなければならない伝統的な漁法は廃れる傾向にある。それら歴史ある漁法のほとんどはまた、漁撈キャンプでは行われるが、定住集落周辺ではほとんど見られなくなっている。

大乾季には大きな減水により、魚の分布が本流に集中すると同時に、人の手に届く範囲に魚たちがいる。このため、本流に面した漁撈キャンプを拠点にして、様々な漁法を同時に行えるようになる。このことが、様々な参加者からなる集団が長期間漁撈キャンプに泊まり込んで漁撈活動を集中的に行う森行きの生態学的な必要条件となっていると考えられる。

II-4. 移動しながらの漁撈生活

バクウェレたちは、乾季になり、本流の水位が低下すると川沿いに遡り漁撈を行う。丸木舟を用いて移動し、本流沿いにキャンプを作る。移動手段として丸木舟が用いられる理由の一つは、村からキャンプに持参する焼畑由来の食料や、逆にキャンプから村へと運び出す魚をはじめとした森林産物の運搬を容易にするためである。

2004 年の大乾季には、定住村から直線距離で40km の範囲で16 — 21 のキャンプが利用されていた（図3-7）。キャンプあたりの滞在者数は2 — 30 人程度（1 — 5 世帯）

だった。滞在者の構成は、同じ乾季の間でも変化してゆく。2—3 月、そして8 月の焼畑伐開直後の時期が頻度のピークであり、この時期にこそ「バカンス」というにふさわしい女性や子供を加えた世帯単位での滞在が高頻度に観察される。この時期には、バカ・ピグミーの夫婦での参加がまみられる。

いったん漁撈に出たバクウェレは、良い漁場を見つけるまで、漁撈キャンプを頻繁に移動させてゆく。どのキャンプが森の魚へのアクセスが良いかは、漁場となる一時水域（氾濫原）が森と川の境界をなすエコトーンであるゆえに、毎年の雨量や川の流れ方に左右される。毎年の本流の氾濫の規模により漁に良い年と悪い年があること、それをどう読んでどのキャンプに滞在するかというところが漁撈行きのオーガナイザーの腕の見せどころである。

以下に、2007 年1 月12 日から24 日までの男性T 一家のキャンプ移動の事例を示す。T 以外の参加者は、妻ひとりと3 人の女兒（うち1 名は幼児）、妻の両親の7人のキャンプであった。



図3—6 ガル漁と呼ばれる空鉤を用いた延縄漁を行うセネガル出身の移住者。

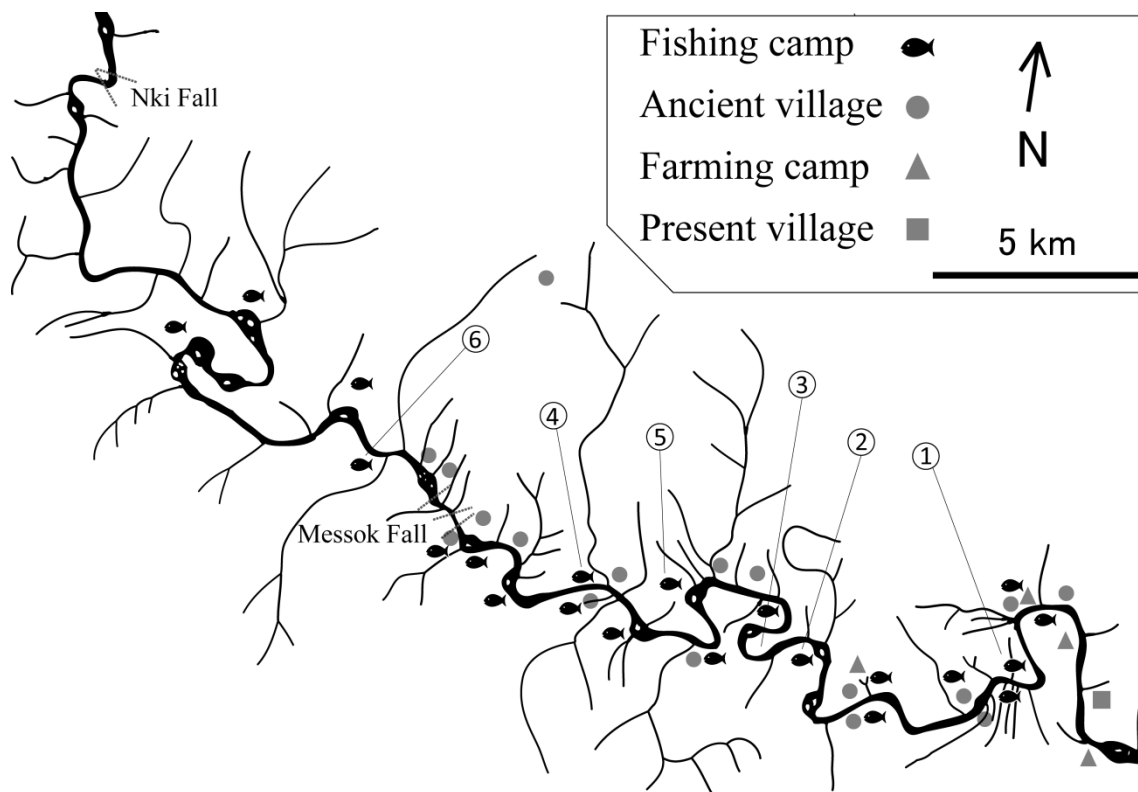


図3-7. ドンゴ村より上流の漁撈キャンプの分布.

- 1 月12 日 村から出発し、地点①に移動.
- 1 月13 日 引き続き丸木舟を漕いで、地点①から地点②の川中島ガビオン島に移動.
- 1 月14 日 地点③の川中島周辺の沼にて、掻い出し漁、置き針漁を、本川で延縄漁を開始. 掻い出し漁で、コビトワニ、小型ヒレナマズ、ティラピア、タイワンドジョウ、アフリカツメガエルを、延縄と置き針で大型のヒレナマズを一匹ずつ捕獲.
- 1 月15 日 地点②より日帰りで地点③の沼まで遠征して掻い出し漁. 小型のヒレナマズとアフリカツメガエルが多量に獲れる.
- 1 月16 日 地点②から地点④のビヤドーブ川の川口の漁撈キャンプに移動.
- 1 月17 日 地点④の近くの沼で掻い出し漁
- 1 月18 日 地点④から下流の地点⑤のレケ島に戻る.
- 1 月19 日 地点⑤の近くの沼で掻い出し漁. 小型ヒレナマズとティラピア、そして

タイワンドジョウをたくさん獲る。

1 月20 日 魚を燻製にする。

1 月21 日 地点⑤より少し上流にある二つの沼で掻い出し漁。小型と中型のヒレナマズを多量に獲る。

1 月22 日 魚を燻製にする。

1 月23 日 2 人の男性のみで延縄漁に。スキルベ科、サカサナマズ、ギギの仲間を獲る。

1 月24 日 延縄漁と網漁を始める。

.....

T のパーティは、2 週間半ほどの予定での漁撈行だったが、後から村からやってきた壮年男性P の家族パーティと地点⑤のキャンプにて合流し、最初の1 週間ほどほぼ上流に毎日移動しながらの漁撈を繰り返した後、川岸の1 か所（⑥地点）にキャンプを作って約2 週間滞在し、網漁、延縄漁、釣り漁、モリツキ漁、掻い出し漁などのほか、集団による魚毒漁モンゴンボ(*mongombo*)¹⁰を行った。丸木舟という移動手段を用いる以上、漁撈キャンプへの参加人数には限界があるが、このように出会った集団どうしが合同で漁をしたり、キャンプを共用したりすることは珍しいことではない。

長期滞在する際には、開かれて新しいキャンプよりも長い間使われてきたキャンプが好まれる。新しく川岸の植生を刈り払ってつくったキャンプは日射が強いために蒸し暑い。咬虫が多いだけでなく野生動物に襲われる危険性がある。バクウェレが特に恐れるのは、キャンプ周辺でアフリカマルミミゾウをはじめとする大型野生動物と遭遇することである。多くの漁撈キャンプが、森の奥深くには作られず、川中島にある理由の一つ

¹⁰ バクウェレ語およびバカ語でマメ科のつる植物*Milletia* sp. を意味する。魚毒漁は、様々な植物性の毒を使って行われるが、それぞれの漁は使われる有毒植物の名前で呼ばれる。

はゾウ対策であるという。古いキャンプは、かつての廃村近くに作られることが多いが、そのような場所ではキャンプを囲む木々の樹冠が閉じており、日射が木陰に遮られて1日中気温が極端に変動することなく居心地が大変良い。柑橘類やトウガラシ、薬用植物など有用な栽培植物が植えられているキャンプも多く、調理や怪我の治療の際には重宝する。

川岸から漁撈キャンプまでの距離は、10m から30m ほどで、キャンプからは川が十分に見える。キャンプに着いて、まずすることは地面の掃除と男女が組になったの小屋づくりである。キャンプ周辺の小径木とアフリカショウガ (*Aframomum* sp.) の茎で骨組みを作り、最後にクズウコン科の葉で屋根を葺く。蚊帳があれば蚊帳を吊るが、なければやはりクズウコン科の葉で壁をつくり、中で焚火をする。世帯ごとに焚火場をつくり、その上にター (taa) という乾燥棚を作る。獲物 (魚をはじめとする水棲動物) をここに載せて、焚火の煙で乾燥させる。強火にし過ぎると魚の組織が煮えてしまい、腐敗の原因になったり、焦げたりすることになるので弱火で煙だけが途切れずあたるように火加減を調節する (図3—8.)。

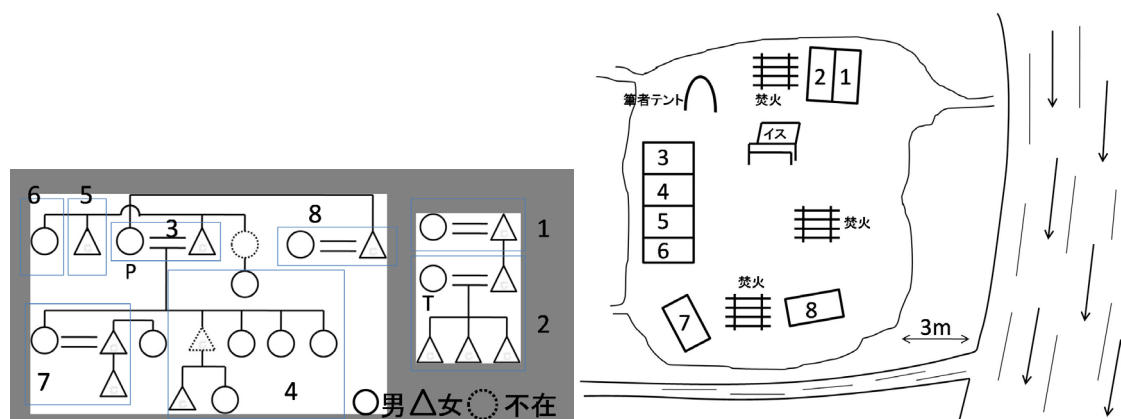


図3—8. 漁撈キャンプにおける社会関係とキャンプ内の小屋の配置の例 (P とT の世帯のパーティ, 2007 年1 月—2 月)。

漁撈キャンプでは、定住村ではまず見られない様子が観察される。村では場所を分け

て食事をする成人の異性どうしが食事を共にする、村で調理を行わない男性が積極的に調理に参加する、獲れた魚ばかりか、村から持ち込まれた農作物がキャンプ内やキャンプ間で分配される、といった光景である。

漁撈キャンプでは、漁撈だけが行われるわけではない。キノコや蜂蜜採集が得意な者はそれを行う。同じキャンプへの滞在が1週間以上にもなれば、跳ね毬が仕掛けられる。このように漁撈キャンプではバクウェレたちの農耕民らしいジェネラリスト（何でも屋）ぶりが発揮される。キャンプ周辺の集落跡にはアブラヤシ (*Elaeis guineensis*, Palmaceae) が、また湿地にはラフィアヤシ (*Raphia* spp., Palmaceae) が群生しており、その気になればヤシ油やヤシ酒の材料には事欠かない。家の葺き替えの時期には、ラフィア林に近い漁撈キャンプは、ヤシの葉採集キャンプに様変わりする。川辺林には、魚以外の恵みや資源が幾つも用意されていて、漁撈キャンプはそれらへのアクセスの拠点となっているのである。漁の合間や夜には、近隣のキャンプからの訪問者を交えて、猥談や噂話、昼間の川や森での逸話や昔話（エッセッサ *esessa*）が子供や女性も参加して語られる。

II-5. 燻製加工された魚のゆくえ

長時間かけて、乾燥棚の上で大切に燻製にされた魚は、村に持ち帰る前に種類やサイズ別に籠の中にパッキングされて丸木舟に積み込まれる。大量の燻製魚が準備できた場合は、一度に定住集落に持ち帰らず、村の手前のキャンプに隠しておいて、後で取りに行くといった工夫がされる。村では、人びとが、魚や森の産物を満載した親戚や知り合いの舟が来るのを今か今かと手ぐすね引いて待っている。船着場で荷降ろしをする際に、持ち帰った燻製の量を人びとの眼に触れさせてしまうと、その後の贈与・分配や販売が思うようにいなくなってしまうのである。定住集落内の親戚や友人への贈与のほか、親戚の家に下宿して近くの町の学校に通う子供たちのもとへもプランテン・バナナやキヤッサバと共に仕送りされる。これらが済んだあとで、自家消費分を除いて残りの燻製

魚を売る（図3—9）．脂肪分をたっぷり含んだヒレナマズやギギの燻製は，人気が高く，一つ2—3000FCFA（400—600 円）にもなるかたまりが飛ぶように売れてゆく．

主な買い手は，バクウェレとハウサの人びとである．小型から中型の魚の燻製は，適当に大きさと種類を組み合わせ，500—1000FCFA（100—200 円）の束にして売られる．バカ・ピグミーの人びともこれには目がない．



図3-9. 村で魚の燻製を売る．

このようにして，ほとんどの場合村の中で魚は売り切れになってしまう．しかし，燻製魚の量が十分に多ければ，近くの町や伐採会社のキャンプに持ち込んで売ることができる．そこでの値段は村で売り買いされる値段の数倍から10 倍以上にもなる．ドンゴ村から約50km 離れた郡都モルンドゥでは，質の良い魚を手に入れようと思えば午前6 時前には公設市場に到着していなければならない．ごく短時間，10—20 分もすれば売り切れてしまっ手に入らないのである．モルンドゥで数日間売るだけの魚があれば，新しい衣服や布，靴はもちろん，自転車や様々な商品を手に入れることも可能になる．

人口規模の大きな町であれば、さらに良い値で売れる。

たとえば、県庁所在地であるヨカドゥマでは、ディムと呼ばれる大型のヒレナマズ (*Heterobranchus longifilis*, Clariidae) 1 匹で、5 万FCFA (1 万円) 以上になる¹¹。長期漁撈キャンプでは、運が良ければ女性による掻い出し漁の成果の一部が累積的に保存され、数十kg ものティラピアやゴロとよばれる小型ヒレナマズの燻製が村に持ち帰られることがある。特に、ゴロの燻製は保存がきく上に、美味であるため故郷の味として町でも人気が高い。掻い出し漁の成果は、副食としてのみならず、女性の貴重な収入源にもなっている。

Ⅲ. 漁撈キャンプにおける社会関係の諸相— 逸話からのアプローチ

Ⅲ-1. 村から森へと向かう心理

なぜ、バクウェレたちは森に行くのだろうか。ここまで見てきたように、バクウェレの漁撈キャンプでの活動には、食物獲得や経済的な意味合いがないわけでは決していない。しかし、だからといって、漁撈活動に目的が収斂しているというわけでもない。かれらの森に行く理由は、森に入って生活すること自体にかれら自身が何らかの意味を認めているからこそであろう。この節では、村を離れて森へと向かうバクウェレたちの心の動きについて、参与観察の中から得られた逸話（エピソード）の中から探ってゆく。あえて逸話に注目するのは、かれらの漁撈実践に関するセルフ・イメージを捉える上では、現時点ではそれがもっとも有効な方法だと考えるからである。まず、個人的な事情による森行きの事例を見てみよう。

¹¹ 筆者は、2008 年5 月にパリのアフリカ人街の一つを訪れた際、調査地から数百キロメートル下流のサンガ川産の燻製魚を航空便で輸入し、街頭で売っている地元出身の女性に会ったことがある。20cm 弱の大きさのヒレナマズ3 尾で15 ユーロという値段で売られていた。森の魚の燻製は、ヨーロッパに移住した人びとのあいだでも需要があるのだ。

事例3-1：傷心の少年，森に行く

ドンゴ村の少年T は、複数のガールフレンド（イモワーズ¹²）が居たが、特に国境を挟んだ隣村の少女との結婚を希望して半年ほど毎日のように贈り物を持って通ったが実らず、他の男に盗られてしまった。約2 週間の間村にいて、見るたびに泣いていたが、その後4 週間ほどひとりで漁撈キャンプに出かけた。多量の魚の燻製を持ち帰った後は、ケロリとして他の少女のところに通い始めた。

これは、失恋した少年が傷つけられたプライドを癒しに漁撈キャンプに行った、という状況である。ドンゴ村のバクウェレたちの間では、異性関係によるトラブルは日常茶飯事である。問題は、事がうまくいかなかった場合の嫉妬がこじれる場合である。問題の当事者が、森行きによりすっきりしたように見えるのみならず、村に戻ってきた個人を周囲が受け入れていることが重要である。

妻や婚約者を連れて、一緒に漁撈キャンプに向かう男性も多い。そこでは、男女間の関係を深めたり、関係を修復したりする効果が期待できるのである。たとえば、青年男性B によれば、掻い出し漁の成功可能性の高い場所に妻を同伴し、満足させることが重要なのだという。村の近くでももちろん掻い出し漁はできるのだが、それとは目に見えて差がつくような漁の成果が得られなければ、そのキャンプは失敗だという。ガビオン島というのは流程距離で25km ほど離れた漁撈キャンプのある川中島である。ガビオン（Gwabiwon）はバクウェレの人名であり、バクウェレたちは川中島や支流、中州、滝、湿地、沼などにしばしば人名を冠した命名を行う。「近くの漁撈キャンプには家族を連れて行かない。十分に満足させられないから。村の近くはすでに掻い出し漁がされ

¹² 結婚することをバクウェレ語でエバ（2 になる）という。婚資を花嫁の家族に受け取ってもらえて、結婚成立となるが、それまでの道のりは長く、一緒に住んだり、性的関係を結んだりしていてもイモワーズ（婚約関係）という通い婚の状況が続く。結婚までに、誰しも3 度か4 度はイモワーズの関係を持つのが普通であり、様々な異性関係の経験を積むうえでもよいことだと考えられている（大石, 2009）。

ていて、たくさん採れない。ガビオン島より先なら連れて行く。」という言説にみられるように、より遠くのキャンプ周辺にはまだ他者が訪問していない沼があるかもしれない。森から水が引いた後に行われる池沼での掻い出し漁では、1回目と2回目で成果がまったく変わってくる。水の引き具合を見ながらではあるが、よい漁が期待できる沼への先着をものにするため、妻や母、ガールフレンドを連れて夫やフィアンセは丸木舟を漕ぐ手に力を入れる。

男性と共に漁撈キャンプに参加する女性は女性で、漁撈キャンプで濃密な時間が過ごせることを期待する。バクウェレ社会では一夫多妻は普通にみられるが、村では妻どうしの、そして夫婦間の確執があり、義理の家族との緊張関係がある。新しく妻を娶る前には、事前にすでに婚姻関係にある第一夫人、あるいは第二夫人の了解を得ておくことが望ましいが、これがなかなか難しいことがある。通りすがりに訪問したキャンプでインタビューすることができた新しく結婚したばかりの女性Mは、うれしそうに十分なタンパク質摂取によって得られる満腹感を強調した。「毎日おいしい食べ物が食べられる。村では魚で満腹にはなれないけれど、このキャンプで、私はゴリラみたいに食べている。」このような言説は、私のようなよそ者に発せられた言葉ではあるが、その場に居合わせた彼女の夫に対する最大級の賛辞のイディオムになっている。

このように森での生活は、ともすると緊張をはらみがちな夫婦関係をポジティブに転調させたり、リフレッシュさせる効果を持ちうる¹³。バクウェレにとって、森という場は親密な関係を作り出したり、リフォームするのにふさわしい場だと考えられていることが窺える。

バクウェレ社会では、他の農耕民集団と同様にソシレリ（フランス語で*sorcillerie*）と

¹³ バクウェレ社会と同様に、一夫多妻婚が見られる旧ザイール中央部の農耕民ボンガンド社会を調査した木村大治によれば、彼のインフォーマントのひとり、長年連れ添った第一夫人に2人目の妻を迎えることを承諾させるのかに悩んだが、しばらく森に入り、思い切って切り出したところあっさり了承してもらえたという（木村大治、私信）。

呼ばれる呪術・妖術が盛んに行われており、呪術や邪術の実践によって様々な怪異現象が発生したり、邪術のために病気になったり死んだりする者が絶えない（大石, 2008）．
これらは、焼畑農耕を営むバントゥーの人たちの世界で顕著にみられ、富や異性関係、社会的成功の不平等による妬みがもとになっていると考えられてきた（掛谷, 1983）．
バクウェレにとっては、現実の人間関係や社会関係と対応した大変リアルな問題であり、人びとの社会行動の心理的な基盤を形作っている．次に、呪術に関係する森行きの事例を見てみよう．

事例3-2：呪いの疑惑をかわす

壮年男性P は、2000 年ころにドンゴ村から3km ほど離れた隣村レゲ村から家族ともども移住してきた．移住の理由は、レゲ村に持っていたカカオ園を手放さなければならなくなったからである．移住以来、P の世帯は頻繁に村の中で家の位置を変えた．

最初の1 年半は、村長が住んでいるドンゴ集落に村人から購入した家に住んでいたが、その後バカ・ピグミーが主な住民であったバカ集落に移り住み、周囲のバカ・ピグミーに酒を頻繁に振舞うなどして労働力を確保し、新たな畑の拡大を図った．P は2002 年以降も同じバカ集落内で移住を繰り返し、しだいに集落の中心的位置に進出するようになった．またドンゴ集落からバカ集落に移住する者が増え、彼の家を取り巻くようにバクウェレの家が増えていった．P は、いつしか自分をバカ集落のチーフであるとバカ・ピグミーに呼ばせるようになった．こういった経緯から、P に出身村である隣村の村長と協力して、ドンゴ村の村長に呪いをかけ、その座を奪おうとしているのではないか、というような噂が流れた．2003 年になると、実際に当時の村長が、足が萎える病気に罹患し、寝込むことが多くなり、P を中心とするグループの邪術によるものに違いないという非難が陰に陽に強まった．すると、P は頻繁に漁撈キャンプに行くようになった．滞在先のキャンプでP に尋ねると、「村が熱くなっているので森に行くことで冷

ます。良い漁をし、たくさん魚を食べることで森の力を自らに補給することができ、村に帰った後に他人からの呪いに打ち克つことができる。」と説明した。

村では、些細なもめごとが、網の目のような親族関係のつながりを伝わって、家系集団間の全面的な争いへと連鎖的に大きく成りやすい。この場合、漁撈キャンプへの移動は、疑義や敵意を持たれた相手や村における「犯人探し」の過熱を牽制する意図があったといえる。

この二つの事例は、異性関係にまつわる負の感情の中和や村内政治の抗争の鎮静化と質のまったく異なる問題ではあるものの、定住村における何らかのトラブルが起きていて、それと対応したかたちで森行きが行われていること、村とは異なる原理が働く場として利用している、という点は共通している。

もちろん、明確なトラブルがなくても、ただ単に村の生活環境に疲れて森に入るということもあるようだ。たとえば、私が2007年1—2月に1か月弱居候した漁撈キャンプで一緒であった既婚の壮年女性Bは、村の喧騒から離れることのメリットを、以下のように説いていた。

「森に居れば、静けさがある。他人に邪魔されない。他の村人と問題が起こることもない。魚のキャンプだけではなく、ニョック（イルビンギア・ナッツ）採集のキャンプも、他の村人のキャンプから離れていたほうが落ち着いて採集ができる。」

この言説は、バクウェレたち自身が、しばしば村における喧騒にストレスを受け、村の生活に倦んでしまうこと、そんな際に森に生活の場を移すことで精神の落ち着きを得ていることを表している。

Ⅲ-2. 森での食物探し

野生ヤマイモは、バカ・ピグミーにとって非常に重要な採集物であるが、普段バクウ

エレが村で口にすることはまずない。自給畑には数は少ないがエッグイム (*egguim*) と呼ばれる栽培ヤム (*Dioscorea alata*) が植えられていて食用にされる¹⁴が、野生ヤムは、人間の食べ物ではなく、「動物の食べ物」だとされる。これはことさらにバカ・ピグミーの食べ物を貶め、「差別」化することによって、自らの集団アイデンティティを表明していることに他ならない。長期にわたる漁撈キャンプの生活では、タンパク質をいかに確保するかが問題になる村とは反対に、主食をいかに確保するかが問題になることはすでに述べた。以下の事例は、数百キログラムに及ぶ村からの農作物を消費しきった時に観察された、漁撈キャンプ参加者全員による野生ヤム採集の様子である。

川沿いのキャンプ生活の持続性は、主食となる炭水化物をどう確保するかにかかっている。漁撈キャンプには、村の自給用の畑からプランテン・バナナとキャッサバを中心に多量かつ複数種類の農作物が持ち込まれる。これらの農作物は、生のままだけではなく、燻製加工や粉末にしたものなど複数種類用意される。足の早い生バナナから生キャッサバ、キャッサバ粉へと順次食されていく。畑由来の食料は、村にある自給畑からの補給とともに、漁撈キャンプへ向かう途中の出作り地の畑からも補給できる。魚と交換にプランテン・バナナやアブラヤシの実を得る。村から十分離れたところにある川沿いの出作り地では、畑さえ十分な面積があれば、毎日、あるいは数日置きに漁撈や狩猟・採集のために訪れる人びとと作物を交換したり、贈与を受けたりすることにより、非常に豊かな食生活を送ることができる。

事例3-3：キャンプメンバー総出のにわかヤム採集

2007 年1 月中旬から2 月初旬にわたり、壮年男性Q の家族を中心とする3 世帯15 人の長期漁撈キャンプに加えてもらった。キャンプの位置が、定住村はもちろん、最も

¹⁴ ヤムイモは、日陰を好むバナナとは異なり直射日光のあたる環境を好む。熱帯雨林内の焼畑でヤム栽培を行うには、除草や畝づくりの手間がかかる上、収穫できる量はキャッサバほどには期待できないので栽培されてはいても数はわずかである。

近い出作り地からも日帰り不可能な距離にまで達し、農作物が底を着くという事態に遭遇した。

表3-1. 村からキャンプへと持ち込まれた食料および調味料（食塩以外は全て自給）。

品目	分量	重量(Kg)
プランテン・バナナ生果	23 房	306
生甘キャッサバ	2 袋	ca100
発酵キャッサバの燻製	1 袋	50
プランテン・バナナの燻製	1 袋	30
サツマイモ	0.5 袋	25
食塩		ca1
乾燥トウガラシ		若干量

村から出発する際には、表3-1 の量の食料と調味料が用意され、4 台の丸木舟に分けて積まれたが、2 週間足らずですべてが消費された。最寄りの出作り地にQ の義兄弟を丸木舟を1 艘と共に送り、作物をもらってやることになったが、かれらが食料と共に戻ってくるには2-3日かかる。その間どうやって食いつなぐかという問題に我々は直面した。いくら魚があっても、主食がまったくなければどうしようもない。結果として、こどもたちをキャンプに残し、数キロメートル下流の対岸の丘に残りの者全員で野生ヤマイモ、ブワル (*mbwal*: *Dioscorea praehensilis*, Dioscoreaceae) を探しに行くことになった。夫婦で組になり、男性がヤマイモの蔓を探し、女性は、山刀で掘る。女性たちは、最初のうちはキャンプのオーガナイザーのQ に対する不満などブツブツ文句を言いながら穴掘りをしていたが、10 分もするとがぜん勢いがつき、競い合って採集が行われた。夕暮れまでに採集できたヤマイモは、キャンプに持ち帰られ、調理されたのち、少

量ずつ何度も分配された。実はヤムイモが好物だという者もあり、村の畑に植え付けるためにこの芽を持ち帰る者もいた。バクウェレたちは、漁撈キャンプ周辺に、ヤムイモが群生する川沿いの小丘陵¹⁵がどこにあるかをよく知っている。Q は「2—3 週間だったら村の食べ物がなくても、ヤムイモと魚で暮らせるさ。」と言っていた（図3-10.）。



図3—10. 漁撈キャンプでの食事の分配

¹⁵ ドンゴ村から北西に広がる森の中には、野生ヤムイモが群生する小丘陵がいくつもあるという。佐藤弘明は、そのうちの一つ、モコンド（*mokondo*）と呼ばれるBek 山の周辺の丘陵において、野生ヤムイモの生息密度調査を行い、この丘の頂上部だけで、118kg/ha の食用可能なヤムイモ現存量を推定している（Sato, 2006）。



図3—11. バクウェレにより採集された野生ヤマイモ

この事例で非常に印象的なことは、いくら主食がなくなったとはいえ、村ではバクウェレがピグミーたちをけなす常套句のようにになっている「野生ヤムを食らうような野蛮な奴ら」に当の本人たちがあっけなくなってしまったことである。それどころか、その動物の食物であるはずの野生ヤムを嗜好する者までいる。農作物がなくなったとき、まっすぐに野生ヤム（図3-11）を探したことは、— それがバクウェレにとっては救荒食に近い位置付けであるにせよ— かれらが森での生存を支える食物として、大きな信頼を寄せていることを示している。

3. 森の恵みに対する態度

川岸に面した漁撈キャンプには上流から様々な漂流物（寄り物）が漂着する。バクウェレは、これらのうちまだ新鮮な魚や獣をトゥトゥ（*tutu*）と呼び、拾ったり、掬い上

げたりして積極的に利用する¹⁶。トゥトゥは、原則的に最初にそれを見つけた者の所有となる。

事例3-4：流れてきたゴリラ

2007 年4 月、友人の青年K が、モルンドウの町で出会ったコンゴ民主共和国出身の漁民から習ったという大型の罟漁エトロ (*etolo*) の新しいやり方を手伝い、観察する機会を得た。1 週間ほどかかって罟¹⁷を3 つ編み上げたのち、これを丸木舟に積みこんで、ドンゴ村の上流に試験に出かけた。罟は、良い場所に設置すれば、群れで移動する習性をもつモルミュルス科 (*Mormyridae*) やコイ科ラベオ属 (*Labeo spp.*, *Cyprinidae*) などの大型魚を効率よく捕らえることができる。よい場所を探していくつかの漁撈キャンプを移動したが、三つ目の滞在先のキャンプでは漁のベテランMとM の息子の2 世帯のグループと一緒にあった。キャンプで過ごして2 日目、M たちは獲れた魚を十分に乾燥させるため、漁をせずにキャンプに留まっていた。朝食の後、川岸に出て食器をすすいでいたM の妻が、突然声を上げた。川の中央あたりを、何かが上流からこちらに向かって来ているらしい。急きょ、M は丸木舟を出してそのモノに漕ぎ寄り、開口一言、ゴリラ (ジル*djil*) のトゥトゥであることを皆に告げた。中洲に引っ張り上げたゴリラは背中白いシルバー・バックで、まだ身体は温かい。外傷もなく、M の推測では、川畔の木に登っていたゴリラが川に落ちて溺れたのだろうとのこと。その場で協力して、解体が始まった。何回も丸木舟を往復させて肉を運び、キャンプに戻ると、M とM の妻は私とKを含むキャンプのメンバー全員にゴリラの肉を分配した。その日の夜から毎食、肉が振る舞われたが、余った部分をすべて燻製にしきることもできず、一部は森の

¹⁶ 寄り物とは異なる採集対象として、雨季に森の中から川に運んできたモノがある。大乾季に入ってしまうと、急速に水位が下がる時期がある。この時期にすかさず川辺や川岸を丹念に探すと雨季に水が残っていた動物の死骸を発見することがあるという。また、筆者は、川に落ち、淹つぽにはまったアフリカゾウの死骸から象牙を採集する様子を観察したことがある。

¹⁷ ラフィアヤシの茎とラタン科のつる植物カオ (*kao* 未同定) を利用して作られる。

中に廃棄された。

この事例では、トゥトゥは大型のオトナのニシゴリラ (*Gorilla gorilla*) であり、多量の肉が得られた¹⁸。この肉のある間は我々がすでに設置した釜を毎朝確かめに行くほかには漁撈活動は行われず、食事の回数を増やすなどして肉の消費に専念した。この他にも、2004 年には丸木舟で移動中に、ピーターズダイカー (*Cephalophus callipygus*) が、ぷかぷか浮いているのを拾い上げた事例に遭遇した。聞き取りでは、他にもミズマメジカ (*Hyemoschus aquaticus*) やサル類 (*Cercopithecoidea*)、モリオオネズミ (*Cricetomys emini*)、ナイルワニ (*Crocodilus niloticus*) のトゥトゥを得たという話を聞いた。もちろん、森の動物よりも頻繁に魚のトゥトゥはしょっちゅう見ることができ、バクウェレたちは良いトゥトゥが拾えるかどうかは、鳥類や爬虫類をはじめとする他の動物たちとの競争だという。このように、漁撈キャンプへの滞在では、森のただなかを流れる川ならではの森の恵みが得られることがあり、これにはいつ、何が見つかるか分からない「ワクワク感」があるのである。

事例3-5：魚は「みんな」のもの

2008 年の1—2月に私がドンゴ集落に滞在中、隣国コンゴ共和国サンガ州の州都ウェッソからはるばる船外機でドンゴ集落の目の前といってもよいごく近傍の漁撈キャンプに乗り付けた専業漁民のグループがいた。かれらはコンゴ政府から得た商業営漁許可証を取得しており、ドンゴ集落の対岸にあたるコンゴ側のキャンプに陣取った。かれらは1 か月以上にわたって10cm 以上の大きな網目の網を使った巻き網漁を、少しずつ位

¹⁸ ゴリラは、絶滅のおそれがある大型類人猿であり、国立公園内に限らず厳重な保護対象となっている。同時にバクウェレにとってはジルと呼ばれるこの動物は、ベカ (*beka*) と呼ばれる割礼儀礼において精霊の肉として結社員に共食されるなど、特別な文化的位置付けを与えられている。ベカの執刀者と女性の産婆のみがジルと呼ばれていることから、かれらのゴリラへの特別な思い入れが感じられる。儀礼のごく限定された機会にかぎって槍で狩猟されている（調査地域における人とゴリラの関わりについての詳細は第4章を参照のこと）。

置を変えながら行い、大型のギギやナマズばかりを多量に水揚げし続けたが、地先のドンゴ村の人びとにはそれらの魚の一部たりとも贈与されることはなかった。

ちょうどその時期に、ドンゴ集落より10kmほど下流の対岸にある町で政府庁舎を建て替える工事が行われており、専業漁民たちはそこで働く労働者たちに高値で魚を売りに行っていた。ドンゴ村からもかなりの人数の男性たちがこの工事に駆り出されてはいた。バクウェレたちは目の前で起こっている出来事を、指をくわえて見守るばかりの状況が続いた。しかし、誰も専業漁民たちに文句やいいがかりをつける者はいなかった。なぜ黙っているのか、と尋ねると「川の魚はみんなのものだから、何もいえない」というのがバクウェレたちの言い分であった。

ここで興味深いのは、陸上の土地、特にカカオ園では園の境界の一本の樹の所有について争うバクウェレたちが、川のものについては、漁撈キャンプという場の共用を他の民族やよそ者で行うだけでなく、魚という資源へのアクセスを陸上の家屋や畑の立地とは関係なく捉えている¹⁹ということである。これは、かれらにとって、プランテン・バナナやカカオよりも魚のほうが、価値がないからなのだろうか。数週間にわたって漁撈に出かけ、自給畑のバナナを腐らせてしまうような人たちが、そんなふう考えることはあり得るだろうか。こと漁撈に関するかぎり、捕獲するまでは獲物は人間のものではないという自然物採捕の論理が守られているのである。漁撈キャンプにおいては、資源に対して共有の論理のほうがより強く働くのである。

III-4. まとめ

¹⁹ ただし、強制移住以前には、築漁にかぎって、主だった支流のそれぞれについて、築をかける権利が家族集団ごとに決まっていた。築漁は、毎年築をかけられる時期と場所が決まっている定置漁法である。漁場をめぐる競争を避けるために権利が設定されていたと考えられるが、現在では、築漁そのものが衰退しており、数本の支流を除きこのような慣習は見られなくなっている。

バクウェレは、ごく個人的な異性関係から集落全体を巻き込んだ政治闘争にいたるまで、定住集落における社会関係に摩擦が生じていたり、予測されたりするとき、そのほとぼりを冷ますように漁撈キャンプに行くことがある。その意味で、バクウェレの人びとにとって、川沿いの漁撈キャンプは丸木舟で気楽に行き来できる村からの一時的な逃避先であると言える。そこでは、村では「動物の食物」だなどといって蔑んだ食物を食すなど、動物と人間、帰属する集団間の文化的差異が曖昧になるなど、定住村では堅固に区切られているかに見える社会的アイデンティティの境界がずれたり、緩くなるという傾向性が指摘できる。

川沿いの生活は、人間が川の資源に近づくだけではなく川が寄り物のような形で森の恵みをもたらしてくれることもある。入手可能性についての予測のつかなさ、宝探しのような魅力にもなる。漁場や漁撈キャンプの利用、そこで捕獲される水産資源には、畑をはじめとする面的な占有の論理が卓越する陸地とは異なったより融通のきく所有やフリー・アクセスの論理が適用される。森を流れる川は、森の中にありながら、一方では森とは異なる生活世界が広がっており、それはさらに外部の世界にも水系のネットワークを介してつながっている。

IV. 考察：森棲み感覚と「バカンス」

IV-1. 森を楽しむ

IV-1-1. 漁撈キャンプの社会的な静かさと快適さ

人口密度の高い定住村では、畑にする土地をめぐる争いや、異性をめぐる問題など複雑な人間関係に起因する多岐にわたる問題の種が絶えることがない。一般に、村での定住的な社会生活には多大なエネルギーが必要になるといえる（西田, 1984）。負の社会関係やストレスが村で蓄積された時、その解消や緩和の方法として、森に行き、そこでしばらく生活を行うことで状況の鎮静化や好転を待つという選択肢がある（寺嶋, 1991）。

漁撈キャンプでは、比較的少人数で、村での絶え間ない喧騒や日々かぎりなく生ずる困難な問題から逃れることができる。漁撈キャンプの社会的な「静かさ」が、いわば「癒し」のような効果を有し、定住生活によって蓄積する負の社会関係に対する緩衝・調整を果たしている側面がある。

このような村生活からの逃避先としての漁撈キャンプを考える上では、丸木舟をつくるか借りるかさえすれば、定住村から比較的気楽に行ける場所でもあるという手軽さが重要である。定住村と比較して、漁撈キャンプの立地環境の物理的、生理的な快適さも人びとの森行きにモチベーションを与えている。特に乾季には村では日射が大変強くなるが、森ではそのようなことはない。十分に発達した林に囲まれた漁撈キャンプの居心地のよさもまた、人びとの社会的な静かさを引き出す条件を形成しているのではないだろうか。

漁撈キャンプの多くは雨季になれば水没してしまう無主の地であり原則的にアクセス自由な場所になっている。すでに述べた事例でも見たように、バクウェレたちは、国境をこえて、あるいは下流からはるばる漁の場を求めてくるよそ者を漁撈キャンプから追い払うことをしない。独占的な所有や利用が見られないなど、漁撈キャンプや漁場となる河川空間のもつ特殊性は、森と川の間のエコトーンとしての曖昧な立地と関係していそう。河川空間では、こと漁撈に関する限り、排除の論理よりも、協同と融和の論理のほうが優先されるのである。

森行きが人びとにもたらすのは、村から離れているということによる精神的・社会的な開放感だけではない。森棲み農耕民が森そのものに寄せる信頼感は、内戦や災害など生命の危険にさらされかねないような不可避の有事の際に、森が人びとが村から避難する「かけこみの森」（杉村, 1997）になってきたことから傍証される。カメルーン南部は、第一次世界大戦以前はドイツ領であったが、戦争の結果フランス領に組み込まれた経緯がある。カメルーンのバクウェレたちは、第一次世界大戦においてドイツ側に

着いた祖先が森の中に逃げ込み、漁撈で何とか生計を維持しつつフランス軍の攻撃をしのいだという伝承が残されている。同様に、1960年のカメルーン独立前後にマキザーと呼ばれる反体制ゲリラ集団が首都ヤウンデから落ち延びてモルンドゥ周辺から上流のドンゴ村周辺に隠れ場所を求めてきたことがあった（Mbembe, 1996; Rupp, 2001）。その際にも人びとは政府軍によるマキザー掃討作戦の巻き添えを食らうことを恐れて、上流の漁撈キャンプに逃れたのだという。

そして、そのような森棲みの機会に複数のクランや民族集団のあいだで通婚が起こり、それにより現在のバクウェレという社会集団の基礎が作られたのだという。ドンゴ村において現在数組みられるバクウェレとバカ・ピグミーとの擬制的な家族関係の起源譚も、上流のキャンプに避難していた際に居住地の共用が起こってその際に両者の間に結ばれた婚姻関係がもともになっているとするものである。このような伝承からは、漁撈キャンプにおいて観察される社会関係の緩さは、バクウェレ社会において伝統的に継承されてきた側面をもつことが示唆される。

IV-1-2. 漁撈実践に内在する楽しさ

魚をとるという生業活動のプロセスそのものに内在する楽しみも欠かせない。松井健は、沖縄や東南アジアの民俗社会を事例にマイナー・サブシステンス論を展開するなかで、自然との密接な関わりを保った生計経済の主流にはなりえないような小規模な生業に内在している楽しみや興奮を積極的に汲み上げようとしてきた（松井, 1998）。

すでに述べたように、バクウェレの漁撈活動には副業的に行われる漁も少なくないの
で、かれらのバラエティに富んだ漁撈活動全体を一括りにマイナー・サブシステンスであるということとはできない。しかし、個々の漁を細かく見てゆくと、まさにマイナー・サブシステンス的な魚とりの営みが少なからず含まれていることが分かる。たとえば、大雨季に冠水林の中に産卵に入るナマズ類のつがいを狙って、銚を持ったまま半徹夜で

魚の通り道で待ち伏せるメウパ (*mewupa*) 漁や、丸木舟を片手あるいは足だけで操りながら川岸を漂流し、フライ・フィッシングの要領でミミズ付きの釣り針を川岸の倒木ぎりぎりに叩きつけて表層を泳いでいるジラロン (*Hydrocynus vittatus*) やジャーセル (*Hepsetus odoe*) を狙うチチャチャ (*tichacha*) 漁、ンボト (*mboto*) というまっ黄色なコイ科の魚 (*Labeo* sp.) がマンベル (草本・未同定) という草本の果実を食べに岸边に寄る²⁰季節に、この植物の果実を餌にして釣り上げるマンベル (*mambelu*) 漁などである。これらは、特定魚種を対象に、ごく限られた季節にタイミングを見計らって行われる。これらの漁法によって得られる漁獲は一時的かつ小規模なもので、到底自給レベル以上の経済的意味を持ちうるものではないし、時間や効率を考えれば延縄漁などとはまったく問題にもならない非効率なものである。銚や釣竿にする木の枝などはごく単純な道具立てだが、魚の生息場所や森の地形に関する知識はもちろん、銚や竿を操る身体技術を必要とする。まさに松井によるマイナー・サブシステムの定義 (松井, 1998) にあてはまる。漁獲の最大化を図る専業漁民から見れば、児戯に等しいこれらの漁撈であっても、バクウェレにとっては重要な漁撈活動なのであり、何といたってもその季節になればむずむずするような生活のなかの漁撈実践なのである。このような熟練した技能や知識を競うような個人的な漁以外にも、集団で行われる追い込み漁や搔い出し漁などでは、いったん魚が獲れ出して興が乗ると次第に興奮状態が高まり、次から次へと漁場を変えながら数時間から半日近くも漁撈活動が止まらなくなることがよくある²¹。心理学者チクセントミハイは、当該の活動にのめり込み、自我を忘れるほどに没入した精神状態をフローと呼んだが、漁撈そのものに、フロー体験的な楽しさが内在しているのである。チクセントミハイは、フロー的な没入の条件として、他者に妨害されない

²⁰ 体の表面だけが黄色っぽいだけでなく、切り身にしても全身が黄色い。マンベル漁によって捕獲された魚の腹を裂いて胃内容物をみると、マンベルの種子ばかりがぎっちらと詰まっていた。

²¹ 調査助手が漁撈にはまってしまい、私との仕事をすっぽかされてしまったことも数知れないが、獲れた魚を手土産に持って帰ってくるのであまりきつく咎めることはできない。

環境の重要性を指摘しているが、漁撈キャンプの社会的な静かさは、まさに人びとがフローに入りやすい環境条件を構成しているといえよう（チクセントミハイ, 1996）。

IV-2. バクウェレの森棲み感覚：アンビバレントな自己表象

これまで、森棲み農耕民の森行きの諸側面について、バクウェレによる漁撈活動実践を事例に見てきた。本章では、漁撈キャンプにおける社会生活の正の側面と村における社会生活の負の側面を主張し過ぎたかもしれない。当然、それだけ森へのこだわりを持ちながら、なぜバクウェレたちは村を棄ててずっと森に棲むということをしなののか、という疑問が出てくる。

漁撈キャンプ暮らしには、まず生態学的には主食となる農作物の確保の問題があることはすでに述べた。この問題のもっとも単純な解決法は、気に入った漁撈キャンプの近くに畑を開いて住み着いてしまうことである。H. パジュジーは、旧ザイールのキュベット州にあるコンゴ川中流のトゥンバ湖周辺の漁撈農耕民ントンバの季節漁撈キャンプが、村になってゆくプロセスを分析している。もともとの定住村における畑用地の不足などが原因となり、季節キャンプであったはずの漁撈キャンプへの滞在の長期化が、自給畑の開墾や定住的な家屋の設置と相互作用しながら進む。

そのうち、教会ができ、学校ができてゆく。ある段階で、その地の用益権が、水や冠水林の精霊の主と契約を交わした伝統的なキャンプの所有者から、国家権力に連なる住民の代表者としての村長へと移ってしまう（Pagezy, 2000）。

バクウェレ社会においても、実際に、漁撈活動による様々な訪問を手掛かりに新たな出作り地や1—2世帯の居住地を作ってしまう例²²は少数ながらみられる。畑を開きポトポト（土壁）の家を建ててしまえば、そこは漁撈キャンプとはまったく違った定住的な空間になってしまう。バクウェレにとっては、森を森のままに残して、長期間住み続

²² その場合、過去に1—3世代前の祖先が使った畑が森林化しているところをもう一度開くことが多い。

けるという習慣がないため、ずっと住むということは環境改変を行い、たとえ小さくとも村にしてしまうことを意味する。また、定住村から2—3泊もしなければたどりつかないような漁撈キャンプの近くに定住的な移住が試みられることはまずない。定住村の情報やネットワークから、完全に孤立してしまうような居住の仕方は好まれないといってよい。この意味では、あくまで、村があつての森なのだとはいえる。

また、少人数のメンバーで長期間にわたるキャンプ生活を繰り返し続けると、今度は森に飽きたり、様々な社会的対立が起こったりする。漁撈キャンプでは親密な人間関係が生まれやすいが、いったんそれが悪い方向に向かうと取り返しのつかない事態にもなりかねない。

パジュジーは、ントンバたちのあいだで、漁撈キャンプにおける小さな紛争が絶えないこと、その内容が漁場の取り合い、水中の漁具の中の魚の盗みあい、所持品の盗難、姦通の現行犯、漁果の多寡への嫉妬、何らかの事故が起こったときの責任のなすりつけあい、などであると列挙している。これらの問題に対して、ントンバたちは、村における権力者とは別に、伝統的なキャンプの所有者にこれらの問題の裁定権を認めることで、秩序を保っているという（Pagezy, 2000）。これらの揉めごとは、ちょうどバクウェレが定住村において日々直面している問題と重なる。ントンバのキャンプにおいて、これらの対立が頻発する要因として、バクウェレよりも漁撈への経済的依存がずっと大きく²³、大勢の者がキャンプに長期間滞在し、漁獲をめぐる競争が大きかったことが考えられる。現在の社会経済状況では、バクウェレたちは比較的少人数で漁撈キャンプに滞在し、かつキャンプからキャンプへの移動性の高いキャンプ生活を行っている。このため、一つのキャンプに長期間にわたって人口が集中するようなことはない。しかし、ントンバの例にみられるように、森暮らしの長期化には、社会的なリスクが潜在している。

²³ 1980年代のトゥンバ湖周辺では、魚の買いつけ人が漁撈キャンプまで高い値段で魚を買いにきたという。漁に専念すれば、学校の教師と匹敵するか、それ以上の金額を手に入れたという（Pagezy, 2000）。

そして何より、バクウェレたちは森の世界に近づきすぎることで、社会的にマージナルな存在になってしまうことを恐れる。森は魅力的な場である。しかし、同時に危険な力をはらんだ場所でもある。ずっと森に棲むということはその森の呪力を身につけるということでもある。

このように森に対する両義的な捉え方がなされるのは、かれらの文化において、定住村を中心に森を周縁とするトポロジーが設定されているからだと考えられる。しかし、かといって、森と村が完全に対立した位置付けにあるかというとは決してそうではない。バクウェレにとって森には、父親や祖父、あるいは数世代前の人びとが生活の場とし、畑を作ったという歴史が刻まれた場所でもある。一見立派な森のように見えても、そこには祖先の生活の痕跡がある。ドゥム (*Ceiba pentandora*) の大木の下には曾祖父たちが呪いを込めた精霊が今でも息づいていて、精神的な世界への入り口が穴を開けている²⁴。塙は、コンゴ共和国北東部のボバンダが築漁キャンプを始める際に、結界を結んで村の日常世界とは異なる場として儀礼的な設定を行うと述べているが、バクウェレではそのような儀礼が見られることはない。森は、まったく非日常的な空間というわけではなく、森と村とは物質的にも社会的にも、そして精神的にも補完的な関係でつながりあっている。

さて、ことピグミーとの関係になると、とたんに森に対する両義的なとらえ方が分かりやすく表面化してくる。バクウェレが、バカ・ピグミーを侮蔑する背景には、バクウェレ自らが森棲みの民であることへの自負感と劣等感をあわせ持っていることが反映されていると思われる。バクウェレは、バカ・ピグミーがより森に近い動物のような存在だとみなす²⁵。しかし、前節でみた事例3のように、いったん森に入ってしまうと、

²⁴ かつて、精霊が踊っていたという大木や岩などが点在しており、それらにはいまでも力が残っていると考えられ、畏れられている。

²⁵ バカ・ピグミーもまた、バクウェレ（バカ語では農耕民を一括してカカと呼ぶ）のことをエボボ（バカ語でゴリラという意味）のような危険な動物であるとみなす。詳細は、第4章を参照せよ。

ピグミーたちと何ら変わらない食物を食べ、コミュニケーションを楽しむのである。

バクウェレは、バカ・ピグミーに自分たちにも共通する森の人間、自然内存在としての人間を見るがゆえに反発し、自分たちは文明化された文化内存在であるとして差別化しようとする。しかし、バクウェレもまた、世界観や基本とする生活様式に大きな差異はあるものの、生態的のみならず社会的にも森に大きく依存しながら生活している森棲みの民であるということをかれら自身がよく知っているのである。

森の「バカンス」という言葉には、森行きの楽しさが込められているだけでなく、こうしたやや屈折した森への愛と森棲みの将来への不安が表現されているように私には思えてならない。

第4章 「人間ゴリラ」と「ゴリラ人間」—人間 =動物関係と民族間関係の交錯と混淆—

I. はじめに

霊長類は、人間との類似性から人間と自然の境界領域において「特権的な位置」を占める(Haraway, 1989). アフリカ類人猿は、人間にとってもよく似ている。人間は、このような自身と似て非なる動物に対して、どんな感覚や感情を覚えるだろうか。本章では、アフリカ熱帯雨林におけるゴリラ²⁶ (*Gorilla gorilla*) を例に、人間と動物の関係を考える。

ゴリラという生物学的種そのものについては、霊長類学が多くの情報をもたらしてくれる。アフリカでは数百年から数千年以上もの長い間類人猿と共存してきた人々がいる。しかし、彼らがどのように類人猿を認知し、向かい合ってきたのかについての情報は少ない²⁷。

大型類人猿保全の文脈では、ごくわずかな例外(例えば山越, 2006)を除けば、日常生活の中で類人猿との関わりを持ってきた熱帯雨林の住民たちは、類人猿たちに害を及ぼす存在としてしか顧みられてこなかった。大型類人猿の近傍に暮らす人々は、徹底して「密猟」に加担する地元住民という側面のみが強調されてきたのである(Giles-Vernick

²⁶ 熱帯アフリカには、現在マウンテンゴリラ (*G. g. beringei*) , ヒガシローランドゴリラ (*G. g. graueri*) , ニシローランドゴリラ (*G. g. gorilla*) , クロスリバーゴリラ (*G. g. diehli*) の4亜種が分布している。本章で取り上げる地域にはニシローランドゴリラが居住している。

²⁷ ただし、日本の霊長類学者による一般向け著作の中には、さまざまな社会の類人猿観に触れたものがある。山極は、ゴリラに対して西欧が抱いた表象の歴史を詳しく紹介している(山極, 2005, 2008)。伊谷純一郎による『ゴリラとピグミーの森』(伊谷, 1961)や黒田末壽による『人類進化再考』(黒田, 1999)には、霊長類学者から見た熱帯雨林住民のアフリカ類人猿観が生き生きと描かれている。

and Rupp, 2006). もちろん、類人猿を狩猟対象としてきた地域は少なくなく、狩猟活動により絶滅に瀕している地域個体群も多いと推定されている。しかし、大型類人猿を対象とした狩猟活動²⁸や乱獲は、その多くが獣肉の商品化や内戦にともなう食料危機といった社会経済的状況に森林地域の住民が巻き込まれていった結果として起こっていることを忘れてはならない(市川, 2008)。

一方、ゴリラの住む森には、農耕民とピグミー系狩猟採集民が共存関係を結びながら隣接居住をしてきた。両者が互いに抱いている感情には、対立的な側面と宥和的な側面が入り混じり、愛憎ないまぜになった複雑な様相を呈している(北西, 2010)。

本章では、通常、霊長類学が提供しない熱帯雨林住民のゴリラに関する民俗知識や人間とゴリラの関係の実態について、狩猟活動と民俗知識を中心に、ゴリラとともに住んでいる人々の実践を紹介する。その後、狩猟採集民が農耕民をゴリラの化身だと考える「ゴリラ人間」の理論、そして死んだ人間がゴリラになる、あるいは生きている人間が変身してゴリラになるという「人間ゴリラ」の理論について検討する。

II. ゴリラの民族誌

II-1. ゴリラの民族動物学

調査地では、56 方名種の野生哺乳類が認知されている。バカ・ピグミーは、人間をボ (*bo*) と呼び、それ以外の動物をソ (*so*) と呼ぶ。コンゴ共和国北東部のンベンジェレ (Mbendjele) もそうだが(Lewis, 2002)、バカ・ピグミーもバクウェレもゾウやゴリラのような大型哺乳類だけでなく、彼らが認識するありとあらゆる生き物に精神ないし魂の存在を認めている。ソはさらに、「ネット・ハンティングで獲れる動物²⁹」(ソナユ

²⁸ ブッシュミート問題に加え、中部アフリカの動物と人間関係をめぐって影を落としているのが、HIV やエボラ出血熱など、霊長類ほか森林性野生動物起源の新興感染症問題である(市川, 2008)。

²⁹ バカ・ピグミーにとって主要な食用動物となるダイカー (ウシ科の森林性羚羊) 類のすべてと、齧歯類がこのカテゴリーに含まれる。現在の調査地において主要な狩猟法は、跳ね罠と銃を用いたものであり、

so na yu) , 「槍で獲れる動物」 (ソナベンガ so na benga) , 「樹上の動物」 (ソナイエ so na ye) , 「地面を動く動物」 (ソナトロ so na tolo) など9種類以上のカテゴリーに分類される。カテゴリーの基準は、狩猟法、動物の生活場所(ハビタット) , 特定の習性や身体形質などさまざまである。カテゴリー間の境界は緩やかで、複数のカテゴリーに重複する動物も多い。

ゴリラとチンパンジー (*Pan troglodytes*) は、 「体毛の動物」 (ソナスス so na susu) という独立したカテゴリーに入れられている。ソナススには、ゴリラとチンパンジーのほかに、ゴマデ (gomade) と呼ばれる科学的には未発見のもう一種類のチンパンジーが含まれている。ゴマデは、顔が白く、人間のように二足歩行し、獰猛で人間を恐れない。木の枝やバラカ (mbalaka) というマメの木の40~50 cmにもなる鞘を山刀の代わりにして集団で攻撃してくるという。

ソナススは、 「樹上の動物」 のカテゴリーの下位分類であり、樹上性のサル類全てが含まれるケマ (kema) というグループとは明確に区別される。

バクウェレも、バカ・ピグミーとほぼ同様の民俗分類を採用している。バクウェレは、人間をモット (mot, 複数形はボット bot) , 動物をティット (titt) と呼び分ける。

ゴリラには、バカ語でエボボ (ebobo) , バクウェレ語でジル (djil) という総称が付けられている。バカ・ピグミーは、ゴリラを総称のほか、性別、成長段階、妊娠した個体、など10の状態に分けて名づけている [表1] 。また、ゴリラの遊動集団はブファ・エボボ (bufa-ebobo) , ゴリラのネスト³⁰がまとまって見られる場所は「ゴリラの村」 (テ・エボボ te-ebobo) と呼ばれる。

草本植物の繊維を編みあげて作る網を用いたネット・ハンティングは現在バカ・ピグミー、バクウェレの間では見られない。にもかかわらず、現在においても網猟に基づいた動物カテゴリーが残っていることは興味深い。

³⁰ チンパンジー、ゴリラともに、木の枝や草本類などを材料に毎日寝床をつくる。霊長類研究者は、この寝床をネスト (nest) と呼ぶ。

表 1: バカ語とバクウェレ語による異なる性・年齢のゴリラの呼称

バカ語呼称	バクウェレ語呼称(複数形)	説明
<i>ebobo</i>	<i>dzil (bε-dzil)</i>	ゴリラ (一般)
<i>la ebobo</i>	<i>mɔ-dzil (bɔ-bε-dzil)</i>	アカンボウ
<i>libambi</i>		コドモ
<i>mokolo a ngille</i>		ワカモノオス
<i>ngille</i>	<i>dzil (bε-dzil)</i>	シルバー・バック
<i>ndonga</i>	<i>ε-bɔn (bε-mε-bɔn)</i>	ヒトリオス
<i>nyagole</i>	?	ムスメ
<i>wose ngille</i>		ワカモノメス
<i>nyao</i>	<i>a-da:ba (ba-da:ba)</i>	ハハオヤ
<i>nyandaba</i>	?	シルバー・バックと一緒に行動するメス
<i>bufa ebobo</i>	<i>lɔ:g-ε-dzil</i>	群れ
<i>te ebobo</i>	<i>njɔk-dzil (ε-njɔk-bε-dzil)</i>	ベッドが集まっている場所

バカ・ピグミーにとって、最も重要な狩猟対象とされるアフリカマルミミゾウ (*Loxodonta africana cyclotis*) に付けられている名称の数は、総称を含めて 9～ 18 種類である(Köhler, 2000; 林, 2010)。ゾウには及ばないものの、多数の名称がゴリラに与えられていることはバカ・ピグミーの人々のゴリラへの関心の強さを物語っている。動物の中で、性別や種々の成長段階、集団にまで詳細に固有名が付けられているのはゾウとゴリラだけである。

ゴリラの身体形質として、バカ・ピグミーがよく言及するのは大きく隆起した眉間、頭の上部が細長くそそり立っていること、そして成熟した個体の毛が赤くなる、といったことである。こうした身体特徴について、バカ・ピグミーはおかしくてたまらないといった表情で笑いをこらえながら話す。

バカ・ピグミーの熟練ハンターにゴリラの群れの構成を尋ねると、基本的な集団構成として、1 個体の「リーダー的」な振る舞いをするオトナ雄（「シェフ」という表現で

説明される) と 0~3 個体ほどの若いシルバーバック³¹⁾に、年齢の異なる雌が数匹、それにコドモゴリラが加わるということを語ってくれた。バカ・ピグミーのハンターがイメージするゴリラの集団は、単雄複雌あるいは複雄複雌群であるようである。これは、ゴリラに関する霊長類学の知見(山極, 2005: 155)と一致する。さらにバカ・ピグミーによれば、コドモの成長に伴いゴリラの集団は時間とともに変化してゆく。群れを離れ、単独行動するオス(霊長類学で言うところの「単独オス」)を、ドンガ(*ndonga*)と呼んでいる。ドンガは成熟した雄ゴリラであるシルバーバックのギレが、より若いオスゴリラに群れから追い出されてしまった老齢个体だと考えられている。メスも細かく区分され、名づけられている。コドモを持ったメスはニャオ(*nyao*)、群れにいるメスの中でリーダー雄の配偶个体のうち最も高齢のものはブフォギレ(*bufogile*)と呼ばれる。同じ群れの中にいる複数個体のメスは、「第一夫人」、「第二夫人」といった言い方で喩えられることもあり、バクウェレなど農耕民社会でよく見られる一夫多妻的なイメージでとらえられているようである。

バクウェレは、バカ・ピグミーほど詳細ではないものの、さまざまな状態のゴリラを呼び分けている。バクウェレ語では、総称のほかにオス、メス、コドモの区分で固有名があるほか、群れ行動をせず、単独行動をとるハナレオス、ゴリラの集団、ネストにもやはり名前が付けられている。

³¹⁾ ゴリラは性成熟し、オトナ雄になる過程で、背中が白くなる。そのような個体は、シルバーバック

(silverback) と呼ばれる。

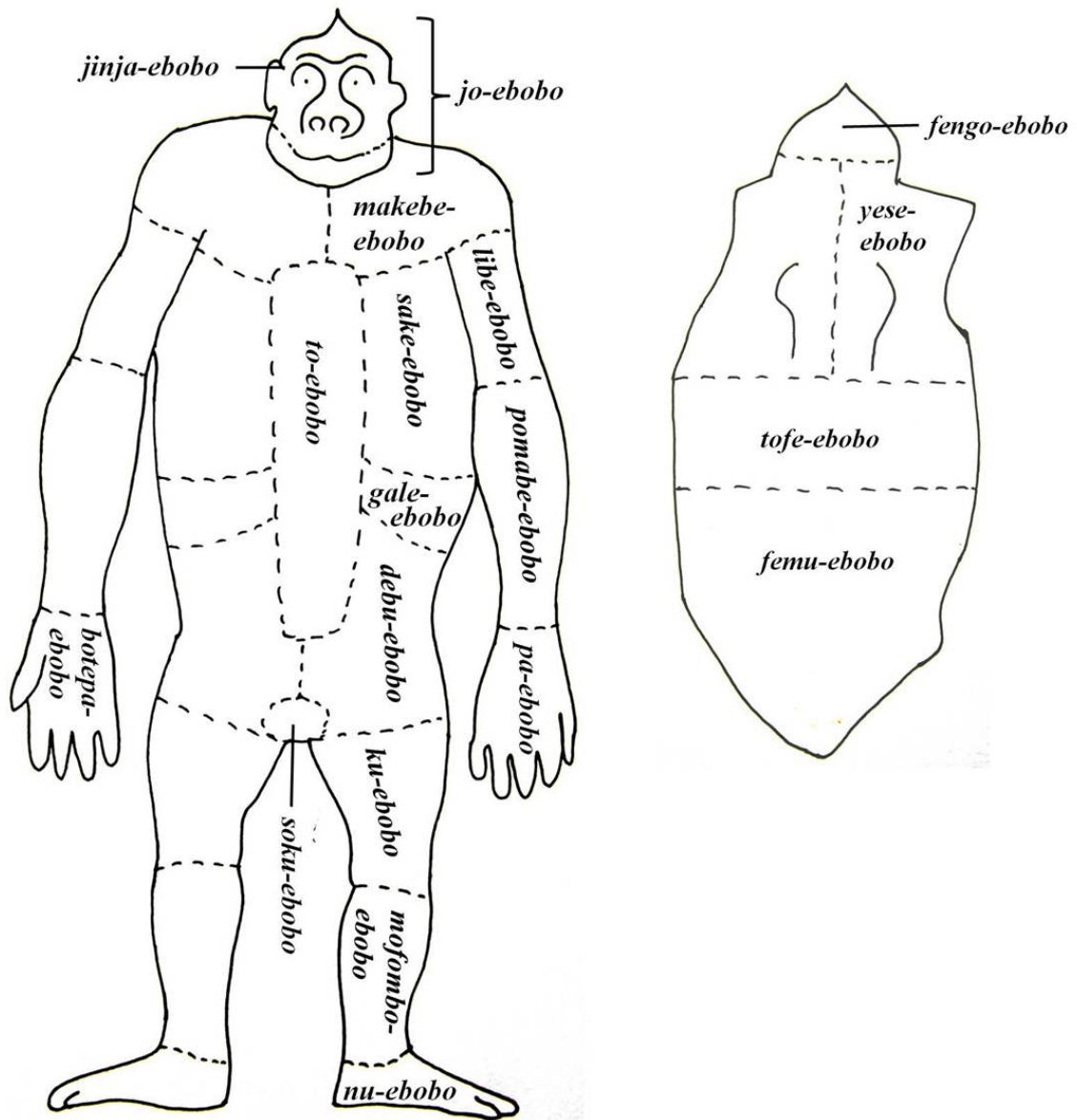


図 4-1: ゴリラの身体部位名称 (バカ語)

バカ語のソは動物を意味するだけでなく、「肉」の意味も兼ねる。バカ・ピグミー社会では、ゴリラによってもたらされる病気は記録されておらず(佐藤, 1998), ゴリラに関する明確な食物禁忌はない。ゴリラは、決して高い頻度ではないが森のキャンプや村での食事、儀礼の際にバカ・ピグミー、バクウェレの両者によって消費される。まとまって食されるのは男子の割礼儀礼ベカ (beka) のための儀礼食などの時である。バカ・

ピグミーではサル類を摂食回避する者は少ないが、類人猿、とくにゴリラでは摂食回避をする者が多い。特に、バカ・ピグミーの女性にチンパンジーを忌避する者が多い。その理由としては、多くの場合、「人間（農耕民）に似ているから」とか「手があるから」という理由が挙げられる(服部, 2008; 林, 2010)。

ゴリラの身体部位の名称を図 1 に示す。図中の点線は解体の際の切り分けられ方を示している。筆者の聞き取りでは、全ての身体部位名称は、該当する人間の身体部位名称に「ゴリラの」を意味する *-ebobo* が付加された複合語であった³²。

さまざまな状態のゴリラに付けられた詳細な呼称や集団の時間変化についての民俗知識は、霊長類学者がおこなう継続的・体系的な観察から得られたものとは異なっている点も多い（例えば、単独オスが群れから追い出された年老いた集団リーダーであるという考えなど）。しかし、これらはバカ・ピグミーがゴリラの集団生活や集団構造の直接観察や足跡の追跡、「ゴリラの村」の観察から経験的に知識を蓄積してきたことを示している。500 種類以上の野生植物に関するバカ・ピグミーの民俗知識を調査した服部志帆によれば、バカ・ピグミーたちは動植物について、彼らなりのやり方で観察を繰り返してきた「科学者」だという見方ができる(服部, 2007)。

なお、ゴリラとチンパンジーは、民話の素材としても重要な役割を果たしている。バカ・ピグミーの定住集落や狩猟採集キャンプでは、リカノ (*likano*) と呼ばれる民話がよく語られる。リカノの主人公は動物であり、チンパンジーとゴリラを主役とするものがある。物語の中の類人猿は、採集活動に出かけるなど人間と同じ活動をおこない、「離れ離れになった子供を思って嘆く」など人間的な感情を持った存在として語られる(服部, 2008: 87-89)。

³² バカ・ピグミーがもともとゴリラの身体の部分名称に固有語彙を当てていなかったかどうかは留保が必要である。バカ・ピグミーと 200 ～300 年前に分かれたと推定されるアカ・ピグミー (Aka) の社会では、ゴリラの身体の部分名称には複合語彙ではなく、固有語彙が当てられている(Bahuchet, 1985: 364. Fig. 114)。

II-2. 人間とゴリラの近接

バカ・ピグミーやバクウェレがゴリラに関する民俗知識を発達させている一因として、人間とゴリラの生息場所に重複が見られることが挙げられる。アフリカ類人猿の中でもゴリラは、草食であり、地上性草本類を好んで食する。そのため、二次林や焼畑など、人為攪乱の強い森にも積極的に現われる。二次林は狩猟採集活動をはじめ、さまざまな人間活動が活発におこなわれる場であり、両者が遭遇することは少なくない。

これは、地域住民にとっては、ゴリラによる獣害が存在することを意味する。調査地では、焼畑によりプランテン・バナナとマニオックが主食作物として、また落花生やトウモロコシをはじめとする各種作物が自給のためや蒸留酒の原料として栽培されている(林・大石 2012)。食用作物のほかには、バナナの焼畑の後に発達するアグロフォレストリーにより、換金作物のカカオが栽培されている。サル類やリス類などの小型動物も獣害をもたらすが、これらの畑に壊滅的な被害をもたらすのはゾウとゴリラである(Hagiwara, 2008)。

ゾウは、特に国立公園や保護区の周辺に頻繁に出没し、畑の作物を根こそぎ掘り起こすだけでなく、踏み荒らしにより畑ごと消滅させてしまう(Hagiwara, 2008)。ゴリラは、植物性食物を主食とするが、森の中に生えるショウガ科やクズウコン科の野生地上性草本類だけではなく、特にプランテン・バナナの髄を好んで食す。一度ゴリラが畑に入ってしまうと、小規模な焼畑であれば、ほとんど全てのバナナの株がやられてしまう。地域住民は、主食の大部分を自給畑で作るプランテン・バナナに依存しているので事態は深刻である。バクウェレは、ゴリラを畑に寄せ付けられないため、樹木に鍋を吊るして叩いたり、銃で威嚇発砲をするなど、さまざまな工夫を試みているがなかなか成功しない。

ゴリラは、貴重な現金収入をもたらすカカオ園にも出没する。カカオの果実を包む甘い果肉は、人間のおやつになるが、ゴリラの好物でもある。筆者は、定住集落から 10

km以上も離れた一次林を歩いていて、カカオの樹が突然現れる経験を何度もしている。バカ・ピグミーやバクウェレによれば、それらはゴリラが森の中でカカオの甘い果肉を食べられるように、「村から盗んだカカオを植えた」ものなのだという。ゴリラは、時に甚大な被害を農耕活動にもたらすが、それを語る人々の語り口にはどこかユーモアが感じられもする。



図 4-2: 狩猟時のゴリラのサイン。

II-3. ゴリラ狩猟の民族誌

ゴリラに対する狩猟は、槍猟と銃猟が主である。跳ね罠にかかる場合もあるが、まれ

である。服部が指摘するように、そもそも棲息密度が低いためか、狩猟頻度は決して高くない(服部, 2007)。槍猟, 銃猟ともにイヌを用い, ゴリラを追跡させる。獲物を見つけるとイヌが吠えるので, その方向へハンターたちは一目散に駆けてゆく。バカ・ピグミーのハンターは, 槍猟など獲物に接近しておこなう狩猟の際にはサイン言語を用いて猟仲間に獲物の種類を知らせる。ゴリラの場合には右手の親指と人差し指をくっつけて輪を作り, 眉毛の上に置く [図 2]。大きく盛り上がったゴリラの眉間を擬したものだという。

バカ・ピグミーの社会では, 狩猟の熟練者, 特にゾウ狩猟に長けた者のことをトゥーマ (*tuma*) と言う。5~6 歳から, 少年たちは, 手作りの弓矢やクロスボー (crossbow), 植物素材を用いた跳ね罠で, 定住集落周辺のネズミ捕りに興じるようになる。その後, リスやヤマアラシやダイカーなどの狩猟経験を重ねた後に, ゴリラやゾウなどの大物に挑戦して, 一人前のハンターとなってゆく(林, 2010)。

ゴリラは, 集団でまとまって行動し, オスは人間の方に向かってくる。ゴリラは, 樹上生活の時間が長いチンパンジーに比べ, 地上で暮らす時間が長い。植物性の材料で毎日作りかえられるネストも, チンパンジーは樹上に作ることが多いが, ゴリラは地上に作る傾向が強い。また, ゴリラは大きな身体で, 地上をゆっくり移動するので足跡を追跡しやすい。これらは, チンパンジーに比べ, 人間による狩猟で殺されやすい条件を与えている³³(山極, 2005, 2008, 山極, 私信)。ハンターたちの語りは, ゴリラは攻撃ではなく威嚇や挨拶のために身体を起こしてドラミング³⁴をするのだが, その際に殺されやすい, という山極の指摘と符合している。

³³ ただし, 下生え (林床植生) の茂り具合によっては, 樹上移動をするチンパンジーの方が, ゴリラよりも銃猟の被害を受けやすい場合もあるという (西原智昭私信による)。

³⁴ とくにオスゴリラが立ち上がって, 両手のひらで胸の上部を叩いて音を出す行動。タイコのような音が出るのでドラミングと呼ばれる。



図 4-3: ゴリラとの格闘について語る B 氏. 鼻にはゴリラに噛みつかれた傷跡が残る. (写真提供：林耕次氏)

狩猟現場において、槍や銃を持った人間とゴリラとでは、圧倒的に人間が有利なように見える。しかし、ハンターたちによれば、実際には、人間とゴリラの間で狩る立場と狩られる立場は容易に交替しうる。また、狩猟場面かどうかに関係なく、人間に不意打ちで危害を加えてくる、取り立てて好戦的で凶暴なゴリラがいるという。調査地で、バカ・ピグミーの狩猟活動について研究をおこなっている林耕次は、2002 年に B というバカ・ピグミー男性（故人、図 4-3）から、次のようなゴリラに襲撃された経験談を聞きとっている。

B 氏は、父親の代から続いてトゥーマである。かつて、彼が狩猟のために森のキャンプに滞在していた際に、ゴリラとふいに遭遇した。ゴリラがモングル

(mongulu)³⁵に近寄ってきたことに気づいた B 氏は、慌てて追い払おうとしたが、逆に攻撃を受けた。鼻や手に噛みつかれ、一命は取り留めたものの、後遺症を伴う重傷を負った。以来、B 氏はゴリラが憎くて憎くて、何頭も殺すようになった。トゥーマは、最も大型で危険な獲物であるゾウ狩りを狩猟の中の狩猟として誇りとするが、B 氏は、ゾウよりも多くのゴリラを殺してきた。(林耕次、私信)

B 氏のようにゴリラに襲われたハンターの中にはゴリラに深い憎悪を抱くようになる者がいる。

狩猟には欠かせないイヌを失ったり、大怪我（鼻をもぎ取られる、耳を噛みちぎられる、手足に裂傷を負う、など）を負ったり、死亡する者もいる。

このように、ゴリラは、ハンターにとってゾウと並んで危険な動物だと考えられている。槍でのゴリラ猟は、文字通り命がけであり、ゴリラを仕留めることはハンターにとっての名誉だとされる(服部, 2007)。バカ・ピグミーのハンターたちは、チンパンジーやゴリラの皮をサワラ (sawala) と呼ばれる着火具入れや小物入れなどの日用品に加工し、熟練ハンターの証ともする(服部 2008)。熟練ハンターに限らず、人々はゴリラの「危険性」、「意地悪さ」を強調する。ゴリラは、人間の気配を感じると警戒音もそこに逃げ出すチンパンジーとは異なり、人間から逃げることなく、山刀、槍や銃を恐れずに立ち向かってくる³⁶。バカ・ピグミーは、森歩きの際、少しでも普段と異なる気配を感じると、足を止めて耳をそばだてるが、そんな時に何が起こったのかと尋ねると、

³⁵ バカ・ピグミーの人々がクズウコン科植物の葉と木の枝でつくるドーム型の伝統的住居のこと。簡素で移動生活に適す。

³⁶ ゴリラが人間から獰猛な動物であるという誤解を受け、また狩猟されやすい理由の一つとして、出会った際に関係性を確認する「チャージ」や「ドラミング」といったオスゴリラの挨拶行動を、相対した人間が、危害を加えるシグナルとして一方的に誤解し、興奮してしまうことが挙げられる(山極, 2008)。

近くにゴリラがいるかもしれないという答えが返ってくるのが少なくない。ゴリラは自分たちのテリトリーに人間が入ってくるのを嫌い、人間が近づくとくんと鼻を鳴らして匂いを嗅ぎ、大きな声で騒いで人間を追い返そうとするという。バカ・ピグミーは、ゴリラは人間を待ち伏せて襲ってくることもあると言い、不用意な遭遇を常に警戒する。特に女性においてこの傾向は顕著で、バカ・ピグミーやアカ・ピグミーの女性は、女性だけで森に出かける際にはゴリラ除けの植物を呪薬として身につける (Giles-Vernick and Rupp, 2006; 服部, 2007)。

ハンターたちは、ゴリラの「危険性」や「暴力性」を強調する一方で、ゴリラの知性や高い認知能力についても言及する。特にチンパンジーと比較して強調されるのは、ゴリラの「賢さ」であり、「狡猾さ」である。例えば、ゴリラはハンターの顔を覚えており、対面して遭遇した際には挑発してくる。また、ゴリラの新しい足跡を追跡してゆくと、ふと足跡が途切れたかと思うと背後からハンターを襲ってくる、などともいう。ハンターたちは、ゴリラが地上と樹上の両方を移動することができることを知っている。ゴリラは、ハンターに追跡されていると察すると、樹上に上って自分の足跡を消すことにより、人をまいて欺くというのである。こういったゴリラの「賢さ」について語る時、ハンターは興奮を隠さない。ハンターによるゴリラとのやり取りの語りは、知的ゲームとしての狩猟の性格を想起させる。このように、狩猟譚の中では、ゴリラはしばしば個性を持った人格的主体として語られ、ゴリラへの否定的なイメージと肯定的なイメージの両面が混在する。

Ⅲ. 「ゴリラ人間」と「人間ゴリラ」の民族誌

Ⅲ-1. 「ゴリラ人間」としての農耕民

中部アフリカのピグミー系狩猟採集民バカやアカは、近隣農耕民をゴリラやチンパンジーに喩え、また死ぬとゴリラに生まれ変わると考えている。服部は、バカの人々がゴ

リラを狩猟した農耕民ハンターを評して、「ゴリラがゴリラを殺した」と言って「大笑いした」逸話を紹介している(服部, 2007). 竹内潔は, コンゴ共和国北東部のアカ・ピグミーの男性が, 共通の友人だった農耕民男性の死を「彼はゴリラになった」のだと語ったことに衝撃を覚えた経験を述べている(竹内, 2001).

コンゴ民主共和国のピグミー系狩猟採集民エフェ (Efe) の死生観を研究した澤田昌人によれば, エフェは, 死後は森に行き, 狩猟採集生活を継続する(Sawada, 1998). バカの死者もまた, 死後も森のどこかで生活を続け, 精霊となって時々生者に薬用植物の知識を授けたり, 新しい歌を授けてくれるあり難い存在である(都留, 1999).

しかし, バカは近隣に棲む農耕民についてそのように考えない. バカは, バクウェレをゴリラの化身とみなしている. 人間としての農耕民の姿は仮のもので, 死ぬと本来のゴリラの姿に戻るというのである.

バカは, バクウェレとゴリラの類似性を指摘する際, 頻繁に身体的特徴や仕草に言及する. ゴリラとバクウェレに共通するのは, バカに対する身振りや振る舞い, 興奮した際のうるささ, そして危険性である. まず, バクウェレの普段の姿勢や歩き方(「ふんぞり返って偉そうに歩く」)が, ゴリラに似ている. シルバーバックが, 威嚇の際に見せる胸を張る格好は, バクウェレがバカを見下す時の姿勢にそっくりである. また邪術³⁷を操るバクウェレの危険さは, 森の中で遭遇したゴリラの暴力性に比肩しうる.

³⁷ 妖術, 呪術, 邪術の各概念や行為を通文化的に明確に区別し定義することは困難である. アザンデ社会の災因論の研究を行ったエヴァンズ・プリチャードは, 生得的に獲得され, 必ずしも本人の意図とは関わりなく他者に災いをもたらすものを「妖術 (witchcraft)」, 特別な知識や技術の学習により獲得され, 意図的にそのわざが行使されるものを「呪術 (magic)」と区分し, 呪術のうち対象に悪い影響をもたらすものを「邪術 (sorcery)」とした(エヴァンズ・プリチャード, 2001). 本研究の調査地を含むカメルーン東南部では, このような区分は認められず, まとめてフランス語でソシレリ (sorcellerie) と呼ばれる. 各民族集団は, ソシレリに対応する民俗概念を持っており, バクウェレ語ではエリエーブ (elieeb), バカ語ではンブ (mbu) と呼ばれる. いずれも特定の者が腹の中に持っていると言われ, 生き物のような存在としてイメージされている(山口亮太, 私信). 本章では, エリエーブやンブを指すことばとして「妖術」を用いるが, 意図性や呪薬の使用が強調される文脈では「邪術」を並用する.

一方で、バクウェレもまたバカ・ピグミーを野生動物のような半人間半動物だとみなしている。バクウェレ語のティット (*titt*) もまた、バカ語のソと同じく動物と肉を同時に意味し、バクウェレがバカ・ピグミーを *mo-titt* と侮蔑的に呼び捨てるとき、それは「動物人間」と同時に「肉人間」というニュアンスをもつ。これが強い語調で言い放たれると、大変きつく聞こえる。また、バカ・ピグミーは森の中のキャンプで人が亡くなるなど悪い出来事があるとキャンプを移動させるが、バクウェレはバカ・ピグミーが放棄したキャンプ跡を見ると、死んだバカ・ピグミーがキイロセスジダイカー (*Cephalophus silvicultor*) になって、その周辺に隠れていると考える。バクウェレの中には、バカ・ピグミーの生まれ変わりだからと、このダイカーを食さない者も多い。

このように農耕民と狩猟採集民は、お互いに相手を動物に類する存在であるとする負の表象を投げつけあっているが、それは日常の相互行為において対等におこなわれるわけではない(竹内, 2001)。狩猟採集民バカ・ピグミーは、日常生活においてバクウェレから差別を受け、劣位に扱われることが多いのである。

コンゴ共和国北部に居住するピグミー系狩猟採集民ンベンジェレを調査したジェローム・ルイスは、少し異なった狩猟採集民と農耕民のやり取りを報告している。ンベンジェレどうしが近隣農耕民の村人(複数形で *bilo* と呼ばれる)に言及する際には、ことごとくゴリラ (*ebobo*) という言葉が使われ、また逆にンベンジェレが狩猟においてゴリラを殺した際には、ゴリラはことごとく村人 (*bilo* の単数形の *milo*) として言及される。またある時、伐採会社での賃労働のため、村人とンベンジェレが一緒に住んでいるキャンプで、ンベンジェレが殺したゴリラの肉が分配される機会があった。ほとんどのンベンジェレは、ゴリラは農耕民の変身した一形態だと考えているので、その肉を食わない。ンベンジェレのハンターは、農耕民に肉を分配する際にも殺し、解体したゴリラの肉を「村人」と呼び続けた。ハンターは、農耕民に肉を渡す際に「あなたの村人どうぞ」と言い、肉を受け取った農耕民は明らかに動揺したが、ただで肉がもらえるの

で何も文句を言わなかったという(Lewis, 2002: 100).

竹内の調査地では、アカ・ピグミーは植物性食物をほぼ全面的に農耕民の農作物に依存しているが、ルイスの調査地では農耕民がンベンジェレのハンターに獣肉を依存している。こうした農耕民と狩猟採集民の間の生態学的依存のバランスが、異なる相互表象の表明をもたらしたのではないだろうか。

バカ・ピグミーの間では、「農耕民の本性はゴリラである」というイメージは子どもにさえ深く根付いている。私は、調査地にはかならずスケッチブックを持って行く。人々はみな絵を描くのが好きなので、求められれば色鉛筆を渡して自由に描いてもらっている。バカ・ピグミーは大人も子供も好んで動物の絵を描く。



図 4-4: バカ・ピグミーの少年によるゴリラのイラスト。

ある時、推定年齢 10 歳ほどのバカ・ピグミーの少年が日暮れまでかかって描いた動物の絵を持ってきた。その中に、どう見ても人間の子供にしか見えないものが描きこまれていた [図 4] 。

私は、その絵を描いた子供に何を描いたのか尋ねた。彼は、何気ない感じで「エボボ」（ゴリラ）と答え、その後小声で「カカ」（*kaka*; 農耕民一般に対する蔑称）と付け加えた。

ふと、他の子供や大人の描いた絵の中にも、動物なのか人間なのか見分けがつかないようなゴリラの絵が散見されるのに気づいた。図 5 はバカ・ピグミーの他の少年が描いた動物の絵で、コロブスザル (*kalu, Colobus guereza*) , アフリカコビトワニ (*mokakele, Tetrapis africanum*) , オオセンザンコウ (*kelepa, Smutsia gigantea*) , カメレオン (*ekoo, Camaeolo sp.*) などさまざまな動物に混じって明らかに人間の顔をし、性器をぶら下げて歩くゴリラが描かれている。

バカ・ピグミーが農耕民をゴリラに喩えるのは耳にたこができるほど聞いていたが、これらのバカ・ピグミーの子供によるスケッチは、バカ・ピグミーが抱いている「ゴリラ人間」としての農耕民イメージの生々しさを私に強く印象づけた。ある人間集団が、他の人間集団との差異を強調する際に、動物呼ばわりすることは世界各地で普通に見られることだろう。日本でも、侮蔑や罵りのイディオムとして、例えば「あいつらは犬だ」などという言い方がされる。しかし、それらは言語表象の域に留まっていて、実際に特定の人間集団や個人が、イヌやニホンザルの化身だと考えられているわけではない。しかし、バカ・ピグミーにとっての「ゴリラ人間」は、単なるイディオムを越え生々しく立ち現れる主体としての農耕民なのである。



図 4-5: バカ・ピグミーの少年による動物のイラスト。

バカの中には、農耕民が死後ゴリラになると考える一方で、自分たちは死んだ後「白人」に生まれ変わって集落に戻ってくると考える者がいる(Giles-Vernick and Rupp, 2006). タマラ・ジル= フェルニックとステファニー・ルプは、WWF など国際的な NGO による熱帯雨林保全事業や、キリスト教会の福祉・教育改善事業など外部社会の介入が、しばしば被益者を「先住民」でありマイノリティだとされるバカ・ピグミーに限定して

おこなわれることが、農耕民優位・狩猟採集民劣位のローカルな伝統的権力関係を変容させつつあり、それがバカ・ピグミーの死後の世界をめぐる言説に反映されていると言う(Giles-Vernick and Rupp, 2006). ジェローム・ルイスによれば、ンベンジェレは、農耕民がゴリラに生まれ変わるだけでなく、「白人」がアカカワイノシシ (*Potamochoerus porcus*) に生まれ変わると考えている。ルイスによれば、良い値で売れるアカカワイノシシは、欧米人によってもたらされる経済価値を表象している(Lewis, 2002: 210-211.). アクセル・ケーラーによれば、コンゴ共和国北西部のソアンケ周辺のバカ・ピグミーと農耕民は、互いに相手が死後類人猿に生まれ変わる、すなわちバカ・ピグミーは農耕民がゴリラに、農耕民はバカ・ピグミーがチンパンジーに生まれ変わると考えている(Köhler, 2005). ゴリラとチンパンジーは、よく似ているが人間に対する態度や行動が全く異なっている。ゴリラは人間に対して攻撃的であるが、チンパンジーは臆病であり、ゴリラは人間に対しテリトリーを主張するが、チンパンジーは主張しない。こうしたゴリラの特徴は、バカ・ピグミーに対して高圧的な態度で権力的に振る舞おうとする農耕民のものであり、チンパンジーの特徴は、万事控え目で農耕民に対し下手に出るバカ・ピグミーのものと解釈できる(Köhler, 2005).

このように、狩猟採集民による農耕民の、あるいは農耕民による狩猟採集民の死後動物化理論は、コンゴ盆地北西部に広く見られる考え方である。それは狩猟実践をはじめとする日常的な動物との遭遇体験により日々構築される人間と動物の関係を媒介に、民族集団間関係を表象してきた。一方で、保全活動や貨幣経済の流入など、外部世界からの介入にともなう人間集団間の関係変容を敏感に反映する文化事象(Lewis, 2002; Giles-Vernick and Rupp, 2006)としても解釈されてきたのである。

III-2. 動物になって畑を荒らす狩猟採集民

狩猟採集民と農耕民の間の確執が高まるのは、狩猟採集民が農耕民の畑の作物を収穫

する「盗み」をめぐるものである(埴, 2004). バクウェレによれば, バカ・ピグミーは自由に動物になったり, 人間に戻ったりできる力—動物変身能力 (エリザリザ *elizaliza*)—を持つ. バカ・ピグミーが, 朝夕の暗い時間や夜になると, 農耕民の眼をくらますためにネズミやサルに変身して畑の農作物を盗むという.

バクウェレによれば, 調査地周辺では, バカ・ピグミーが畑の作物を荒らす動物と間違えられて, バクウェレ男性に「銃で撃たれる」事件が幾度となく起こってきた.

バクウェレ男性 A は, 日も暮れかかった夕方に偶然自分の焼畑を通りかかった. A は, 1 匹のコロブスザルが畑でトウモロコシを食べているのを発見した. 銃を取りに家に走り, 息せき切って畑に戻ってきた A はまだ畑に残っていたコロブスザルを鉄砲で撃った. しかし, 弾が当たった途端に奇妙な叫び声が上がった. 鉄砲で撃ったコロブスザルに近づいてみると, そこにはサルではなく, なんとバカ・ピグミー男性 B が呻うめいていた. 幸い怪我はかすり傷で, A は慌てて B を村に運び病院に連れて行った.

バクウェレによれば, エリザリザは狩猟の際に動物を欺いたり, 畑で盗みをする際に畑の主の目を欺いたり, 動物となって直接敵に攻撃を仕掛けるための呪術の一種である. エリザリザを持つためには, エリエーブ (*elieeb*) とバクウェレ語で呼ばれる妖術的な力がなくてはならない. エリザリザにより変身している間, 人間としての身体はそのままだが, 森に入った魂が動物の姿になって振る舞う. 変身中に怪我を負ったり, 死亡すると, 人間の身体も何らかの損傷を受けるか, 死亡することとなる.

あるバクウェレのインフォーマントによれば, 身体に何らかの障害を持つバカ・ピグミーの中には, かつてエリザリザにより動物に変身している際に, 動物や農耕民から攻撃を受けて魂に怪我を負い, そのために障害を抱えることになった者が少なくないという. 私の親しいバカ・ピグミーの友人 S は, 右脚に障害があるが, バクウェレによればそれは動物に変身中に怪我を負ったためだという.

S は少年時代を調査地の隣村の M 村で過ごした。ある時、S はアジルマンガベイ (*Cercocebusagilis*) に変身して、あるバクウェレの畑でトウモロコシを盗んでいた。盗みに気づいた畑の主 (バクウェレ男性) は、銃でアジルマンガベイを撃った。マンガベイは脚を撃ち抜かれて倒れ、姿を消した。数日後、S は定住集落のキャンプで発熱を伴って発病し、右脚を患った。その時の後遺症のために、現在も S は右足のひざが不自由なままである。

バクウェレは、森に詳しいバカ・ピグミーの超自然的な力を畏れてきた。バカ・ピグミーがエリザリザという呪術により動物に変身し獣害をもたらすという理論には、そういった不思議な力を持つバカ・ピグミーへの畏れが窺える。また、バクウェレがバカ・ピグミーとの畑の作物をめぐる対立を、他の畑荒らしをする動物のそれと変わらないものであると認識していることも窺える。バクウェレは、バカ・ピグミーを畏れつつも半人間＝半動物と見なし、文化内存在としての自集団と「より動物に近い」バカ・ピグミーとの差異を強調することによって、バカ・ピグミーとの境界を維持しようとしているのである。

III-3. 「人間ゴリラ」の民族誌

バクウェレによれば、ゴリラの中には、姿はゴリラだが、魂は人間が変身した存在である「人間ゴリラ」(ジル・エリザリザ *djil-elizaliza*) が紛れているという。エリザリザを持っているバクウェレは、ゴリラだけでなく、ヒョウ、リス、フサオヤマアラシなどさまざまな動物に姿を変えて行動することができる。ゴリラに変身して、森の中で敵を待ち伏せし、危害を加え、殺す。また、エリザリザを持っているバクウェレは、死ぬとゴリラになる。このゴリラは、死者の親しんだ場所に繰り返し再来するのですぐにそれと分かる。

ジル・エリザリザは、人間を恐れず大胆に人間の生活域に出没し、いたずらをする。村に出てきたこのようなゴリラは、人間に危害を及ぼさないので殺されない。人間としての身体は死んだが、魂は生きてエリザリザによってゴリラの中に宿っている。生まれ変わりの人間ゴリラは、思いを満たすと、森に戻っていく。生まれ変わりの人間ゴリラは、死んだ本人の親族以外の人間には吼ほえるが、親族には吼えない（「攻撃的」ではない）。そのため、これらが狩猟によって殺されるときには、多くの場合容易に近接ができる親族ハンターの手によることになる。森の中でゴリラと遭遇した際に、どれが普通のゴリラで、どれが人間ゴリラなのかは分からないことが多いが、調理すれば人間ゴリラは不味いのですぐに分かる。

ジル・エリザリザには、生きている邪術者が呪薬を用いてゴリラに変身し、他者に危害を加えたり、殺そうとしている場合と、エリザリザを持った人間（の身体）が死んでゴリラに生まれ変わった場合とがある。

聞き取りをおこなったところ、バクウェレ、そしてバカ・ピグミーが遭遇しているジル・エリザリザの出現頻度は少なくない。最近 20 年間ほどの間にも、調査地から 50 km ほどの範囲の地域で毎年 1, 2 件以上ジル・エリザリザとの遭遇やジル・エリザリザが引き起こした事件があることが分かった。以下に得られた事例のいくつかを示す。

(事例 4-1 邪術者が変身したジル・エリザリザによる襲撃)

ジル・エリザリザと格闘し、瀕死の重傷を負ったバクウェレの壮年男性 F の事例を紹介する。F は、カメルーンとコンゴ共和国の国境に面する調査地近傍のコンゴ側の B 村でカカオ栽培をおこないながら生計を立てている。

2009 年 10 月のある早朝、F が目を覚ますと、子供たちが家の前にサッカーのゴール

ポスト代わりに立てていた棒の先に、一羽のフクロウ³⁸が止まっていた。フクロウにはのどの部分に大きな目立つ突起があった。Fの近所に住む妖術持ちとして有名な老女も、のどに大きな突起ができていたので、Fはすぐにフクロウの正体が、エリザリザにより変身した老女であると判断した。Fは、使用人のAと母方の甥のGを呼び、二日ばかりで銃でフクロウを撃ち殺した。フクロウが死ぬと、老女は「Fは私を殺した！ Fは私のフクロウを殺してしまった！」と言って泣き叫んだ。間もなく老女は病に伏したが、回復後の彼女の左上腕には銃創が付いていた。

その後すぐに、村の外れで一頭のメスゴリラが見かけられるようになった。Fは、とうとう老女がジル・エリザリザになって自分を攻撃しに来たのではないかと直感した。そこでFは、先日フクロウを撃ち殺したAとGを再び呼び出して、このメスゴリラの追跡をさせた。AとGがゴリラの跡を付けてゆくと、ゴリラは水の傍から片時も離れずに歩いてゆく。AとGは狙いをつけて10発も発砲したが、ゴリラは巧みに銃弾を避けて逃げ回った。

ゴリラは徘徊と出没を続け、狩猟の成果がない日が続いた。老女はFに言った。「あなたのハンターたちは、本当に役立たずだ。村の中をゴリラが堂々と歩いているのに殺せないなんて、みっともない。私は今晚食べるおかずもないというのに」。老女に揶揄され業を煮やしたFは、翌日AとGがゴリラを追って出かけると、自ら銃を持ってその後を追った。相変わらず、ゴリラは水際ばかりを歩いていて、AとGがゴリラを追い詰めて発砲しようとする、川の中に浸かり、撃つこともできない。Gが丸太を川に投げ込むと、ゴリラは陸に上がってきた。そこをAとGは撃ちかけたが、やはり弾は当たらない。ゴリラは村の入り口のバナナ畑に逃げ込み、Fと遭遇した。Fが2発撃ち込むと、ゴリラはFのいる方に突進し、Fに抱きつき押し倒した。Fは銃を使うこ

³⁸ 中部アフリカの多くの社会ではフクロウは邪術者の使いであるとされ、強く忌まれている。

とができず、ゴリラと上になり下になりしながら格闘した。ゴリラはFの上腕、太もも、ふくらはぎに噛みつき、肉をちぎり取った。左の上腕部はゴリラにつかまれ、指が肉を突き抜けた。ただならぬ物音で格闘に気づいた村人Hが、家から散弾銃を持ってきて、Fと地面を這いながら格闘を続けているゴリラの首筋に銃口を当てて発砲し、ゴリラは死んだ。Fは一命を取りとめたが重傷を負った。老女を除くB村の全員がゴリラを食べた。格闘事件の5日ほどして、老女は突然姿を消し、3ヵ月後に突然戻ってきた。

ゴリラ人間、すなわちジル・エリザリザという現象には、妖術／邪術との関連が多かれ少なかれ存在している。これは、ジル・エリザリザの出現が邪術によるものと同定された典型的な事例である。B村では老女は、この不在の間に呪医のところに通って身体に入った銃弾を取り除いていたのではないかと噂された。また、Fがジル・エリザリザから攻撃を受けた理由として、さまざまな噂が流れた。まず、Fは多くの村人とカカオ園の賃貸契約を結んで利益を上げていた。また、Fは地方都市の商人にも知り合いが多く、金回りが良かった。これらが人々の嫉妬を呼んでいた。さらに老女は、Fの経済活動がもたらす村の「発展」が、伝統的な妖術実践の効きめを激減させると考えたのではないかという仮説が聞かれた。

(事例 4-2 水場にたたずむジル・エリザリザ)

1985 年ころ、農耕民の男性 C は、伐採会社の手伝いに雇われ、バカ・ピグミー男性数名とディワラという森の奥のキャンプに滞在していた。ディワラはかつてバクウェレとバカ・ピグミーの村があった廃村の一つで当時は無人だった。毎朝、水場に水を汲みに行くと、ゴリラに出会った。水汲みの間、決まってゴリラは背中を向けてじっと座ったままだった。全く人を恐れず、静かなのでジル・エリザリザに間違いないということになり、殺すことはしなかった。

生まれ変わりゴリラとの遭遇は、人間の死の直後に村周辺で起こることが多いようだが、森の中で起こった珍しい事例である。ディワラは、植民地期に野生ゴム採集に使われ、1950 年ころに放棄された村で、現在ではすっかり成長した森に覆われている。この事例で出現したジル・エリザリザは、かつてディワラに住んでいた祖先の魂を受け継いだゴリラだったのではないかと考えられている。生まれ変わりゴリラは、人間を恐れず、もの静かで、攻撃的ではないことが多い。

(事例 4-3 葬式に出て来て手を振り、ダンスを踊ったゴリラ)

1988 年ころ、バクウェレ男性 D と擬制的親族関係にあるバカ・ピグミー男性 B が亡くなった。D の家の裏で土葬が終わり、葬式のダンスの準備をしていると、D の家の前の戸口にゴリラが突然現れた。人々が驚いていると、ゴリラはあたりをうろうろするだけでなく、男たちの雑談小屋の中に入って中から手を振ったので、死んだバカ・ピグミー男性のジル・エリザリザだと分かった。太鼓を叩くと、リズムに合わせて道の上でゴリラは踊った。葬式の後、1 ヶ月近くこのゴリラは村の周りをうろついたが、エリザリザなので放っておいた。その後ふいにいなくなった。

人間の死後間もなく現れる人間ゴリラは、とりわけ擬人的に語られる。故人の親しんだ場所やものや人間の近くにたびたび現れて、ディスプレイをおこなうというパターンが多い。この事例で注目したいのは、バカ・ピグミーも死後ゴリラになることがあるという点である。バクウェレと異なり、少なくとも現在のバカ・ピグミーは、自分たちが死後ゴリラに生まれ変わるなどとは決して考えていない。D の家族は、調査地において現在に至るまでバカ・ピグミーの家族との擬制的親族関係を維持できている数少ないバクウェレである。この事例では、バクウェレが、ジル・エリザリザを擬制的親族関係に

あるバカ・ピグミーに敷衍して適用している。バクウェレは、バカ・ピグミーとの差異を強調しつつも、別の文脈ではバカ・ピグミーを自分たちの文化実践の枠組みに取りこもうとするのである。

このように、バクウェレの語るジル・エリザリザの現れ方やその性格にはかなりの変異がある。邪術者の変身体であるジル・エリザリザは、凶暴で、遭遇した人間に意図的に深刻な危害を加える極めて危険な存在である。また、具体的な事例は採集できなかったが、バクウェレによれば、ジル・エリザリザに女性や子どもがさらわれ、行方不明になることがあるという。人さらいをおこなうジル・エリザリザはとりわけ警戒されている。一方で人間の生まれ変わりであるジル・エリザリザは、人間らしい感情を持ち、ユーモラスで人間的な存在である。このように矛盾した複数の性格を持つ「人間ゴリラ」をどう解釈したらよいだろうか。

III-4. 人間とゴリラの入れ代わりと混淆

カメルーン東南部のバクウェレ社会だけでなく、コンゴ盆地北西部を流れるサンガ川流域の複数の農耕民にとって、ゴリラは特別な存在である(Giles-Vernick and Rupp, 2006).

「人間ゴリラ」は、隣接する中央アフリカ共和国南西部のンピエム（Mpiemu）(Giles-Vernick, 2002; Giles-Vernick and Rupp, 2006), コンゴ共和国サンガ州のジェム（Djem）, バクウェレ(Köhler 2005)などの農耕民社会から報告がある。

ジル= フェルニックとルブによれば、人間ゴリラの出現には明らかに農耕民の妖術的思考が関わっており、人間でも動物でもない生まれ変わりゴリラの曖昧さは、当事者の社会的位置づけの曖昧さを表している(Giles-Vernick and Rupp, 2006).

アクセル・ケーラーは、コンゴ北西部における生まれ変わりゴリラを「幽霊ゴリラ」(gorilla-revenant) と呼び、人間の変態であるとして、邪術者の変身によるゴリラと区

別を試みている。コンゴ北西部では、「幽霊ゴリラ」は通常シルバーバックであり、「幽霊ゴリラ」だと判断されたゴリラは殺されず、穏やかに追い払われるか、自発的に離れるまで放置される(Köhler, 2005: 417)。ケーラーによれば、死んだものの現世に未練を残した者が生前生きた場所に戻ってきて、その思いを表明するためにゴリラとなって現れるのだと考えられている。

バクウェレによれば、邪術者の変身によるジル・エリザリザはキティ (*kiti*) と呼ばれる他者に禍をもたらす邪術実践のひとつである。これについて言及する時は緊張が漂う。一方で、バクウェレが生まれ変わりゴリラについて語るとき、ジル・エリザリザは知的で、気持ちの通い合うような動物として性格づけられる。邪術者に操られ人間を食べると同時に、先祖に連なる血縁者であるジル・エリザリザは、まさに両義的な存在である。愛着を感じる存在でありながら、生まれ変わりのジル・エリザリザを殺すことができるのは故人の親族であるという逆説は、バクウェレの家族観を反映している。血縁が強ければ強いほど、妖術／邪術により相手を殺すことは容易になるからである。ジル・エリザリザの両義的性格は、バクウェレの自己表象の幅を示しているように思われる。つまり、ゴリラは、モリー・ムリンの言う人間の鏡の役割を果たしている(Mullin, 1999)。

ジル・エリザリザは、ジル＝フェルニックらが指摘するように、一見したところ人間でも動物でもない曖昧な存在である。出現の文脈から明らかな場合を除けば、ジル・エリザリザは普通のゴリラとまったく見分けが付きにくいからである。この混沌とした状況は、調査地の人間社会において、誰が邪術者か、誰が妖術を持っているのか—往々にして本人にも一見分けがつかない事態と大変よく似ている。理論的には、バクウェレにとってすべてのゴリラはジル・エリザリザである可能性がある。この意味では、バクウェレにとってもはやゴリラは動物ではなく、人間である。またバカ・ピグミーにとって、バクウェレは限りなくゴリラなのである。

IV. まとめ

ゴリラは、バカ・ピグミーにとってもバクウェレにとっても両義性をはらんだ動物である。ピグミー系狩猟採集民と農耕民の間には、徹底した嫌悪感の表明と同時に、信頼と依存といったアンビバレントな感情が生起している(Bahuchet and Guillaume, 1982; 竹内, 2001)。狩猟採集民は、平等主義的な価値観に基づいて行動し、個人の行動を抑圧的に制限したり、強制することを大変嫌う。しかし、農耕民は、バカ・ピグミーを自分たちより劣った存在と見なし、狩猟採集民を支配しコントロールしようとする(竹内, 2001)。そこで、狩猟採集民は、農耕民との共存により恩恵を得ながらも、関係の固定化を逃れるようにさまざまな手を打つ(竹内, 2001; Lewis, 2002; 埴, 2004)。

農耕民も狩猟採集民も共に、互いの差異を維持しようとしている点では変わらない。ただし、農耕民は農耕民優位・狩猟採集民劣位という不平等を積極的に維持・強化しようとする。それに対して、狩猟採集民は、世界観や生活様式における農耕民との差異は維持しつつも、不平等を構造化している二項対立の境界を曖昧化させ、あるいは無力化しようとする。不平等を前提とした二項対立か、平等を前提とした二項対立かという点において、両者が志向する共存の方向性は全く異なっている。

ジェローム・ルイスによれば、ンベンジェレは農耕民を狩猟動物に対するのと同じやり方で扱い、交渉しようとしている(Lewis, 2002)。バカ・ピグミーとバクウェレの関係においても、バカ・ピグミーは自分たちの束縛を嫌う生き方を理解しようとし、バクウェレに対して、野生動物に対するのと同様の態度で臨んでいるように思われる。それが、農耕民はゴリラである、という隠喩によく現れているのではないだろうか。一方、動物に対する戦略を相手に応用しているのは、バクウェレも同様である。バクウェレは、バカ・ピグミーを獣害動物と同様にみなしている。バカ・ピグミーとバクウェレのすれ違った共存関係は、両者の動物との付き合い方と影響し合っている。のみならず、人間とゴリラが入れ替わる「人間ゴリラ」の事例では、ゴリラは個人や人間集団の置かれた

社会的文化的状況を反映し、表象するだけでなく、妖術的思考を媒介にして人々の社会関係に介入していた。そこでは人間と動物の関係は錯綜的であり、両者が混淆しながら動物をも含めた社会の相互作用がおこなわれていると見ることができる。

5 章 バカ・ピグミーによる換金作物栽培と民族間関係

I. はじめに

バカ・ピグミーは、中部アフリカのピグミー系狩猟採集民の中でも、半定住化と農耕化が進んだ集団である(Hewlett, 1996). 彼らは、1960年代に進められた独立カメルーン政府主導の定住化政策と並行化して焼畑農業を受容した(Althabe, 1965)が、農耕活動の実態については、プランテン・バナナ栽培の受容に関する Kitanishi (2003)を除けばこれまでほとんど見られなかった. この章では、カメルーン東部州において観察されたバカ・ピグミーによる換金作物としてのカカオ栽培の実態、ならびに関連する彼らの生活スタイルにおける社会経済的な変化について記載する.

ピグミー系狩猟採集民が、近隣農耕民による農耕活動を手助けして食用作物や換金作物を栽培することはコンゴ盆地の各地で見られる. これは、農耕民が農作物、酒、鉄、そして工業製品を狩猟採集民に提供し、その代わりに狩猟採集民が農耕民に労働力を提供するという物々交換の一形態だと考えられてきた(Turnbull, 1961; Bahuchet & Guillaume, 1982; Terashima, 1986; Sakanashi, 2010). 多くの先行研究は、これらの生業活動が明らかに地域市場経済に影響を受けているのに、農耕民と狩猟採集民の関係をより広い世界から分離した閉じた系であるにとらえがちであった(Ichikawa, 1986; Terashima, 1986; Grinker, 1994; Takeuchi, 2001, しかし, Ichikawa, 2000も見よ). これらの分析においては、近隣農耕民は、狩猟採集民と外部世界の間を仲立ちし、コントロールする調整弁のような存在であった. しかしながら、そのような閉鎖的な系は大きくなる一方の市場経済の影響と、その背後にあるグローバリゼーションのプロセスの圧力の下で維持できるわけ

がない。カメルーン東南部では、農耕民と狩猟採集民バカ・ピグミーの双方が30年間以上にわたり、カカオ栽培を続けている。本章では、この換金作物栽培の社会経済的な諸側面をバカ・ピグミーの近隣に棲む農耕民、商業民、そして外部世界との関係変化の文脈から明らかにする。

換金作物栽培は、食用作物栽培とは基本的に性格が異なる。まず、換金作物栽培は、明らかに経済的な利益を得る（カネを得る）ための行為である。次に、カカオは多年生木本作物であるので、その生産には長い時間と集中的な労働力投入を要する。特に栽培初期の労働成果が出るのは、3年から5年も後のことである。したがって、これは一つの典型的な「遅延利得型経済」の性格を有しており、狩猟採集活動など即座に労働成果が得られる「即時利得型経済」の性格を持つ一連の生業活動(Woodburn, 1982)とは好対照をなす。本章ではこのようなカカオ栽培の諸特徴³⁹について、農耕民とピグミー系狩猟採集民の関係の変化の文脈で検討してゆく。

カカオ栽培の諸特徴は、狩猟採集活動に根差したバカ・ピグミーの伝統的な生活様式と価値システムと整合性がないので、バカ・ピグミーにとってカカオ栽培を受け入れることは困難のように思える。それゆえに、私はバカ・ピグミーが伝統的価値システム—平等主義的で協同的な社会倫理—を維持しつつ、近代的な市場経済へのより良い適応によって現金収入を確保する、という一見矛盾したように見える二つの目標をいかに達成しようとしているのかに焦点を当てたい。

II. カメルーン東南部におけるカカオ栽培

II-1. カメルーン東南部におけるカカオ栽培の歴史的背景

³⁹ 多年生の樹木作物栽培が続けば、従来行われてきた焼畑農耕とは異なり、農地は森には戻らない。そのような状況は、人々の土地利用や土地に対する権利に関する概念に影響を与えずにはおかない。この土地の所有と利用にかかわる変化の社会経済的な側面については第7章で述べる。

カカオ栽培は、フランス植民地政府によって、野生ゴムの採集が減少し行われなくなった1920-1930年代に導入された。当時、現在調査地に居住するバクウェレとバカ・ピグミーの祖先たちはジャー川上流沿いに点々と分布していた小さな集落に分かれて居住していた。1960年代初め、独立直後のカメルーン政府の指示により、現在の集落位置と近い場所に定住化・集住化が行われた(大石, 2010)。この強制的移住の結果として、多くのバクウェレは彼らが1960年までに開いていたカカオ畑のほとんどを放棄することになり、新しい居住地では数家族が新しいカカオ畑を作りはじめた。

調査地とジャー川を挟んで南に隣接するコンゴ共和国サンガ州ンバラ郡とセンベ郡は1960年代以降最も生産的なカカオ栽培地域であった。主要な生産の制限要因は、薄く分散した人口分布のためカカオ園の維持に必要な労働力が十分に確保できないことであった(Guillot, 1977; Köhler, 2005)。コンゴ共和国では1990年代半ばから2000年代初めの内戦が、完全にカカオ経済を崩壊させたが、カカオ栽培は、代わってカメルーン側において盛んになっていった。ジャー川を横断した人口移動や通婚関係は盛んであり、コンゴ側から、カカオ栽培に経験のある熟練労働者や栽培技術が流入した。

1980年代になると、木材伐採会社⁴⁰が調査地周辺に基地を作って森林伐採事業を開始した。伐採会社は多くの地元住民を雇用し⁴¹、バカ・ピグミーとバクウェレに多量の貨幣と購買力をもたらした(Kitanishi, 2006)。さらに、伐採会社は賃金労働者として多くの他地域出身者を地域に連れてきた。これらの出稼ぎ労働者は、給料をカカオ畑の拡大に投資した。伐採会社が撤退すると、彼らの多くはこの地域を去ったが、一部はカカオ裁

⁴⁰ 調査地において操業を行った伐採会社の名前は、*Campagnie Camerounais des Grumes et Sciages* (カメルーン木材・製材会社、略称 C. C. G. S.)であった。1970年代後半から1980年代初めまでドンゴ村に基地を置いて操業をおこなった。

⁴¹ Kitanishi (2006)と服部(2010)は、伐採会社が地域住民の雇用においてバカ・ピグミーを差別していると記載している。しかし、私が調査地周辺で行った、実際に伐採会社に雇用されて働いたバカ・ピグミー、バクウェレ、その他の民族の元出稼ぎ労働者への聞き取り調査によれば民族による差別があったわけではなく、個人の識字能力等による選別の結果、雇用数に違いが生じていたという理解が妥当なように思われる。給料は職種によって異なっていた。比較的給与の高い事務作業や重機の運転などには、学校での読み書きの訓練を積んだ者が充てられたという。服部(2010)の言うように、伐採事業開始当初にはバカ・ピグミーの雇用はバクウェレによる斡旋によって行われていたが、操業が継続するなかで、作業に熟練したバカ・ピグミーはより待遇の良い仕事を任されるようになっていったという。

培を継続するために残った。それ以来、多くのバカ・ピグミーが居住地の近くで彼ら自身のカカオ畑をつくり、カカオ栽培を始めたと考えられる。

II-2. アフリカ熱帯雨林地域におけるカカオ栽培の特徴

カメルーン東南部では、年に通例2回ずつ雨季と乾季がある。大乾季の終わりにあたる2月から3月にかけて、森林植生を切り開き、乾燥させた後に火入れを行う焼畑によって空間が開かれる。畑には、初めはプランテン・バナナ、ビターキャッサバ、ヤウティア（ココヤム）、タロイモなど食用作物が植えられる。調査地のバカ・ピグミーにとって最も重要な主食はプランテン・バナナであり、次にキャッサバとヤウティアが続く(Sato, 2010)。バナナは強い日当たりを好まず、強い直射日光の下ではカカオの実生は育つことができない。それゆえに、人々は新しいバナナとカカオの畑を開く際に樹木を伐り残し、それらはカカオの庇蔭樹となる(Carrière, 2003; Shikata, 2007)。カカオを植える場合は、火入れ後にバナナの脇芽を焼畑に植えるのと同時に、カカオ種子を直播で播種する。バナナはカカオよりも先に成長して、2〜3年の間カカオの稚樹を日射から保護する。播種後3〜4年後にカカオは最初の実をつけ、収穫をもたらす始める。さらに数年経つと、カカオと庇蔭樹のみが畑に残る。

カカオ栽培は、継続的な労働投入がほぼ通年にわたって必要になる。最も重要な活動は、森林植生の回復を抑制するための頻繁な除草であり、2-3ヶ月に一回行うのが好ましい。収穫と収穫後のカカオ豆の処理もまた重労働で、9月から11月まで、大雨季を通じて行われるがしばしば1月末まで作業が続くことがある。カカオの果実は、果肉を取り除いて発酵させた後、売られるまで2か月以上にわたって直射日光に当てて乾燥させる。買い付け人が12月半ばから2月半ば⁴²の間に買い付けに来ると、市が立つ。この市で、カカオを持つすべての生産者が買い付け人にカカオを売り、彼らは得た収入で都市

⁴² 買い付け人によるカカオの買取価格は、通常、収穫期の遅い時期になるほど上昇してゆく。それゆえ、カカオ生産者は、高値のつく時期にカカオを売り抜けるような算段をする。

から来た商人が持ってきた様々な商品を購入するのである。

労働投入とそれによって得られる利得の時間差という点から言えば、カカオ栽培は、1-2年の間に収穫ができ、集中的な除草のように手間暇のかかる世話を必要としないプランテン・バナナの栽培(Kitanishi, 2003)とは大きく異なっていると言える。

Ⅲ. 研究方法

Ⅲ-1. カカオ園の野外観察と計測調査

野外調査は、2007年3月から2010年3月までの4回、合計4.5ヶ月にわたって行われた。まず、バカ・ピグミーとバクウェレの調査補助者の助けを借りて、調査村とその周辺の全てのカカオ畑⁴³の数を調べ、その結果132筆が確認された。次に、GPS端末(米国Garmin社、Map60CSx)を持って、畑の所有者⁴⁴かそのもっとも近い近親者の案内で畑の境界を歩くことにより、それぞれのカカオ園の面積を計測した。

Ⅲ-2. カカオ栽培に関する聞き取り調査

面積計測の後、畑の所有と利用の状況、形成と維持の履歴について情報を得るため、カカオ畑で所有者にカカオ畑についての聞き取り調査を行った。具体的な質問項目は、伐開前の植生タイプ、過去数年間にわたるカカオ収量、畑から得られた現金収入である。得られた現金収入をどのように使ったかについても尋ねた。調査にあたっては、バカ語、バクウェレ語とフランス語を使用するとともに、調査補助者による通訳の補助を得た。

⁴³ ここで、本稿における「カカオ畑」、あるいは「カカオ園」を、5 齢以上のカカオ樹を含み、たとえ少量であってもカカオ豆の収穫のあるすべての畑と定義する。

⁴⁴ バカ・ピグミー、バクウェレ、ハウサを問わず、カカオ園の所有権は、特定の個人に属することになっている。しかし、ここで言う所有の概念は、西欧近代社会でいうそれほどの排他性を持っておらず、かつ民族によって権利の内容にずれがある。本研究では、複数の関係者から得られた情報をクロスチェックして所有者を確かめながら調査を進めた。

IV. 結果

IV-1. カカオ栽培の消長

IV-1-1. 調査地域におけるカカオ栽培の拡大

現在ドンゴ村のある位置に移住後すぐに、バクウェレがいくつかのカカオ畑を開いた。その後、調査村におけるカカオ畑の数は2回の開墾ピーク期を経て増加してゆく。ハウサとバカは、1970年代初めにカカオ畑を作りだす(図. 5-1(a))。最初のピークは、1970年代後半に調査村周辺で伐採事業が行われていた時である。

聞き取りの中で、調査地のバカ・ピグミーが、カカオ栽培を始めた理由についての語りも得られた。例えば、バカ・ピグミーの壮年男性Bによれば以下のようだ。

【事例：カカオ栽培を開始した経緯についての語り】

「以前、M（バクウェレ男性）のカカオ畑の手伝いをしていたことがあった。収穫が済んで、Mはムルンドゥにカカオを売りに行った。その帰り、ろくすっぽ払ってくれなかった。1シーズンずっと働いて、たったの15,000FCFA。妻も子もいるのに、どうやって分けたらいいやら。Mにもっと払ってくれるように言ったら、「お前は自分のカカオ畑を作る2本の手を持ってないのか？」と返された。それで、妻と話し合っただけでカカオ畑を始めることにした。」(2010年8月1日)

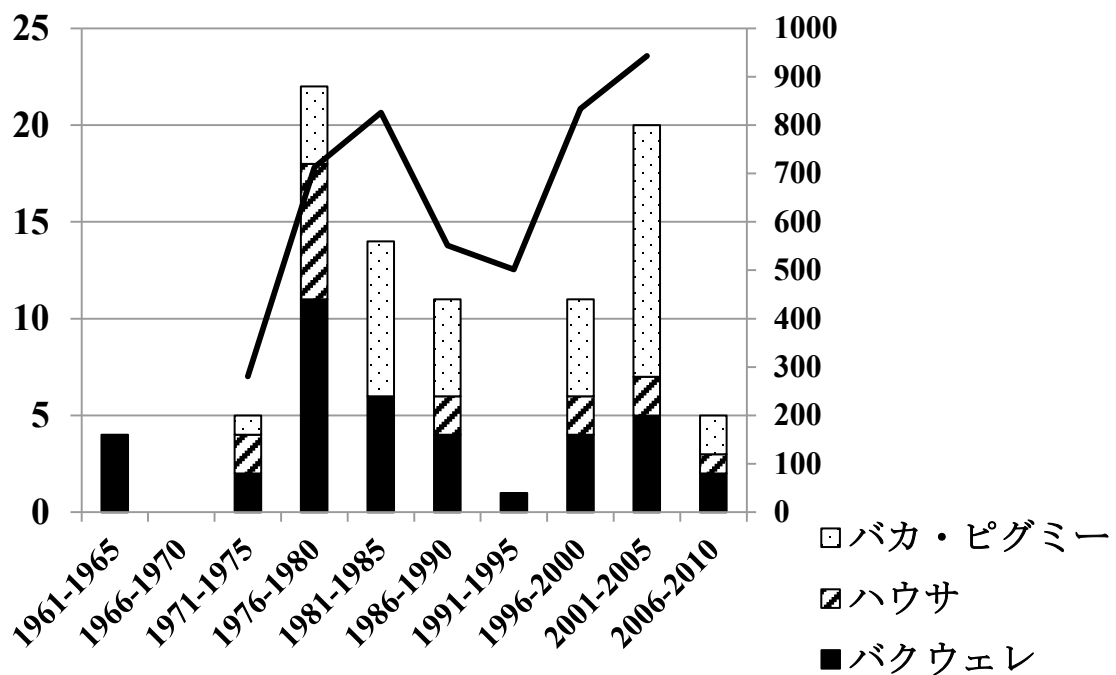
このBの語りは、バクウェレからの経済的自立が、バカ・ピグミーによるカカオ栽培の動機の一つとなったことを示唆している。

カメルーン政府のマーケティングボード(*L'Office National de Commercialisation de Produits de Base*)が1991年に廃止され、カメルーンの国内カカオ市場は1993年に自由化された(Varlat, 1997)。1994年にはFCFA⁴⁵の通貨価値切り下げが行われ、農産物輸出に有

⁴⁵ FCFA は、"Franc de la cooperation Financière en Afrique central"の略語で、カメルーンをはじめとする中部

利な経済的条件があった。それに関わらず、この市場自由化はカカオ価格の急低下をもたらした（墓田，2000; Duguma et al. 2001）。これは生産者を落胆させ、この時期のカカオ畑の開墾数は大きく減っている。2回目の開墾ピークは、内戦などの政治的理由によりコートジボワールをはじめとする西アフリカ諸国におけるカカオ生産の減少が引き金となって起こったカカオ価格の高騰によりもたらされた（四方，2007）。バクウェレとハウサが、最初のピーク時期に現在彼らの所有しているカカオ畑の多くを開いたのに対して、バカは、2番目のピーク時期にカカオ畑を多く開いた(図5-1(a))。

図5-1(a)



アフリカ経済共同体(CEMAC)で流通する通貨の単位である。フランス・フランとのレートが固定されており、1ユーロが 656FCFA に相当する。

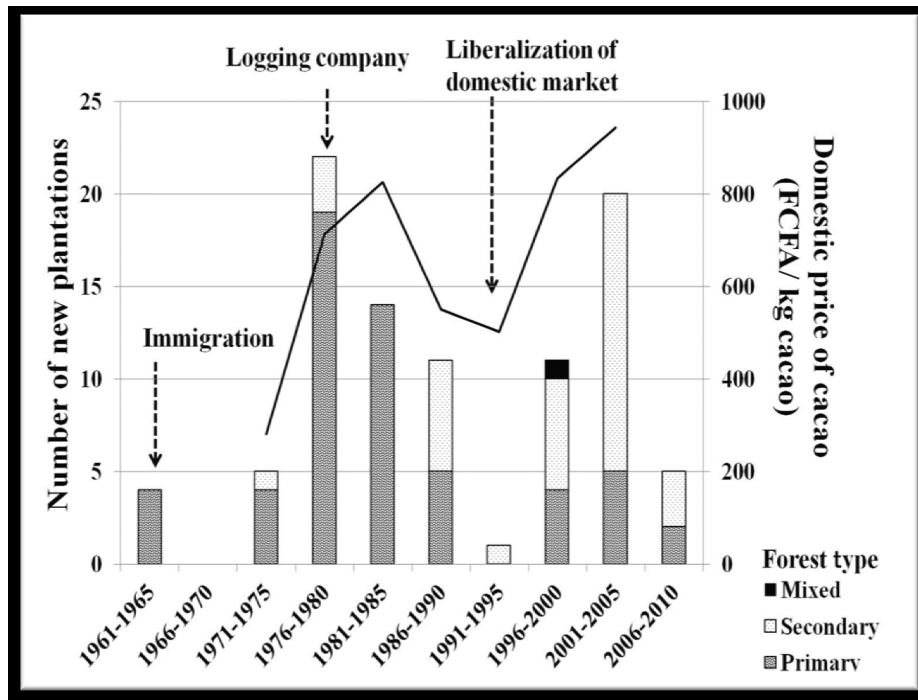


図5-1(b)

図5-1. 調査地における1961年から2010年までのカカオ園の開墾数(N=93). (a): 縦棒は民族集団別の開墾数を示す. (b): 縦棒は伐開前の植生別の開墾数を示す.

都市や市場から遠く離れた地におけるカカオ栽培は、グローバルな、そしてローカルな政治経済状況に強く影響されるのである。最初のピーク時期の開墾では、ほとんどのカカオ畑は一次林を利用して作られたが、2回目のピーク時期の開墾では逆にほとんどが二次林を利用して作られた（図5-1(b)）。開墾前の植生について情報を得ることができた101筆のカカオ畑のうち、59% (60/101)が一次林に、40% (40/101)が二次林あるいは休閑林に、残りの1% (1/101)が一次林と二次林の混ざった植生に作られていた。

カカオ畑をつくる植生が一次林から二次林へと移行したことは、調査地域における定住化の進展と人口増加を反映している。もはや簡単にアクセスできる一次林が居住地の近くに少なくなったので、住民は二次林をより積極的に利用するようになったと考えられる。

IV-1-2. 栽培面積における個人差

私が95人のカカオ畑所有者の協力を得て、計測できたのは合計117筆のカカオ畑で、それらの総面積は229haに及ぶ。表5-1、表5-2、図5-2に示したように、民族集団間とバカ集団内の両方で、所有するカカオ畑の数と面積について、相当な個人差が生じていることがわかる。

表5-1. 民族集団ごとのカカオ園所有状況.

民族集団	人口(人)	世帯数 (N)	カカオ園を所有する世帯数 (百分率%)
バカ	300	65	58 (89.2%)
バクウェレ	250	45	45 (100%)
ハウサ/ バミレケ	50	14	12 (85.7%)

表5-2. 個人耕作者が所有するカカオ園数とサイズ.

民族集団	所有カカオ園数* (百分率)	耕作者あたりの カカオ園数	所有カカオ園面積合 計(ha, 百分率)	耕作者あたりカカ オ園面積 (ha)
バカ	55(47.0%)	1.1	40.7(17.8%)	0.8
バクウェレ	44(37.6%)	1.3	96.8(42.3%)	2.9
ハウサ/ バミレケ	18(15.4%)	1.6	91.4(39.9%)	7.6
	117(100%)		228.9(100%)	

*本研究で計測した数を表す.

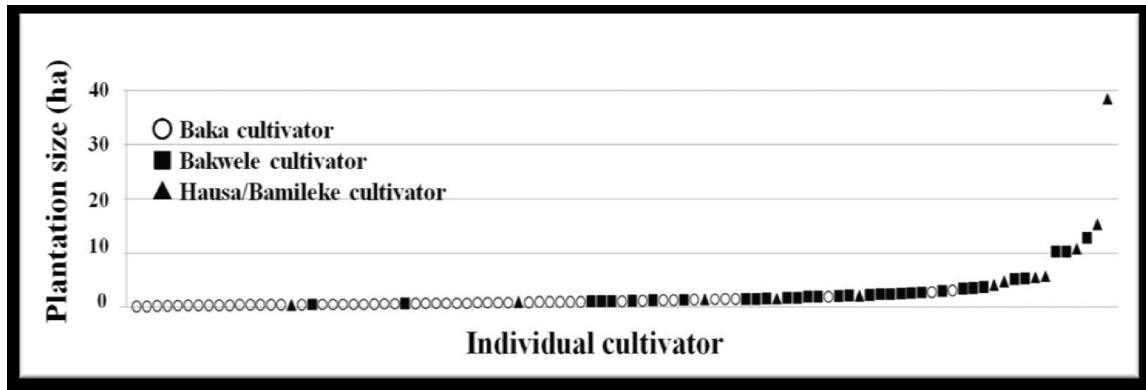


図5-2. 2009-2010年の耕作者ごとのカカオ園面積の分布。各ドットは個別耕作者を表し、経営面積順に配置してある。マーカーの形は当該個人の民族集団を表す。

バカは、最も多数のカカオ畑を持つが、商業民ハウサと農耕民バクウェレは所有する畑の面積が大きい（表5-2）。2-3ha以上のカカオ畑を所有しているバカの数はずかである。しかし、調査地のバカ全世帯数の90% (58/65)が少なくとも1筆以上のカカオ畑を持っている（表5-1）。カカオが植えられている食用作物の生産が行われている畑は、食用作物の収穫が終わった後カカオ畑になる。バカ、農耕民バクウェレ、商業民ハウサによって所有されているカカオ畑の平均面積は、それぞれ0.8, 2.9, そして7.6haであった（表5-2）。

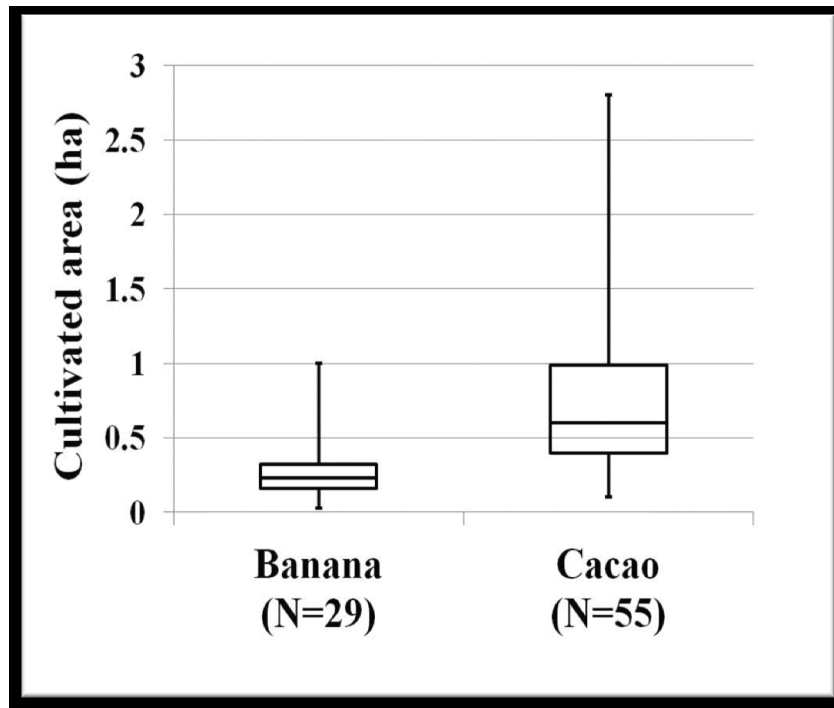


図5-3. 同一のバカ集団によるプランテン・バナナの焼畑経営面積(Kitanishi, 2003)とカカオ園経営面積(本研究)の比較. 箱ひげ図の中の水平バーは中央値を, 箱の下限と上限はそれぞれ25%と75%のパーセンタイルを示し, エラー・バーは最大値と最小値を示す.

北西功一は, 1999年から2000年にかけて本研究とほぼ同じ集団を対象にバナナ栽培の実態を調査した(Kitanishi, 2003). バカのカカオ畑について得られた面積データを, Kitanishi (2003)に報告されているバカのバナナ畑の面積データと比較したところ, 栽培面積の変異がカカオ畑においてバナナ畑よりも有意に大きかった(図5-3).

バカのカカオ畑のほとんどが, とびぬけて大きい3筆を除けば, 似たような大きさであることは興味深い. これは, おそらくバカがほとんど家族労働に依存してカカオ栽培を行っていることと関係しており, 1世帯当たり0.8haというカカオ畑の面積が他からの労働投入がない場合の上限になっている可能性がある. これとは対照的に, 労働者を雇ってカカオ栽培を行うバクウェレやハウサの間では, カカオ畑の面積にはるかに大きな個人差が生じている (図5-2.) .

もっとも大きなカカオ畑の所有者は、1980年代に調査地に住みついた壮年後期の商人である。彼は5つのカカオ畑を持ち、それらの合計面積は40haに及び、本人の推定によれば毎年350万から500万FCFAの粗利益を生み出す。彼のカカオ畑は、調査村周辺のカカオ畑の総面積合計の17.5%にも相当する。

IV-1-3. カカオ畑の所有、世代間継承とジェンダー

バカとバクウェレの両方で、カカオ畑の所有には著しい性差がみられた⁴⁶。バカの場合には所有者の93.1% (54/58)が、バクウェレの場合は所有者の90.9% (41/45)が男性だった。カカオ畑の所有者は、ほとんど排他的に男性であるといえる。女性は、夫からカカオ畑を相続した場合や、子からカカオ畑を贈与されるなど、非常に限られた場合にのみ所有者となっていた。カカオ畑の管理もまた、基本的に男性により行われる。これは、両民族集団において、通常女性が管理を行う食物生産用の畑と対照をなしている。

この男女分業はバカの間では、畑の呼称に反映している。すなわち、カカオ畑が*gbie na mokose*「男の畑」と呼ばれるのに対して、食用作物の畑は*gbie na wose*「女の畑」と呼ばれる（林，2000）。

カカオ畑の2～3世代にわたる相続がバカの間で一般的であることも明らかとなった。バカのカカオ畑のほぼ40% (55のうち20筆)が、本人により開かれたものではなく、家族間の相続によって得られたものだった。表5-3に示したように、最も一般的な相続は父から子へであり、他に配偶者間や兄弟間での相続がみられた。バカのカカオ畑のうち1haを越えるもののほとんど(10のうち7筆)は家族内で相続されてきたものだった。これはカカオ畑が、少なくとも一部のバカにとっては世代間継承されることにより蓄積されるという意味において財産になっていることを示唆する。

⁴⁶ ハウサなど商業民については、彼らのほとんどが配偶者や子供を移住先である調査地域周辺には同伴してきていない。調査地には、3人の既婚ハウサ女性が居住しているが、いずれもカカオ園を所有していない。

表5-3. バカのカカオ園の相続事例.

被相続者と相続者	事例数
父親から息子	11
夫から妻	3
兄弟から兄弟	3
妻から夫	1
父親から養子	1
義理の姉妹から義理の兄弟	1
計	20

IV-2. 現金収入の獲得と消費

IV-2-1. 収穫、販売と現金収入の推定

バカは、自分自身のカカオ畑から現金収入を得ることができるが、同時に他の者のために賃労働をして働くことによっても現金収入を得ることができる。まず、私は彼ら自身のカカオ畑からの粗収入の推定を試みた。ここで、異なる民族集団に属する人々が所有するカカオ畑から収穫された乾燥カカオの収量データ⁴⁷が統計的に同じ母集団に属するものと仮定する。この仮定の下で、乾燥カカオ収量は、カカオ生産樹の樹齢とは関係なく、カカオ畑の面積サイズと相関関係があった(図5-4, $r^2=0.71$, $p<0.001$, $N=59$)。

⁴⁷ ここでの収量データは、研究方法の項目で述べたように実測値ではなく、各耕作者に過去3-5年間に
おける収穫量についての聞き取り調査から得たものである。異なる民族集団によって所有・耕作されてい
るカカオ園間における正確な生産力の比較には実測を伴った調査が改めて必要となろう。

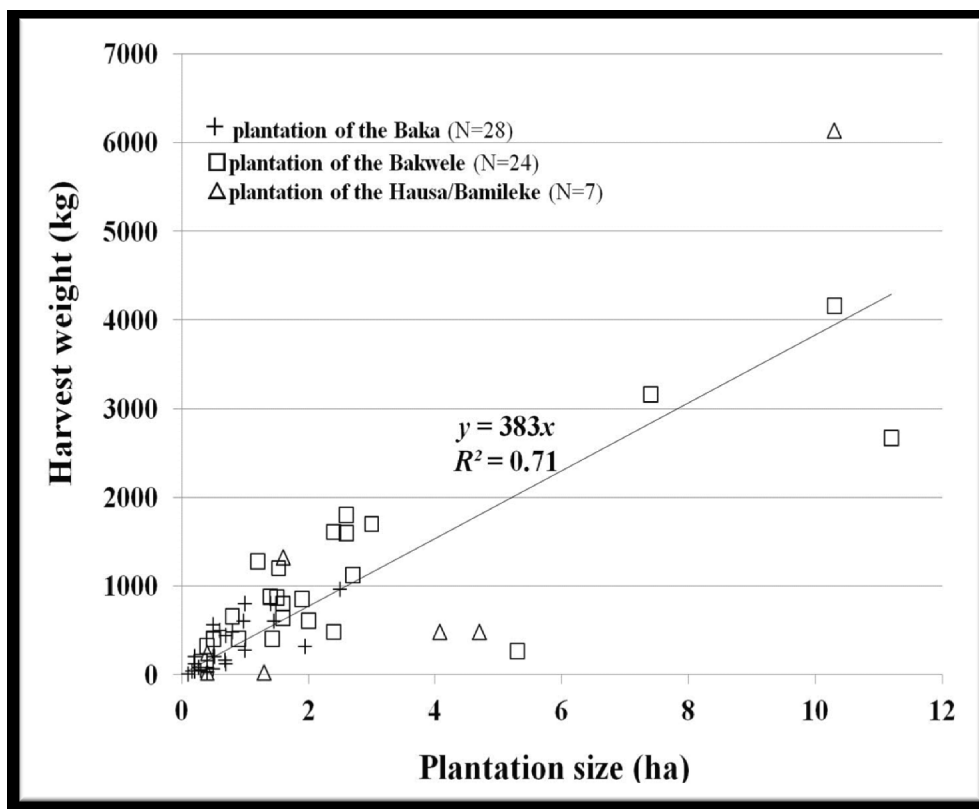


図5-4. 乾燥カカオ重量とカカオ園のサイズの関係 (N=59). 異なる民族集団のカカオ園は、それぞれ異なるマーカーで示されている。

乾燥カカオの面積当たり平均収量は、383kg/haであった。2009年から2010年にかけてのカカオシーズンに、調査地における生産者価格は1,200FCFA/kgであった。この価格から、カカオ畑面積当たり粗収入を計算すると、459,600FCFA/haになる。したがって、この値にカカオ畑の平均所有面積を乗ずれば、自分自身の畑からカカオを売るバカは、平均して367,680FCFA以上の現金収入を期待できることになる(表5-4)。

表5-4. カカオ耕作者ごとの現金粗収入の期待値(FCFA).

民族集団	現金収入期待値*
------	----------

(FCFA)

バカ	367 680
バクウェレ	1 332 840
ハウサ/バミレケ	3 492 960

*全てのカカオ豆が、1,200FCFA/Kg（2009-2010年のシーズンにおける最終価格）で売却されると仮定したときの現金粗収入の期待値。本文中でも述べたが、特にカカオ豆の取引価格が上昇するシーズン末まで待たずにカカオ豆を売ってしまうバカの場合には、これと実際の収入額とは大きな隔たりがある。

しかし、実際にはこれだけの現金を手にするバカはほとんどいない。カカオ豆の価格は、収穫期を通じて上昇してゆく。それにもかかわらず、多くのバカは買い付け価格が上がるのを十分に待つことなく売ってしまう。貯めたカカオをまとめて売る代わりに、彼らは長い収穫から買い付け期の間は何回にも小分けにして少量のカカオを売る。これは、彼らが良い価格がつくまで十分な量の乾燥カカオ豆を貯めることよりも、即座に現金を得ることにより関心を持っているからであろう。カカオの買い付け人と地域に住んでいる商業民は、彼らのこう言ったメンタリティをよく理解していて、収穫期間中毎日バカの集落を訪ねてごく少量のカカオを集めている。



図5-5. 出荷するカカオ豆を入れる袋(およそ80Kgが入るものと, 100Kg入るものがある)とカカオ豆を計量するカラパスと呼ばれるプラスチック製の容器.

このごく少量のカカオ豆の取引は、カラパス(*carapace*)と呼ばれる。カラパスは、フランス語で「甲羅」を意味するが、約20Lの容量をもつカカオ計量に用いられるプラスチック製の容器のことである（図5-5）。この形式の取引における生産者価格は、通常の買い付けに比べて半分か三分の一以下にしかない。このようにして、バカの生産するカカオ豆は安く抑えられており、わずかな金額であっても今すぐに現金が欲しいと

いう常なる欲望が、カカオを売らずに貯めておき、後でよい値にして売るということを阻んでいるのである。さらに、バカとバクウェレの中には、少額の現金を得るため、しばしば未乾燥のカカオ豆をカラパス形式で売る者も少なくない。未乾燥の生豆はさらに安い価格に買い叩かれる。

IV-2-2. カカオ栽培による現金収入の分配と用途

ふつう、食物などとは異なり、現金のやりとりは目につかないように行われるので、カカオ栽培による現金収入の用途について、体系だった観察により明らかにすることは困難であった。この側面についてより詳しく知るために、私と親しい関係にある2人のバカのインフォーマントに聞き取り調査を行った。

【成人男性Aの事例】

Aは、推定年齢28歳の成人男性で遠い村の出身である。2009年から2010年のカカオ収穫期にかけて、Aはハウサの畑で働くとともに、自分自身で開いたまだ若齢のカカオ樹がほとんどのカカオ畑からも収穫を得ていた。ハウサ男性は、給料としてAに150,000FCFAを支払った。これに加えて、彼は自分の畑から10Lの乾燥カカオ豆を収穫し、カラパス形式で売って5,000FCFAを得た。したがって、Aの収入合計は155,000FCFAとなった。Aは、そのうち113,150FCFA (73%)で商品を購入し、15,000FCFA (10%)で酒をツケ買いし、7,000FCFA (5%)を隣村のミンドゥル村に住む母親と妹に贈与した。Aは、調査地から北に約250km離れたンガトー・ヌーボー村の出身であり、隣村に住む母親と妹を除くAの親族は出身村に居住しているが、そちらに現金収入を送ることはなかった。Aは、現金収入のほとんどをラジオ・カセットレコーダー、布、洋服、スーツケース、山刀、靴、香水などの商品購入に充てたが、それらは自分自身と妻のためのものであった。結局、Aはバクウェレ女性にツケで飲んで貯めていた酒代を払ったが、借金をすべ

て払う前に新たに9,000FCFA分の酒を新たなツケで購入したために、彼の借金はなくな
らない結果となった。

【成人男性Bの事例】

Bは、推定年齢18歳の青年のバカである。実の父親が2007年に亡くなった後、Bは父
親の所有していた2つのカカオ畑（合計面積は、約0.4ha）を相続した。Bは、これら2つ
のカカオ畑を母方叔父（母親の弟）の助けを借りて維持している。2009年から2010年の
カカオ収穫期にかけて、Bは1.5袋の乾燥カカオ豆の収穫を得て、40,000FCFAで売却し
た。Bは、15,000FCFAを農作業を手伝った叔父に渡し、兄弟姉妹3人に（弟1人と2人の
妹）にそれぞれ5,000FCFAずつを分配した。Bは、残りの10,000FCFAを得た。Bの叔父
は、Bから分配された15,000FCFAを妻と姉（Bの母親）とに自分の3人で分けた。Bのカ
カオ畑で得られた現金収入の分配に与った者は、すべて農作業に参加していた人々であ
った。Bの叔父は、カカオ畑がBだけの所有物ではなく、彼自身を含むBとBの父親が畑
を開き、維持するのを助けてきた「家族全員のものである」と主張した。Bは、カカオ
畑の所有者であるにもかかわらず、実際のところ、Bはカカオ園での労働には熟練して
おらず、Cが畑の管理のほとんどを行っているのが実態であった。

これらの2事例は、カカオ栽培から得られた現金収入は、それが自分のカカオ園から
得られたものにせよ、他人のカカオ園での賃労働により得られたものにせよ、その直接
的な分配範囲は近隣に住んでいるごく限られた親族に限定されていることを示唆する。
これは、バカが慣習的に行ってきた広範囲への流動性に富んだ食物分配—特に森林キャ
ンプにおいて狩猟された獣肉がその場に居合わせた人々全員に平等に分配される場合
(Bahuchet, 1990; Kitanishi, 2000; Hayashi, 2008)—とは、対照的に見える。バカにとって、
食物とは異なり、貨幣は直接分かち合う対象（もの）ではない。バカは、サービスやモ

ノの対価として支払いを受けると、直ちにそれを使用する。彼らは、現在のところ、自分たちの畑から食用作物を収穫できるので、食物の獲得を金銭に依存していない。したがって、彼らの主要な金銭の使途は商品とアルコールになる(Köhler, 2005; Kitanishi, 2006)。

成人男性Aの事例が示すように、バカは実に多様な商品のショッピングを楽しんでいる。山刀や鍋のような生活必需品を除けば、彼らは購入した商品を必ずしも広範な人々の間で共同利用することはない。その傾向は、例えばラジカセのような高価な商品の場合に顕著である。彼らは、農耕民（バクウェレ）から頻繁にアルコールを購入する。地元酒は、バクウェレ女性によって醸造・蒸留されるもので、地域住民からはンゴロンゴロ(*ngolongolo*)、あるいはアイキ(*arki*)と呼ばれる。ンゴロンゴロは、かつてはバカとバクウェレの間の物々交換において、バクウェレからバカへと贈与されるアイテムであったが、現在では現金で売買される商品に転化している⁴⁸。地元で作られる酒に加えて、バミレケやバムンのような非ムスリム商業民は都市から持ちこんだ、瓶ビール、紙パック入りの赤ワイン、そして小袋入りのウィスキーを含む工業アルコール製品を販売している⁴⁹。男女を問わず、バカのほとんどがこれらのアルコールに強い嗜好を示す。親族ないし、近隣の誰かが何がしかの現金収入を得たと知ったとたんに、彼らはアルコールの分け前が得られる（その人が酒を購入して分配する）ことを期待する。他の多くの購入商品とは異なって、酒はバカの集団内で広範に分配されている。しかし、一部のバカの若者は、このアルコールのポトラッチ的分配によって自らの稼ぎをすっかりなくしてしまうことを嫌い、この慣習に不平を抱いている者がある。

バカが、現金収入を手にした途端に、酒やたばこなどの嗜好品や、サングラスやすぐ

⁴⁸ 調査期間中の調査地における地元酒の値段は、1リットル当たり 1000-2000FCFA であった。地元酒のアルコール体積濃度は、16-43%であった(大石&林、未発表データ)。

⁴⁹ これらの工業的に生産されたアルコール製品の調査地における値段は、ビール瓶1本（アルコール体積濃度 5%、容量 0.65 リットル）当たり 1000-1200FCFA、紙パック入り赤ワイン（12%、容量 1 リットル）2000-2500FCFA、小袋入りウィスキー（42-45%、30-50 ミリリットル）150-250FCFA であった。

に壊れてしまうまがい物の腕時計など、生活に直接必要のあるとは到底思えないような商品にそのほとんどを使ってしまうことは興味深い。バカは、現金を得た先の商人や農耕民のところで、すぐさま商品や酒を購入する。つまり、バカに支払われた貨幣は、支払われた途端に支払った者の手に直ちに戻る(Bahuchet & Guillaume, 1982; Köhler, 2005)。

Kitanishi (2006)は、バカ男性は少額の現金(1,000FCFA以下)と高額な現金(10,000FCFA以上)を区別しており、前者は酒や日常生活に必要な商品の購入に当てられ、後者は姻族への婚資に当てられると述べている。北西は、自身がバカに支払った現金の行方についての観察事例に基づいて、婚資を支払うために10,000FCFA紙幣が貯蓄されるのであれば、その支払いがリネージ間でなされることによって、世帯間の経済的不平等をならす効果があると議論している(Kitanishi, 2006)。婚資システムに、蓄積された富と女性の時間的遅滞を伴った互酬的交換によって、親族集団間の経済的不平等を平準化する機能があるという議論は、旧ザイール（現コンゴ民主共和国）赤道州のモンゴ系農耕民ボンガンドゥ社会において報告がある（黒田，1993）。しかし、私の観察と聞き取りの限りでは、そのように10,000FCFA紙幣を婚資のために貯蓄する習慣は、バカ男性の間で広く共有されているとは言えず、したがってそのような平準化効果はほとんど期待できないと考えられる。

IV-3. バカの賃金労働

IV-3-1. 労働力不足とバカの労働者確保をめぐる競争

乾季の終盤になると、新しい焼畑のための伐開作業が行われ、雨季にはカカオの収穫作業が行われる。これらの作業はともに集中的な労働を必要とする。バクウェレとハウサは、これらの作業にバカの労働力を調達しようとする。しかし、賃労働を行うバカの労働力には限りがあり、したがって両者の間にはバカの労働力確保をめぐる激しい競

争が起こることになる。バカは、農耕民のもとでの農作業をバカ語でベラ(*nbela*)⁵⁰と呼ぶ。カカオ豆の生産者価格が上昇するにつれて、調査地域でのカカオ栽培の規模も拡大した。その結果として、カカオ園での労働力不足が生じ、バカへの1日当たり労賃⁵¹は1998年から2010年までの間に、250FCFAから1,000FCFAへと4倍に増加した(図5-6)。

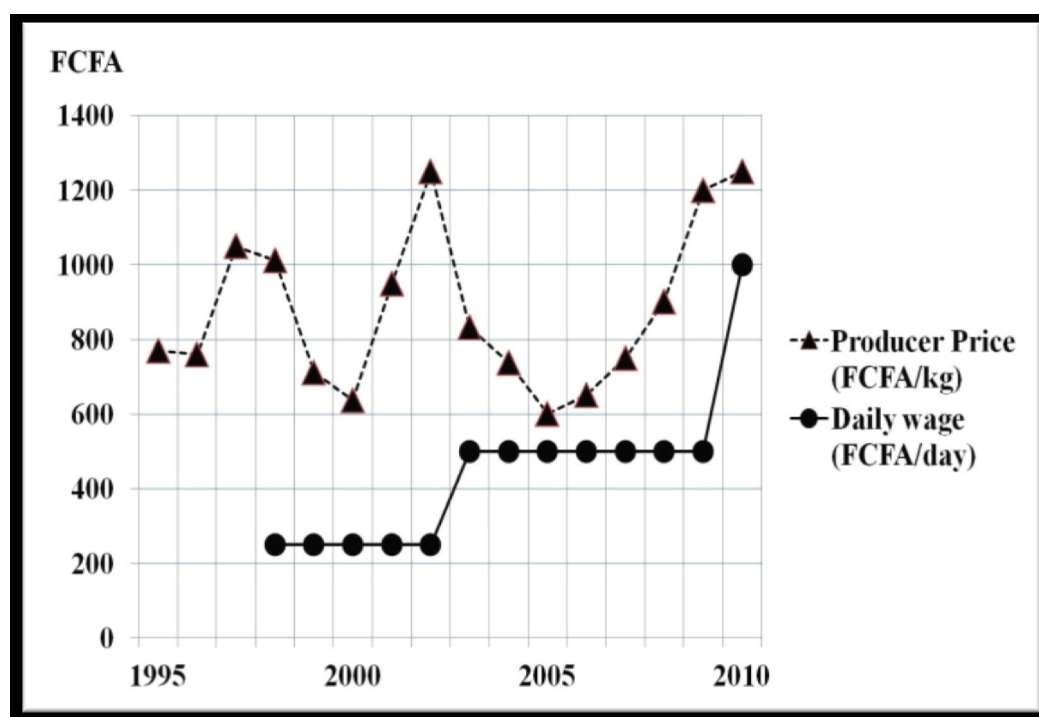


図5-6. 1995年から2010年までの調査地におけるカカオ生産者価格とバカの労賃の変動。

2009年には、バカ・ピグミーは半日(3-5時間程度)の農作業に対して、500FCFA、あるいは0.5リットルのアルコール（ンゴロンゴロ）を受け取っていた。多くのバクウェレは、バカ・ピグミーを雇用しても支払う現金を持ち合わせていないため、バカ・ピグミ

⁵⁰ バカ語のベラの意味は、「仕事」である。他に、リンガラ語でモサラ(*mosala*)、バクウェレ語でメサラ(*mesala*)と呼ばれることもある。

⁵¹ 調査地では、1日当たりの労賃は雇用者と働き手の間の直接交渉によって決められるが、ある雇用者が報酬額を上げるとそれが全体に波及する傾向があるので話し合いによって目安となる値段が決められている。農作業に大勢の賃金労働者を雇う大規模な農園主が、働き手を確実に集められるように労賃を上げようとする傾向がある。

一のカカオ園での労働に対して、一定体積の地酒を現金に換算可能なものとして報酬に充てていた。しかし、多くのバカ・ピグミーは、食料や嗜好品よりも、現金での労働報酬の支払いを好む傾向にある。より多くのバカ・ピグミーが、資金力のあるハウサの畑で働くようになったため、バクウェレは自分たちの畑で働いてくれるバカ・ピグミーを見つけるのがより困難になりつつある。そのため、バクウェレの中には、毎日早朝から地酒の入った大きな容器をぶら下げてバカ・ピグミーのキャンプを回り、畑での作業をバカ・ピグミーに依頼する者もいる(図5-7)。一部のバカ・ピグミーは、この農耕民による早朝のキャンプ訪問を嫌って、朝の時間を邪魔されないために、よりバクウェレの村から遠い位置へと引っ越しまでしていた。しかし、また地酒が本当に好きでバクウェレからの依頼を断れないバカ・ピグミーも大勢いる。そんなバカ・ピグミーに言わせれば、「ンゴロンゴロはエネルギーの源だから、飲むなどと言われても止められない。」ということになる。



図5-7. 早朝、若いバクウェレのカップルが、自家製のンゴロンゴロ（蒸留酒）を持ってバカのキャンプを訪問している(2010年3月).

バクウェレと反対に、ハウサはバカ・ピグミーに現金で労働報酬を支払い、加えてバカ・ピグミーに、古着、サンダル、鍋、石鹼、食用油、そして化学調味料などの日用雑貨を贈与する。彼らの多くは、バカ・ピグミーに農作業のための山刀を支給し、仕事以外の時間の使用も許す。現金で支払われる労賃に加えて、これらの贈与品はバカ・ピグミーを強く魅了する。ハウサ農園主から雇用されたバカ・ピグミーへの現金の支払いは、約束次第で、シーズンの終わりにまとめて支払われることもあれば、何回かに分けて支払われることもある。ただし、バクウェレもハウサも、バカ・ピグミーの子供をカカオ園での労働のために雇用することはない。

興味深いことに、ハウサの畑で働くバカ・ピグミーは、得られた現金を工業製品のために商人に支払うよりも、地酒のためにバクウェレに支払う方を好む(第6章)。したがって、地酒はバカ・ピグミーが農作業をする動機づけになっていると同時に、ハウサによるバカ・ピグミーの雇用がバクウェレにも利益をもたらすことに貢献しているのである。このようにして、貨幣は調査地の異なる社会集団の間を循環している。

IV-3-2. 農園労働者としてのバカ・ピグミーの評判

最も大人数のバカ・ピグミーを雇用しているのは、調査地域で最大のカカオ園を経営していて、「経済の父」と綽名されているフルベの男性⁵²である。彼は、カカオ園での作業に50名以上のバカ・ピグミーを雇っている。彼は、農作業にバカ・ピグミーのみを雇用する。熟練者を確保するため、100,000-150,000FCFAの給料で、カカオシーズンの大部分をカバーする3-4か月の期間まとめて雇ってしまう。彼は、バクウェレを雇用しない理由として、雇っても常に労賃に不平を述べて、バカ・ピグミーのように真面目に働かないからだという理由を挙げた。彼は自分のカカオ園経営の成功が、バカ・ピグミ

⁵² 彼は、毎日夕方になるとハウサ語の国際ラジオ放送サービスに耳を傾け、カカオの国際価格をチェックしていた。

一労働者と良好な信頼関係を築けたことに負っていると認識している。この人物の成功が、他の多くの商人を調査地周辺に引きつけ、それらの人々は彼に倣って同じ成功を収めようとしているのである。

この地域のバカ・ピグミーは、カカオ農園における熟練労働者として広く評判が通っている。例えば、数人のバカ・ピグミーの思春期後期の男性は調査地から300kmほど離れたブンバ・ンゴコ県都のヨカドゥマ市近郊の大規模カカオ農園主にリクルートされて⁵³、出稼ぎに出かけていた。ヨカドゥマ市周辺にも大勢バカ・ピグミーの人々はいるにもかかわらず、農園主はわざわざ遠隔のドンゴ村からカカオ園での仕事に慣れたバカ・ピグミーを呼び寄せて契約雇用したのである。このように、調査地周辺の若いバカ・ピグミーの男性は、しばしば遠隔地での仕事の口を与えられ、2-4ヶ月の出稼ぎ生活を過ごし、割の良い給料を手にして帰ってくる。

熱帯林に覆われたカメルーン南部・東南部では、カカオ栽培は地域貨幣経済に大きな役割を担っている。しかし、カメルーン東南部は、輸出作物であるカカオ豆の積出港であるドゥアラ港からほど遠く、商業的なカカオ栽培には多くの不利な点を抱えている。小規模なカカオ園は粗放的に管理され、農薬や肥料は入手が困難な上に高くつく。これら一連の悪条件にも関わらず、カカオ栽培が成功している理由の一つとして、バカ・ピグミーによる安価な労働力の供給が挙げられる。

IV-3-3. 賃金労働のインパクト

現在、調査地域周辺の少なからぬバカ・ピグミーは、自らの生計維持活動と、現金獲得のための賃金労働との間でどのようにバランスをとるかという課題に直面している。

⁵³ この事例では、農園主であるヨカドゥマのムスリム商人は、調査地近傍の町であるムルンドゥ市に住み、毎日都市と調査地周辺との間を往復運転している「ブッシュ・タクシー」の運転手（ムスリム）にバカ・ピグミーの労働者を採して、自分のところに送るように依頼していた。このようなムスリムどうしのネットワークがバカ・ピグミーの出稼ぎを促している一面がある。出稼ぎから戻ってきたバカ・ピグミーへの聞き取りによれば、農園主は彼らに食料、衣服、日用品を与え、それぞれに 150,000FCFA を労賃として支給したという。得られた収入は全て、調査地の村に戻ってくる前に使ってしまったという。

焼畑農耕を受容して以来、これまで数十年にわたって、バカ・ピグミーにとって自給焼畑は親族と姻族を中心とする共同作業によって維持されてきた。賃金労働に特化する個人が増えることは、共同で行われる生業活動の妨げになる。バカ・ピグミーの間では、金銭の授受を伴わず、年齢の近い個人間で、メンバーの農作業を相互扶助する共同作業グループを作る習慣⁵⁴があるが、複数のメンバーが賃労働にや雇われてしまえば、互酬性により成り立っているそのような協力行動は成立しなくなってしまう。バカ・ピグミーの中には、自らの畑を半ば放棄して、現金を得るためにハウサやバクウェレの畑での賃金労働に励む者がいる。したがって、カカオ栽培が拡大する前に導入され、行われていた農作業に関する相互扶助システムは、姻族間で婚資の支払いとして行われるものを除けば、廃れる傾向にある。

バカ・ピグミーによるバカ・ピグミーの雇用が試行的に行われる事例を偶然観察した Kitanishi (2006)は、現金や酒を報酬としてバカがバカ・ピグミーを雇用することは、報酬の受け取り手がそれを労働への対価としてよりも、分配されたものとしてみなす可能性が高いので、バカ・ピグミーの間では容易に広まらないだろうと予測した。しかし実際には、賃金労働の雇用関係は、今やバカとバカ・ピグミー以外の民族の間にとどまらず、バカ・ピグミーどうしてもそう珍しいことではなくなり、一部のバカ・ピグミーは、マリファナ、タバコ、酒、そして現金を労働報酬として他のバカ・ピグミーに農作業を依頼している。あるバカ・ピグミー男性は、仕事は仕事であり、農耕民の畑で働くのも、他のバカ・ピグミーの畑で働くのも同じことであるとすら言っていた。

V. 討論と結論

V-1. 遅延型利得経済への適応

⁵⁴ 調査地のバカ・ピグミーには、互いの農作業を助けるいくつかのやり方を発展させている。バカ・ピグミーの高齢者によれば、集団労働は、バカ・ピグミーの農業生産力を高めるために、かつて地方政府の指示によって導入されたものである(Kitanishi, 2003)。バカ・ピグミーは、これを自給畑やカカオ園での作業にしだいに取り入れていったものと思われる。

1960年代の定住化に続いて、一部のバカ・ピグミーは食用作物の栽培を開始し、その後すぐにカカオ栽培を行う者が現れた。カカオとプランテン・バナナという農業生態学的に類似した特徴（熱帯林樹木による庇陰を必要とする）を持つ作物の組み合わせが、食用作物としてのバナナ栽培の受容の延長としてカカオ栽培の受容を容易にした要因の一つである。グローバルな、あるいは国家レベルにおける経済政策もこのプロセスを後押しした。調査地域周辺への熱帯林伐採事業の拡大は、市場経済の地域社会へのアクセスを容易にし、貨幣とともに資本主義的な行動原理をとる商業民をもたらした。カカオ豆の価格上昇のような外部経済の影響は、カカオ栽培の拡大に拍車をかけた。カカオ栽培が盛んになると、焼畑休閑林も伐開されて、カカオ農園へと姿を変えていった。バカ・ピグミーも、バクウェレなど近隣農耕民も、これらの変化の波に否応なく影響されてきた。

カカオのような樹木性換金作物は、長期にわたり、継続的で頻繁にインテンシブな労働力投入を必要とする。このように、カカオ栽培は典型的な遅延型利得経済的な活動であり、バカ・ピグミーや他のピグミー系狩猟採集民が伝統的に従事してきた即時利得型経済的な活動とは正反対の特徴を有する(Woodburn, 1982)。ムスリム商業民や、農耕民の経営規模に比べればずっと小さい規模ながら、調査地ではほとんどのバカ・ピグミー世帯が自らの畑でカカオを育てていた。なかには、バクウェレと同等かそれ以上に大きなカカオ園を所有するバカ・ピグミーもいる。バカ・ピグミーのカカオ園のうち、1haを越す畑はその全てが親族内で、数世代にわたって相続されているものだった。このように、一部のバカ・ピグミーは自作農民としてうまくカカオ栽培に適応している。カカオ園は、バカ・ピグミーの財産となっている。

カカオ園の面積は、食用作物の畑よりもずっと大きい。女性により所有され、管理される自給作物の畑とは対照的に、ほとんどのカカオ園は男性により所有され、管理される。相続される場合も、男系による。これらのカカオ栽培と財産としてのカカオ園の特

徴は、男性の権力を相対的に肥大させ、バカ・ピグミー社会における男女間の関係に影響を与えていると考えられるが、この点については別稿にて検討してみたい。

カカオ園の面積測定は、畑のサイズに相当程度の個人差が見られることを明らかにした。バカ・ピグミーのインフォーマントたちの多くは、カカオ園の経営規模の差が、現金収入に反映されること、かつては見られなかったような経済的な不平等を増加させていることを認識している。

V-2. 経済的な報酬の認知とその即時消費

カカオ栽培のための労働力不足は、バカ・ピグミーに、賃労働を行って現金収入を得る機会を増大させた。調査地域への移住者たちは、バカ・ピグミーを現金で積極的に雇用することにより、バカ・ピグミーに、これまでバカ・ピグミーの行動をコントロールしてきたバクウェレから、経済的・心理的に独立する機会を与えている。バカ・ピグミーは、カカオ栽培に関して、他人の畑で賃金労働をするか、あるいは自分の畑からの収穫物を売るか、自らの意志で選ぶことができる。

しかし、多くのバカ・ピグミーは、現金収入を手にした途端にその大半をアルコールや商品を購入することで使い切ってしまう。バカ・ピグミーの社会の伝統的な規範である分配は、こと現金については、近傍に住む親族を対象として、極めて限定的に行われるに過ぎない。アルコールと商品への強い欲望のために、現金収入は即座に消費される。そのような行動は、「現在への関心」(Ichikawa, 2000)と表現されるような、彼らの人生に対する態度に根差している。この態度は、即時利得型システム(Woodburn, 1982)の資源利用になじんだ人々に特徴的なものである。

一部のバカ・ピグミーは、アルコール依存症に陥っている(Köhler, 2005)。アルコールを得るために、彼らはより現金経済に依存するようになっている。得られた現金収入は、生活の向上や畑の拡大といったことよりもアルコール消費につぎ込まれる。ただ、彼ら

は持ち金を全て酒に使い果たしても、後悔しているようには見えない。したがって、多くのバカ・ピグミーは直ちに仕事の結果としての現金が得られない自らの畑に投資するよりも、農耕民であれ、商業民であれ、誰かの畑で仕事をして手っ取り早く賃金を得ることを選ぶことになる。このような状況では、食用作物の畑にせよ、カカオ園にせよ、自分たちの畑を共同で作業する相互扶助的な労働システムはもはや成り立たない。賃金労働では、早ければ働いたその日のうち、数時間後に賃金が得られる。たとえ少ない額であっても、その現金で酒を飲み、仲間と楽しく過ごす。賃金労働を選ぶバカ・ピグミーの行動は、このようなごく短期的な便益に動機づけられたものとして理解できる。即時的、刹那的な消費というバカ・ピグミーのハビトゥスが、ほとんどのバカ・ピグミーが現金を貯蓄して、より長期的な目標を獲得することを妨げているのである。

カカオ園の所有者であるほとんどのバカ・ピグミーは、まとまった量の収穫物を価格が高くなるカカオの市場がひらかれる日まで保持することができれば、自分自身のカカオ園から相当な額の現金収入を期待できる。残念ながら、多くのバカ・ピグミーはそれまで待たずに、カラパス方式で少量ずつカカオ豆を売って換金し、生活に最低限必要なものとアルコールに変える。こうして、彼らはより多くの現金を自らのカカオ園から得る、あるいは将来の利用のために残す機会を失っているのである。

バカ・ピグミーの人々を換金作物の栽培に駆り立てている要因は逆説的に見える。彼らは、農耕民や商業民から提供される酒や様々な商品に対する購買力をもつ現金への強い関心に動かされている。ほとんどのバカ・ピグミーは、カカオ栽培から得た現金を節約して貯蓄したり、将来の投資のためにとっておくことはせず、それを使って即時的な報酬を追及することに懸命になる。

V-3. 変化する価値観と、近隣農耕民との民族間関係

これらの問題があるにも関わらず、少数のバカ・ピグミーは金の貯蓄を試みている。

彼らは、貨幣が可能にする新しい機会を理解し、利用するようになってきている。貨幣は、一般的な購買力を持ち、それを貯めることにより、後でそれに見合ったものであればどんなものでも買うことができる。大半のバカ・ピグミーは貨幣を直ちに使うが、一部では、将来における利用と投資のために節約を始めている者がいる。調査地域における現金経済は、バカ・ピグミーのようなごく小さな民族集団の内部においてさえ、非常に大きな経済的な不平等を作り出している。

その一方で、貨幣を用いた売買においては、その持ち主のエスニシティや職業に関わりなく、交換における平等な関係が想定されているので（貨幣価値は売買の前後で不変である）、取引に関わった人々の間の平等性を高める方向に作用する。私が調査の中で耳にしたバカ・ピグミーたちの語りからは、近隣農耕民や商人と同等の社会的地位に立ちたいという強い欲望が現れていた。経済的に成功する機会が増えれば、バカ・ピグミーが、ローカルな文脈においてより社会的、政治的な自律性を高めることにつながるだろう。

貨幣は、バカ・ピグミーとバクウェレの間で、「過激な階級の平準者」(Marx, 1961; Bloch and Parry, 1989)として作用するが、同時に貨幣経済に適応可能なバカ・ピグミーと、そうではないバカ・ピグミーとを差別化する。カカオ栽培におけるバカ・ピグミーの労働力の重要度の高まりは、地域内の民族集団間の関係を変えた。バカ・ピグミーは、より大きなカカオ農園の持ち主にとっての自分たちの労働力の価値を自覚するようになった。現在のよな労働力不足が継続する限り、バカ・ピグミーはどこでどのように働くかを自ら選ぶことができ、賃労働を選んだ場合には雇用について雇用者と交渉する力を持つ。ハウサや新たに移住してきた商業民の畑で、より条件の良い賃労働を経験したバカ・ピグミーは、バクウェレの畑で強制的に働かされることを望んでいない。バカ・ピグミーの人々のバクウェレに対する態度は大きく変わったにも関わらず、バクウェレにはこの変化を受け入れようとする様子は見られず、依然バカを自分たちの庇護下にある

べきものと考え、コントロールしようとしている。バカ・ピグミーは、バクウェレによる束縛からより自由になり、より対等な関係を築こうとしている。これらの2集団の間では相互の依存関係についての認知に食い違いが生じていて、それがしばしば具体的な対立となって現れる。一方で、バカ・ピグミーはハウサを、バクウェレとは異なる新たな「パトロン」として捉える傾向にあるが、ハウサは、バカを雇用関係にある賃金労働者としてしか見ておらず、契約範囲を越えてバカの社会生活に深入りしようとは考えていない。

カカオ栽培の導入を通じて、既に少数のバカ・ピグミーは、貨幣を将来への投資を可能にする資本として活用しはじめている。すなわち、現金を節約して、貯めたお金で他のバカ・ピグミーを雇うことが実践されている。同じバカ・ピグミー社会の中で、いまだ即時利得型経済に焦点を置いた活動を行っているバカと、多少の貯蓄を行ってそれをもとに将来への投資を行う遅延型利得経済への冒険の道を歩むバカとの相違は大きい。消費するか、貯めるかという貨幣に対する態度における相違は、平和的で平等主義的な社会関係を維持するうえで、将来的に問題をもたらさう。そのような異なった価値観の人々がどうやって共存できるだろうか。現代を生きるバカ・ピグミーは、この問題に向き合ってゆかなければならないだろう。

第6章 バカ・ピグミーによる嗜好品利用と民族間関係

I. はじめに

嗜好品とは、必ずしも栄養の摂取を目的としない味や香りを楽しむ飲食物や喫煙物を指す⁵⁵。本章では、嗜好品利用を切り口に狩猟採集民と農耕民の関係を考える。これまで世界各地の先住民社会を対象とした文化人類学的研究においては、たばこ酒は「開発」など近代化にともなう外部世界との接触の結果としてもたらされる負の側面（例えば、貧困化、周縁化、排除、搾取など）の具体的な現れとして強調されることが殆どであり、嗜好品利用のもつ両義的性格が先住民社会内部や外部社会との社会関係の動態との関連で十分に論じてこられてきたとは言い難い。

例えば、極北地域に住むイヌイトを対象とした研究では、在来の生計経済が近代化に伴って外部経済に侵略的に組み込まれていく過程で外部から導入された酒が、個人の身体や社会に、しばしば不可逆的な悪影響を及ぼすものとして捉えられてきた（岸上, 2005）。タンザニアのハッザでは、「先住民観光」に参加した旅行者のもたらした現金で購入した酒の過剰摂取が暴力や殺人事件を引き起こしているという（Marlowe, 2010: p. 287.）。アフリカ南部のブッシュマン研究においても、飲酒に伴う暴力事件や性犯罪が問

⁵⁵ 嗜好品の定義は様々であるが、例えば、高田公理は『広辞苑』からの引用「栄養摂取を目的とせず、香味や刺激を得るための飲食物」を記したうえで、いくつかの特質（①「通常の飲食物」ではない＝栄養・エネルギー源としては期待しない。②「通常の薬」でもない＝病気への効果は期待しない。③生命維持に「積極的な効果」はない。④しかし「ないと寂しい感じ」がする。⑤摂取すると「精神（＝心）に良い効果」がもたらされる。⑥しばしば人と人との出会いや意思疎通を円滑にする効果を発揮する。⑦「植物素材」が使われる場合が多い。）を挙げつつ、「遊びと楽しみの要素をはらむ飲食物」と述べている（高田, 2008; p.2-3.）。

題になっているという報告（池谷, 1995）がある反面、著しく変容する社会・経済環境により新しい状況の中でもがく先住民による、希望を見出そうとする生活実践の一部として飲酒の肯定的な側面を捉え直そうとする動きもごく少数ながら見受けられる（Sylvain, 2006）.

中部アフリカに広がる熱帯雨林地域の先住民であるピグミー系狩猟採集民についても、開発や定住化が進み、近隣農耕民との接触や同化が進んだ集団についてたばこや酒の過剰摂取がもたらす健康的、あるいは社会文化的な問題が指摘されてきた。医学雑誌『*Lancet*』誌の「先住民の健康」をテーマとした最近の特集では、アフリカの先住民の健康問題の中に HIV 問題などと並んでアルコール依存症やアルコール摂取に起因する暴力が取り上げられている(Ohenjo et al., 2006). ピグミー系狩猟採集民については、Jackson が、ルワンダのトゥワについて、酒の過剰摂取がもたらすアルコール中毒や家庭内暴力の問題を(Jackson, 2003), また Froment はカメルーンのバコラについて、成人の 15%以上に高血圧症がみられるとして、その推定要因として塩、たばこ酒の過剰摂取を指摘している(Froment, 1993, 2001).

農耕受容以前のバカ・ピグミーは、ムブティ・ピグミー(Ichikawa 1986)やエフェ・ピグミー(Terashima, 1986), アカ・ピグミー(Bahuchet and Guillaume, 1982)など、他のピグミー系狩猟採集民について報告されてきたように、隣接居住する農耕民⁵⁶との間で相互依存的な「共生関係」を結び、獣肉や蜂蜜など狩猟採集の産物と、バナナやキャッサバなど焼畑作物の交換により生計が成り立っていたと考えられる(Althabe, 1965).

こうした農耕民と狩猟採集民の「共生関係」について論じた先行研究では、農耕民側が贈与・交換の対象として狩猟採集民に供与するものとして、まず生存に欠かせないカロリー源である農作物、次いで鉄製品や布などの工業製品に焦点が当てられてきた。嗜

⁵⁶ 本章で「農耕民」と記載する場合は、とくに個々の民族名を示すものではなく、バクウェレを含めたバカ・ピグミーの近隣農耕民全体を意味する。

好品は、生態学的な生計維持に直接的に結び付くものではないため、農作物や鉄製品ほどには重要視されてこなかった。

コンゴ盆地北西部における農耕民とピグミー系狩猟採集民の経済関係は、概ね贈与を中心とした互惠的・互酬的關係から、物々交換を中心とした交換経済、さらに貨幣を介在させた貨幣経済へと歴史的に変化してきたと言われる(Bahuchet and Guillaume, 1982). この歴史的な民族間関係の変遷のなかで、嗜好品の社会文化的位置づけはどのように変化してきたのだろうか。

塙(2004)が調査したコンゴ共和国の農耕民ボバンダと、ピグミー系狩猟採集民アカの間では、貨幣を媒介とした関係は現在に至るまでほとんど見られない。塙は、物々交換と贈与という2種類のもののやりとりについて、それぞれ品目と頻度を調査した。両者のもののやり取りでは、物々交換よりも贈与が高頻度で見られ、しかも贈与の方向性はボバンダからアカ・ピグミーへの一方的なものであった。ボバンダとアカ・ピグミーは、ボバンダからアカ・ピグミーへの「一方的な贈与」を通じてボバンダを優位、アカ・ピグミーを劣位とする「不平等なつながり」を再生産している。ボバンダとアカ・ピグミーは、対立的な関係が卓越する定住村と宥和的な関係が卓越する森の中の漁撈キャンプと言う2つの対照的な相互交渉の場を持つが、その両方において嗜好品(ヤシ酒、たばこ、マリファナ)が、最も高頻度にボバンダからアカ・ピグミーに贈られている品目なのである。

興味深いことに、塙が「日雇いの関係」が見られるとする焼畑伐開時には、嗜好品は贈与ではなく交換品目となって、食事供与と同程度に労働サービスと交換される。塙は、不平等だが親密な擬制的親族関係を維持する両者の社会交渉のあり方として、「一方的な贈与」についての分析を加えているが、ボバンダからアカ・ピグミーへの贈与において、なぜ嗜好品が多用されるのかという点には答えていない(塙, 2004)。

さらに貨幣経済化が進んだ地域では、嗜好品はどのように利用されているだろうか。

カメルーン南部の農耕民ファンによる、換金作物栽培へのバカ・ピグミーの労働力利用を調査した坂梨は、カカオ園における農作業労働の対価として農耕民から狩猟採集民に与えられる獣肉の重要性を強調する（坂梨, 2009）。しかし同時に、農作業時には、ファンからバカ・ピグミーに絶え間なく食事や酒が提供され、労働者としてのバカ・ピグミーの農作業への意欲、すなわちフランス語における「モチベーション(*motivation*)」を高めていると論じている（坂梨, 2010）。坂梨の調査地では、バカ・ピグミーの農耕化は進んでおらず、ファンは農作物、獣肉、ヤシ酒、蒸留酒、商品、貨幣など多重生業複合から得られる多様なものをバカ・ピグミーの労働と交換し、貨幣による支払いは両者の関係に浸透しているとはとても言い難い。

カメルーン南部と同様、本研究が対象とするカメルーン東南部でも、少なからぬ地域で換金作物としてのカカオ栽培が普及・浸透している。バカ・ピグミーが農耕民の焼畑開墾やプランテーション維持に必要な労働力を提供し、農耕民バクウェレは現金のほか、焼畑作物を原料とする蒸留酒や、焼畑で栽培されるたばこ、あるいは大麻を労働報酬の一部として支給する（林, 2000; Kitanishi, 2006; Oishi, 2012; 第5章）。ここでのバクウェレとバカ・ピグミーとの関係においては、パトロン＝クライアント関係と言う非常に個人的な両者の結びつきは希薄化している（林, 2000, 大石, 2010）。むしろ、一見「雇用＝被雇用」というおもに現金を介してお互いの欲求に折り合いをつけるような関係が目立ち始め（林, 2000）、さらにバクウェレに対して、酒ではなく金銭による労働報酬支払いを求めるバカ・ピグミーも増えてきている（Oishi, 2012）。

市場経済が地域経済に浸透するとき、しばしば既存の物々交換や贈与交換と現金経済の併存状況がもたらされる。その場合に、異なる交換原理が同じものやサービスに適用されることにより、ものの価値に不斉合が見られることがある（Hampfrey, 1987, 市川, 1991）。ムブティとともに旧ザイールのイトゥリの森に棲む農耕民ビラは、ムブティの労働サービスに、貨幣で労賃を払う場合よりずっと多量のキャッサバを与える。ムブテ

ィの中には農耕民との物々交換により得られた余剰のキャッサバを市場に持って行き現金化する者が現れた。しかし、市川がそのキャッサバの由来を尋ねたとき、そのムブティは決して物々交換により得られたキャッサバであることを認めようとしなかったという。このムブティは、自らの行いとは裏腹に物々交換と市場経済の間で交換体系が斉合的であるべきだとは考えていなかったのである。市場経済が浸透しても、貨幣は価値をおしなべて測る万能の物差しとして機能しなければ、贈与交換や物々交換によって、より大きな市場経済に対して地域経済は一定の自律や「伝統的な価値観」を維持することができるのである（市川, 1991）。

カメルーン東南部では、バカ・ピグミーによるバカ・ピグミー自身の労働の商品化がみられるようになったという点で、坂梨の調査地のバカ・ピグミーや、アカやムブティなどピグミー系狩猟採集民について報告されている事例とは大きく異なっている。この場合、バカ・ピグミーは貨幣経済に完全に組み込まれ、経済的自律性を失ってしまったと言えるだろうか。

バクウェレとバカ・ピグミーの関係は賃労働に特化したわけではなく、市場経済下における単純なプランテーション経営者と労働者といった階層的な関係にはなっていない。ここで注目されるのが、農耕民とバカ・ピグミーの間では、たばこや酒などの嗜好品を介した交換が、賃金による雇用との不斉合性を保ちつつも残っていることである。貨幣を媒介とした交換と、酒・たばこなどの嗜好品を媒介とした贈与交換の2つの異なる交換原理を併用した駆け引きが両者の関係の動態と関係していると推測される。

そこで本章では、カメルーン東南部における嗜好品としての酒やたばこの普及状況や飲酒慣行を踏まえつつ、(1) 狩猟採集民と農耕民双方の集団におけるたばこと酒の入手状況や製造過程、および消費の実態を記述し、(2) たばこと酒が集団間／内で売買・交換・譲渡・分配される社会的文脈についての分析を通じて、嗜好品としてのたばこと酒が、贈与・交換経済と市場経済という異なる交換論理が併存する地域経済の中で、狩猟

採集民＝農耕民関係の維持や再編にどのような役割を果たしているかを検討する。これらの記述と分析においては、アフリカ熱帯林における狩猟採集民＝農耕民関係に関する先行研究において、これまで十分に分析がなされてきたとは言い難い、たばこと酒などの嗜好品の「ものの属性」に着目する。その上で、農耕化と定住化をした狩猟採集社会にとっての、たばこや酒の功罪、あるいは両義性について考察を試みる。

本章で用いるおもな資料は、2009年2月から3月にかけて行った現地調査で収集した。この時期は大乾季の終盤にあたり、農作業歴ではカカオ収穫の農繁期が終わり、焼畑伐開の時期が来るまでのちょうど端境期に当たる。まず、当該社会において流通しているたばこや酒について、種類や入手方法（栽培・製造方法含む）、流通・交換形態について調査を行った。蒸留酒については、分光分析計（アタゴ（株）、エチルアルコール濃度計 AL-21α）を用いて、体積アルコール濃度の迅速測定を実施した。

日常生活における喫煙や飲酒に関わる行動については、焼畑やカカオ園、集落内のバー、集会所など異なる嗜好品利用の状況下での嗜好品をめぐる社会交渉について参与観察を行った。

Ⅱ. カメルーン東南部における嗜好品—たばこと酒を中心に—

Ⅱ-1. たばこの種類と嗜好

Ⅱ-1-1. 自家栽培のたばこ

たばこは、ンダコ（*ndako*）と総称される。とくに地元、あるいは隣接地域で栽培されたたばこの葉は、モンゴロ（*mongolo*）と呼ばれる。バカ・ピグミーのモンゴロの喫し方には男女間で明確な相違がある。まず、熾火で乾燥させたたばこの葉は指先で細かく粉碎される。その後、男性は、その粉を同じく熾火で乾燥させたクズウコン科植物の葉で筒状に巻き、火をつけて吸う。男性の年長者は、手製のパイプを使用することもある（図1）。



図 6-1 : 壮年男性の喫煙用パイプ (mokondo).

一方, 女性はモンゴロの粉を焚火の灰と混ぜ, 舌の裏で味わう楽しみ方をする(図2). モンゴロは喫するまでに手間がかかるので, 紙巻きのたばこは吸うがモンゴロは敬遠するという者も女性を中心に若者世代に増えている. しかし, モンゴロを愛好するバカ・ピグミーは, その手間自体を楽しみとし, また, 独特の風味に親しんでいる.

たばこの葉は, 調査地において自家消費以外でまとまった量を本格的に栽培・販売する者はバカ・ピグミー, バクウェレともにいなかった. きれいに乾燥されたたばこの葉は, 都市からやってきた商人や行商を行う農耕民女性によって持ち込まれる.



図 6-2: 口の中でたばこを味わうバカ・ピグミーの女性.

Ⅱ-1-2. 自家栽培の大麻

一部のバカ・ピグミー男性、バクウェレ男性の間では、ジャマ (*njama*) と呼ばれる大麻 (マリファナ) を好む者がいる。興奮作用を求めて、モンゴロを巻く際に少量の乾燥大麻を混入する。大麻は、バクウェレの焼畑の一角で栽培されており、労働報酬としてバカ・ピグミーに渡されるほか、量に応じて 100~300FCFA⁵⁷で小売りされることもある。ただし、中毒性と興奮作用に伴うトラブル・疾患のために、バカ・ピグミーのなかでも忌避されることがある。

⁵⁷ セーファーフラン (FCFA) は、中部アフリカのカメルーン、ガボン、コンゴ共和国、チャド、赤道ギニアの 6 ヶ国で流通している貨幣である。レートはユーロと固定相場制で連動しており、1 ユーロが 656FCFA である。調査当時のレートでは、おおよそ 100FCFA が 20 円であった..

II-1-3. 工業製品のたばこ

カメルーン各地で市販されている箱入りの紙巻きたばこである。バクウェレ語では、ドロック(*dorok*)という固有名があるが、バカ語には固有名称はない。商品の銘柄で呼ばれるか、あるいはたばこの総称であるンダコという言葉がそのまま使われる。

都市部で購入する際には、銘柄により価格が異なるが、調査地では、20 本入りひと箱あたり 500 FCFA (約 100 円)⁽⁴⁾という均一な価格で販売されている。また、1 本あたり 25 FCFA (約 5 円) でばら売りされることもある。人気は高いが、外部からの商人が持ち込むのに頼ることになるため、カカオの出荷期など地域経済の活発化する時期を除き、調査地では常に品薄である。

II-2. 酒の種類と嗜好

調査地では、酒はバカ・ピグミーにとっても、バクウェレにとっても日常生活に密着したなじみ深いものであり、男性が主であるが女性も飲む。初めてバカ語を体系的に記載した Brisson は、酒を表す語彙として *njàmbù* をあてている (Brisson 2010)。しかし、調査地においてはこの語彙は使われておらず、近隣農耕民の言語やフランス語、あるいは酒の商品名で呼ばれている。バクウェレ語では、飲み物と酒には、同じ語彙メニョク (*menyok*) が使われ、バカ・ピグミーの人々のあいだでもこれが転用されている。酒は、メニョク以外に、コンゴ民主共和国、コンゴ共和国を中心とした中部アフリカでよく使われる地域共通語であるリンガラ語で、マサンガ (*masanga*) と呼ばれたり、アイキ (*aiki*) やアラキ (*arki*)⁵⁸などとも呼ばれる。

II-2-1. ヤシ酒

バクウェレの言葉では、*menyok me leer* という。バカ語ではヤシを示すンビラ (*mbila*)

⁵⁸ *aiki* や *arki, arkina* と呼ばれる蒸留酒は、カメルーンのみならず、中部アフリカ、東アフリカ、北アフリカから西アジアまでの広い地域で見られる (重田, 1989)。カメルーンでは、南部を中心とした熱帯雨林地域では、ヤシ酒のほかキャッサバとトウモロコシの醸造物が蒸留されるが、北部を中心としたサバンナ地域では、トウジンビエなど雑穀が用いられる地域がある (de Garine, 2001)。

の語が使われ、*ngo mbila*（＝ヤシの水、ヤシの樹液）という複合語で呼ばれる（Brisson 2010）。熱帯アフリカでは、サバンナから熱帯雨林地域までの広い範囲でヤシ酒が飲まれている（埴・市川 1995, 埴 1996, 伊藤 2010）。しかし、調査地では、切らずにヤシ酒の生産ができるラフィアヤシ（*Raphia* spp.）は、集落から遠方（約 15km）の北西にある湿地帯まで行かないと自生していない。したがって、調査地で見られるヤシ酒は、集落放棄地や焼畑休閑林に自生する「半栽培」されたアブラヤシ（*Elaeis guineensis*）の樹液から造られることになる（埴, 1996）。

ヤシ酒の造り方は、まず幹を切り倒したアブラヤシの先端部を切り出し、幹の内側の髓に切り込みを入れる。そこに滲出してくる樹液を採取して半日ほど置くと自然発酵して酒となる。発酵が進むと甘みが減り、アルコール度数が増すが（3～4%）、同時に酸味も強くなる。過度に発酵が進んだものはあまり好まれない。幹の大きさなどにもよるが、切り倒されたアブラヤシ 1 本からは毎日朝晩の 2 回の樹液採取で、1 日当たり合計 3 リットル程度のヤシ酒が取れる。幹の髓を少しずつ切り進めることで、2 週間から 1 ヶ月間ほど継続して楽しむことができる。

ヤシ酒を造る際に、樹液を受ける容器の中に樹皮を入れておき、苦みや渋みなどの風味をつける。味付けの樹皮に使用される樹種は、造り手により多様であり、中には強い精神的効果（酩酊状態や躁状態など）をもたらすものもある。その効果は、飲み手の体質、体調、飲酒量によって大きく変わる。この効果が、呪術的な力によるもの（「薬」や「毒」だと言うように表現される）だと考えられることがある。

農耕民やバカ・ピグミーの間では、食事同様に、ヤシ酒に毒を仕込まれて悪酔いをすると、精神状態をコントロールされることがあるから、他人の作ったヤシ酒を不用心に飲みすぎることは危険だといった言説も聞かれた。

例えば、首都ヤウンデ近郊出身のあるカカオ園主 A が、近年になってカカオ園の労働報酬としてヤシ酒を用い出した。多くのバカ・ピグミーがそれを求めて A の畑に集

まるようになり、仕事に人気が出た。バクウェレたちは、そのヤシ酒には飲んだ者を虜にしてしまう特別な薬が混ぜられており、そのためにバカ・ピグミーたちが次々に惹き寄せられてしまい、自分たちの畑には働きに来なくなったのだと考えた。彼らは、ヤシ酒の持つ呪力により、自分たちのクライアントであるべきバカ・ピグミーたちの労働力がよそ者にすっかり横取りされてしまったと悔しがっていたが、そのうちのいくらかは、自分たちもまた同じヤシ酒の味見に出かけていた。

このように、ヤシ酒は単に美味で魅力的であるというだけでなく、呪術的な力をもった飲み物としても考えられている（チュツオーラ, 1970）。

II-2-2. 蒸留酒（現地生産）

(a) 蒸留酒と農耕民の生計活動

蒸留酒は、調査地周辺のバカ・ピグミー、バクウェレのあいだでは、最も頻繁に飲まれている。バクウェレ語では *menyok me du*（直訳すれば、「火の酒」を意味する）が固有名称であるが、単に酒の総称を示すメニョクとも、ンゴロンゴロ (*ngolongolo*) とも呼ばれる。蒸留酒は、旧ザイールの農耕民ンガンドゥ (Takeda, 1990)、ソンゴーラ (安溪, 1995)、レッセ (寺嶋, 1997) をはじめ、コンゴ盆地各地の農耕民社会で広く嗜まれている。

蒸留酒の原料には基質となる澱粉源として、キャッサバ、プランテン・バナナ、カカオ果汁など様々なものを用いることができるが、調査地をはじめカメルーン東南部では、原料にはキャッサバとトウモロコシが使われる。自家製の蒸留酒であるこの酒は、特有の土臭い匂いを持ち、無色透明からやや黄色がかった色が着いている。バクウェレをはじめ、多くの農耕民社会では、この酒の製造と販売は女性の仕事と決まっている (寺嶋 1997)。

蒸留酒は、後述するように農作業の際に振る舞われ、また労働報酬ともなるもので、

特に蒸留酒造りが盛んになるのは、焼畑の伐開期と、換金作物であるカカオの収穫期など、まとまって農作業が行われる時期である。しかし、それ以外の時期にも、ほぼ通年、村落内のいずれかの農耕民世帯で蒸留酒が造られている。蒸留酒がいつから商品化され、貨幣で売買されるようになったのかは不明であるが、現在では、金さえ払えば手に入れることができる。

バクウェレの女性は蒸留開始後、最初にとれるアルコール度数の強い酒のいくらかを夫や恋人にプレゼントをする慣習がある。しかし、それ以外は、たとえ妻や恋人の造った酒であっても配偶者は金を払わないと飲むことはできない。このように、酒造りは、バクウェレの女性にとって主体的に現金収入を得られる数少ない方途の一つである。とくに、シングル・マザーや寡婦にとって、畑の維持だけでなく、自身やこどもの生活必需品の購入や学費を用意するのに、酒造りはなくてはならない生計手段になっている (cf. Kakeya and Sugiyama, 1985)。

蒸留酒の値段は、グラス杯 (約 100 ml) が 100 FCFA, 1 リットルで 1,000 FCFA と決まっている。誰の家でいつ酒ができるかはいつの間にか村落中に知れわたっており、蒸留作業の時から蒸留場所の周りで待っているバカ・ピグミーやバクウェレの男たちを見ることができる。なお、飲み方として、ペットボトルや大きめのプラスチック容器からグラスに注がれた酒は、決まって一気にあおるように飲まれる。

(b) 蒸留酒造りの実際

i. 道具の準備と原料の調整・発酵

蒸留酒造りに必須の道具は、ドラム缶を輪切りにして作った蒸留釜とアルコール分を含んだ蒸気を通す金属製の筒がセットになった蒸留装置である。ドラム缶も金属製の筒も、木材伐採会社などからの放出品を近くの地方都市から仕入れてくる。金属製の筒は屋根を葺くトタンを丸めて溶接したものなども使われているが、途中で穴があいている

と蒸留の効率が悪くなるほか冷却部で水漏れを起こす。状態の良い筒が得られるかどうか、うまく蒸留酒を造るための重要な要素になる。筒は、酒の造り手である農耕民女性の間で貸し借りが行われ、使いまわされる。

バカ・ピグミーの女性は、農耕民女性が酒作りを行う際に原材料の加工や蒸留作業の手伝いをする。しかし、バカ・ピグミーの女性が、自前で蒸留酒メニョクを造ることはほとんどない。その理由としては、酒の材料調達に必要となる十分な面積のキャッサバとトウモロコシの畑を持たないこと、醸造・蒸留のための道具（ドラム缶と金属製の筒）を入手あるいは農耕民女性から借用することが容易ではないため、といったことが考えられる。また、バカ・ピグミーの女性たちは、酒造りは農耕民の役割であり、自分たちが率先して行うような仕事ではないと考えているようにも見受けられる。

酒造りの原料にはキャッサバとトウモロコシを用いるが、キャッサバはアルコール発酵の基質となる澱粉として、トウモロコシは、種子を途中まで発芽させたのち乾燥させたものを発酵開始のスターター酵素として用いられる。

熱帯アフリカでは、有毒種と無毒種の2つの種類のキャッサバ (*Manihot esculenta*) が栽培されているが、酒造りにはよりたくさん作付されている有毒種が用いられる。有毒種には青酸成分が含まれているため、生の根茎を用いる場合には毒抜きが必要となる。キャッサバの根茎は、掘り取ったのちに皮を剥いて水につけ、3日間程度かけて十分に発酵させた後、いったん天日乾燥させる。経済的余裕があれば、すでに毒抜きと乾燥を経て天日乾燥されたキャッサバ粉を購入して用いることもある。

キャッサバの毒抜きをする一方で、トウモロコシの乾燥種子は水につけて発芽したものを再度乾燥させ、杵で搗き粉状にしておく。天日干ししたキャッサバと水をドラム缶の釜に入れ、煮たのちに上述の発芽トウモロコシ粉を加えて、一昼夜から二昼夜寝かせる。発酵を促すために、工業製品の砂糖を加えることもある。発酵させる時間が短いと、十分なアルコール分が生成しない。しかし、寝かせすぎると発酵が進み過ぎてしまう。

したがって、どのタイミングでドラム缶の釜を火にかけて蒸留を始めるかが造り手の腕の見せどころとなる。



図 3. 蒸気に含まれるエチルアルコールが筒を通る間に冷やされ、蒸留酒となる。

ii. 蒸留と混合

蒸留作業は、焚きつけ用となる薪を十分用意して、3 時間から半日程度かけて行われる(図 3)。頻繁に酒造りをするバクウェレ女性のなかには、キャッサバ畑の近くに蒸留のための小屋を準備する者もいる。いったん蒸留を開始すると、その場から離れることはできない。蒸留作業は必要に応じて、子どもやバカ・ピグミー女性などの助力を得ながら続けられる。作業の間は長時間にわたり、蒸し暑い環境に耐えなければならない。蒸留の火加減も重要で、強くしすぎるとアルコール分が一気に飛んでしまうため、中火からやや弱火で慎重に加熱する。

蒸気が出始めたら、筒の部分に水をかけてアルコール分の回収が良くなるように心がける。液化したアルコールは、筒の出口から滴らせて、ビールやウイスキーの空き瓶、あるいはペットボトルの瓶にとる。

ドラム缶一本の蒸留で、5 本から 12 本程度の酒が取れる。最初の瓶はアルコール分が強く、最後になればなるほど水っぽくなってゆく。ボトルごとに、エチルアルコール度数を実測したところ、1 本目は 30-45 度だったが、2 本目以降は単調に減少してゆく（図 4）。何本取ったところで蒸留作業をやめるかは、最終的にどれくらいの強さの酒をどれだけ造るのか、造り手の考え方による。蒸留が終わると、すべての瓶に取った酒を混ぜて均等なものにする(図 5)。1 本目から 3 本目くらいまでの混合割合を高めて、1.5 倍から 2 倍の価格（1,500－2,000CA フラン/リットル）で販売する場合もある調査期間中、蒸留後に混合されたメニョクを採取し（15 試料）、それぞれのエチルアルコール濃度を計測した。結果は、16%から 33.2%と度数にはかなりの開きがみられたが、平均すると 22.6%であった（SD=5.9）。

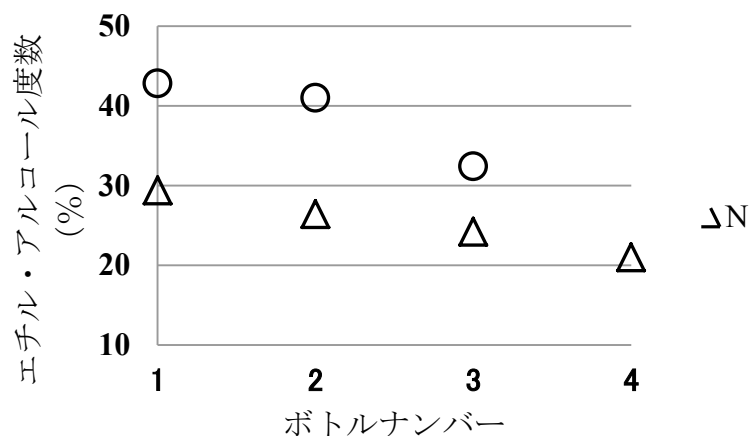


図 4. 蒸留ボトルの順番とエチルアルコール度数

未婚女性 M と既婚女性 N が蒸留作業を行った際に協力を依頼し、蒸留が行われた順番に各ボトルから数 mL ずつ試料を採取し、エチルアルコール濃度の迅速測定を行った。



図 5. 蒸留が済んだ酒のブレンドをおこなうバクウェレの女性.

Ⅱ-2-3. 工業酒製品：ビール，ウイスキー，ワイン

a. 価格と嗜好

ビール，ウイスキー，ワインは，都市部から商品として持ち込まれる工業製品であり，商人から現金を介してのみ購入される．ビールはカメルーンを含めた中部アフリカ諸国で国民酒と言えるもので，どのような地方でも数種類の銘柄を揃える．首都圏では瓶一本（650ml）あたり 400-500 FCFA 程度で気軽に購入できるビールだが，本研究の調査地のように首都から陸路で 3 日以上もかかる遠方では，運搬にコストがかかることもあり割高となる．

ウイスキーは瓶でも稀に見かけるが，広く流通しているものは 40～50ml を個々に袋詰めした *sache whisky* とフランス語で呼ばれる国産ないしナイジェリアなど西アフリカの製品である(図 6)．この袋詰めのウイスキーは，都市部では一袋 100FCFA 程度で購入

することが可能であるが、調査地周辺では 200～300FCFA で販売されている。アルコール度数が 40-50 度前後と大変強く、人気がある。しかし、わずかしき分量がないので、共飲できる人数は多くても 2～3 人に限られる。



図 6: さまざまな種類の袋詰めウイスキー (sache whisky)。

ワインは瓶詰めのもので流通することはほとんどない。見かけるものは 1 リットル入りの紙パックに入ったものである。これらの大衆ワインはスペイン産が大半を占め、調査地では 2,000FCFA 程度で販売されている。女性を中心に赤の甘口が好まれている。ビールと小袋入りのウイスキーに比べるとワインの流通量は少ない。

ビールとウイスキーは、換金作物であるカカオの収穫販売期の現金収入がある時期（調査地周辺では主に雨期後半の 11 月から 1 月までの時期）や賃金労働に恵まれた際に、集中的に販売され、購入され、消費される。これらは、「高級」な飲み物であり、その消費は儀礼的な意味合いをもつ。

農耕民の世帯主は、姻族や客人、都市から役人の訪問があった際には、借金をしてで

もビールやワイン，ウイスキーを揃えようとする．ボトルに入ったウイスキーは，近くの都市で1瓶 8,000FCFA 以上もする高価なものだが，バクウェレ社会では，葬明けの儀礼など大きな儀礼の際に用意される．「白人の飲み物⁵⁹」と呼ばれるビールやウイスキーが卓に並ぶことは，それだけで大変強力な社交的なメッセージを放つ．

b. 急激な工業酒製品の普及と浸透

2000 年以降，調査地では換金作物であるカカオ栽培の浸透と価格の高騰に伴い，都市から移住したバミレケ人やバムン人などの商人たちを中心に，定住集落内で日中から酒を飲ませるバー開く者が増加した．バーの店主は，夜な夜な大音量の流行歌（カメルーンの都市部で盛んなマコッサや，隣国コンゴのリングラ・ポップスなどのポピュラー・ミュージック）を大音量で流しながら，地酒であるメニョクはもちろん，ビールやウイスキーなどが売られる．

後者の商人には女性も含まれるが，自ら酒を造ることはせずに，近隣の街都市から大量の地酒（メニョク）を安価（1 リットルあたり 300～500FCFA）で仕入れ，村では村で醸造されたメニョクと同じ価格で販売することによって利ざやを稼いでいる．このように，小袋入りのウイスキーや紙巻きたばこなど，バカ・ピグミーの，とくに男性を強く惹きつける嗜好品をバカ・ピグミーがいつでも購入できるような状況が作られている．

II-3. その他の嗜好品：覚醒剤の流入

2007-8 年ころから，フランス語で *comprime*，あるいは *drog* と呼ばれる錠剤型の覚醒剤が調査地周辺で密かに売買されるようになった．カメルーン都市部では，既にメタン

⁵⁹ バクウェレ語で，「白人の（-teele）」という形容がなされるものには，例えば，他には船外機（「白人の櫂」）などがある．

フェタミン系の麻薬が流通し問題になっているが、上述の都市部出身の商人により村まで持ち込まれているものと思われる。覚醒剤の使用は、現在までのところバカ・ピグミーやバクウェレの若者世代のごく一部に留まっている。しかし、2008年と2010年には、覚醒効果の増大を求めて、メニョクやビールの中にたばこやマリファナ、さらにこの覚醒剤を浸して飲用し錯乱状態に陥った患者が出た。また、2009年には調査地の隣村でバカ・ピグミーの若者が、覚醒剤を販売していたバクウェレの壮年男性とトラブルになり、山刀でバクウェレ男性の首を切って殺害するという事件が発生した。

Ⅲ. 飲酒と喫煙の実態

Ⅲ-1. バカ・ピグミーの日常生活における喫煙と飲酒

バカ・ピグミーは、定住集落での焼畑農耕と賃金労働を基盤とした生活と同時に、森での狩猟採集を基盤とした生活を維持している。とくに、2月から4月にかけて（大乾期の後半から小雨期への移行期に該当する）、モロンゴと呼ばれる狩猟採集行に積極的に出掛ける。葉たばこは、年長の狩猟者に好まれ、森のキャンプにも積極的に持ち込まれるが、酒はまず持ち込まれない。

喫煙の機会は男女ともに、朝夕ののんびりとした時間帯に楽しんでいることが多い。男性は、バンジョ (*mbanjo*) と呼ばれる簡単なベンチが併設された集会所に座りながら、女性は熾した火の脇に座りながら、おもむろにたばこを取り出す。この様子は定住集落でも、森のキャンプでも変わりはない。吸いかけのたばこを周りにいるもの同士、まわしながら楽しむことも珍しくない。調査者がバカ・ピグミーの集落を訪れると、挨拶のあと、あるいは挨拶のひとつとして *”to phe ndako.”*（「たばこをくれ。」）と語りかけられることが多い。バカ・ピグミーにとっては、たばこは最も身近な嗜好品のひとつであり、また、喫煙がある種のコミュニケーションツールになっている。

他方で酒は、バカ・ピグミーにとって村の飲み物だと考えられている。バクウェレも、

森に漁撈や狩猟に赴く際に村から蒸留酒を持って行くことはまずないが、滞在先の漁撈キャンプで、ヤシ酒を造って愉しむことは見られる(大石, 2010). すでに述べたように、調査地においてバカ・ピグミーの男性は稀にしかヤシ酒を造らず、バカ・ピグミーの女性は蒸留酒を造らない。したがって、バカ・ピグミーは農耕民あるいは商人から酒を手に入れることになる。調査地で造られる酒は、地域内で商品として現金を介しても取引引きされる。また、たばこや酒が労働代価として現物支給的に、労働雇用主(=酒の造り手)から使用人(=飲み手)に渡されることがある。

とくに、酒を労働代価とした農耕民とバカ・ピグミーの関係は、焼畑の伐開作業や農作物の植え付け時や、カカオの収穫で人手を多く必要とする時期に活発化する。これは、労働報酬の一部に酒が含まれるほか、仕事に対するモチベーションを高めるために作業の合間に酒が振る舞われるためである(坂梨, 2010)。

近年では、農耕民とバカ・ピグミーの間だけではなく、バカ・ピグミーどうしても労働の報酬として購入した酒やたばこ、大麻を振る舞うことが見られるようになっている。これまで、労働交換を行うことはあっても、バカ・ピグミーがバカ・ピグミーを雇用することは、ほとんど見られなかった。こういった事例は、平等主義社会だとされてきたバカ・ピグミー社会の中で、大きな価値変容が起きていることを示唆している。

III-2. 酒と労働をめぐるバカ・ピグミーとバクウェレの駆け引き

現金を介さない取引のなかで、酒はバクウェレの経済において、焼畑の伐開や畑の草刈りなどを自分の畑について行う際に、バカ・ピグミーの人びととの労働交換において欠かせない役割を担うようになった。農耕に関する労働報酬として、半日の労働に現金であればひとり当たり 500FCFA 払わなければならない。厳密には、これをグラス 5 杯分の自家製蒸留酒で代用することができることになっている。しかし、1日の畑での労働の中でも、実際にグラス 5 杯分が単位時間当たり正確に配られることは稀であり、バ

カ・ピグミーたちは畑での作業中にも酒を要求する。

これは、農耕民により生産される蒸留酒の有する特徴，すなわち交換の場に応じて現金を介しても交換されるし，労働やモノとも物々交換されるという点によるところが大きい。農耕民にとっては，作業を早く終わらせるための動機づけのためには，タイミングよく，程よい強さの酒を振る舞うことが必要になる。酒が振る舞われなければバカ・ピグミーたちは帰ってしまうか，より条件よく酒が得られる家を選ぶようになってしまうだろう。一方で振る舞いすぎると，バカ・ピグミーたちは酩酊してしまい仕事の効率が落ちるだけでなく，酒がいくらあっても足りなくなる。バカ・ピグミーたちは，いつ，どの世帯のどの女性が酒を造るか，良く心得ているだけでなく，それが「良い」酒かどうかについて緊密に情報交換して翌日どの家の畑を手伝いに行くか判断している。焼畑をめぐる労働と酒の交換は，かつてのような擬制的親族関係に基づいた，家系間の特別な関係を失った農耕民バクウェレと狩猟採集民バカ・ピグミーの駆け引きであると同時に，バクウェレ世帯間のバカ・ピグミーの労働力をめぐる駆け引きにほかならない。

農作業の最中や後にもバカ・ピグミーとバクウェレが酒を共飲することがあるが，農作業とは関係なく両者が盃を汲み交わすこともしばしば見られる。主として，メニョクをバクウェレが「馴染み」であったり，「兄弟」関係にあるバカ・ピグミーにおごるのである。しかし，調査者（大石）の前では，往々にして，バクウェレに酒の共飲に誘われたバカ・ピグミーはそれを断ることがあった。調査地では，バクウェレに贈与されるよりも，自分で稼いだおカネで酒を購入して飲むことを好むバカ・ピグミーが増えている。このような，「杯を受けない」という態度表明は，バカ・ピグミーなりの農耕民に対する対等意識や独立心の表明ではないかと考えられる。

Ⅲ－３．儀礼の場におけるバカ・ピグミーの飲酒

バカの儀礼に関する先行研究を見る限り，バカ・ピグミーの冠婚葬祭や儀礼の場では，

もともと酒が飲まれる機会はなかったか、非常に限定されていたと考えられる（都留, 1996; 2002, 分藤, 2001, 2007）。したがって、周辺農耕民と物々交換経済を通じた親密な社会関係を築く中で、バカ・ピグミーの儀礼実践にも飲酒の慣習が徐々に広まっていったものと推測される。

調査地において、もともと酒は限定された場面において飲まれるものであった。少なくとも、調査を開始した 2002 年当時はそのように見受けられた。しかし、現在では、冠婚葬祭に関わるような時には、儀礼の主催者は参加者をもてなすためにも大量の食料（農作物と獣肉）と併せて、酒を用意することが求められるようになった。

歌と踊りを中心とするバカ・ピグミーの儀礼「ベ (*be*)」では、歌い手である女性たちと踊り手である男性が相互に興奮状態をもたらす相互作用を及ぼし合う（都留 1996, 2001, 2010）。そのような相互作用によって儀礼を盛り上げていくことをバカ・ピグミーたちは、しばしば「ベを熱くする」といった表現で語る（都留, 2001, p. 65）。これを踏まえると、調査地のバカ・ピグミーたちが、「ベを熱くする」手段として、酒を用い始めたということは想像に難くない。

一方、バクウェレなど農耕民の慣習である男性の割礼儀礼 (*beka*) や精霊儀礼の枠組みでは、酒は精霊に捧げる贈与物の一つであり、人間と精霊が酒を共飲するなど、酒の存在は重要である（例えば, Kolelas, 2007 など）。こういった農耕民の儀礼実践における酒の利用が転用されたためか、本研究を行った調査地では、その場の雰囲気を高揚させるために、酒やたばこが儀礼に用いられ、その存在はしだいに重要なものになってきているのである。バカ・ピグミーの精霊儀礼における仮面使用の農耕民社会からの転用について検討をおこなった分藤は、バカ・ピグミーが農耕民由来の儀礼文化装置としての仮面をそのまま受容しているわけではなく、「仮面は、『ベ』（歌と踊り）の『演出』方法として『ベ』をよりダイナミックな社会的相互行為にしている」のだという（分藤, 2007）。

飲酒についても、当初は『べ』を盛り上げるための小道具として酒が持ち込まれたのではないかと考えられる。しかし、現在ではしだいに飲酒そのものが儀礼を行うインセンティブの一部になり、ある程度の酒が用意できなければ歌い手が集まらず、『べ』が始まらない、という本末転倒な様相をすら呈するようになってしまっている。そういった儀礼の場では、参加した人数に見合った十分な量はもちろん、酒を参加者に提供するタイミングが重要になる。単に量が多すぎるだけでは、たちの悪い酔っぱらいが暴れ出したり、参加者の間でケンカが始まって儀礼の場の面白みや盛り上がりをすっかり台無しにしてしまうことになる。

Ⅲ－４．バカ・ピグミーとバクウェレの飲酒行動の比較

前節までに見てきたように、調査地においてみられる様々なバカ・ピグミーの日常生活の様々な文脈における飲酒行動は、周辺の農耕民による影響で始まったものと推測されるわけだが、バクウェレ社会における飲酒行動はどのようなものだろうか。ここでは、簡潔に両者の飲酒行動について比較を行う。

バカ・ピグミーの人々と同様に、バクウェレにおいても男女ともにメニョクの飲酒は日常的に行われる。健康を願って、乳幼児に少量のメニョクが与えられることもある。メニョクとは対照的に、工業製品であるビールやワインの飲酒は、カカオ栽培や獣肉、燻製魚の売買により十分な現金収入が得られる時期にのみ活発になる。しかし、それ以外の時期には、葬送儀礼や村の行事、都市から訪れる行政官や政治家の饗応など特別な機会を除けばほとんど飲まれない。バクウェレ社会では、バカ・ピグミーとは異なり、労働交換によって他のバクウェレからメニョクが入手されることはない。現金による購入か、作り手による贈与か、あるいは分配によるかのいずれかである。

また、バクウェレの飲酒には規則がある。例えば、メニョクの分配に当たっては、分配する者がまず少量のメニョクで手を洗って、それからその場にいる分配の受け手のグ

ラスに順に注いでゆく。誰が酒を振る舞うか、どの順番で酒を注ぐか、には飲酒の場を構成する者の間での秩序の確認の意味が付与されている。たまたま現金収入を得た者が、一見ランダムに酒を分配し合っているように見えるバカ・ピグミー社会における酒の分配とは好対照をなしていると言えよう。

バカ・ピグミーだけでなく、バクウェレにもアルコールに溺れて社会的問題を起こす者は絶えない。しかし、そのような個人は特定されており、村落の中で個別に対応がとられる。バカ・ピグミー社会においては、バクウェレと比べて、ずっと多くの成員が同時に酩酊する上に、アルコールによって大きく行動を変える者が多い。コミュニティで対応するというよりも、全員で酔っ払うに近い。このことが、バカ・ピグミー社会における飲酒の愉しみを増大させるとともに、飲酒にともなう逸脱行動の社会的なリスクを高めている。

IV. まとめと討論

IV-1. 狩猟採集民＝農耕民関係における嗜好品

バカ・ピグミーを含むピグミー系狩猟採集民は、コンゴ盆地に広がるアフリカ熱帯雨林の先住民であると考えられている。しかし、かれらの文化が、どれだけ彼らに固有なものなのかは、カラハリ論争やワイルド・ヤムクエスチョンなど修正主義論争が活発化し、アフリカ狩猟採集民文化の真正性が問われるようになると(池谷, 2002: 序論)、ピグミー語の不在や種々の狩猟法の起源などが問題にされてきた(例えば, Blench, 1999)。

本論文で扱った飲酒文化についてはどうであろうか。一般に、酒造りは農耕起源と結び付けて議論される。確かに、狩猟採集民が自ら酒を造るという例は少数の例外を除いて、ほとんど知られていない。酒を狩猟採集民バカ・ピグミーたちがいつから酒を飲むようになったのかは不明であるが、イヌイットにおける飲酒のように、全く酒を知らない人々の間に、わずかたかだか数十年の間に広まった習慣(岸上, 2005)というわけで

はない。

ムブティ・ピグミーについて最初にまとめた民族誌を書いたコリン・ターンプルは、ムブティ・ピグミーの世界観にとって、森の世界と村の世界は対照的な位置づけにあるとした。そこでは、酒は村（農耕民ビラ）の産物であり、農耕民がムブティ・ピグミーを誘惑する大きな要素の1つとして位置づけられている（ターンプル, 1976）。

その後行われた日本人による生態人類学的研究によって明らかにされたピグミー系狩猟採集民と近隣農耕民の間の生態経済的な相互依存関係（「共生関係」）が、炭水化物（農作物）と獣肉（動物性たんぱく質）の相互補完の機能を果たしているというものであった（Ichikawa, 1986; Terashima, 1986）。

バクウェレもまた、ザイール赤道州(Kimura 1992)やコンゴ東北部(竹内 2001)の農耕民と同様に自ら漁撈や狩猟採集を行い、自前で狩猟・漁撈により動物性たんぱく質を得ることができる（Oishi 2006, 大石 2010）。しかし、バクウェレは、自給作物生産のための焼畑の伐開や、換金作物生産のためのカカオ畑の維持をバカ・ピグミーの労働力に大きく依存してきた（林, 2000, Oishi 2012）。

したがって、バカ・ピグミーが農耕を本格的に行って十分な収穫を得られるまでは、例えば塙がボバンダとアカ・ピグミーの物々交換関係について示したように、バクウェレはバカ・ピグミーの労働力提供に対して、酒だけではなく、農作物を含む多様な物品やサービスを与えることにより物々交換的な経済的相互依存関係を維持してきたと推測される（塙 2004）。

しかし、バカ・ピグミーが農耕化に一定程度成功し、農作物の自給が可能になると、バカ・ピグミーにとっては、労働力提供との交換対象ないし労働報酬として積極的に農作物を受け取る生態学的な必要性は減少する(Kitanishi 2003, Oishi, 2012)。結果として、それ以外の「もの」、つまりバカ・ピグミーにとって価値が失われていない酒やたばこなどの嗜好品が両者の交換において重要性を増したと考えられる。つまり、農耕

民からピグミー社会への酒の流れの増加は、もののやり取りにおいて、農耕民とピグミーの間の相互依存の度合いが高まったためではなく、労働報酬にまつわる両者の関係性の変化を意味していると考えられる。

バカ・ピグミーは、定住化の結果、農耕民のごく近傍に住んだり、混住することさえ見られるようになった。このような条件下にあっては、バカ・ピグミー自身は酒造りを行わず、定住集落から離れた森のキャンプにおける滞在時間が多かった時代とは異なり、森の中の狩猟採集キャンプに滞在する以外には、常時飲酒が可能な条件が整えられたと言ってよい。伐採会社の操業や、換金作物栽培の普及により、現金の流通が本格化し、商業民による地域経済への介入の程度が増してゆく中で、農耕民の造る酒がある段階で商品化された。バカ・ピグミーたちは、従来の贈与交換、ないし物々交換によるだけではなく、賃金労働により得た貨幣の購買力を用いて、自らの意思で好きな時に好きなだけ酒を購入することができるようになったのである。このように、農耕・定住化とともに、貨幣経済の急速な浸透による社会経済的な諸変化と連動する形で、バカ・ピグミーは日常的な飲酒習慣を形成するに至ったのである。

農耕民から狩猟採集民への嗜好品の「贈与」は、不平等イデオロギーの再生産の装置のひとつだった。酒はそこで、狩猟採集民には作り出せない「嗜好品」としての重要な役割を果たしていた。本章における報告事例は、その不平等な関係の再生産の仕組みが貨幣経済化と拮抗しつつ変化してきている状況を示しているものと位置づけられる。

IV-2. 嗜好品がつなぐ地域経済と市場経済

調査地では、換金作物栽培の浸透により、バカ・ピグミーの労働の商品化が進んだ。バカ・ピグミーの労働は、現金を払えば、バカ自身を含む誰によってでも利用することができるようになった。

しかし、バカ・ピグミーの労働は、同時に酒や様々な商品とも交換される。これらの交

換の間の価値のやり取りについては、一応、1日当たり 500-1000FCFA といった貨幣価値を基準に一定の共通レートが定められている。しかし、その実態は表面的なもので、実際のところはバカ・ピグミーの労働と交換される酒や商品の質や量は、農耕民とバカ・ピグミー、あるいは商人とバカ・ピグミーの関係に応じて大きく異なっている。

これは、農耕民により生産される蒸留酒の有する特徴、すなわち交換の場に応じて現金を介しても交換されるし、労働やモノとも物々交換されるという点によるところが大きい。労働は商品化されたが、農耕民と狩猟採集民の間では、嗜好品のやりとりを通じて、贈与交換による一般的互酬性の論理が残される余地がかるうじて残されている。

蒸留酒は農耕民女性がつくり、農耕民世帯の貴重な現金収入源となっている。バカ・ピグミーの労働力をめぐって、大規模なカカオ園を経営する商人と農耕民は潜在的な競争関係にある。しかし、バカ・ピグミーが資金力豊富な商人のプランテーションで賃金労働を行い、その賃金で蒸留酒を頻繁に購入することで、農耕民は商人によるバカ・ピグミーの雇用から間接的に裨益することができる。

多くのバカ・ピグミーは、現金の獲得そのものよりも、獲得した現金を使って酒を購入し、愉しむことに価値を見出している。このような、バカ・ピグミーの持つ嗜好品への強い欲求が、カカオ栽培による大きなインパクトを受けた地域経済の中で、バカ・ピグミーを市場経済の中に統合する大きな要因となっているのである。

IV-3. たばこと酒の両義性

換金作物栽培の浸透に伴い、カカオ園経営や賃金労働に適応できるバカ・ピグミーとにくいバカ・ピグミーの間で経済的な不平等が生まれつつある(Oishi, 2012)。現在でも、狩猟採集活動は行われているが、定住集落においては、狩猟採集キャンプに比べて食物分配は限定的であり(Kitanishi 2002)、現金の分配はごく身うちでしか行われず、現金の多くは獲得された直後に、遅滞なくアルコールや商品購入に消費され、現金を蓄積

できる者は限られている(Oishi, 2012).

しかし、定住村において、現金とは異なり、酒の分配はコミュニティの多くの成員に開かれ、活発に分配が行われている(Kitanishi 2006). 現金が得られたとき、酒を購入して居合わせた人々に分配することにおいて、バカ・ピグミーはカネに糸目をつけず、惜しみなくカネをつぎ込んで、分配し合っているように見える. 少なくとも、酒の分配と共飲は、共同体としての統合を実感しあう時間になっているかに見える.

一方で飲酒の機会は日常化し、かつては酒が持ち込まれることはなかった伝統的な精霊儀礼においても、酒が用いられるようになった. 酒は、歌や踊りを盛り上げる効果があると同時に、酒がないと儀礼を行わない、など手段と目的の転倒が見られるようになっていのも事実である.

埜(2004)は、かつて農耕民からピグミーへの酒をはじめとするの嗜好品の供与を「先行贈与」と表現した. しかし、本研究の調査地では、酒は農耕民からピグミーに一方的に「贈与」されるものではなく、優秀な労働者であり、自作農でもあるピグミーが、農耕民から「購入」して消費されるものになった. そのため、カカオ栽培と賃金労働により得られた現金収入のかなりの部分が酒の消費のために使われることとなる. 酒をこよなく愛するバカ・ピグミーは、収入以上に酒を消費し、さらに前借りを重ねて酒を消費する. 借金は、酒のために借金をし、借金を返すために働いているうちにまた酒に手を出し、と言う悪循環で雪だるま式に膨れ上がっていき、二束三文でカカオ園を貸し出したり、最終的には土地を手放さなければならなくなる事例も増えている(第7章).

実は、現金収入が獲得されても、たばこや酒に得られたカネが消えてゆくという問題は、中部アフリカでは狩猟採集民だけにとどまらない. Coad(2010)は、ガボンの農耕民 Pouvi 社会において詳細な家計調査を行い、獣肉により得られる収入の 50%近くが男性によるアルコールとたばこの購入によって消費されてしまうこと、そしてその傾向は高い収入を得ている世帯ほど顕著であることを明らかにした. 現金がもたらされれば、生

業形態やライフスタイル、外部経済との関わり方の相違に関わりなく、たばこと酒の消費が増えるのだとすれば、森の民による嗜好品消費の増加は、グローバリゼーションに付随する文化事象としてより広範な社会を対象に一般化できるのかもしれない。しかし、経済活動の活発化にともなう嗜好品消費行動の活発化に、農耕民と狩猟採集民の間でどのような差異があるのか、あるいはないのかに関しては、より詳しく検討する必要がある。

日常的な飲酒の機会の増加は、もともと酒をもたなかった狩猟採集民に、しばしば「酔うことのみのために酒を飲む」(重田 1989)としか思えないような飲酒行動をもたらす。その結果として、酒を飲んで酔っぱらい、他のバカ・ピグミーや農耕民とのトラブルや諍いを起こして、後々まで物笑いの種になったり、より深刻な問題に発展する事例もみられる。バカ・ピグミーの人々が一般的に酒に弱く、飲み出したら止まらない者が多いという点は、Marloweがタンザニアの狩猟採集民ハッザについて指摘しているのと同様である(Marlowe 2010)。また、既に報告のあるルワンダのトゥワ(Jackson 2003, 2006)、ボツワナのブッシュマン(Syvain, 2006)におけるのと同様に、バカ・ピグミーに置いても一部の男性が、酔っ払った挙げくに家庭内暴力をふるうことがある。さらに、酒やたばこだけではなく、商人により持ち込まれた覚醒剤の流通も密かにはじまっている。アルコールやドラッグの依存は、イヌイトをはじめとする先行研究でたびたび指摘されてきた開発に付随した先住民社会の負の側面であるとも言える。国際的な換金作物であるカオの価格は頻繁に変動し、それは本研究の調査地のような文字通りの辺境地域の地域経済にも大きな影響を与えている。貨幣経済化による外来嗜好品の流入と消費については、継続的な調査により今後の動向を注意深く見守る必要がある。

第7章 バカ・ピグミーの土地問題と民族間関係

I. はじめに

これまで、アフリカ地域社会の慣習的な土地所有・利用システムの特徴として、土地の交換価値よりも使用価値を優先し、当事者間の交渉可能性に開かれた協調的・順応的な性格が強調されてきた（例えば、松村，2006 など）。しかし近年、アフリカにおける土地紛争は協調的側面よりも競争と対立によるマイノリティや社会階層化により生じた下位階級の排除プロセスとして表面化しつつある(Peters, 2004)。2000年代後半に入ると、経済のグローバル化とともに外資によるアフリカへの投資が増加し、国家や特権階級と結びついたグローバル資本による大規模な土地の買い占め(land grabbing)問題に象徴される、土地をめぐる紛争がアフリカ各地で激化した（大山 2009; 2011）。こういった背景から、*Africa* 誌は「アフリカにおける土地の政治学」と題した特集を組んでいる(Lund & Boone (eds.), 2013)。大山による研究を除けば、最近のアフリカにおける土地紛争を扱うこれらの先行研究は、政治経済を軸に地域社会への国家の介入と、それに対する地域社会の政治的対応を強調する一方で、土地資源の利用に関わる生態学的な側面はあまり顧みられていない。報告される事例の地理的範囲は、サバンナ・砂漠景観が卓越する東部・南部アフリカ、西アフリカの英語がほとんどであり、熱帯林内における事例はほとんど見られない。

本章では、これまで人口密度が低く、開発の影響が相対的に軽微であると考えられてきた熱帯雨林地域における土地問題をあつかう。カメルーン東南部の狩猟採集民バカ・ピグミーと近隣農耕民は、独立以前の1950年代から継続的に市場経済化の圧力を受けて

きた。換金作物であるカカオ栽培の導入は、労働力需要を高め、政府による政策と相乗して街道沿いへの狩猟採集民の定住化と農耕化を進行させた(Althabe, 1965)。1970年代に入って熱帯林伐採事業が繰り返し行われるようになると、林道は熱帯林の奥深くまで到達するようになり、貨幣は至るところで流通するようになった。カカオ栽培は、こうした政治経済的条件の中でカメルーン東南部に広く浸透し、定住化したバカ・ピグミーを含む地域住民の主要な現金収入源の一つとなっていた(林, 2000; Kitanishi, 2006; Oishi, 2012)。

熱帯林地域では、地域住民は狩猟採集や焼畑など伝統的生業実践根差した生態学的なハビタット認識と慣習的な土地所有/利用システムを発達させてきた。地域住民は半遊動的な居住様式をとること、焼畑などの人為により植生を開いても放棄後しばらくすれば森林景観が回復するという生態的背景から、半恒久的な土地の占有や利用は想定されてこなかった。一定の地理的範囲を交換価値を有する土地であるという土地表象は発達しにくい。

ところがカカオは多年生樹木作物であり、ひとたび多年生樹木作物が植栽された畑は、プランテン・バナナに代表される伝統的な食糧作物の焼畑と異なって、放棄されない限り、森には戻らない。すなわち、カカオ栽培が長期間継続することは、焼畑経営においては自明であった畑地と森林の生態学的循環が起こらなくなることを意味する。これは、土地利用と土地使用の権利についての認識に多大な影響を与えると予想される。そして現在、イスラム商人のネットワークシステムを媒介に市場経済と継続的なつながりをもつ調査地におけるカカオ栽培では、半永続的な土地利用という歪新たな土地利用の特徴が、バカ・ピグミーと近隣農耕民、そして商業移民との間で新たな対立を生み出している。本章では、この土地をめぐる民族間の協調と対立の両側面を記述し、対立の原因となっている土地認識の相違について明らかにする。

II. カカオ園の貸借と売買

II-1. 前払い契約 (ヤナ)

熱帯林には、銀行のような近代的な金融システムは存在しない。調査地域の住民は、さまざまな理由で現金を必要とするとき、2通りのローカルな金融システムを利用する。

一つは「ヤナ」と呼ばれる仕組みで、将来のカカオ豆の収穫を担保にして、買い手が売り手にあらかじめ定めた割合で金銭を貸し、収穫後に買い手が乾燥カカオを引き取る仕組みである。通常、買い手に有利な非常に高いレートで契約がなされる。ヤナにおける現金とカカオ豆の交換レートは、乾燥カカオ豆一袋当たりいくらかと決められる。取引条件は、当事者間の合意によって秘密裏に決められ、地域内変異が大きい。たとえば、調査地では、乾燥カカオ豆1袋(およそ 100kg に相当する)あたり、20,000-40,000 FCFA (4,000-8,000 円) という2倍程度の幅で契約がなされていた(図 7-1)。1袋あたりの値段は、市場に近ければ近い立地であるほど高くなる傾向にあると言われ、ヨカドゥマ市周辺では 50,000FCFA (10,000 円) 以上になる場合もある。ヤナ契約は、カメルーン東部州で広くみられる慣行であり、カカオ栽培地域において数十年以上の歴史を有するものと推測される。

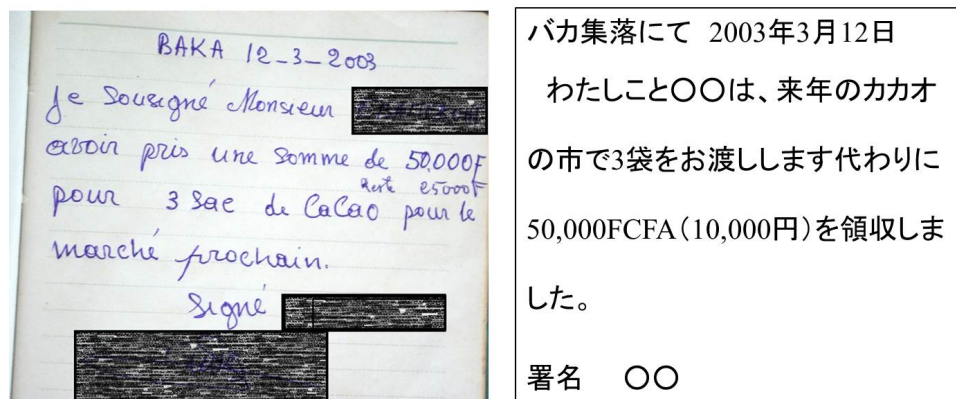


図 7-1. 個人間で取り結ばれたヤナ契約書の例。

II-2. カカオ園の貸借契約(ロカション)と売却

もう一つの地域金融の仕組みは、フランス語で「賃貸借」を意味する名詞である「ロカション」(*location*)と呼ばれるカカオ園の委託栽培の仕組みである。カカオ園の所有者が、いくばくかの金銭と引き換えに農園の耕作と管理を借り手に委ねる。借り手は、農園の維持・管理を任せられる代わりに、収穫されるカカオ豆とそこからの売却益を全て自分のものにできる。契約は、おおよそ12月から2月の時期にあたるカカオ豆の収穫・売却作業の終了直後から翌年の売却時期までを単位として、1年ごとにおこなわれる。実質的な更新回数に制限はなく、貸し手と借り手の交渉次第で何回でも更新することができる。

レートは、カカオ園の管理状況、貸し手と借り手の交渉次第で大きく変動しうる。しかし、賃貸金額の交渉をリードするのは金銭を払う借り手である。というのも、カカオ園の貸し手は通常、病気の治療、子息の秘密結社へのイニシエーション、結婚の婚資の準備、葬式などの社会的・文化的な必要性のために、すぐにでも現金が入用な状況にあるからである。バカ・ピグミーが、しばしばこの仕組みをフランス語で「助けを求める(*demande d'aide*)」と表現することは、このタイプの土地利用と金銭の交換取引に経済的な格差が明瞭に存在することを示している。

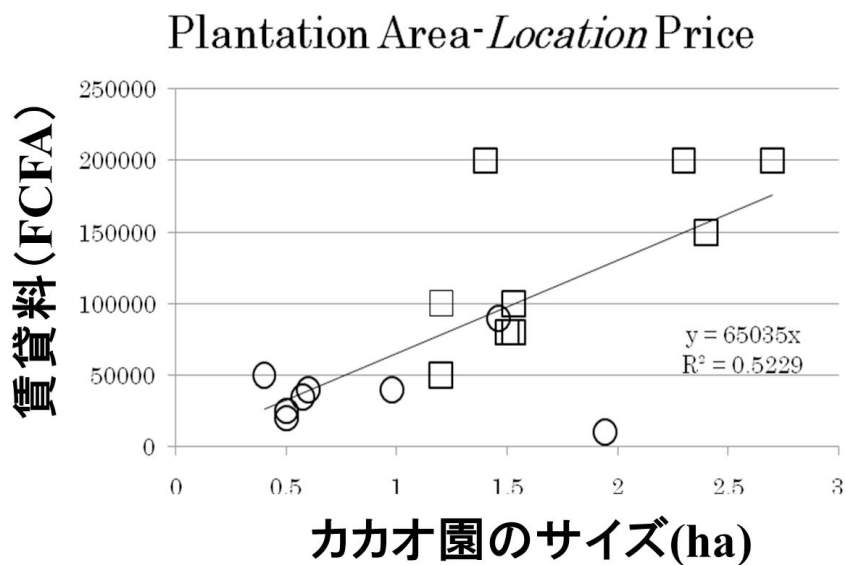


図 7-2 : カカオ園のサイズと賃貸料の関係 (N=17)

調査地におけるカカオ園の平均賃貸金額(N=17)は、1年あたり 65,000FCFA/ha (13,000 円/ha) であった(図 7-2)。1ha のカカオ園から期待できる粗収入は、468,000FCFA であった(第 5 章)。借り手がロカシオン契約から期待できる粗利益は賃貸金額を差し引いた 403,000FCFA/ha/年 (80,600 円/ha/年) と見積もられる。

聞き取り調査によって得られたカカオの収量は、植栽されたカカオの樹齢とではなく、カカオ園のサイズとより強い相関関係を示した(第 5 章)。したがって、カカオ園のレンタル料はカカオ園のサイズに比例すると予想される。しかし、興味深いことにレンタル料は、貸し手と借り手の民族間組み合わせによって大きく異なっていた。バクウェレがバカ・ピグミーのカカオ園を借りる際にはレンタル料は平均 40,690FCFA/ha/年 (N=4) であったのに対して、ハウサはおおよそバクウェレの 2 倍に相当する平均 82,469FCFA/ha/年 (N=3)を支払っていた。ハウサに比べて地元住民との居住歴が短いバミレケなどごく最近移住してきた商業移民は、ハウサよりもさらに高額のリENTAL料金を払う傾向がみられた。

表 7-1：ヤナとロカシオンの比較

呼称	現金と交換されるもの	契約期間	秘匿性	権威の関与	導入時期
ヤナ (yana)	生産物	短期(<1年)	高	無	古い
ロカシオン (loation)	土地の用益権	長期(≥1年)	低	有	最近(2000年代)

聞き取りによればこのロカシオンの仕組みは、ごく最近の 2003-2004 年の収穫期にムルンドゥ市からやってきたあるバイヤーによって調査地に導入されたという。ロカシオン契約は、地域共同体(commune locale)のチーフの承認を必要とするものの、売り手が一般的な生産者価格に比べて著しく安い値段で買い叩かれることになるヤナ契約に比べると、ずっとオープンな形で取り結ばれる。カカオ園をロカシオン制度によって借りた者は、ひとたび投資した畑の全ての管理についての責任を負うことになる（例えば、農園の維持に必要な農作業の放棄は厳しく非難されることとなる）。ロカシオンとは対照的に、ヤナ契約は短い期間に少ない投資で利益を上げるのに効果的だと考えられている（表 7-1）。しかし、ヤナ契約の場合、耕作者が借りた金銭のツケを踏み倒して、約束したカカオを持ってこないあるいは逃散されるかもしれないというリスクがある。したがって、大きなカカオ園を経営する商業移民は、ヤナ契約よりもロカシオンを好む傾向にある。

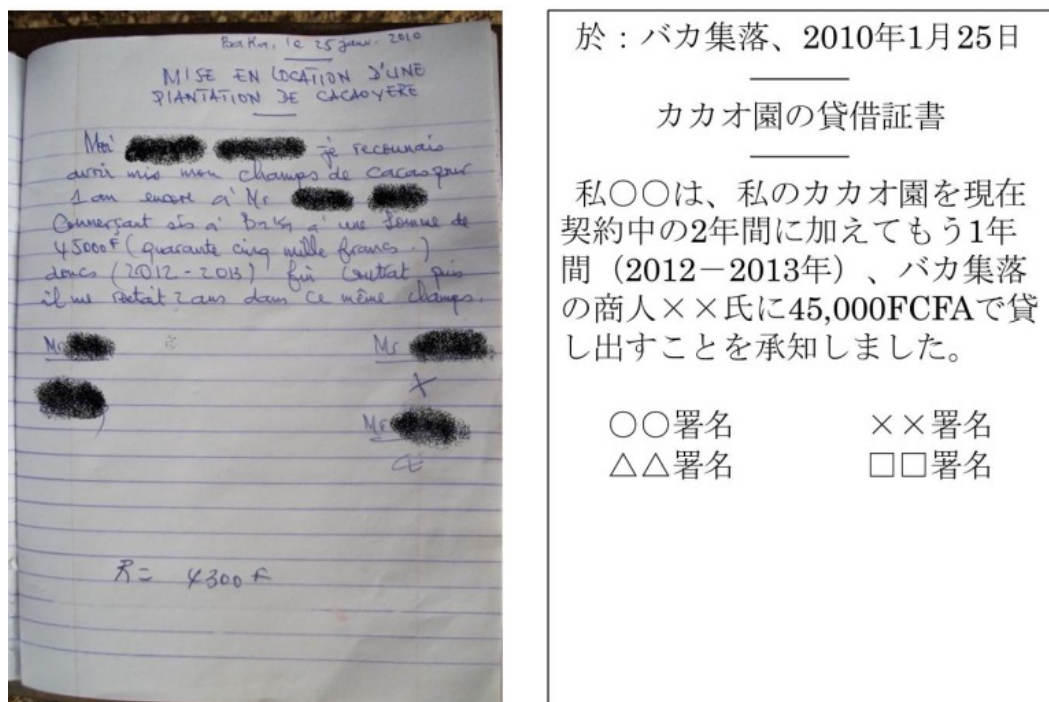


図 7-3. ロカシオン契約書の一例.

図 7-3 は、バカ・ピグミーの男性とハウサ男性の間で交わされたロカシオン契約書の一例である。まだカカオ豆の売却が終わらない 2010 年の年頭に、このバカ・ピグミー男性は、現金を前借りして 2 年間のロカシオン契約の延長をおこなっている。バカ・ピグミーの多くはフランス語の読み書きができないため、ほとんどの場合、契約書は借り手によって作成され、保管される。バカ・ピグミーの当事者は口頭で契約内容を確認して自筆のサインをする。契約書の写しは、村長のところに運ばれて承認を受ける。

借り手は、契約書をさらに最寄りの都市であるムルンドゥ市の政府組織に持参して手数料を払い、書類の公認手続きを行うことがある。地方政府（に所属する役人）は、契約内容について調査することなく手数料を受領して公認手続きをおこなう。こうしておくことによって、借り手は、貸し手とトラブルが起こった際に、地方政府役人が署名した書類を武器として、土地返還要求を含む借金を返済しない貸し手からの様々な要求に對抗することができる。バカ・ピグミーは、彼らに気前よく現金を与える借り手にしば

しば感謝すらしているが、これらの契約は実際のところきわめて不平等なものだと言わざるをえない。なぜならば、カカオ園から収穫される利益のほとんどが借り手のものとなるだけでなく、ロカシオン契約のなされる方向性が、バカ・ピグミーからバクウェレをはじめとした近隣農耕民へ、そして近隣農耕民から商業移民へという偏ったものだからである(表 7-2)。

表 7-2: ロカシオン契約における貸し手と借り手の民族間組み合わせ (N=42)。

		借り手				計
		Baka	Bantu	Hausaほか	不明	
貸し手	Baka	0	9	14	2	25
	Bantu	0	7	10	0	17
	Hausaほか	0	0	0	0	0
	計	0	16	24	2	42

カカオ園の売買は、多額の借金が蓄積した場合やカカオ園所有者本人や親族が多額の現金を必要とするような状況が起こった場合にみられる。多額の債権を有する商業移民は、ロカシオンの借り手に返済不可能な現金の代わりに土地の権利を要求することもある。カカオ園丸ごとの売買契約。開墾者は、一切の権利を失う。図 7-4 は、あるバクウェレの兄弟がフルベ商人にカカオ園を売却した際の証文である。

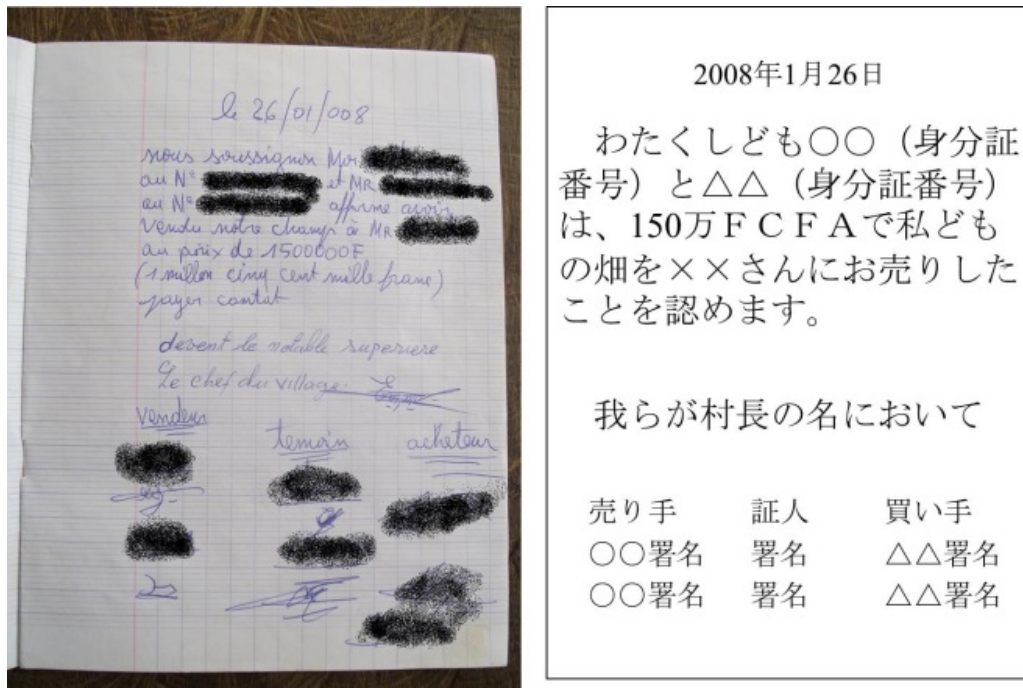


図 7-4：土地売買契約書の一例。

II-3. カカオ園の賃貸・売却理由

バカ・ピグミーの所有するカカオ園のうち 25 筆 (43%) がハウサ、バミレケ、そしてバクウェレに貸し出されていた。上述したように、これらの契約における貸し手と借り手の立場は対等なものではない。それにも関わらず、なぜ主要な貸し手であるバカ・ピグミーは不利益を承知しながらも、他民族集団に頻繁にカカオ園を貸し出すのだろうか。借金のみがバカ・ピグミーがロカシオン契約を結ぶ要因となっているわけではない。以下の事例のように、バカ・ピグミー集団内部の事情から、ロカシオンをおこなう場合もみられる。

事例 7-1. バカ・ピグミーの壮年男性 T は、1.5ha 以上のサイズのカカオ園を所有している。T は、他のバカ・ピグミーが彼の畑からカカオを盗むので、バミレケ商人と契約を結んで共同で管理することにしたと私に語った。T によれば、プランテ

ン・バナナのような自給作物が盗まれるのと、カカオ豆が盗まれることは彼にとってちがうことである。バナナは、主食であり皆が必要とするものだが、貨幣は一部の特定の目的のために必要になるものである。T はさらに、カカオ園からの現金収入を分配する場合であっても、自分の金を自分の眼で確かめてから分配したいと加えた。T の主張は、平等な食物分配が成立するためには所有者の存在が重要であるという北西の議論と整合性が認められる(Kitanishi, 2001)。

事例 7-2. 壮年バカ・ピグミー男性 BMT は、数年前、村の「経済の父」と呼ばれるハウサ商人 IBM に自分のカカオ園を貸したことがある。BMT は、IBM とロカシオン契約を結んだ理由について、(1)自分が村を不在にして旅行に出る間、親族が彼のカカオ園の面倒を見る可能性が低いと思ったため、(2) 調査地から 300km ほどの道のりがあるンガトー村への旅行費用が必要だったため、と説明した。2 年後に予定より 1 年長い旅行を終えて村に戻った BMT は、IBM に 1 年分のレンタル料の追加支払いを求めた。IBM は BMT に 100,000 FCFA (20,000 円)を支払い、BMT は再び自分のカカオ園の作業をするようになった。

事例 7-1 では、バカ・ピグミーがロカシオンの仕組みを、カカオ園からの収穫の分配をめぐる葛藤に対処しようとしていた。また事例 7-2 では、ロカシオンの仕組みを利用することで、定住集落を留守にしている農園が維持され、現金収入が得られていた。

Ⅲ. 社会的な不平等と対立

土地の貸借をめぐるトラブルをみてゆくことで、狩猟採集民と非狩猟採集民の間の、そして狩猟採集社会内部の社会経済的な不平等についての葛藤や対立が明らかになる。

事例 7-3: バクウェレ男性 M は、別れた元妻への金銭支払いのため、「友人」(リンガラ語で *ndeko*, 擬制的な親子関係)であるというバカ・ピグミー男性 N の所有するカカオ園を、本人の承諾なく勝手にロカシオン契約に入れ、契約によって得られた現金を独り占めした。M は、普段自分は「友人」であるバカ男性の要求になにかれと応えているのだから、N が自分を助けるのは当たり前だと説明した。しかし N は、この取引について自分の意志に反するものだと言明したうえで、「農耕民は私たちにとって良くない」と漏らした。そのような M との不公平な関係にどのような利点があるのかと問うても、N はただ「彼は私の「友人」だ」と繰り返すのみであった。

調査地域におけるバカ・ピグミーとバクウェレの間のパトロン＝クライアント関係は弱体化しており、普段は表面に現れてこないのだが、土地をめぐる交渉において、このような形で実体化されることがある。なお、畑の所有者の同意なしに契約が結ばれることは、バカ・ピグミーとバクウェレの間だけではなく、バカ・ピグミーの間でも類似の事例が起こっている。調査地では、遠く離れた村の出身男性が多く婚入している。カカオ園の権利をめぐる葛藤は、そのようなバカ・ピグミーカップルの夫と義理の父親の間でよくみられる。

事例 7-4: あるバンガンドゥ地域出身のバカ・ピグミーの男性 Y は、調査村のバカ・ピグミーの女性 M と結婚し定住している。Y は、調査村と出身村の両方に複数のカカオ園を所有しているが、Y が里帰りのために調査村を留守にしている間に、義父は Y に無断でカカオ園をハウサとロカシオン契約してしまった。出身村から戻ってこのことを知った Y はたいへん不満に思い、義父に対してレンタル料の分け前を要求する権利の主張をすべきか否か迷ったが、M との結婚を維持するために、不承

不承受け入れた。

土地の権利をめぐる契約が、「正統な所有者」との間で結ばれていなくとも、実効性をもってしてしまうことが事例 7-3 および事例 7-4 に示されているような問題を生む結果になっている。カカオ園は男性が所有するということになっているので、ロカシオン契約が結ばれる過程からは、しばしば女性が除外される。ほとんどの農作業は、夫婦を単位として行われるのにも関わらず、夫たちは、配偶者をはじめ他の親族の意見を考慮しないままにロカシオン契約を結び、女性たちの反感を買うこととなる。妻は、夫がカカオ園のロカシオン契約について一言の相談もないままに決め、さらには得られたレンタル料を自分たちに十分に分配することなく、飲酒や商品へと即時消費してしまうことに対して不満の声を上げる。

IV. カカオ園と土地の権利をめぐる論争

前節でみたようなカカオ園の貸借・売買事例の増加は、土地と森の権利に関する論争を引き起こしている。バカ・ピグミー、バクウェレ、ハウサやバミレケといった異なるアクターの間での土地の権利に関する正統性をめぐる議論は、主張される権利の内容と文脈が異なっているために、噛みあわない。森林や土地の所有と利用に関して、村落レベルのローカルな権威に基づく慣習的な権利と、政府による土地法という少なくとも 2 つの規則が存在する。焼畑をおこなう上で、最もシンプルで合理的だと思われるのはバカ・ピグミーとバクウェレの間で共有されている慣習的な土地利用のルールである。そのルールでは、焼畑地とその後背地にある森林を利用する権利は、その森をもっとも早く伐開して畑を切り拓いたものにあるとするものである。しかし、このルールは焼畑のような一時的な土地利用とそれに付随した権利を前提としており、カカオ栽培のような半永続的、かつ独占的な土地利用が行われる事態は想定されていない。またカメルーン

国家による土地法では、原則として土地はすべて国家による総有制であり、役所への登記を行った市街地内の宅地等を除き、土地の私有は認められていない。つまり、慣習法、国家法ともにカカオ園の貸借や売買は規則外の事態ということになる。それにも関わらず、村長や地方行政官は、土地の貸借や売買を事実上認めている。これには、地域の権威的な立場にある人々は、ロカシオンのような契約を承認することによって、いくばくかの「手数料」を得られることも影響していると思われる。

地元住民のうちとくにバクウェレなどの土着農耕民は、現在バカ・ピグミーが利用している土地を含め、定住集落周辺の土地の権利が外部者に流出することによって、自分たちの土地資源へのコントロールが損なわれることを懸念している。2007 年にバカ・ピグミーの男性 B がムルンドゥ市のバミレケ商人 W に 3ha を越える比較的大規模なカカオ園を売するという出来事が起こった。10 月 21 日、村長は、人々を招集して農地の権利移動の問題について話し合いが持たれた。話し合いの参加者（26 人）の内訳は、バクウェレが過半数の 16 人を占め、残りは 4 人がバカ・ピグミーで、3 人がハウサとバミレケ商人であった。カカオ園の貸し手の多くはバカ・ピグミーであるにも関わらず、参加者数は少なかった。この会合の場には、たまたまフィールド・ワーク中であった日本人研究者も招かれて、議論は 2 時間 40 分にわたって続いた(木村, 2010: p. 253)。議論の大半は、B から W へと売却されたカカオ園取引の是非に焦点があてられた。チーフダムの書記によって記録された会議内容の記録によると、バクウェレの参加者は、土地の所有者が村内居住者から村外居住者に移ることを問題視した。彼らは、問題のもととはカカオ園の貸借システム（ロカシオン）にあることを指摘し、村長はロカシオン契約の禁止を宣言した。しかし、手っ取り早く現金が必要な人々は極めて容易に新たなロカシオン契約を結ぶ。会合で決められた禁止令はロカシオン契約を減少させることに、ほとんど何の効果もたらさなかった。実際、会合の後に最も早く新たなロカシオン契約を結んだのは禁止令を出したはずの村長その人であった。

2008 年に聞き取りを行った農業省の役人は、これらの土地の貸借契約は望ましくないものの、すぐに現金が必要とする地域住民の「貧困」状況を考慮すれば 禁止することは難しいという見解であった。上述したように、カメルーン国家の土地法は土地の私有、したがって売買を許していない。しかし実際には土地は農業実践などのために私的に利用されている。アクターによって異なる見方で土地に付随した複数の権利が把握されているために、この地域における土地の権利問題は複雑なものとなっている。

V. 土地契約をめぐる地域住民間の駆け引き

しかし、バカ・ピグミーは単に土地の貸借と売買の犠牲になっているわけではない。かれらの少なくとも一部は、借り手である農耕民や商業民を騙すことによって抵抗したり、土地の権利について独自の主張を行う様子が観察された。

事例 7-5：1 年半の間にバカ・ピグミーの壮年男性 KG は、以下に記すように異なる農耕民や商人と 4 回のロカシオン契約と 1 回のヤナ契約を重複して結び、300,000FCFA（6 万円）を得た。

- ① KGA（バカ・ピグミー）が ALB（バクウェレ 1）にカカオ園を貸す。
- ② ALB が罾猟のため、森に入っている間に KGA が同じカカオ園を ALZ（バクウェレ 2）に貸す。
- ③ ALB が戻ってきて二重貸しが発覚、ALZ が町の憲兵隊を呼ぶ。
- ④ 裁定の結果、ALZ が ALB に賠償金を支払う（100,000F）。
- ⑤ ALZ には金がなかったので、DBS（バクウェレ 3）が 80,000F 援助し、代わりに KGA のカカオ園の賃貸権を得る。
- ⑥ KGA と DBS が、2014 年までカカオ園を借りる契約更新をする。

- ⑦ KGA が THS（バミレケ商農）に借金を依頼。 THS と KGA はヤナの契約をする。1 サック 20,000F でクレジットを渡す。
- ⑧ ヤナ契約が 100,000F（5 サック分）まで行ったところで、MLO（ハウサ商農）がそこに 50,000F を足すから共同で KGA の畑をレンタルしないかと提案。
- ⑨ KGA は、MLO と THS の提案を受けてカネを受け取り、カカオ畑を貸す。
- ⑩ 再度 2 重貸ししていることが発覚し、問題の決着は村裁判に持ち込まれた。

カカオ園の所有者の KGA は、借り手たちにカカオ園の貸借を強制されたと主張したが、借り手らはこの主張を否定した。村裁判の結果、多重契約を行った借り手らは互いの契約金を弁償しあうことが決められ、KGA への特別のペナルティは課されなかった。この事例では、カカオ園の所有者としての KGA の立場は保全され、結果的に利益すら得ることになった。

事例 7-6：父親によって、自分の知らないうちに自らのカカオ園を売却されてしまったバカ・ピグミー男性 D による新しい畑の所有者のハウサ男性 S との交渉の事例である。D は、父親によって売却されたのは、カカオ樹とその生産物であるカカオ豆だけであって、土地そのものや農地に残っているプランテン・バナナや他の産物は彼自身の所有であると主張する。D は、このハウサと 30 分以上にわたってフランス語で議論を続けた。

私が、D と彼が作ったカカオ園の中を歩いていると、突然 S が現れ、そのカカオ園は既に D の父親によって S に売却されていることを告げたうえで、なぜ D がカカオ園に来たのかと問い質した。D は、カカオ園の売買契約は彼の父親が D に相談なく勝手に結んだものであること、その契約によって売られたのは畑の中のカカオ

樹のみで、自給用に D と家族が植えたプランテン・バナナは生計維持に必要なものであり、自分には自由に収穫をする権利があると主張した。

バカ・ピグミーは長期間にわたる土地保有の仕組みを発達させてこなかったもので、半永久的な土地所有の概念を持っていない。したがって、現金と引き換えに土地へのアクセスの権利が制限されるという論理が理解しがたいものであることは容易に想像がつく。

VI. 地方政府による土地問題への介入

カカオ生産の安定と増加は、カメルーン政府の政策でもある。実際、カカオの輸出は、カメルーンの外貨獲得に貢献してきた。最近、カメルーン政府はカカオ生産者とバイヤーの間の取引について、いくつかの政治的措置を発令した。2010年8月17日、通商大臣はカカオ売買に関する新法を公布した。新法では、直接生産者から買い付けを行う商人は登録を義務付けられ、生産者は、カカオ生産量の調整を行うことを求められた。政府は、これによってカカオの生産・流通に秩序を与えようとした。

Vivre aujourd'hui

30 Sep 2010

Boumba et Ngoko : Le préfet interdit la vente et la location des plantations

Pratique courante et illégale dans la filière cacao, elle bloque, selon Gabriel Eloi Essoa, le développement de ce département de l'Est.

Le préfet du département de la Boumba et Ngoko à l'Est, Gabriel Eloi Essoa vient de signer un arrêté préfectoral interdisant non seulement un marché illégal du cacao appelé localement «le yana», mais aussi la vente et la location des plantations agricoles dans l'ensemble de ce département. Pour se justifier, Gabriel Eloi Essoa s'est adressé longuement aux populations de Yokadouma, chef lieu de ce département de l'Est après sa tournée de prise de contact. «Parlant justement de l'agriculture, nous travaillons mais nous ne jouissons pas du juste prix de notre travail à cause de ce que votre porte-parole a appelé les vautours. Mais [aussi] à cause de notre turpitude. Comment je peux remettre plus de quatre sacs de cacao à quelqu'un contre 30.000 frs ? C'est une aberration le «yana», un scandale, le vol. C'est pour cela que j'ai pris mes responsabilités en interdisant cette pratique sur l'ensemble du département de la Boumba et Ngoko», a-t-il déclaré.

Gabriel Eloi Essoa estime qu'il appartient aux uns et autres d'appliquer cet arrêté. «Nous devons donc être disciplinés ; ne pas hypothéquer notre récolte avant le temps. Nous vendons notre propre bien comme si nous volions. Je parle également de vente et de location des plantations». Un procédé jugé «illégal» par le préfet du département de la Boumba et Ngoko. Raisons évoquées : «ces plantations sont sur le domaine national sur lequel vous n'avez pas de titre foncier dont légalement vous ne pouvez pas vendre cette espace là. Et ces plantations vous avez beau les créées, elles ne vous appartiennent pas seul. Vos épouses et vos enfants ont investi là-dessus et ont les droits là-dessus et vous ne devez pas hypothéquer cela si facilement. Je voulais donc qu'on tourne le dos à cette pratique.»

D'après les statistiques, Yokadouma produit à elle seule dans ce bassin de production 5000 tonnes environ de cacao par an. Malheureusement, les populations ne bénéficient pas de leur récolte à cause de la pratique du «yana» qui consiste à prêter de l'argent aux planteurs et récupérer plutôt le cacao. Une pratique entretenue par des commerçants véreux qui profitent non seulement de la précarité des planteurs mais aussi du manque de voies de communication pour évacuer la production.

Tout en approuvant l'initiative du préfet, les populations de Yokadouma ont adressé à Gabriel Eloi Essoa des revendications ; notamment la construction d'un monument en la mémoire du chef Zokadouma qui signifie l'éléphant qui ne tombe jamais, fondateur de la ville qui fut exécuté par les allemands. Elles profitent en effet des célébrations des cinquantièmes de l'indépendance (2010) et de la réunification (2011). De même qu'elles ont évoqué le cas de l'exploitation forestière, principale activité du coin qui ne bénéficie toujours pas aux riveraines puisque «depuis l'exercice 2007, nous sommes sans nouvelle des 10% de cette recette qui nous revient». Selon l'orateur, les comités de gestion et l'exécutif municipal pillent silencieusement ces fonds avec la bénédiction des certaines autorités administratives. Même silence entretenu en ce qui concerne les revenus de la forêt communal. Tout comme la création des infrastructures sociales. Pour Gabriel Eloi Essoa qui effectuait ainsi sa première sortie officielle depuis son installation le 29 juin dernier, toutes ces revendications sont fondées et seront intégrées

Sebastian Chi Elvido, à Yokadouma

図 7-5 : *Quotidienmutations.Info* 紙に掲載された「ブンバ＝ンゴコ県：知事が農地の売買と貸借を禁止へ」と題する記事。

続いて、2010 年 9 月 30 日にはブンバ＝ンゴコ県の新知事(プリフェ)の Gabriel Eloi Essoa が、カカオ園の貸借および売買を禁止する条例を發布した。以下は、カメルーンのインターネット新聞 *Quotidienmutations.Info* 紙に掲載された「ブンバ＝ンゴコ県：知事が農地の売買と貸借を禁止へ (Boumba et Ngoko: Le Prefet interdit la vente et la location des plantations)」と題する記事の(2010 年 9 月 30 日付公開; 図 7-5)中の知事発言を引用した部分の翻訳である。

「これらの農園は国家に属するものであって、登記していない土地を市民が勝手に売買することは違法である。それに、あなたが作り上げた美しい畑は、あなただけのものではない。あなたの配偶者や子供たちもまたそこに労働力を投資したのであり、かれらにも畑についての権利があるのだから、簡単にそれを手放すべきではない。だから私は県民にヤナやロカシオンを止めていただきたい。」

知事は、土地所有に関する法的な根拠を挙げて土地の売買や貸借の違法性を述べたうえで、ヤナやロカシオンに関わる倫理的な問題についても指摘している。これまで、ヤナやロカシオンが引き起こしている問題は、地方行政官によって黙認されていたことからすれば、この知事の発言や土地取引の禁止措置は画期的だと言えよう。小規模なカカオ生産者の土地の権利を保護し、買い付け人登録制度のもと、生産物取引に課税することで、国際価格高騰に伴うカカオ生産の増加を政府の税収増加にもつなげることが期待されていることも押さえておく必要がある。

VII. まとめ

まとまった額の現金が必要な状況が生ずると、バカ・ピグミーは自分たちのカカオ園を貸借契約に入れたり、売却してしまう者までいる。そのため、彼らの一部には毎年の

ように新しいカカオ園を作っては収穫ができる数年後にはすぐ手放す、ということを繰り返す者もいる。借金がたまると、商人たちは地域共同体の伝統的な権威や地方行政官の権威を利用した「契約書」によって、バカ・ピグミーが利用している土地への権利を獲得しようとする。しかし、バカ・ピグミーは商人が考えるような半永久的に土地を独占所有し、利用するという概念を持ってこなかったし、そのような考え方を受け入れてはいない。カカオ園は土地であると同時に、バカ・ピグミーにとっては食料畑であり、森でもある。

ここに、狩猟採集民と非狩猟採集民の間で、土地に関して取引される諸権利についての認識の齟齬が生まれている。バカ・ピグミーは、これまで表立って自らの権利の主張を行うことは稀れであった。しかし、土地の売買契約によって土地へのアクセスが奪われるリスクに直面したバカ・ピグミーの中に、商人を相手とした交渉や村内裁判のような公的な場で積極的にカカオ畑やそれに隣接する森を利用する権利を積極的に主張する機会が増えてきていることは注目に値する。

バカ・ピグミーは、貸借契約を重ねるなどして、商人との取引を操作しようと試みることがある。これは、商人によるバカ・ピグミーの労働力搾取を部分的に埋め合わせる意味合いも持っている。

バカ・ピグミーが長期間定住集落を不在にする際に、現金収入を得つつ財産としてのカカオ園を維持するという手段にもなっていたという点において、カカオ園の貸借契約にはポジティブな側面も見受けられる。貸借契約によって、畑の管理をバカ・ピグミー以外に委ねてしまえば、収穫前後のカカオ豆の盗みをめぐる葛藤を回避することができる。ロカシオン契約を適切に活用することによって、カカオ園という定住集落における財産を維持しつつ、森での長期にわたる遊動生活も享受するという2つの異なった目的を同時に満たすことができるのである。

終章

本論文では、カメルーン東南部における農耕民と狩猟採集民の関係の諸相を、コンゴ国境域の調査村の事例をもとに明らかにしてきた。分析に際して注目したのは、(1) 外部世界と地域社会の相互作用のなかでの農耕民＝狩猟採集民関係の歴史的な変遷過程、(2) 農耕民＝狩猟採集民関係と人／自然（動物）関係にみられる多様な様態の二項対立的構造との関連性、(3) 貨幣経済浸透下における農耕民＝狩猟採集民関係の存続と変容、の3点であった。ここでは、まず第2章から7章までの内容を要約しつつ得られた知見の整理を行ったのちに、総合的な考察を加える。最後に今後の展望を述べる。

I. 各章の要約

第2章では、現地の古老のオーラル・ヒストリーにもとづく現地踏査と植民地期に作成された歴史資料によって、ジャー川下流域における過去100年間の人間の居住史と外部世界との関わりについて明らかにした。現在のブンバ・ベック国立公園、ロミエ市、コンゴのンバラ郡のバンツーA系統の住民は、第一次大戦の独仏戦争(1905-1910)、フランス領赤道アフリカでの強制労働(1920-30)、カメルーン独立直前の新政府軍による共産ゲリラの掃討作戦(1950年代後半)の少なくとも過去3回の紛争や徴用に巻き込まれて、複数の方角からジャー川沿いの森のなかへと逃避した。また、ンゴラという放棄集落には植民地会社による野生ゴム採集のための大規模な強制労働キャンプが作られ、サバナ地域からカコの人々が連行されて労働に従事させられた。これらの結果、ジャー川沿いにコナベンベ、バクウェレ、ジェム、カコなど複数の出自集団による混合部族的性格をもつ集落群が形成された。バカ・ピグミーの古老からは、ゴム採集を手伝った記憶についての語りが得られた。農耕民と狩猟採集民の居住様式は、農耕民数世帯が数kmお

きに分散居住し、その周辺の数 km 離れた森林内にバカ・ピグミーのキャンプが衛星的に分布する形態をとった 1910 年代から 1950 年代後半までの植民地期と、カメルーンの独立前後の強制移住政策により、定住性の強い大規模な集落に定住するようになった 1960 年代から現在までとで大きく異なっていたことが明らかとなった。独立前後の強制移住の際に、ジャー川沿いに居住していた農耕民、狩猟採集民はカメルーン側とコンゴ側に分かれて移住し、その際にいくつかの擬制的な親族関係は弱体化したと考えられる。ジャー川沿いに確認された 21 の農耕民の定住集落跡からは、放棄年代によって土器、鉄器、工業製品などさまざまな人為遺物が発見された。また、カカオ園、ゴム園、パイナップル園の跡地が森林内に確認された。定住化後の 1960 年代以降は、調査地域が 1970 年代後半から 1980 年代前半まで熱帯林伐採事業の基地となったことから、従来の農耕民との関係に加え、労働者として出稼ぎにきた他地域からの農耕民や商業民との関係に影響を受けつつ、バカ・ピグミーの定住集落は比較的狭い地理的範囲のなかで離合集散を繰り返してきた。2000 年代前半からは、農耕民と商業移民が一部のバカ・ピグミーの定住集落の近傍に移住を始めた結果、村落内における土地利用において狩猟採集民の周縁化が目立つようになった。

第 3 章では、バクウェレの自然資源利用の社会的側面を取り上げて、村と森でバカ・ピグミーとの関わり方が変わることを森棲み農耕民のセルフ・イメージの両義性との関わりから考察した。カメルーン東南部とコンゴ共和国の国境を流れるジャー・ンゴコ川（コンゴ川支流）沿いに居住するバクウェレは、焼畑農耕民であるが、同時に河川漁撈を得意とする。乾季になれば、生まれたての赤ん坊や妊婦を含む、世帯の構成メンバーのほとんどに加え、料理バナナ、キャッサバ粉などの多量の農作物、鍋や寝具などの家財道具、あげくにニワトリ、ヤギまでを丸木舟に満載して漁撈に出かける。バクウェレの漁撈の特徴は、家族で泊りがけの、それも時に 2 カ月を超える漁撈採集行を行うことである。バクウェレの漁撈活動の特徴は、多様な魚種や水棲動物を対象とした漁法の多

様性にある。河川本流で行う成人男性中心の漁だけではなく、森林内を流れる小河川の水を堰き止めたり、森林内のみずたまりの水をかいぼりして中の魚をつかみ取る掻い出し漁など、女性やこどもの得意とする漁が含まれていて、参加者の多くはなんらかの漁で活躍できる。河川漁撈は、社会的弱者にも参入が容易な身近な生業としても、重要な役割を担っている。定住村落と漁撈キャンプでは、生業活動や食生活が変わるだけでなく、社会的なモードが大きく変わり、個人や集団の間の社会的緊張の解消や社会関係の組み換えに大きな役割を果たしている。漁撈キャンプと定住村落における価値転換は食物選択から民族間関係にまで及び、定住村落では政治的優位に立つ焼畑農耕民は狩猟採集民をことさらに侮蔑するが、漁撈キャンプでは態度を逆転させ森の文化に詳しい狩猟採集民と宥和的な行動をとり一定の敬意すら示すのである。

第4章では、バカ・ピグミーとバクウェレの関係を、この地域の熱帯林に棲息しているゴリラとの関係から論じた。カメルーン東南部の熱帯林には多様な動物が棲息しているが、とりわけゴリラは、農耕民＝狩猟民関係の象徴的側面と深く関わっている。バカ・ピグミーは、近隣に居住している農耕民バクウェレをゴリラに喩え、死ぬとゴリラに生まれ変わる「ゴリラ人間」だと考えている。一方、バクウェレによれば、バカ・ピグミーは動物変身能力を持ち小動物に変身して畑の作物を盗むなどの悪さをする。ゴリラの中には、姿はゴリラだが、魂は人間が変身した存在である「人間ゴリラ」が紛れているという。バカ・ピグミーは自分たちの束縛を嫌う生き方を理解しようとしめないバクウェレに対して、ゴリラに対するのと同様の態度で臨み、バクウェレは、バカ・ピグミーを獣害をもたらす動物と同様にみなす。バカ・ピグミーとバクウェレの関係は、両者の動物との付き合い方と影響し合っているだけでなく、妖術的思考を媒介に動物による介入を受ける。そこでは人間と動物の関係は錯綜的であり、両者が混淆しながら動物を含めた社会の相互作用が進んでいると見ることができる。

第5章では、調査地域における顕著な社会経済現象であるバカ・ピグミーによる樹木

性換金作物（カカオ）栽培実践をとりあげ、近隣農耕民、および商業民との関わりから論じた。カカオ栽培は、経済的な利益をもたらす一方で、長期的かつ集中的な労働力投下を必要とする。バカ・ピグミーがいかにそれに適応しているかを、とくに貨幣経済浸透下におけるバカ・ピグミーと近隣農耕民、商業民との間の民族間関係の動態に注意を置きながら検討した。木材伐採事業とそれにより活発化した換金作物栽培の流れの中で、バカ・ピグミーは自分たちの畑の中にカカオを植えはじめた。バカ・ピグミーは、より大きなカカオ園を持つ農民の畑で賃労働を行うことにより現金収入を得てもいる。酒や商品への強い欲望のため、多くのバカ・ピグミーは得られた現金収入を得られた直後に使ってしまう。一方で、少数ではあるが、カネを節約して貯蓄を行い、他のバカ・ピグミーを雇用してカカオ園を拡大しようとする者もいる。カカオ栽培は、バカ・ピグミーに、近隣農耕民による媒介やコントロールのない直接的なかたちでの市場経済へのアクセスを可能にし、バカ・ピグミーの地域社会における政治経済的な自立性を高めている。同時に、それは個人間に経済的不平等を生むことにつながり、経済利得への利己的な関心と平等主義的な規範との間でバカ・ピグミー社会に葛藤を生み出している。

第6章では、嗜好品としてのたばこ酒が、贈与・交換経済と市場経済という異なる交換論理が併存する地域経済の中で、狩猟採集民＝農耕民関係の維持や再編にどのような役割を果たしているかを検討した。また、他地域との比較から農耕民とピグミー系狩猟採集民の経済関係の歴史的変化の文脈のなかで本事例研究の位置づけを行った。バクウェレは、自給作物生産のための焼畑の伐開や、換金作物生産のためのカカオ畑の維持をバカ・ピグミーの労働力に大きく依存してきた。バカ・ピグミーが焼畑農耕を受容し、自給可能な収穫を得られるまでは、バクウェレはバカ・ピグミーの労働力提供に対して、農作物とともに嗜好品を含む多様な物品やサービスを与えることによって物々交換的な経済的相互依存関係を維持してきたと推測される。しかし、伐採会社の操業や、換金作物栽培の普及により、現金の流通が本格化し、商業民による地域経済への介入の程度

が増してゆく中で、農耕民の造る酒がある段階で贈与品から商品へと変化した。それは同時に、バカの労働力の商品化をも意味した。バカ・ピグミーたちは、従来の贈与交換、ないし物々交換によらなくとも、獣肉やカカオ栽培からの収入や賃金労働の報酬として得た貨幣の購買力を用いて、自らの意思で好きな時に好きなだけ酒を購入することができるようになった。貨幣経済の急速な浸透による社会経済的な諸変化と連動する形で、バカは日常的な飲酒習慣を形成するに至っている。農耕民から狩猟採集民への嗜好品の「贈与」は、不平等イデオロギーの再生産の装置のひとつだった。酒はそこで、狩猟採集民には作り出せない「嗜好品」としての重要な役割を果たしていた。調査地域では、その不平等な関係の再生産の仕組みが貨幣経済化と拮抗しつつ変容してきていると位置づけられる。

第7章では、土地への権利をめぐる民族間／民族内の対立（協調）的關係とその背景にある土地表象の相違について論じた。カカオは多年生樹木作物であり、ひとたび多年生樹木作物が植栽された畑は、プランテン・バナナに代表される伝統的な食糧作物の焼畑と異なって、放棄されない限り森には戻らない。過去半世紀以上にわたって、カメルーン東南部におけるカカオ栽培は、ハウサなどイスラム商人のネットワークシステムを媒介に市場経済に接続されてきた。半永続的な土地利用という亜新たな土地利用の特徴が、バカ・ピグミーと近隣農耕民、そして商業移民との間で新たな対立を生み出している。カメルーン東部州では、カカオ栽培と関連して生産物を担保にした融資制度(ヤナ)とカカオ園の貸借制度(ロカシオン)というローカルな金融システムが存在する。2000年代以降に広まった土地貸借制度は、農地を保全しつつ定住集落を長期間不在にすることを可能にしたり、収穫物の分配をめぐる葛藤を棚上げにするというポジティブな側面がある反面、取引において地元住民（バカ・ピグミー、バクウェレ）の負債が拡大すると、売買契約に移行する事例がみられた。カメルーンの土地法は未登記の土地の私有、売買、貸借を許していないが、慣習的な土地利用の規則と国家法の間で土地取引は見過ごされ

ている。カカオ園は、熱帯林植生を皆伐することなく、むしろ熱帯林植生を活用して形成されるので、カカオ園内には日常的な採集活動の対象となる有用樹種が少なからず分布している。また、南米の熱帯林を原産とするカカオと東南アジアの熱帯林原産の主食作物であるプランテン・バナナの農業生態学的な相性は大変良い。したがって、定住集落の周辺半径 5km 余りにわたって見られるカカオ園は、貴重な現金収入を生み出す財産であるだけでなく、混作された自給作物の供給源であり、様々な非木材林産物の採集場所にもなっている。土地の取引が行われるなかで、狩猟採集民、農耕民、商業民のそれぞれの間で、やりとりをする土地への権利の意味するところ（用益権の内容）が異なっているために齟齬が生じていることが明らかになった。

II. 結論

II-1. 近現代における農耕民＝狩猟採集民関係の変遷

ここでは、過去 100 年間の地域史のなかで、農耕民と狩猟採集民の関係を大きく 3 つの時代区分に分けて考察する。

	カメルーン独立 定住集住化 伐採事業 道路開通		
	第1期	第2期	第3期
	1910-1950前半	1960-1970	1980-現在
農耕民	半定住	定住	定住
狩猟採集民	遊動	半定住	定住
商業民	-	訪問	定住／訪問
獣肉交易	物々交換⇒現金販売		
象牙交易			
換金作物	ゴム	カカオ	

図 8-1: 農耕民＝狩猟採集民関係の時代区分

第1期は第一次大戦後の1910年から1950年代後半の強制移住／集住化までのフランス植民地期で、第2期はカメルーン独立から1970年代後半の熱帯林伐採事業の開始まで、第3期は1980年代から現在までである。

第1期より以前、およそ150年ほど前のバンツー諸族間の部族戦争の時期に複数の出自集団から現在のNki国立公園内の森林内に逃避してきた農耕民集団が、ジャー川流域に定着し、部族混合的な居住集団をつくった。第1期では焼畑移動耕作をしつつ漁撈をおこなうバクウェレと、狩猟採集活動をおこなうバカ・ピグミーは、ジャー川本流沿いと熱帯林内部に棲み分けて居住し、獣肉など狩猟採集産物や農作業のための労働力と農作物の物々交換の関係をもち、親族間で擬制的親族関係が結ばれた。男子割礼儀礼(ベカ)の共有が見られた。すでに第一次大戦前から、ドイツ人、大戦後はフランス人との接触があり、象牙交易がおこなわれていた。野生ゴム採集やカカオ栽培などが植民地政府によって農耕民に課され、少なくとも一部のバカ・ピグミーはこれを手伝わされていた。貨幣は、外部世界と農耕民の間で流通するが、農耕民と狩猟採集民の間では物々交換(モノのやり取り)が維持される(図8-2)。

市場経済への包摂①

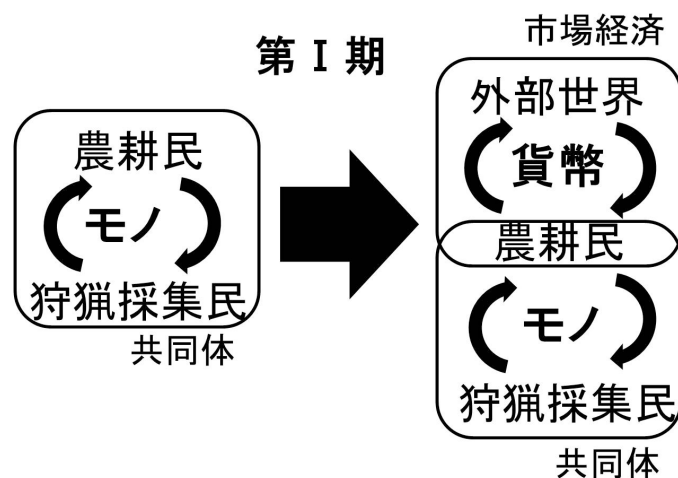


図8-2: 第1期から第2期にかけての農耕民＝狩猟採集民関係の変化

第2期では、強制移住により擬制的親族関係にあった家系集団がばらばらに移動していった結果、定住先で新たに農耕民とバカ・ピグミーとの関係が作られてゆくこととなる。バクウェレは、移住元の焼畑やカカオ園を放棄して本格的に定住生活に入ることとなるが、乾季にはジャー川沿いで漁撈活動が続けた。バカ・ピグミーはバクウェレの集落の近傍に複数の定住集落をつくり、半定住化する。半定住化したバカ・ピグミーの狩猟法は、かつては頻繁に行われた集団槍猟から、定住集落から日帰りで見回りが可能な罾猟や農耕民から委託される銃猟が中心となる。バカ・ピグミーは、バクウェレの焼畑を手伝うだけでなく、焼畑農耕を受容してプランテン・バナナを栽培し始めるが、自給できるまでにはなかなか至らずバクウェレとの物々交換関係はある程度維持される。

市場経済への包摂②

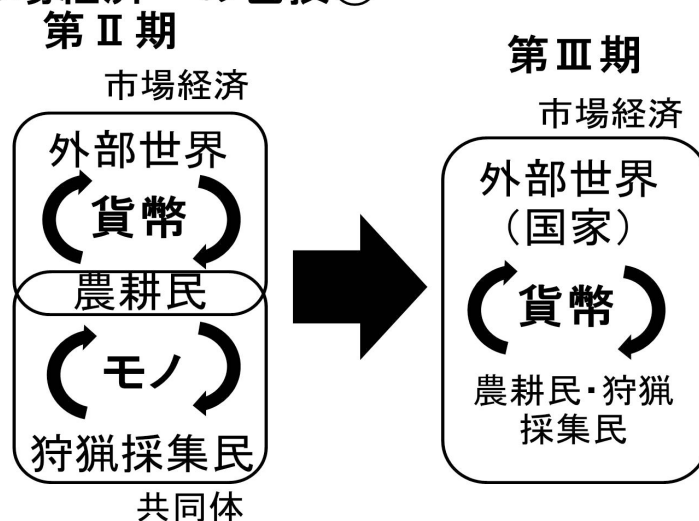


図 8-3: 第2期から第3期にかけての農耕民＝狩猟採集民関係の変化

第3期では、熱帯林伐採事業に伴う地域住民の雇用と貨幣経済の浸透が契機となって、地域経済の全体に現金が取り込まれるようになる(図 8-3)。バカ・ピグミーとバクウェレなどバンツー系農耕民のほかに、新たに移入・定着した商業民が加わり、民族間関係

が多様化する。構造調整やコートジボワールなどアフリカの他のカカオ産地の政変などにより、カメルーンのカカオ経済が好調になると、焼畑でのカカオ栽培が盛んになった。カカオ栽培は、バカ・ピグミーの間にも広まっていった。ムスリム商業民の一部が、バカ・ピグミーの安価な労働力の利用を背景にカカオ農園の拡大に成功すると、賃労働に従事して商人との関係を深めるバカが増えることとなった。バカ・ピグミーとバクウェレの関係は、これ以降急速に弱体化していった。

すくなくとも過去 100 年間にわたって、調査地域における農耕民と狩猟採集民の関係は、外部世界の動きから隔離されたものではなく、また両者は相互依存的であった。しかし、バカ・ピグミーと農耕民の依存の方向性と程度には時代区分ごとに相違がみられる。第 1 期における委任統治政府による野生ゴム採集、そしてその後のカカオ栽培の導入は、農耕民の狩猟採集民の労働力への依存を高めた。第 2 期以降のバカ・ピグミーによる農耕の受容は、次第に農耕民への食料依存を減少させた。第 1-2 期までは、バカ・ピグミーと外部世界との関係はバクウェレによって媒介されていたが、第 3 期ではバカ・ピグミーは直接外部世界と関係をもつようになった。外部世界との関係をもとに、バカ・ピグミーは、農耕民にたいして以前よりも自立した位置を占めるようになった。

II-2. バカ・ピグミーのカカオ栽培：貨幣経済と農耕民＝狩猟採集民関係

熱帯林伐採事業とそれに引き続く換金作物栽培ブームは、地域社会に貨幣を流通させることによって、農耕民と狩猟採集民の間の贈与／交換システムに質的な変化をもたらした。貨幣はバカ・ピグミーに購買力を与えた。貨幣を手にしたバカ・ピグミーたちは、それまで農耕民との社会関係に埋め込まれ、農耕民優位で進められがちだったもののやり取りを、より自立的に行えるようになった。貨幣をもちいた交換では、相手も自分たちで選ぶことができ、売り手と買い手を取引において対等な立場に置く。擬制的親族関係、あるいは「友人」の関係を枠組みとした農耕民から狩猟採集民への贈与は、一方的

なアドレス性を付されることによって、両者の間の紐帯とともに受贈者である狩猟採集民にモース的な意味での負債を与え、農耕民への従属性を作り出す装置として働いていたが、貨幣をもちいた交換はこのような農耕民による狩猟採集民への「先行贈与」(埜 2004)の意味を打ち消すこととなった。

ピグミーを含む熱帯アフリカの狩猟採集民は、生業活動におけるリターンが直接的で即時利得的な経済システムと密接に関連した平等主義規範を築いてきた(Woodburn 1982)。カカオ栽培は、播種から収穫まで少なくとも 5 年以上かかる典型的な遅延利得経済の特徴を有する。カカオ園所有は男性に限定され、経営面積には数世代にわたる相続の結果とみられる個人差が存在し、そこには長期間(数十年)にわたる遅延利得的な生業活動選択の結果が反映されている。カカオ園所有は男性に限定され、経営面積には数世代にわたる相続の結果とみられる個人差が存在することが明らかとなった。したがって、現金収入に相当な格差が推定されたが、実際には収穫前のカカオ豆の盗みへの積極的な制裁がみられないため、現金収入は一定程度平準化される。

バカ・ピグミーと農耕民、商業民との間で、貨幣を介在したカカオ園の賃貸関係が存在することも明らかになった。即座に現金を必要とする場合や長期遊動生活を行うなどのため、定住村を不在にするバカ・ピグミーに活用される。ただし、借金が蓄積するとこの関係はしばしば土地の権利をめぐる紛争に発展する。したがって、貨幣を媒介としたバカ・ピグミーと農耕民、商業民の社会経済関係は、協調的な側面がみられる一方で、搾取的な関係に発展し、周縁化につながることもある。

バカ・ピグミーによるカカオ栽培は、嗜好品や商品など魅力的な使用価値への強い関心に動機づけられており、交換価値を有する貨幣が、嗜好品のもたらす恍惚への「眼前への関心」(Ichikawa 2000)と遅延利得経済的な生業活動をつなぐ役割を果たしている。すなわち、遅延利得経済への擬似適応だと言える。

しかし、擬似適応を繰り返すなかで、狩猟採集民コミュニティの中には積極的に貨幣

を蓄積し、他のバカ・ピグミーを雇用する者が現れるなど、狩猟採集民コミュニティの内部において萌芽的な社会的階層化が起こっている実態が明らかとなった。いわば、狩猟採集社会内部に農耕民化した狩猟採集民とそうではない狩猟採集民の葛藤が生まれているのである。伝統的な生活を保持した者と変容を受けた者がいかに共存を図ってゆくことができるかは、経済格差が拡大している現在のバカ・ピグミー社会にとって重要な課題である。

Ⅱ-3. 象徴実践によるエスニック・バウンダリーの維持と再生産

第1期から第3期までのバクウェレとバカ・ピグミーの関係の変遷を、政治的側面、経済的側面、文化的側面に分けて整理する(図8-4)。

	政治	経済	文化
I 期	依存	相互依存	二項対立
II 期	依存	自立	二項対立
III 期	自立	自立・競合	二項対立

図 8-4: 政治・経済・文化の各側面における農耕民＝狩猟採集民関係の変遷

バカ・ピグミーは、市場経済の浸透のなかで農耕化し、現金獲得手段を得ることによって相対的に農耕民から自立した経済を営むようになり（第2期）、さらに換金作物栽培のような経済活動では農耕民のライバルとして競合関係に立つようになってきている（第3期）。

経済的な関係の変化は、バクウェレが、外部世界とバカ・ピグミーの間を媒介する立場に立つという政治的な依存関係（第 1-2 期）に影響を与え、バカ・ピグミーは農耕民から相対的に自立した形で外部世界と政治的な交渉を行うようになってきている（第 3 期）。このようにめまぐるしい社会経済条件の変化を経験し、バカ・ピグミーとバクウェレは、生業実践の上での差異が相対的に減少してきている。それにも関わらず、文化面では二項対立が維持されている（第 1-3 期）。

両者の二項対立的関係は、第 3 章でみたように村と森で異なる様相を見せるが、同時に、第 4 章の「ゴリラ人間」の事例でみたように、両者は日常生活のなかで互いを「半人間・半動物」とみなす負の相互表象を投げつけあいながら、共に互いの差異を積極的に維持しようとしている。バクウェレは農耕民優位・狩猟採集民劣位という不平等を積極的に維持・強化しようとするのに対して、バカは、世界観や生活様式における農耕民との差異は維持しつつも、不平等を構造化している二項対立の境界を曖昧化させ、あるいは無力化しようとする。不平等を前提とした二項対立か、平等を前提とした二項対立かという点において、両者が志向する共存の方向性は全く異なっているにも関わらず、そこには「利害の対立」による共同性と言えるものが成立している。両者の「分離的な共存」は、このような「ままたらぬ他者」として立ち現われる象徴的な次元における対立が実際の野生動物との遭遇経験の中で再生産され、日常的な相互行為にフィードバックされることによって循環的にされている。この意味で、エスニック・バウンダリーは、熱帯雨林という自然環境に依存した日常生活の中で象徴的に構築され続けている。

木村大治は、個体どうしの相互行為の枠についての考察の中で、「利害の対立によって共同性が共有」される事例としてアニメ『トムとジェリー』における敵対した 2 匹の主人公を例に挙げている。つねに互いを意識しながらネガティブな相互作用を繰り返しているバカ・ピグミーとバクウェレのやり取りは、まさにそのような共同性を想起させる。

このようにバカ・ピグミーとバクウェレの両者は、負の互酬性ともいえる共同性のもとで、たとえば第4章における「人間ゴリラ」のような文化としての「自然」を駆使して、農耕民＝狩猟採集民関係の二項対立を維持・再生産することによって、両者は文化的に同化することなく、象徴の共同体を形成してきたのである。

Ⅲ. 今後の展望

本研究は、比較的狭い地域社会における農耕民＝狩猟採集民関係の通時的な動態に焦点を当てて記述した。したがって、アフリカ熱帯林地域全体、あるいはカメルーン東南部のなかの地域変異を踏まえれば、本研究により得られた知見の一般化には限界がある。コンゴ盆地とその周辺を視野に入れた比較研究をおこなうことで、より大きな政治経済的文脈の中での位置づけが可能になると思われる。

次に、本研究では、集団間／集団内関係に関わる個人間の相互行為が、どのようなメカニズムで維持／再生産されているのかについての解明には踏み込むことはできなかった。本研究で明らかになった農耕民と狩猟採集民の間のマクロな（集団レベルでの）相互作用と、ミクロな相互作用をつなぐ作業が今後の課題である。

最後に、本研究では、複数のアクターの視点を取り入れた民族誌を目指したが、農耕民＝狩猟採集民関係と言う主題の設定上、商業民の側からの資料収集と分析がいまだ不十分であると言える。商業民以外のアクターである行政機関の官吏や NGO 関係者についても断片的な聞き取り調査を行ったにとどまっている。この点について、より包括的な調査が必要である。

謝辞

本書のもととなる調査は、以下のプロジェクト・財団からの資金援助により行われた。

日本学術振興会科学研究費補助金

- 若手研究（研究活動スタート支援）「中央アフリカ低地熱帯林における川の民と森の民の交流史に関する歴史生態学的研究」（2009.10.-2011.3., 課題番号 21820018, 代表：大石高典）
- 若手研究 (B)「アフリカ熱帯林への貨幣経済浸透に伴う経済的不平等の拡大と住民の平等主義規範の相克」(2011.5.-2014.3., 課題番号：23720424, 代表：大石高典)

文部科学省科学研究費補助金

- 基盤研究 (A)「アフリカ熱帯森林帯における民族的アイデンティティの再編成に関する人類学的研究」(FY2001-2003, 課題番号 13371006, 代表：竹内潔富山大学准教授)
- 基盤研究 (B)「コミュニケーション・プロセスとしての生態人類学:アフリカ熱帯雨林における研究」(FY2002-2005, 課題番号 14401013, 代表：木村大治京都大学准教授)
- 基盤研究 (A)「アフリカ熱帯林における人間活動と環境変化の生態史的研究」(FY2006-2009, 課題番号 18201046, 代表：木村大治京都大学准教授)
- 基盤研究 (A)「アフリカ熱帯森林帯における先住民社会の周縁化に関する比較研究」(FY2006-2009, 課題番号 18251014, 代表：竹内潔富山大学准教授)
- 基盤研究 (A)「『仮想地球空間』の創出に基づく地域研究統合データベースの作成」

(FY2007-2009, 課題番号 19201052, 代表：荒木茂京都大学教授)

- 基盤研究 (A)「動物殺しの比較民族誌研究」(FY2012-2017, 課題番号 24251019, 代表：奥野克巳桜美林大学教授)

民間財団等からの研究助成金

- 財団法人日本科学協会笹川科学研究助成(18-035)「熱帯雨林の中の移動・定住と民族間関係の歴史生態学：カメルーン東南部のバンツー系焼畑農耕民とピグミー系狩猟採集民の過去 100 年間における移住履歴の復元から」(2006.4.-2007.2., 代表：大石高典)
- 公益信託四方記念地球環境保全研究助成基金研究助成「アフリカ熱帯雨林において生活者が持続的に利用可能な小河川の動物資源量の推定」(2006.8.-2007.7., 代表：大石高典)
- 第 10 回猿田彦大神フォーラム「みちひらき研究/創作」助成「モノノケの民族生態学—中央アフリカ・カメルーンをフィールドにした, モノノケ・動物表象と感覚価値に関する研究—」(2007.10.-2008.6., 代表：大石高典)
- 財団法人高梨学術奨励基金平成 20-21 年度研究助成「森に埋め込まれた狩猟採集民＝焼畑農耕民の空間利用変遷と民族間関係～アフリカ熱帯林におけるヒューマン・インパクトと民族考古学～」(2008.6.-2010.3., 代表：大石高典)
- 財団法人 たばこ総合研究センター平成 20 年度研究助成「熱帯アフリカにおけるたばこと酒をめぐる市場経済と交換経済」(2008.4.-2009.3., 代表：林耕次神戸学院大学研究員)
- 平成 20 年度京都大学若手研究者スタートアップ研究費「アフリカ熱帯雨林内の小人口社会における環境史と民族史の統合的研究」(2008.10.-2010.3., 代表：大石高典)

- 2010 年度公益財団法人住友財団・環境研究助成「アフリカ熱帯林における動物性タンパク質の交易拡大と漁撈活動の持続性」(2010.11.-2012.5., 代表:大石高典)
- 生き物文化誌学会『さくら基金』研究助成「熱帯アフリカの森林居住民を対象とした比較民族魚類学的研究」(2011.4.-2013.3., 代表:大石高典)
- 財団法人高梨学術奨励基金平成 23 年度研究助成「カメルーン東南部における熱帯雨林居住民の生業活動と野生炭水化物源植物の相互作用に関する民族生態学的研究」(2011.6.-2012.3., 代表:大石高典)
- 財団法人高梨学術奨励基金平成 24 年度研究助成「コンゴ盆地北西部のピグミー系狩猟採集民を対象とした熱帯雨林植生の遷移現象に関する民俗理論の研究」(2012.6.-2013.3., 代表:大石高典)

現地調査は、カメルーン共和国科学研究開発省(MINRESI),ならびに森林野生動物省(MINFOF)の調査許可のもとで行われた。Gopdefroy Ngima Mawoung 博士には、カウンター・パート研究者として調査許可の取得にご助力を頂いたほか、折に触れて研究内容にもアドバイスを頂いた。

木村大治博士(京都大学)には本論文執筆にあたって、丁寧なご指導を頂いた。市川光雄博士(日本モンキーセンター)には、論文執筆のご指導を頂いた。竹内潔博士(富山大学)には、ワークショップや国際会議に誘って頂き、研究を進める上で大きな刺激を頂いた。出身大学院である京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室では、自由な発想で研究を行う楽しさを教えて頂き、京都大学カメルーン・フィールドステーションのメンバーのみなさまには、現地調査の遂行にあたってお世話になった。2008 年 6 月から 2011 年 5 月まで在籍した京都大学こころの未来研究センターからは、たびたびのアフリカ出張をご許可いただいた。当時の上司である鎌田東二博士からは、現在に至るまで折に触れて研究活動への激励を頂いた。

調査地であるドンゴ村における研究の先達である佐藤弘明博士（浜松医科大学）、山内太郎博士（北海道大学）、共同研究者である林耕次博士（京都大学）、Evariste Fongnzossie 博士（ドゥアラ大学）には、調査基地を共有させていただくなど現地調査で大変お世話になっただけでなく、滞在が重なった際には研究の進め方等について相談に乗っていただき、貴重なご助言を頂いた。

国立パリ自然史博物館の Igor de Garine 博士, Serge Bahuchet 博士, H       Pagezy 博士, ロンドン大学の Jerome Lewis 博士, ワシントン州立大学の Barry Hewlett 博士, Bonnie Hewlett 博士には研究を進める上で有用なコメントやご批判, ご助言をたくさん頂いた。

カメルーン東南部の調査地であるドンゴ村では、バカ・ピグミー、バクウェレ、ハウサなど地域住民の皆様にはいつも温かく迎えて頂き、調査に協力を頂いた。調査アシスタントとしてお世話になった Nsonkali Charles-Jones 氏, Meyapweu Ngassam Serges 氏, Ndoumbe David 氏, Mobisa Pierre 氏には、調査補助や翻訳だけでなく、地域で社会生活を送るために重要なさまざまな事柄を教えて頂いた。

最後に、家族である母、大石雅子には研究生活を有形無形に支えていただいた。ここに記して感謝する。

引用文献

■ 和文文献

- 秋道智弥 1976 「漁撈活動と魚の生態—ソロモン諸島マライタ島の事例」 季刊人類学 7 (2) : 76-128 講談社.
- 安溪貴子 1995 「ソンゴラの火の酒—ザイール」 山本紀夫・吉田集而 編著『酒づくりの民族誌』八坂書房, 119-130.
- 安溪遊地 1981 「ソンゴラ族の農耕生活と経済活動—中央アフリカ熱帯雨林化の焼畑農耕—」 季刊人類学 12: 96-178 講談社.
- 安溪遊地 1979 「原生林のなかの漁撈—中央アフリカ・ソンゴラ族」『アニマ』7-7: 81-87.
- 池谷和信 2002.『国家のなかでの狩猟採集民—カラハリ・サンにおける生業活動の歴史民族誌』国立民族学博物館.
- 市川光雄 1982.『森の狩猟民—ムブティ・ピグミーの生活—』人文書院.
- 市川光雄 1991 「ザイール・イトゥリ地方における物々交換と現金取引—交換体系の不整合をめぐる—」 谷 泰 編『文化を読む: フィールドとテキストのあいだ』, 人文書院, 48-77.
- 市川光雄 2001. 「森の民へのアプローチ」 市川・佐藤編『森と人の共存世界』京都大学学術出版会.
- 市川光雄 2008. 「ブッシュミート問題: アフリカ熱帯雨林の新たな危機」 池谷和信・林良博編『ヒトと動物の関係学第4巻 野生と環境』岩波書店, pp. 163-184.
- 伊藤美穂 2010. 「ヤシ酒と共に生きる—ギニア共和国東南部熱帯林地域におけるラフィアヤシ利用—」, 木村大治・北西功一 編『森棲みの生態誌』京都大学学術出版会, 243-261.
- 岩田明久・大西信弘・木口由香. 2003 「南部ラオスの平野部における魚類の生息場所利用と住民の漁撈活動」『アジア・アフリカ地域研究』3: 51-86.
- エヴァンズ=プリチャード, E・E2001 『アザンデ人の世界—妖術・託宣・呪術』向井元子訳, みすず書房.
- 大石高典 2008. 「モノノケの民族生態学—国家に抗するモノノケたち—」『あらはれ』11:142-165 猿田彦大神フォーラム.
- 大石高典 2009. 「森に埋め込まれた狩猟採集民—焼畑農耕民の空間利用変遷と民族間関係—アフリカ熱帯林における民族考古学的研究—」『高梨学術奨励基金年報』平成20年度. pp. 199-207.
- 大山修一 2009. 「ザンビアの農村における土地の共同保有にみる公共圏と土地法の改

- 正」児玉由佳編 アジア経済研究双書 No.581『現代アフリカ農村と公共圏』147-183. アジア経済研究所.
- 大山修一 2011.「ザンビアにおける新土地法の制定とベンバ農村の困窮化」掛谷 誠・伊谷樹一編『アフリカ地域研究と農村開発』246-280. 京都大学学術出版会.
- 岸上伸啓 2005.『イヌイト「極北の狩猟民」のいま』中央公論新社.
- 北西功一 2001.「分配者としての所有者—狩猟採集民アカにおける食物分配」市川光雄・佐藤弘明編,『森と人の共存世界』pp. 61-91. 京都大学学術出版会.
- 北西功一 2010.「アフリカ熱帯林の社会 (2) —ピグミーと農耕民の関係—」木村大治・北西功一 (編)『森棲みの社会誌: アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』京都大学学術出版会, pp. 21-46.
- 北西功一 2010.「所有者とシェアリング—アカにおける食物分配から考える—」木村大治・北西功一 編『森棲みの社会誌』京都大学学術出版会, pp. 263-280.
- 木村大治 2003.『共在感覚』京都大学学術出版会.
- 木村大治 2010.「バカ・ピグミーは日常会話で何を語っているか」木村大治・北西功一 編『森棲みの社会誌』京都大学学術出版会, pp. 239-261.
- 坂梨健太 2009.「カメルーン南部熱帯雨林におけるファンの農耕と狩猟活動」『アフリカ研究』74: 37-50.
- 坂梨健太 2010.「中央アフリカ熱帯雨林カカオ生産における労働力利用に関する一考察: カメルーン南部に暮らすバンツー系農耕民ファンを事例として」木村大治・北西功一編『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅱ』京都大学学術出版会. pp.129-150.
- 佐藤弘明 1991.「定住した狩猟採集民バカ・ピグミー」田中二郎・掛谷誠 編『ヒトの自然誌』平凡社, 543-566.
- 佐藤弘明 1993.「定住した狩猟採集民バカ・ピグミー」田中二郎・掛谷誠編,『ヒトの自然誌』pp. 543-566.
- 佐藤弘明 1998.「病気と動物—アフリカ熱帯雨林狩猟採集民 Baka の民俗病因—」『浜松医科大学紀要一般教育』第 12 号, pp. 35-55.
- 佐藤弘明 2010.「熱帯雨林狩猟採集民が農耕民にならなかった理由」木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史Ⅰ—』pp. 119-139.
- 佐藤弘明・川村協平・稲井啓之・山内太郎 2006「カメルーン熱帯雨林における”純粹”な狩猟採集生活—小乾季における狩猟採集民 Baka の 20 日間の調査」『アフリカ研究』69, pp. 1-14.
- 佐藤廉也 2003.「森林焼畑農耕民の酒造りと飲酒の機能—エチオピア西南部の事例を中心に—」吉田集而 編『JCAS 連携研究成果報告 4 酒をめぐる地域間比較研究』地域研究コンソーシアム, pp. 183-210.
- 四方籌 2006.「森は何を語るのか?—カメルーン東南部の熱帯雨林に暮らす焼畑農耕民

- の生活と森林植生との関わり」日本熱帯生態学会ニューズレターNo.62.1-7.
- 四方籌 2007. 「伐らない焼畑—カメルーン東南部の熱帯雨林帯におけるカカオ栽培の受容にみられる変化と持続—」『アジア・アフリカ地域研究』 6(2): 257-278.
- 重田眞義 1989. 「さけ | 酒」伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直 監修『アフリカを知る事典』平凡社, 170-171.
- 重田眞義 1989. 「しこうひん | 嗜好品」伊谷純一郎・小田英郎・川田順造・田中二郎・米山俊直 監修『アフリカを知る事典』平凡社, 191-192.
- ターンプル, C. 1976. 『森の民』藤川玄人訳, 筑摩書房.
- 高田公理 2008. 「嗜好品文化研究への招待」高田公理・嗜好品文化研究会 編『嗜好品文化を学ぶ人のために』世界思想社, 1-14.
- 高田公理 2008. 「酒・アルコール飲料」高田公理・嗜好品文化研究会 編『嗜好品文化を学ぶ人のために』世界思想社, 31-37.
- 竹内潔 2001. 「彼はゴリラになった—狩猟採集民アカと近隣農耕民のアンビバレントな共生関係」市川・佐藤編『森と人の共存世界』京都大学学術出版会.
- 竹内潔 1995. 「狩猟活動における儀礼性と楽しさ—コンゴ北東部の狩猟採集民アカのネット・ハンティングにおける協同と分配」『アフリカ研究』 46: 57-76
- 武田 淳 2002. 「ザイルの川漁—母なる川が産出する魚を糧にする人たち」『アフリカを歩く』 pp. 292-300 以文社.
- チュツオーラ, エイモス 1970 『やし酒飲み』土屋 哲 訳, 晶文社.
- 都留泰作 1996. 「バカ・ピグミーの精霊儀礼」『アフリカ研究』 49.
- 都留泰作 2001. 「「メ」とは何か?—バカ・ピグミーの「精霊」観念に関する考察」市川光雄・佐藤弘明編『森と人の共存世界』京都大学学術出版会, pp. 141-185.
- 都留泰作 2002 「森の精に歌いかける人々—バカ・ピグミーの『ベ』における踊りと歌の実践」澤田昌人 (編)『アフリカ狩猟採集民の世界観』, 京都精華大学創造研究所.
- 都留泰作 2010. 「バカ・ピグミーの歌と踊り: 演技技法の分析に向けて」木村大治・中村美知夫・高梨克也 (編)『インタラクションの境界と接続: サル・人・会話研究から』昭和堂.
- 寺嶋秀明, 1991. 「森と村と蜂蜜と—狩猟採集民と農耕民のインタラクションの諸相」田中二郎・掛谷誠編『ヒトの自然誌』平凡社.
- 寺嶋秀明 1993 『共生の森』東京大学出版会.
- 寺嶋秀明 1991 「森と村と蜂蜜と—狩猟採集民と農耕民のインタラクションの諸相」田中二郎・掛谷誠 編『ヒトの自然誌』平凡社, 465-486.
- 寺嶋秀明 1997 『共生の森』東京大学出版会.
- 西田正規 1984 「定住革命」『季刊人類学』 15(1). 講談社.
- 墓田桂 2000. 「構造調整計画以降のカメルーン経済」『外務省調査月報』2000 年度 No.2.

pp. 119-138.

服部志帆 2004 「自然保護計画と狩猟採集民の生活：カメルーン東部州熱帯林におけるバカ・ピグミーの例から」『エコソフィア』13：昭和堂，113-127.

服部志帆 2007 「ゴリラはナイフを持っている—カメルーンの森から—」『アジア・アフリカ地域研究』7（1），pp. 132-137.

服部志帆 2008 『熱帯雨林保護と地域住民の生活・文化の両立に関する研究—カメルーン東南部の狩猟採集民バカの事例から—』博士学位申請論文，京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科.

服部志帆 2010. 「森の民バカを取り巻く現代的問題;変わりゆく生活と揺れる民族関係」『森棲みの社会誌—アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 II』 pp. 179-205. 京都大学学術出版会.

服部志帆 2012. 『森と人の共存への挑戦—カメルーンの熱帯雨林保護と狩猟採集民の生活・文化の両立に関する研究—』松香堂出版.

塙 狼星・市川光雄 1995. 「アフリカのヤシ酒」山本紀夫・吉田集而 編著『酒づくりの民族誌』八坂書房，111-118.

塙 狼星 1996. 「表現手段としてのやし酒—焼畑農耕民ボンドンゴの多重な世界」田中二郎，掛谷誠，市川光雄，太田至編著『続自然社会の人類学：変貌するアフリカ』アカデミア出版会. 339-372.

塙 狼星 2004. 「コンゴ共和国北部における焼畑農耕民と狩猟採集民の相互関係の動態」『アフリカ研究』64: 19-42.

塙 狼星 2004. 「コンゴ盆地西部熱帯雨林における地域社会編成に関する人類学的研究」京都大学大学院理学研究科博士論文.

林耕次 2000. 「カメルーン南東部バカ（Baka）の狩猟採集活動—その実態と今日的意義」『人間文化』神戸学院大学人文学会，14, pp. 27-38.

林耕次 2010. 「バカ・ピグミーのゾウ狩猟」木村大治・北西功一（編）『森棲みの生態誌：アフリカ熱帯林の人・自然・歴史 I』京都大学学術出版会，pp. 353-372.

林耕次，大石高典 2012 「狩猟採集民バカの日常生活におけるたばこと酒—カメルーン東南部における貨幣経済の浸透にともなう外来嗜好品の流入—」『人間文化』30，神戸学院大学人文学会，pp.29-43.

分藤大翼 2001 「バカ・ピグミーの加入儀礼—ジェンギの秘密—」澤田昌人（編）『アフリカ狩猟採集社会の世界観』京都精華大学創造研究所，pp. 10-53.

分藤大翼 2007 「ポスト狩猟採集社会の文化変容—仮面儀礼の受容と転用—」『アジア・アフリカ地域研究』6(2): pp. 489-506.

松井健 1998. 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体」『民俗の技術』（篠原徹編）pp. 247-268 朝倉書店.

松浦直毅 2010. 「ピグミーと農耕民の民族関係の再考—ガボン南部バボンゴ・ピグミー

と農耕民マサンゴの「対等な」関係—」森棲みの社会誌』

松浦直毅 2012.『現代の〈森の民〉中部アフリカ, バボンゴ・ピグミーの民族誌』昭和堂.

松村圭一郎 2008.『所有と分配の人類学—エチオピア農村社会の土地と富をめぐる力学』世界思想社.

安岡宏和 2004.「コンゴ盆地北西部に暮らすバカ・ピグミーの生活と長期採集行 (モロンゴ)」『アジア・アフリカ地域研究』4-1: 36-85.

山極寿一 2005『ゴリラ』東京大学出版会.

山極寿一 2008 「野生動物とヒトとの関わりの現代史—霊長類学が変えた動物観と人間観」池谷和信・林良博編『ヒトと動物の関係学第4巻 野生と環境』岩波書店, pp.69-88.

山越言 2006 「野生チンパンジーとの共存を支える在来知に基づいた保全モデル | ギニア・ボッソウ村における住民運動の事例から—」『環境社会学研究』12. pp. 120-135.

■ 欧文文献

Althabe, G. 1965. Changement sociaux chez les Pygmées Baka de l'Est-Cameroun. *Cahiers d'études africaines*. 5(20) : 561-592.

Ankei, Y. 1989. Folk knowledge of fish among the Songola and the Bwari: Comparative Ethnoichthyology of the Lualaba river fishermen and Lake Tanganyika fishermen. *African Study Monographs*, Suppl. 9: 1-88.

Bahuchet, S. & H. Guillaume 1982. Aka-farmer relations in the northwest Congo Basin. In (Leacock, E. & R. Lee, eds.) *Politics and history in band societies*. pp. 189-211. Cambridge University Press, Cambridge.

Bahuchet, S. 1990. Food sharing among the Pygmies of central Africa. *African Study Monographs*, 11(1): 27-53.

Bailey, R. C. et al. 1989. Hunting and gathering in the tropical forest : Is it possible ? *American Anthropologist*, 91 (1): pp. 59-82.

Beckerman, S. 1993. Major patterns in indigenous Amazonian subsistence. In: C. M. Hladik, A. Hladik, O. F. Linares, H. Pagezy, A. Semple and M. Hadley (eds.) *Tropical Forests, People and Food*, pp. 411-424 UNESCO, Paris.

Blench, C. 1999. Are the African Pygmies as ethnographic fiction? In: Biesbrouck, K., Elders, S. Rossel, G. (eds.) *Central African Hunter-Gatherers in a multidisciplinary perspective: Challenging elusiveness*. Research School for Asian, African, and Amerindian Studies, Universiteit Leiden, pp. 41-60.

- Brisson, R. 2010. *Petit dictionnaire Baka-Français*. L'Harmattan, Paris.
- Coad, L., K. Abernethy, A. Balmford, A. Manica, L. Aairey, and E. J. Milner-Gulland 2010. Distribution and Use of Income from Bushmeat in a Rural Village, Central Gabon. *Conservation Biology*, 24 (6): 1510-1518.
- De Garine, I. 2001. Drinking in Northern Cameroon among the Masa and Muzey. In: Igor de Garine and Valerie de Garine (eds.) *Drinking: Anthropological Approaches*. Berghahn, Oxford.
- Dodd, R. 1986. The Politics of Neighbourliness. *Paper presented at the 4th International Conference on Hunting and Gathering Societies, London*. London School of Economics, UK.
- Duguma, B., J. Gockowski and J. Bakala. 2001. Smallholder cacao [*Theobroma cacao* Linn.] cultivation in agroforestry systems of west and central Africa: challenges and opportunities, *Agroforestry Systems* 51: pp. 177-188.
- Froment, A., Koppert, G. J. A., and J-F. Loung 1993. "Eat well, live well": Nutritional status and health of Forest populations in Southern Cameroon. In: Hladik, C.M., Hladik, A., Linares, O.F. Pagezy, H., Semple, A. and Hadley, M. (eds.). *Tropical Forests, People and Food. Biocultural Interactions and Applications to Development*. Man and the Biosphere Series, 13, UNESCO, Paris. pp. 357-364
- Froment, A., 2001. Evolutionary biology and health of hunter-gatherer populations. In: Catherine Panter-Bric et al. (eds.) *Hunter-gatherers: an interdisciplinary perspective*. Cambridge University Press. pp. 239-266.
- Giles-Vernick, Tamara *Cutting the vines of the past: environmental histories of the central African rain forest*, The University Press of Virginia.
- Giles-Vernick, T., Rupp, S. 2006. Visions of apes, reflections on change; telling tales of great apes in equatorial Africa. *African Studies Review*, 49(1), pp. 51-73.
- Grinker, R. R. 1994. *Houses in the Rainforest : Ethnicity and Inequality among Farmers and Foragers in Central Africa*. University of California Press, Berkeley.
- Guillaume, H. 2001. *Du miel au café, de l'ivoire à l'acajou: la colonisation de l'interfluvie Sangha-Oubangui et l'évolution des rapports entre chasseurs-collecteurs pygmées Aka et agriculteurs (Centrafrique, Congo) 1880-1980 (Vol. 27)*. Peeters Publishers.
- Guillot, B. 1977. Problèmes de développement de la production Cacaoyère dans les districts de Sembé et Souanké (Congo). *Cahier d'O.R.S.T.O.M.*, ser. Sci.hum., vol. 16 :2, pp.151-169.
- Guthrie, M. 1967-71. *Comparative Bantu : An Introduction to the Comparative Linguistics and Prehistory of the Bantu Languages*. Gregg, Farnborough.
- Hagiwara, M. 2008 Human-Wildlife conflict in Odzala National Park, Republic of Congo -

- Challenges for protecting both of farming crops and forest elephants. *Annual Report of Pro Natura Fund* Vol. 17: 177-185. The Nature Conservation Society of Japan, Tokyo.
- Hampfrey, C. 1987. Barter and economic disintegration. *Man (N. S.)*, 20: pp. 48-72.
- Haraway, Dona 1989 *Primate visions: Gender, Race and Nature in the world of modern science*. London, Routledge.
- Hayashi, K. 2008. Hunting activities in forest camps among the Baka hunter-gatherers of southeastern Cameroon. *African Study Monographs*, 29(2): 73-92.
- Hewlett, B. 1996. Cultural Diversities among African Pygmies. In: Susan Kent ed. *Cultural Diversity among Twentieth-Century Foragers*, pp. 215-244. Cambridge University Press.
- Ichikawa, M. 1981. Ecological and sociological importance of honey to the Mbuti net hunters, eastern Zaire. *African Study Monographs*, 1: 55-69.
- Ichikawa, M. 1986. Economic bases of symbiosis, territoriality and intra-band cooperation of the Mbuti Pygmies. *Sprache und Geschichte in Afrika* 7(1): 161-188.
- Ichikawa, M. 2000. "Interest in the Present" in the Nationwide Monetary Economy: The Case of Mbuti Hunters in Zaire. In (Schweitzer, P., M. Biesele and R. K. Hitchcock, eds.), *Hunters and Gatherers in the Modern World*. Berghahn, Oxford, pp. 263-274.
- Ikeya, K., Ogawa, H., Michell P. eds. 2009. Interactions between hunter-gatherers and farmers; from prehistory to present. *Senri Ethnological Studies* 73.
- Jackson, D. 2003. *Twa women, Twa rights in the great lakes region of Africa*. Minority rights group international, London, UK. 40pp.
- Joiris, DV. 2003. The Framework of Central African Hunter-Gatherers and Neighboring Societies. *African Study Monographs*, Suppl. 28: 57-79.
- Takeya, M and Y. Sugiyama 1985. Citemene, Finger millet and Bemba culture: A socio-ecological study of slash-and-burn cultivation in Northeastern Zambia. *African Study Monographs, Supplementary Issue*, 4: 1-24.
- Kimura, D. 1992. Daily activities and social association of the Bongando in central Zaire. *African Study Monographs* 13-1: 1-33.
- Kitanishi, K. 2000. The Aka and Baka: food sharing among two central Africa hunter-gatherer groups. In: (Wenzel, G.W., G. Hovelsrud-Broda, & N. Kishigami, eds.) *The Social Economy of Sharing: Resource Allocation and Modern Hunter-gatherers*. *Senri Ethnological Studies*, 53: 149-169.
- Kitanishi, K. 2003. Cultivation by the Baka Hunter-Gatherers in the tropical rain forest of central Africa. *African Study Monographs*, Suppl. 28: 143-157.
- Kitanishi, K. 2006. The impact of cash and commoditization on the Baka hunter-gatherer

- society in southeastern Cameroon. *African Study Monographs*, Suppl.33: 121-142.
- Köhler, A. 1999. The forest as Home: Baka environment and housing. In: Biesbrouck et al. eds. *Central African Hunter-Gatherers in a Multidisciplinary Perspectives: Challenging Elusiveness*. pp. 89-104. CNWS, Univ. Leiden.
- Köhler, A. 2000. Half-man, half-elephant: shapeshifting among the Baka of Congo. In: John Knight (ed.) *Natural enemies: people-wildlife conflicts in anthropological perspective*. Routledge, Taylor & Francis. pp. 50-77.
- Köhler, A. 2005a. Money Makes the World Go Round? Commodity Sharing, Gifting and Exchange in the Baka (Pygmy) Economy. In: Widlok T. and W. G. Tadesse (eds.) *Property and Equality: Encapsulation, commercialisation, discrimination*. Berghahn, Oxford. pp. 32-55.
- Köhler, A. 2005b "Of Apes and Men: Baka and Bantu Attitudes to Wildlife and the Making of Eco-Goodies and Baddies" *Conservation & Society* 3(2): 407-435.
- Kolelas, B. B. 2007 *Les épreuves initiatiques chez les Bantu* Editions MENAIBUC, Paris. 149pp.
- Lewis, Jerome 2002 Forest hunter-gatherers and their world: A study of the Mbendjele Yaka Pygmies of Congo-Brazzaville and their secular and religious activities and representations. Ph.D. Dissertation, Department of Social Anthropology, London School of Economics and Political Science, London.
- Lewis, M.P., G.F. Simons & C.D. Fennig (eds.) 2013. *Ethnologue: Languages of the World*, 17th edition. Dallas, Texas: SIL International. Online. <http://www.ethnologue.com> (Accessed February 25, 2014)
- Lund, C., & Boone, C. (2013). Introduction: Land politics in Africa—Constituting Authority Over Territory, Property and Persons. *Africa: The Journal of the International African Institute*, 83(1), 1-13.
- Marlowe, F. W. 2010. *The Hadza*. University of California Press, London, UK.
- Mengho, M. B. 1978 "L'agriculture traditionnelle chez les Bakouélé et les Djem du Congo: Un exemple d'agriculture forestière" *Les Cahiers d'Outre-Mer*. Tome 31. n. 121. pp. 48-84.
- Mullin, MH. 1999. Mirrors and windows: Sociocultural studies of human-animal relationships. *Annual Review of Anthropology*, 28. pp. 201-224.
- Ohenjo et al. 2006. "Health of Indigenous people in Africa" *Lancet*, Volume 367, Issue 9526, pp. 1937-1946.
- Oishi T. 2012. Cash crop cultivation and interethnic relations of the Baka Hunter-Gatherers in southeastern Cameroon. *African Study Monographs*, Supplementary Issue No. 43. pp. 115-136.

- Pelican, M. 2009. Complexities of indigeneity and autochthony: an African example. *American Ethnologist*, 36(1), 52-65.
- Peters, PE. 2004. Inequality and social conflict over land in Africa. *Journal of Agrarian Change*, 4(3), 269-314.
- Quotidien Mutations 2010. Boumba et Ngoko: Le préfet interdit la vente et la location des plantations. Online
<http://www.quotidienmutations.info/septembre/1285827373.php> (Accessed
 Septembre 30. 2010)
- Robineau, C. 1971 Évolution économique et sociale en Afrique centrale : l'exemple de Souanke (République populaire du Congo). *Memoire O.R.S.T.O.M.* n. 45. Paris. 218pp.
- Rupp, S. 2003. Interethnic Relations in Southeastern Cameroon: Challenging the "Hunter-Gatherer" – "Farmer" Dichotomy. *African study monographs. Supplementary issue.*, 28, 37-56.
- Sato, H. 1992. Notes on the distribution and settlement pattern of hunter-gatherers in northwestern Congo. *African Study monographs* 13(4): 203-216.
- Sato, H. 1998. Folk Etiology among the Baka, a Group of Hunter-Gatherers in the African Rainforest. *African Study Monographs* 25, pp. 33-46.
- Sato H., Kawamura K., Hayashi K., Inai H, and T. Yamauchi, 2012. Addressing the wild yam question: how Baka hunter-gatherers acted and lived during two controlled foraging trips in the tropical rainforest of southeastern Cameroon. *Anthropological Science*, 120 (2): 129-149.
- Sawada, M. 1998. Encounters with the dead among the Efe and the Balese in the Ituri forest: Mores and ethnic identity shown by the dead. *African Study Monographs*, Supplementary Issue No.25: 85-104.
- Siroto, L. 1969. "Masks and social organization among the Bakwele people of Western Equatorial Africa" Unpublished Ph. D. Thesis. Columbia Univ., USA.
- Spielman KA. & Eder JF. 1994. Hunters and farmers: Then and now. *Annual Review of Anthropology* 23: 303-323.
- Sylvain, R., 2006. Drinking, Fighting and Healing: San Struggles for Survival and Solidarity in the Omaheke Region, Namibia, in *Updating the San: Image and Reality of an African People in the 21st Century*, Robert K. Hitchcock, Kazunobu Ikeya, Richard B. Lee, and Megan Bieseke, eds. *Senri Ethnological Series*, 70: 131-150. National Museum of Ethnology.
- Takeda, J. 1990. The dietary repertory of the Ngandu people of the tropical rain forest: An ecological and anthropological study of the subsistence activities and food procurement technology of a slash-and-burn agriculturist in the Zaire river Basin.

African Study Monographs, Suppl. 11: 1-75.

Takeda, J., Sato, H. 1993. Multiple subsistence strategies and protein resources of horticulturalists in the Zaire basin: the Ngandu and the Boyela. In: C. M. Hladik, A. Hladik, O. F. Linares, H. Pagezy, A. Semple and M. Hadley (eds.) *Tropical Forests, People and Food*, pp. 497-504. UNESCO.

Terashima, H. 1986 Economic exchange and the symbiotic relationship between the Mbuti (Efe) pygmies and the neighbouring farmers, *Sprache und Geschichte in Afrika* 7 (1): 391-405.

Turnbull, C. 1961. *The Forest People*. Simon and Schuster, New York.

Turnbull, C. 1976 *Man in Africa*, Garden city, New York.

Varlat, F. 1997. Réforme des institutions dans les filières cacao et café au Cameroun :
Chronique des années 1990 à 1997, CIRAD, Montpellier.

Wilkie DS. & Curran B. 1993. Historical trends in forager and farmer exchange in the Ituri rain forest of northeastern Zaïre. *Human Ecology*, 21(4): 389-417.

Woodburn, J. 1982. Egalitarian Societies. *Man* (N.S.) 17: 431-51.

Yasuoka, 2006. Long-Term Foraging Expeditions (Molongo) among the Baka Hunter-Gatherers in the Northwestern Congo Basin, with Special Reference to the “Wild Yam Question” *Human Ecology* 34(2): 275-296.

■ 公文書資料

National Archives of Yaoundé:

- APA 11779-B, 1932.
- APA 11634-J Moloundou, 1933.
- 11089 Djako, 1942.
- APA 10098-D, 1943.
- APA 11732 Rapport Annuel Moloundou, 1949.
- APA 11732 Moloundou, 1950.
- APA 11732 22 II Rapport Annuel, 1951.
- 3AC 4074 Rapport Annuel Moloundou, 1952.
- 1AC 3509 Moloundou Statiques Annee, 1957.